

ISSN 1882-9848

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya

: Jurnal Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang

＜第 20 号＞

日本インドネシア学会

Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang

2014 年

インドネシア 言語と文化
Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang
第 20 号 (2014 年)

目次

【テーマ論文】

インドネシア語会話の授業について

(Pikirkan Kembali Kelas Percakapan Bahasa Indonesia)

森山幹弘 (MORIYAMA Mikihiro)、サフィトリ・エリアス (Savitri Elias)、
モハンマド・ウマル・ムスリム (Mohammad Umar Muslim)、
降幡正志 (FURIHATA Masashi)、原真由子 (HARA Mayuko)

1

【論文】

Penggunaan Foto dalam Pembelajaran Percakapan

(写真を使った会話教授法)

Edy Priyono (エディ・プリヨノ) 12

Upaya Mempertahankan Minat Belajar Bahasa Indonesia Mahasiswa Tingkat III dan IV
di Kanda University of International Studies (KUIS)

(神田外語大学における大学 3、4 年生のインドネシア語学習意欲を保つための試み)

Suyoto (スヨト) 22

How to teach the usage of the prefix meN- of Malay-Indonesian language more effectively?

: The application of *gojuonzu* to its teaching for Japanese learners

(マレー・インドネシア語接辞 meN の効率的な教授法に関する一提案)

(Bagaimana mengajar kegunaan imbuhan meN di dalam Bahasa Melayu-Indonesia?)

: Penerapan *gojuonzu* di pengajarannya untuk mahasiswa Jepang)

NOMURA Toru (野村亨) 35

インドネシア流行語再考

(Mempertimbangkan Bahasa Gaul sekali lagi)

三宅良美 (MIYAKE Yoshimi) 47

現代ジャワ若者におけるジャワ語の敬語使用の運用実態

—ガジャマダ大学学生のケーススタディー—

(Kondisi Pemakaian Bahasa Krama pada Kalangan Muda Jawa Saat ini)

: Studi Kasus terhadap Mahasiswa Universitas Gadjah Mada)

エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ

(Elyzabeth Esther Fibra Simarmata) 61

インドネシア語の補文の含意について (Implikasi Klausa Pemerlengkapan Bahasa Indonesia)	安田和彦 (YASUDA Kazuhiko)	75
インドネシア語の引用句倒置構文 (Quotative Inversion in Indonesian)	長南一豪 (CHONAN Kazuhide)	94
インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティについて (Penggunaan dan Modalitas dalam Pola Hubungan Syarat Bahasa Indonesia)	Ari Artadi (アリ・アルタディ)	113
セレベス上位語群と南スラウェシ語群の関係 (Perhubungan Genealogis di antara Kelompok Bahasa Atas Selebes dan Kelompok Bahasa Sulawesi Selatan)	山口真佐夫 (YAMAGUCHI Masao)	133
【日本インドネシア学会会則】		153
【編集後記】		155

インドネシア語会話の授業について¹ Pikirkan Kembali Kelas Percakapan Bahasa Indonesia

森山幹弘 (MORIYAMA Mikihiro)
サフィトリ・エリアス (Savitri Elias)
モハンマド・ウマル・ムスリム (Mohammad Umar Muslim)
降幡正志 (FURIHATA Masashi)
原真由子 (HARA Mayuko)

要旨 Sinopsis

Panel ini bertujuan untuk meningkatkan pengajaran Bahasa Indonesia di tingkat universitas dan semacamnya di Jepang. Khususnya, pengajaran Bahasa Indonesia dalam percakapan. Untuk itu, tahap pertama yang diperlukan adalah pemahaman bersama antara anggota-anggota dari Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang (HPISJ) mengenai keadaan pengajaran Bahasa Indonesia dalam percakapan. Dalam panel ini kami mempresentasikan praktek pengajaran Bahasa Indonesia di Universitas Osaka dan Universitas Bahasa-bahasa Asing Tokyo sebagai contohnya.

Pengajaran bahasa berkaitan dengan banyak aspek. Penyelenggaraan pengajaran bahasa di suatu lembaga perlu mempertimbangkan berbagai macam aspek agar dapat berlangsung dengan baik. Penggunaan bahan ajar, metode pengajaran, dan masalah-masalah yang muncul dalam penyelenggaraan pengajaran berkaitan erat dengan keadaan bahasa dan tradisi pengajaran bahasa yang diajarkan, bahasa asli pembelajar, budaya dan karakter pembelajar, sistem pendidikan yang berlaku, tujuan pengajaran, lingkungan belajar, dan banyak aspek yang lain.

Dalam tulisan ini dipaparkan keadaan pengajaran bahasa Indonesia, khususnya pengajaran percakapan, di kedua universitas Jepang dengan berbagai macam aspeknya. Setiap lembaga mempunyai sistem pengajaran bahasa yang berbeda tergantung dari banyak faktor. Secara praktis, informasi tentang pengajaran bahasa Indonesia di banyak tempat berguna untuk memberikan wawasan bagi orang yang mengajar atau ingin mengajar bahasa Indonesia. Informasi ini juga berguna sebagai pengetahuan untuk membantu memecahkan masalah-masalah pengajaran bahasa Indonesia. Secara teoretis, pengumpulan informasi ini juga berguna untuk pembentukan generalisasi tentang pengajaran bahasa Indonesia dan teori pengajaran bahasa.

¹ 本論文は2013年11月9日に摂南大学で開催された第44回日本インドネシア学会研究大会において行ったテーマ発表「インドネシア語の会話の授業について—ネイティブ教員の報告を手がかりとして—」を基にまとめたものである。なお本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究C）「日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設」の助成を受けて、平成25年度から3年間の計画で行っているものである。

1. 議論の背景

2011 年の日本インドネシア学会のテーマ発表において、「インドネシア語教育の活性化のために」と題して発表を行った。その発表の背景には、この 10 年ほどの間に日本におけるインドネシア語学習者が減少し、これまで教えられていた教育機関でインドネシア語が教えられなくなってくるにつれ、それらの教育機関に所属する教員も減少し、限られた教員だけでは独自の教材などを開発し、教育する「体力」がなくなってきたという認識があった。そこで、日本におけるインドネシア語教育はどのような対策を採ることが必要とされているのか。また、国内に散らばっている教育機関の教員が協力し、日本インドネシア学会を中心にしてどのような対策を採ることが可能なのか。既存の教育資源を最大限に有効活用するためにはどうしたらよいのか、などについて議論し、具体的な実施案について考えていくことが今後の日本のインドネシア語教育にとって必要であることを議論した。そのような認識は、日本インドネシア学会の会員とある程度の共有ができたと思われる。

それを踏まえて、森山、降幡、原の 3 名は、上述のように既存の教育資源を最大限かつ有効に活用するための方策について具体的な議論を行い、2013 年度の文部科学省の科学研究費の基盤研究に「日本におけるインドネシア語教材の分析と教材バンクの創設」という研究課題で応募し、採択された²。今回のテーマ発表では、今後の日本のインドネシア語教育における「聞く」「話す」技能に直結する会話教材の開発を念頭において、日本におけるインドネシア語の会話授業のあるべき方向性について学会員間で議論をすることを目的とした。まず、大阪大学と東京外国語大学において、ネイティブの教員によって会話の授業がどのように行われているか、それぞれ報告をしてもらい、現状を知るとともに問題点を共有することから始めた。それに基づいて、いくつかの共通課題を取り上げて、学会としてどのように取り組んでいくかを議論していった。今回のテーマについては、会話の授業を担当している教員の多くがインドネシア人教員ということから、テーマ発表と議論のすべてをインドネシア語で行うこととした。

2. 議論の出発点と目的：インドネシア語の会話授業

日本におけるインドネシア語の会話の授業の運営は、ほとんどの教育機関において、もっぱらネイティブの教員に委ねられてきたのではないかと。つまり、インドネシア語教育の全体のカリキュラムの中で、文法や作文などの授業との位置づけがなされないまま行われてきたのではないだろうか。インドネシア語科目のコーディネーターは、会話の授業で使われている教科書さえ知らず、どのような運営が行われているのかも把握していないということもあるようである。

また、会話教材の開発について、他の科目とのリンクが考えられて作成されていることもあまり多いとは思われない。会話の授業を担当する専任教員あるいは非常勤の教員とのコミュニケーションを行い、インドネシア語教育に携わる教員が議論し、それぞれの教材を検討し、有機的な関係をもつ教材を作成されなければならない。

さらには、外国人に対して会話の授業をした経験のないネイティブの教員への必要な指導や訓練なども行っていないのが現状である。教育経験のない教員に対しては十分なガイダンスや

² 森山については、上記科学研究費と併せて、2014 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 による研究助成を受けている。

引き継ぎを行った上で、授業を任せるのであれば、会話の授業を初めて担当する教員は戸惑うばかりである。近年では外国語教授法という語学教育の分野の研究も成果が出されてきており、インドネシア語教育に取り込むことができる教育法もあると思われる。果たして、実際の教育現場でどのような会話の授業の実践が行われているのか、現状の認識を行うことから始める必要がある、というのが今回の発表の出発点である。いわば、これまでほとんど議論してこなかったテーマについてインドネシア語教育に携わる教員や研究者間で議論を呼びかけることが目的である。

まず初めに、どのような授業の運営が行われているかについて、大阪大学と東京外国語大学で会話の授業を担当しているサフィトリ・エリアスとモハンマド・ウマル・ムスリムから、以下のように報告が行われた。

3. 大阪大学と東京外国語大学におけるインドネシア語会話の授業の報告

3.1 大阪大学における会話の授業

3.1.1 大阪大学のインドネシア語教育カリキュラム

大阪大学外国語学部インドネシア語専攻では、専門の授業として、1年次、2年次の前期課程、3・4年次の後期課程においてインドネシア語の授業を開講している。1年次、2年次では、それぞれ週5コマのインドネシア語実習（必修）があり、大まかに「文法」「読解」「会話」「作文」「総合」に分野が分けられている。この2学年のインドネシア語実習は通年で成績評価を出す。3・4年次では、2年間で、学期ごとに開講されているインドネシア語実習を最低限8単位履修することになっている。週4コマの授業を開講しているが、いわば選択必修として、学生はそこから平均して週1コマか2コマのインドネシア語実習を選択している。また、前期課程とは異なり、授業は特に技能分野に分けず、むしろインドネシア語そのものの実習というよりは、インドネシア語で専門分野の知識を深めるといった性格の授業も含まれる。

これらのインドネシア語の授業において、各段階でネイティブ教員が2コマから3コマを担当し、その中に会話が含まれている。

3.1.2 1年次の会話の授業

会話の授業は週に1回行われ、1学期間に14回か15回の授業回数がある。大阪大学インドネシア語専攻では1学年の定員が10名であり、日本語専攻の学生や留年の学生を加えて12人か13人程度のクラス規模である。1学期の段階では、教員が作成する教材を用いる。それは7章からなり、それぞれトピックごとに作った会話スキットから成っている。トピックは、例えば、挨拶、自己紹介、家族などである。

1つのトピックは、2回の授業を使い、会話に出てくる単語、文構造、アクセントとイントネーション、会話の文化背景を解説した上で、ロールプレイ、ドリル練習を行うほか、単語の聞き取り練習をミニマルペアを使って行う。特に初回の授業では、文字の紹介、母音・子音の発音練習も行う。会話の授業においては学生の母語（日本語）の影響をふまえた指導を行うことが重要である。

2学期は、1学期で用意したような教材は用意せず、学生に自らのアイディアであるトピックや状況を設定した上で2人の話者からなる会話を作らせ、その会話を実際に行ってもらおう。自分で会話を作成し、また他の履修者の会話を聞くことによって、新たな語彙の習得、作文練

習（叙述文、疑問文、命令文など）、要約・理解の練習に役立てる。

この授業において、教員は履修者の発音および彼らが作った文の構造を注意深く観察し、また修正することが重要である。なお、文体については、将来、彼らはフォーマルな状況で正しいインドネシア語を使いこなせることが期待されることから、フォーマルな文体とインフォーマルな文体の両方を用いるよりも、フォーマルな文体のみの使用を指導している。インフォーマルな文体の習得は、個人的に SMS、電子メール、facebook、twitter などを通して直接インドネシア人と「おしゃべり」したりコミュニケーションをはかったりすることによって可能であるからである。まず先に、フォーマルな文体を理解していれば、インフォーマルなインドネシア語を聞いたり読んだりしても、対応するフォーマルな表現を解説すれば容易に理解できるだろうと思われる。

成績評価は、授業時の参加と試験に基づく。1年時の試験は学期末に行われ、計2回である。いずれも、学生が自らトピックを探し、それについて教員とディスカッションするという形態である。トピックの例として、自然災害、私の故郷、リサイクルなどがあげられる。

試験実施の前に、まず学生が自分で選んだトピックに基づき作文（長さは問わない）を行い、それを教員が添削する。学生は、この作文が試験時の質疑応答の材料になることを意識しなければならない。試験では、1人ずつ教員と対面し、1人当たり約10~15分である。

3.1.3 2年次の会話の授業

2年次の会話の授業は、学生の語彙力が1年次よりも伸びていると考えられるため、トピックの選択がより多様である。学生の人数は1年次とほぼ同じである。

会話の授業の実施は、作文の授業と組み合わせ、連動させている。作文の授業に関わる部分として、学生は自ら選んだトピックについて作文を行い、教員の添削を受ける。この部分は、予習として行われる。その後、会話の授業に関わる部分となるが、そのトピックの作文内容に基づいて各自発表を行う。発表の際、学生はその作文を暗記したり読み上げたりすることなく、聞き手に5分程度で語らなくてはならない。そのためには、彼らは発表の内容を十分に理解し、適切な語彙を用い、正しい構造の文を作り、正しい発音をする必要がある。発表の後は、他の学生との質疑応答がなされるが、この過程が会話の授業に最も密接な部分と言える。この質疑応答において、教員は学生のやりとりを観察し、適宜間違いを修正する。

試験は、会話の授業と作文の授業はそもそも異なる科目であるため、別々に実施する。会話の授業の試験は、1年次と同様である。すなわち、各学生が自ら選んだトピックについて作文を行い、教員の添削を受けた上で、1人あたり10~15分教員とそのトピックについて議論を行うというものである。

3.1.4 3・4年次のインドネシア語実習

上述のように、3・4年次のインドネシア語演習（週4コマ開講）は選択必修である。したがって、受講者の人数は学期や年によって異なるが、ネイティブ教員の担当する会話の授業はたいてい6人から9人程度の規模である。

ネイティブ教員が担当する授業のテーマ・分野は、「会話」ではなく、「ディスカッション」としている。2年次と同じようにディスカッションのトピックは特に指定せず、学生がそれぞれ選ぶ。異なる点は、前もって受講者が作文し、教員に添削を受けるというプロセスがないということである。各学生は自ら選んだトピックについて発表のために簡単にポイントを書いて

おき、授業ではそれに基づいて、原稿を暗記したり読み上げたりせずに語り、そしてその内容について他の学生の意見を求める。

学生間の議論を、教員は観察し、発音、語彙、文法、文体など各レベルでのインドネシア語の間違いを修正する。試験は行わず、評価はディスカッションにおける参加・活発度と出席に基づいて行う。

3.1.5 まとめ

以上のような、テキストのみに頼らない会話の授業の方法によって、インドネシア語の能力だけでなく、学生の自発的な動機を引き出すことが可能になっていると言える。すなわち、学生自ら考えてテーマを選択し、そのテーマを述べるために必要な単語を新たに探し、構造をもった文章を作り、それを正しい発音で発表するということによって、既存のテキストに基づくだけでは得られない語学力と動機が生まれる。

また、会話と作文という2つの分野の授業を関連づけることによって、相乗効果が期待でき、上述したような学生の学習意欲や動機づけにおいても効果があるだろう。ここでは、異なる2つの授業を組み合わせているが、会話あるいは作文のそれぞれ単独の授業の中でも、2つの要素を用いることで実現できると思われる。

会話や会話に関連する授業の実施において、1クラスの受講者数は大阪大学の現時点でのサイズである10~13人が理想的であると考えられる。会話の授業では1人1人の発音や発話に注目しなければならない、また様々な状況やトピックに応じた発話や議論の仕方を教えるためには、クラスサイズが大きくなると十分に指導できないであろう。

3.2 東京外国語大学における会話の授業

3.2.1 東京外国語大学のインドネシア語教育カリキュラム

学士課程において、学生は各自の学部の必修科目、必修の専攻言語科目（言語文化学部は28単位、国際社会学部は20単位）、必修の地域研究基礎科目（6単位、例えば東南アジア地域研究基礎科目）、および学部／専攻の選択科目を、最短で8学期（4年間）、最長で16学期（8年間）で履修する。インドネシア語専攻で開講されている授業は30単位分で、その内訳は以下の通りである。

	春学期	秋学期
1年次（10単位）	会話 1A / 会話 1B 文法 1A / 文法 1B 作文 1	会話 2A / 会話 2B 文法 2A / 文法 2B 作文 2
2年次（10単位）	会話 3J 作文 3J 読解 1J / 読解 1L / 読解 1N	会話 3K 作文 3K 読解 1K / 読解 1M / 読解 1O
3年次（4単位）	作文 4 読解 2J	会話 4 読解 2K
4年次（4単位）	作文 5 読解 3J / 読解 3L	会話 5 読解 3K / 読解 3M

インドネシア語の授業として、読解（12 単位）、会話（8 単位）、作文（6 単位）、文法（4 単位）の 4 つのカテゴリーが設定されている。読解の単位数が最も多く、会話、作文、文法がそれに続く。国際社会学部では、3 年次および 4 年次の授業 8 単位分について別の言語の授業を履修することもできる。

インドネシア語専攻は、専任スタッフ 2 名（日本人）、2 年ごとに交代する客員教員 1 名（インドネシア人）、および数名の非常勤講師を有している。上述の 4 カテゴリーのうち、文法は日本人教員が担当し、会話はインドネシア人教員が担当する。読解および作文については日本人教員もインドネシア人教員も担当する。

インドネシア語専攻の新入生は毎年約 20 名であり、1 年次の授業の受講者は約 20 名と比較的安定している。しかし、2 年次以降の受講者数にはばらつきがあり、10 名以下の授業もあれば、30 名を超える場合もある。インドネシア語専攻で必修となる 28 単位のうち、会話の授業は 8 単位で、内訳は以下の通りである。

1. 1 年次春学期： 会話 1A および 会話 1B
2. 1 年次秋学期： 会話 2A および 会話 2B
3. 2 年次春学期： 会話 3J
4. 2 年次秋学期： 会話 3K
5. 3 年次秋学期： 会話 4
6. 4 年次秋学期： 会話 5

3.2.2 1 年次の会話の授業

1 年次における会話の授業は、学生が基本的あるいは日常的なコミュニケーションを行うことができる力を養うことを目的とする。「知り合う」「買い物をする」「訪問する」といった日常的なトピックに基づいてシラバスを作成する。春学期（会話 1A および会話 1B）、秋学期（会話 2A および会話 2B）いずれも週に 2 回会話の授業が行われている。春学期の 2 コマ（会話 1A および会話 1B）のシラバスは共通しているが、授業の進め方が異なる。会話 1A では一定のトピックについてダイアログ例を読み、理解し、練習問題に取り組む。会話 1B では、さまざまな種類の練習問題を行う。秋学期の授業 2 コマ（会話 2A および会話 2B）も同様のパターンで授業を進める。

1 年次の会話の教材は(1)ダイアログ例、および(2)練習問題の 2 つの部分からなる。ダイアログ例は、練習問題へと発展させ、かつさまざまなインドネシア文化の側面を説明するために教員が作成したものである。ダイアログ例は、(1)インドネシア語で自分のことを述べる、(2)できるだけ自然なインドネシア語を用いる、そして(3)インドネシア文化を理解する、の 3 点を目的として作成している。目的(1)に対応して、ダイアログには日本に関する人名や場所、食物、習慣、あるいはキャンパス及びその周辺での学生の生活環境などを盛り込んでいる。目的(2)に対応して、ダイアログ例に用いる表現には、他言語（とりわけ日本語や英語）に合わせたものではなくインドネシア人が日常用いるインドネシア語を使用する。目的(3)は目的(2)と深く関連しており、教員はダイアログ内の自然なインドネシア語の使用に基づいてインドネシア文化を説明する。

インドネシア語の会話の授業では、一般的には直接法（教授言語や教材にインドネシア語を用いる）やコミュニカティブ・メソッド（学生がインドネシア語でコミュニケーション活動を

行う)が主流である。直接法による授業は1年次の初頭から導入され、学生は最初から教員の話す、あるいは教材に用いられているインドネシア語に直面することになる。英語の使用は、やむを得ない状況に限られる。直接法で授業を行う際には、教員は述べようとすることを学生が理解できるようさまざまな手法を考えなければならない。実際には直接法による授業はそれほど難しくない。平易な表現を用い、はっきりとした声で話し、さほど早くなく繰り返し述べることで、学生は教員の述べることをだんだんに理解していく。

直接法による授業は、インドネシア語を聴くことに慣れていき、特別に要約する必要がなくなるため、学生にとって意義がある。またインドネシア人がどのようにインドネシア語を話すか直接目にすることができるため、他のインドネシア人と出会う際に違和感を覚えることがなくなる。

コミュニケーション・メソッドも1年次の初頭から導入される。1年次における毎回の授業で、学生は教員の提示するダイアログ例を用いて他の学生とインドネシア語で会話を行わなければならない。2年次以降においても学生はディスカッションやプレゼンテーションなどのコミュニケーション活動をインドネシア語で行わなければならない。

3.2.3 2年次以降の会話の授業

2年次における会話の授業は、1年次に修得したコミュニケーション力をさらに発展させることを目的とする。2年次では一般的なコミュニケーションを行う、すなわち教育や文化などのトピックについて話せることが期待される。3年次および4年次では、興味のある分野や特別なトピックについてコミュニケーションを行えることが期待される。そのために、ディスカッションやプレゼンテーション、インタビューなどの口頭表現能力を発展させていく。

2年次の会話の授業は春学期と秋学期にそれぞれ1コマずつ(会話3Jおよび会話3K)あり、3年次では秋学期に1コマ(会話4)、4年次にも秋学期に1コマ(会話5)が開講されている。したがって、履修単位数は1年次の4コマから2年次の2コマ、3~4年次に各1コマずつと、授業数が減っていく。

2年次以降の会話の教材は、新聞、雑誌、テレビ、映画、インターネット、インドネシア人へのインタビューなど多岐にわたる。シラバスは、その時点で日本やインドネシアで関心が持たれている話題や学生が興味を持っている分野などに従って作成される。

2年次以降の授業は非常にフレキシブルである。シラバス内で計画されているトピックに基づき、それに関連する形で学生はさまざまな活動を行う。例えば「教育」というトピックでは、学生は教育に関する新聞記事を読んだりインターネット上で情報を探したり、テレビで教育に関する番組を見たり、インタビューしたりといった作業を行う。状況や必要性に応じて、それらの情報源は日本語やインドネシア語、もしくは他の言語によることもある。収集した情報を、授業内でインドネシア語を用いてプレゼンテーションやディスカッションを行う。

3.2.4 問題点と課題

3.2.4.1 教材について

教材に関する主要な問題点は、状況に合った教材、すなわち日本人学生のニーズに合った教材がまだ整理されていないことである。日本人学生のニーズに合った教材には、日本文化とインドネシア文化を反映している、日本の教育制度を考慮している、日本人学生の性格を考慮していることが必要である。東京外国語大学で用いている教材は、インドネシア語話者である教

員が作成しており、当然ながらインドネシア文化をより多く反映することになり、日本の教育制度や日本人学生の性格を十分に考慮したものとはなっていない。状況にあった教材を作成するためには、日本人教員とインドネシア人教員の協力が必要となる。

別の問題として、インドネシア語のフォーマルな文体とインフォーマルな文体の違いが挙げられる。フォーマルな文体は、いくつかの点においてインフォーマルな文体と大きく異なる。一般に授業ではフォーマルな文体を教えることになるため、インフォーマルな状況で学生の用いるインドネシア語はぎこちなく、あるいは不自然に聞こえることがよくある。また、インフォーマルな状況でインドネシア人の話す表現を学生が理解できないこともしばしばである。学生のインドネシア語の不自然さは、日常のコミュニケーションでよく用いられる表現が複雑な文法要素を含むという点にもある。会話の授業においてフォーマルな文体とインフォーマルな文体の違いは1年次の当初から説明している。例えば、人称代名詞 *Anda* (フォーマル) と *kamu* (インフォーマル) を、ダイアログ例を通じて当初から説明する。とはいえ、授業ではフォーマルな文体に重きを置いており、インフォーマルな文体は非常によく使うと思われる表現に限っている。

日常会話で用いられる複雑な構造を持つ文は、学生が平易な構造を持つ文を使えるようになった後に導入する。例えば、*Apa yang sedang dibaca Toshio?* のような複雑な構造を持つ疑問文は、*Toshio sedang membaca apa?* のようにより平易な構造を持つ文の後に教える。

また、異なるカテゴリーにおける教材同士の関係も問題点として挙げられる。上述のとおり、東京外国語大学のインドネシア語専攻のカリキュラムは読解、会話、作文および文法の4つのカテゴリーからなりたつ。これら4つのカテゴリーはレベルによってさらに細かく分けられ、これら4つのカテゴリーすべてが常に毎学期開講されているわけではない。また教員もレベルによって異なってくる。例えば1年次に設定されている会話、文法、作文の3カテゴリーは、それぞれ別の教員が担当しているため、十分にリンクしているとは言い難い。もし3カテゴリーの教材が互いに関連し協力していれば、ある授業で学んだ事柄を他の授業で繰り返し定着させられるなど、教育をより効果的に行える。しかし、異なるカテゴリー同士の授業を効果的に関連づけていくことは簡単なことではなく、教員が異なればなおさらである。

3.2.4.2 授業運営について

日本人は一般に口数が少なく恥ずかしがりであることが知られている。このような性格は、間違いを犯さない、あるいは誤解されないようにと、会話する際に注意深くなる傾向があるという日本人の文化に深く関連する。東京外国語大学での授業では、学生は無口でありしゃべらないという傾向にある。そのため、学生が話すことを促すため、教員はさまざまな方法を採用している。

例えば、学生を2~4名の小グループに分けることがある。小グループ内であれば、学生はたいてい恥ずかしがることなく話そうとする。その際に注意すべきことは、グループ内の全員に話させるようにし、コミュニケーションが一定の学生に偏らないようにすることである。また、日本語ではなくインドネシア語を話すように常に促し注意することも必要である。

また、教員が学生1人1人に対し教員からの質問に強制的に答えさせるという方法もある。この方法は学生に話させるという点では効果的だが、時間がかかり、また教員にかなりの負担がかかる。教員が1人の学生と話している最中に、授業の妨げにならないよう他の学生には別

の課題を与える必要があることに注意すべきである。この方法は、大規模なクラスよりも小規模なクラスにおいて導入しやすいものである。

授業運営の別の問題点として、1 クラス内における学生のレベルの違いがあり、これは2 年次以上の授業に見られる。語学力が低い学生がクラスの中に存在することも少なくない。このような学生に対しては、授業時間外に追加の課題を与えるなど、特別なケアをし、しっかりと勉強するように促す必要がある。授業の理解度の低い学生がいると、他の学生が述べたことを理解できなかったり、あるいは自分の述べていることが他の学生に理解できなかったりするなど、会話の授業において問題が生じ、結果として授業あるいは課題の実施が順調に進まなかったり妨げられたりすることにつながる。

3.2.4.3 教室外での学習

学生の会話能力の向上の助けとなる学習の1 つに、インドネシア人留学生との交流を支援することが有効である。東京外国語大学には毎年20 名弱のインドネシア人留学生が在籍しているが、学生にとって、インドネシア人と出会う機会は多くはない。しかし、数名の学生はその留学生と交流を持とうとする。その交流において、たいていの留学生はインドネシア語を話す際に若者のインフォーマルな文体(bahasa gaul)を用いる。そのため留学生と交流を持っている学生はしばしば授業中に他の学生や教員に理解できない語を用いることがある。さらには、留学生と交流を持つ学生は、インフォーマルな文体で多く会話するためフォーマルとインフォーマルの区別がつかなくなることがある。

インドネシア人と直接交流するのではなく、インターネットを通じてインドネシア人の友人を捜すことも可能である。一般にインドネシア人は友人になってくれやすく、しかも相手がインドネシア語を学ぶ外国人であればなおさらである。それ以外に、インドネシア人を授業に招いたり、インタビューのためにインドネシア人のところを訪問するという課題を与えることも行っている。

4. 会話授業の現状分析と提案

4.1 現状認識

上記の2 つの発表から見てきたことは、大阪大学では1 週間に1 回、東京外国語大学では1 ないし2 回の会話の授業が行われているが、ともにインドネシア語の他の授業との連関が必ずしも明確であるとは言えなかった。クラスサイズについては、大阪では10～13 名、東京では20～30 名である。東京のサイズは会話としてはやや大きすぎるように思われるが、留年者などの影響でやむを得ないところもあるようである。

教材については、それぞれの大学で担当教員が準備して行う授業とそうでない授業がある。あらかじめ準備されていない授業の中で、受講生が作文をしてきたものを教材として使う会話の授業がおこなわれているものもあった。しかしながら、それらの教材について他のインドネシア語の授業との関連が検討され、リンクさせるような教材の作成は行われていない。また、主として授業担当者が独自に教材を作成し、授業の運営の仕方についてもコーディネーター教員と十分な議論が行われているとは言えないようである。

両大学で難しいと考えられていたのは、口語やインフォーマルな言語を教えることであった。友人同士で使用されるくだけたインドネシア語を教えるか否かについて、どの程度まで教える

べきかについて、その判断が難しいと感じられている。

2名の発表を踏まえて行われた学会での議論をさらに加えて、以下のような検討課題と方向性が見えてきた。

4.2 検討課題と提案

両大学の授業の運営からいくつかの検討課題が見えてきた。それは日本の他のインドネシア語教育機関には当てはまらないものもあると思われるが、共通の課題となっているものもあると考えられる。以下に項目ごとに示す。

(1) 会話の授業の適正なクラスサイズ

この点については、それぞれの大学の語学科目の運営の観点から、一概に決められるものではないが、適正な会話の授業は20名を超えないことが望ましい。

(2) 正しい発音の訓練の重要性

特に1年次には学生がインドネシア語の正しい発音を身につけることを主眼として会話の授業が行われ、ネイティブの教員から丁寧な発音の指導が行われることが望まれる。

(3) 授業シラバスの明確化とそれに基づいた授業の実施

文部科学省からの指導によって各大学ではシラバスの作成についてより詳細な記述を行う事が義務づけられている。会話の授業のシラバスについても、当該授業において何を教えるのか、到達目標として何がどこまでできるようになるかの明示、成績の評価の基準の明示、試験をどのように行うのかなど、シラバスに示す事により、より良い授業が運営できる。

(4) 教材について

なんらかの教材が準備されなければならないことは言うまでもないが、その教材は他のインドネシア語科目と有機的に連関が図られることで効率的な授業の運営につながる。また、東京外国語大学で行われているようなパターン練習、ロールプレイなどを授業に取り入れる場合には、そのための教材が作成されなければならない。

またクイズ形式を取り入れた教材や写真や動画などのヴィジュアルな教材を多く取り入れることがすでに会話の授業において行われており、学生の動機付けに役立っている。

大阪大学で行われているように、週一回の作文の授業と会話の授業をリンクさせることで、学生自ら考えてテーマを選択し、そのテーマについて話すために必要な単語を新たに探し、それを正しい発音で発表するということによって、既存のテキストに基づくだけでは得られない語学力と動機が生まれる。

(5) 授業の運営の仕方

授業担当の教員が様々な創意工夫を行い、試行錯誤しながら授業を運営している事が発表と議論のなかから見えてきた。日本人の学生に適した授業運営も考慮される必要がある。比較的遠慮がちな日本人学生に対してより活発なコミュニケーション能力を身につけさせることも外国語学習には必要とされる。

(6) 教授言語

日本の教育機関では英語を媒介言語としている場合と、媒介言語なしにインドネシア語で教えている場合に大別できる。ただし、どちらの場合にも教員が日本語ができる場合には日本語を交えて教えている。1年生の初めからインドネシア語のみで会話の授業を運営するには、

少し無理があるかもしれないが、ネイティブの教員のインドネシア語を聞かせることが重要であるので、授業が運営できればできるだけインドネシア語を教授言語とすることが望ましいと考えられる。

(7) 口語体と地方語について

基本的には口語体のインドネシア語は、授業においては教えないことが良いという議論があった。しかし、情報として伝えて、インドネシアへの旅行や、留学生との交流で戸惑いを感じないようにする必要がある。地方語のインドネシア語への影響については高学年で教えるのも良いであろう。

(8) 教室外での学習の指導

インターネットを活用したインドネシア語の学習についても指導することで、教室外での学習を奨励することができる。有用なサイトや動画サイトの活用によって生きたインドネシア語の習得を促す事ができる。また、キャンパス内のインドネシア人留学生や地域のインドネシア人コミュニティーとの接点を作るための紹介を教員が行うことで実践会話の機会を増やすことができる。

5 おわりに

今回のテーマ発表において、日本におけるインドネシア語の会話の授業についてどのような運営が行われているか、問題点がどこにあるのか、課題は何かなどをインドネシア語の教育に携わる者の間で共有できた事が最も大きい収穫であったと思われる。とりわけ、ネイティブの教員が主体的に会話の授業の運営について考える機会になったことの意味が大きいと思われる。

インドネシア語の会話を日本人の学生に教える際には、日本人の学生の特性や日本の大学の教育現場の実状に合わせた教授法を考える必要がある。ただし、それぞれの会話の授業担当教員は外国語教授法等の理論に基づく教授法を取り入れた上で、日本人学生に合わせてアレンジすることが必要であろう。ゼロから手探りで教授法を編み出していくのは効率的とは言えず、教育効果も限られてくると思われる。その点からネイティブの教員間の情報共有や勉強会などを行うことも意味があると考えられる。その観点から、今回のテーマ発表を受けて、次年度にはネイティブ教員が企画する会話授業の取組に関するテーマ発表を行うことを提案した。今年の発表者と情報共有しながら企画されることを期待したい。

今回のテーマ発表の成果としては非常に限られたものではあったが、いくつかの議論や提案を基に、それぞれの教育機関において、より良いインドネシア語の会話授業を目指して具体的な取組が進められることを期待する。

最後に、本発表のテーマ「インドネシア語の会話の授業について―ネイティブ教員の報告を手がかりにして」について、学会の議論の場において貴重な意見、情報、そして有意義な議論を頂いた学会員の皆様にお礼を申し上げる。

Penggunaan Foto dalam Pembelajaran Percakapan 写真を使った会話教授法

エディ・プリヨノ（京都産業大学）
Edy Priyono (Universitas Kyoto Sangyo)

要旨

本論文では、写真を使ったインドネシア語会話の授業について考察する。インドネシアの印刷メディアから直接採取した教材を用いる。クラスのレベルは中級である。このレベルの会話を能動的に学習する活動について考える。授業は次のような構成で行う。

- (1) クラスをいくつかのグループにわけると。(各グループは2～4人)
- (2) 写真を印刷したプリントを1人1枚配る。
(同グループの学生には同一の写真を印刷したもの)
- (3) 写真をよく見る。(1分程度)
- (4) 各自、写真を説明するために必要なインドネシア語の単語を書く。(2分程度)
- (5) 各自、写真について説明する文章をインドネシア語で書く。(4分程度)
- (6) 各グループ内でディスカッションを行う。(5分程度)
- (7) 全員の前で各グループがインドネシア語で発表を行い、その後全体でインドネシア語で質疑応答する。(7分程度)
- (8) 写真について全体でディスカッションを行い、その後各グループはインドネシア語の文章を完成する。

写真にはたった一枚であっても非常に多くの情報が隠れており、その視覚的インパクトは大きい。一枚の写真から学生が自由な発想をうながされることで、学生は授業に興味をもち、能動的に、かつ、楽しみながら学習を行うことができる。このことは授業全体、クラス全体の活性化にもつながる。また、この授業では、学生一人一人が自分の意見を持ち、それを表現する力、他の人と意見交換したり議論したりする力を養うことも目的としている。一連の学習を通じて、インドネシアについて興味を持つとともに、インドネシア語のコミュニケーション能力を総合的に高めることができる。

1. Pendahuluan

Manusia adalah makhluk sosial. Mereka selalu hidup berkelompok, mulai dari kelompok kecil sampai kelompok besar. Interaksi antarkelompok didukung oleh alat komunikasi yang mereka miliki bersama yakni bahasa. Kenyataan ini berlaku bagi masyarakat tradisional maupun masyarakat modern. Hampir semua aktivitas manusia tidak dapat berlangsung tanpa bahasa. Peranan bahasa sebagai alat komunikasi makin penting dirasakan seiring dengan peradaban manusia yang terus berkembang (Jago Tarigan, 1987).

Bahasa adalah suatu sistem lambang bunyi, bersifat arbitrer, digunakan oleh suatu masyarakat tutur untuk bekerja sama, berkomunikasi, dan mengidentifikasi diri. Sebagai suatu sistem, maka bahasa terbentuk oleh suatu aturan, kaidah, atau pola-pola tertentu. Bila aturan, kaidah atau pola ini dilanggar, maka komunikasi dapat terganggu (Abdul Chaer, 1998). Bahasa memiliki peran penting dalam perkembangan intelektual, sosial, dan emosional peserta didik (siswa, mahasiswa) dan merupakan penunjang keberhasilan dalam mempelajari semua bidang studi. Karena pentingnya bahasa seperti tersebut di atas, maka tujuan pokok mempelajari bahasa adalah agar dapat menggunakan bahasa itu untuk berkomunikasi baik secara lisan maupun tulisan dengan tepat dan fasih. Pembelajaran bahasa diharapkan mampu membantu peserta didik mengenali dirinya, budayanya, budaya orang lain, mampu mengemukakan gagasan, serta berpartisipasi dalam masyarakat.

Pembelajaran bahasa memiliki empat fungsi, yaitu :

- a. Alat untuk menyatakan ekspresi diri. Bahasa menyatakan secara terbuka segala sesuatu yang tersirat didalam pikiran manusia.
- b. Alat komunikasi. Bahasa merupakan saluran perumusan maksud dan memungkinkan adanya kerja sama antarindividu.
- c. Alat mengadakan integrasi dan adaptasi sosial. Bahasa merupakan salah satu unsur kebudayaan yang memungkinkan manusia memanfaatkan pengalamannya dan belajar menyesuaikan diri dengan orang-orang lain.
- d. Alat mengadakan kontrol sosial. Bahasa merupakan alat yang dipergunakan dalam usaha mempengaruhi tingkah laku dan tindak tanduk orang lain (Gorys Keraf, 1991).

2. Metode dan Teknik Pembelajaran Bahasa

Tujuan pembelajaran bahasa adalah mengarahkan pembelajar untuk melakukan interaksi verbal yang bermakna. Untuk mencapai tujuan ini, pengajar (guru/dosen bahasa) harus menciptakan suasana belajar yang kondusif. Mereka tidak hanya berperan sebagai pengajar, tetapi juga sebagai *motivator*, *director*, dan *facilitator*. Agar bisa mengelola proses belajar mengajar dengan baik, guru/dosen bahasa harus memiliki pengetahuan tentang berbagai metode dan teknik pembelajaran bahasa.

Metode pembelajaran bahasa adalah rencana pembelajaran bahasa yang mencakup pemilihan, penentuan, dan penyusunan bahan yang akan diajarkan secara sistematis serta

kemungkinan pengembangannya. Pemilihan, penentuan, dan penyusunan bahan ajar secara sistematis dilakukan agar bahan ajar tersebut mudah diserap dan dikuasai oleh siswa. Ada beberapa metode yang dapat digunakan dalam pembelajaran bahasa Indonesia, misalnya, metode terjemahan, metode ceramah, metode membaca, metode *audiolingual*, metode langsung, metode komunikatif, metode diskusi, dan lain-lain (Jago Tarigan, 1987).

Teknik pembelajaran bahasa adalah cara mengajarkan atau menyampaikan bahan ajar yang telah disusun (dalam metode). Teknik adalah cara konkret yang dipakai guru/dosen saat proses pembelajaran berlangsung. Sebuah teknik perlu digunakan dengan tepat oleh guru/dosen agar proses belajar mengajar dapat berjalan lancar. Dalam menentukan teknik pembelajaran, guru/dosen harus mempertimbangkan situasi kelas, keadaan siswa/mahasiswa, bahan ajar, dan faktor-faktor lain. Ada banyak teknik yang bisa digunakan dalam pembelajaran bahasa. Berikut ini adalah beberapa teknik yang biasa digunakan dalam pembelajaran percakapan bahasa Indonesia.

- (a) ulang ucap
- (b) lihat ucap
- (c) memerikan
- (d) bertanya
- (e) menjawab pertanyaan
- (f) menceritakan kembali
- (g) berdialog
- (h) bermain peran
- (i) berwawancara
- (j) reka cerita foto/gambar

Dari uraian di atas dapat dikatakan bahwa teknik pembelajaran adalah upaya yang dilakukan oleh guru/dosen dalam pelaksanaan kegiatan belajar mengajar untuk memperoleh hasil pembelajaran yang optimal. Suatu pembelajaran bahasa dikatakan berhasil jika pembelajar menjadi terampil menggunakan bahasa sebagai alat komunikasi

3. Pembelajaran Aktif

Pembelajaran adalah proses interaksi antara pengajar dan pembelajar di suatu lingkungan belajar. Pembelajaran memiliki konotasi berbeda dengan pengajaran. Pengajaran mengesankan pada pekerjaan satu pihak, yaitu kegiatan pengajar saja. Sedangkan pembelajaran menunjukkan adanya interaksi antara pengajar dan pembelajar.

Pembelajaran aktif adalah cara pembelajaran yang melibatkan aktivitas peserta didik (siswa/mahasiswa) dalam proses pembelajaran di kelas. Dengan menerapkan kegiatan pembelajaran aktif, pengajar (guru/dosen) mengajak pembelajar untuk belajar secara aktif. Artinya, pembelajar melibatkan diri dalam proses pembelajaran secara fisik dan mental untuk mendapatkan hasil belajar yang maksimal (Barr & Tagg, 1995; Zaini, 2002).

Dalam model pembelajaran aktif, guru/dosen lebih memposisikan dirinya sebagai

fasilitator, yang bertugas memberikan kemudahan belajar kepada peserta didik. Peserta didik terlibat secara aktif dan banyak berperan dalam proses pembelajaran sedangkan guru/dosen lebih banyak memberikan arahan dan bimbingan, serta mengatur sirkulasi dan jalannya proses pembelajaran. Pembelajaran aktif merupakan proses pembelajaran yang mengharuskan guru/dosen untuk memotivasi dan memunculkan kreativitas peserta didik. Selama proses pembelajaran berlangsung, mereka harus mampu menggunakan beberapa teknik yang variatif. Dalam model pembelajaran aktif, pembelajar akan mendapatkan pemahaman yang dapat meningkatkan kompetensinya. Selain itu, model pembelajaran aktif memungkinkan peserta didik mengembangkan kemampuan berpikir tingkat tinggi, seperti menganalisis, melakukan penilaian terhadap berbagai hal, dan mampu menerapkan keterampilannya dalam kehidupan sehari-hari.

4. Penggunaan Media Pembelajaran

Dalam proses belajar mengajar ada beberapa faktor yang mempengaruhi tercapainya tujuan pembelajaran, yaitu pengajar, peserta didik, lingkungan, metode/teknik, dan media pembelajaran. Kata media berasal dari bahasa Latin yang merupakan bentuk jamak dari "medium" yang secara harafiah berarti perantara atau pengantar. Dalam pendidikan, media adalah sesuatu yang digunakan oleh pendidik untuk menyampaikan pesan kepada peserta didik untuk meningkatkan perhatian dan minat mereka.

Dengan adanya media pembelajaran, maka tradisi lisan dan tulisan dalam proses pembelajaran dapat diperkaya dengan berbagai media tersebut. Dengan adanya media pembelajaran, ide yang abstrak bisa menjadi kongkret dan mudah dimengerti oleh peserta didik. Bila media pembelajaran digunakan secara tepat, proses pembelajaran akan berjalan efektif. Ada beberapa jenis media pembelajaran, misalnya:

1. Media audio, yaitu media yang hanya dapat didengar saja (radio, rekaman suara).
2. Media visual, yaitu media yang hanya dapat dilihat saja, tidak mengandung unsur Suara (komik, poster, gambar, lukisan, foto).
3. Media audio visual, yaitu media yang selain mengandung unsur suara juga mengandung unsur gambar yang bisa dilihat (film, rekaman video, televisi).

Fungsi media pembelajaran, antara lain adalah:

1. Menjadikan pembelajaran lebih menarik.
2. Membangkitkan motivasi belajar
3. Meningkatkan keefektifan proses pembelajaran dan penyampaian pesan dan isi pelajaran pada saat itu, sehingga yang menjadi tujuan dari pembelajaran bisa tercapai secara maksimal.

Keberhasilan penggunaan media pembelajaran dalam proses pembelajaran bergantung pada (1) isi pesan, (2) cara menjelaskan pesan, dan (3) karakteristik penerima pesan. Dengan demikian dalam memilih dan menggunakan media, perlu diperhatikan ketiga faktor tersebut. Apabila ketiga faktor tersebut mampu digabungkan dengan baik,

penggunaan media pembelajaran akan memberikan hasil yang maksimal. Proses pembelajaran adalah proses komunikasi. Media pembelajaran menempati posisi yang cukup penting sebagai salah satu komponen proses pembelajaran. Tanpa media pembelajaran, proses komunikasi juga tidak akan bisa berlangsung secara optimal. Dengan adanya media pembelajaran, proses pembelajaran akan menjadi lebih bermutu.

Meskipun demikian, sampai sekarang masih ada beberapa pengajar yang enggan menggunakan media pembelajaran. Alasan mereka tidak menggunakan media pembelajaran, antara lain yaitu:

Pertama, menggunakan media adalah repot. Mengajar dengan menggunakan media perlu persiapan, mereka merasa sudah sangat repot dengan menulis persiapan pembelajaran, jadwal yang padat, masalah keluarga di rumah dan lain-lain, sehingga tidak ada waktu untuk memikirkan media pembelajaran.

Kedua, media biasanya canggih dan mahal. Media tidak harus canggih dan mahal. Sebenarnya, nilai penting dari sebuah media pembelajaran tidak terletak pada kecanggihannya (apalagi harganya yang mahal) tetapi pada efektifitas dan efisiensinya dalam membantu proses pembelajaran.

Ketiga, tidak bisa menggunakannya. Gagtek (gagap teknologi) ternyata menyerang sebagian dari pengajar. Ada beberapa yang “takut” dengan peralatan elektronik, takut salah pijit, takut rusak, dan sebagainya.

Keempat, media adalah hiburan, sedangkan belajar adalah kegiatan serius. Menurut pendapat orang-orang tertentu, belajar harus dengan serius, sedangkan media pembelajaran itu identik dengan hiburan. Hiburan adalah hal yang berbeda dengan belajar. Padahal, paradigma belajar kini sudah berubah. Kalau proses belajar mengajar bisa berlangsung dengan menyenangkan, mengapa harus dengan menderita?

Kelima, kebiasaan menggunakan metode ceramah/bicara. Metode mengajar dengan ceramah adalah lebih mudah daripada menggunakan media. Inilah kebiasaan yang sulit diubah.

5. Penggunaan foto sebagai Media Pembelajaran

Dalam makalah ini, penulis akan mencoba menjelaskan penggunaan foto sebagai media pembelajaran. Foto bisa membantu guru/dosen waktu memberikan penjelasan. Selain bisa menghemat kata-kata dan waktu, penjelasan guru/dosen lebih mudah dimengerti oleh pembelajar, lebih menarik, membangkitkan motivasi belajar, menghilangkan kesalahan pemahaman, serta informasi yang disampaikan menjadi konsisten.

Seperti yang tertulis di atas, ada tiga jenis media, yaitu media audio, visual, dan audio visual. Salah satu media visual adalah foto. Media foto merupakan media pembelajaran yang mudah dimengerti. Sumbernya pun tersebar luas dan mudah didapatkan, misalnya melalui surat kabar, majalah, koleksi foto pribadi, dan lain-lain. Penggunaan foto sebagai media yang dikaitkan dengan materi pembelajaran akan menjadi seperti bahasa yang dapat

dimengerti dan mengandung banyak makna. Mudah-mudahan mendapatkan foto tidak berarti nilai foto sebagai media rendah. Justru kemudahan ini yang harus dimanfaatkan guru/dosen. Foto memiliki kelebihan tersendiri karena berkaitan dengan penglihatan (visual). Foto dapat mengkonkritkan sesuatu yang bersifat verbal dan abstrak. Kelebihan foto, antara lain:

- (1) Sifatnya kongkret, lebih realistik, dan menunjukkan pokok masalah dibandingkan dengan media verbal semata.
- (2) Foto dapat mengatasi keterbatasan waktu.
- (3) Foto dapat mengatasi keterbatasan pengamatan.
- (4) Foto dapat memperjelas suatu masalah dalam bidang apa saja dan untuk tingkat usia berapa saja.
- (5) Foto mudah didapat, murah, dan bisa digunakan tanpa peralatan khusus (Helmi Hasan, dkk. , 2003).

Setiap media pembelajaran memiliki kelebihan dan kekurangan. Kekurangan foto sebagai media pembelajaran, di antaranya, yaitu:

- (1) Foto hanya menekankan persepsi indra penglihat.
- (2) Ukurannya sangat terbatas untuk ditunjukkan kepada kelompok besar.

Dengan mempertimbangkan kelemahan foto di atas, berarti guru/dosen harus memilih foto yang memiliki pesan tidak terlalu kompleks atau foto yang sederhana tetapi memiliki pesan informasi yang jelas dan tepat. Sebenarnya, dengan berbagai kecanggihan teknologi zaman sekarang, guru/dosen dapat memanfaatkan peralatan seperti komputer, proyektor, untuk memperbesar foto sehingga dapat dilihat oleh seluruh siswa dalam kelas atau kelompok besar. Selanjutnya, guru/dosen harus memilih foto yang cocok supaya penggunaan foto sebagai media dalam pembelajaran efektif. Syarat-syarat foto yang cocok untuk media, antara lain, sebagai berikut:

- (1) Wajar, tidak direkayasa oleh juru kamera, artinya foto tersebut harus menunjukkan situasi seperti halnya kalau orang melihat benda sebenarnya.
 - (2) Sederhana, artinya jelas menunjukkan poin-poin pokok dalam foto.
 - (3) Jelas, artinya bisa dilihat dan tidak kabur.
 - (4) Mengandung gerak atau perbuatan, artinya ada kesan dinamis.
- (Sarah Hatcher, 2012).

6. Penggunaan Foto dalam Pembelajaran Percakapan Bahasa Indonesia

Seperti kita ketahui, otak manusia terdiri dari dua bagian. Otak bagian kiri dan bagian kanan. Kita mengolah informasi melalui otak kiri dan otak kanan yang mempunyai tugas masing-masing. Otak kiri merupakan otak akademis yang tugasnya adalah mengolah hal-hal yang berhubungan dengan logika, analisis, bahasa dan matematika. Sebaliknya, otak kanan adalah otak kreatif karena dipenuhi imajinasi, emosi, intuisi, dan spiritual. Dalam pembelajaran bahasa, penggunaan foto sebagai media akan mengaktifkan otak bagian kanan karena pembelajar harus menggunakan imajinasinya. Dalam makalah ini,

penulis akan membahas pembelajaran aktif menggunakan foto dalam kuliah percakapan bahasa Indonesia untuk tingkat menengah. Metode yang digunakan dalam pembelajaran ini adalah metode komunikatif dan metode diskusi. Teknik pembelajaran yang digunakan adalah teknik kolaborasi, teknik tanya jawab, dan teknik reka cerita. Peserta kuliah adalah mahasiswa tingkat 3 dan tingkat 4. Jadi, mereka sudah memiliki pengetahuan dasar tentang tata bahasa Indonesia.

Adapun langkah-langkah pembelajarannya secara garis besar adalah sebagai berikut.

1. Mahasiswa dibagi menjadi beberapa kelompok. Satu kelompok terdiri dari 2~4 orang.
2. Setiap orang diberi satu lembar kegiatan yang ada foto.
Semua mahasiswa mendapat foto yang sama (lihat lampiran).
3. Mahasiswa melihat foto dengan seksama selama kira-kira 1 menit.
4. Setiap mahasiswa menulis kata-kata bahasa Indonesia yang ada dengan hubungannya
Dengan foto di kotak kecil di lembar kegiatan selama kira-kira 2 menit (lihat lampiran).
Mahasiswa boleh menggunakan kamus untuk mencari kata-kata yang cocok.
5. Mahasiswa menulis narasi dalam bahasa Indonesia untuk menjelaskan peristiwa dalam foto di kotak besar di lembar kegiatan selama kira-kira 5 menit (lihat lampiran).
Mahasiswa boleh menggunakan kamus untuk mencari kata-kata yang cocok.
6. Dengan berkolaborasi inter siswa satu kelompok, mahasiswa berdiskusi dan saling mengevaluasi narasi mahasiswa lain baik tulisan maupun isinya selama kira-kira 5 menit.
7. Setiap kelompok mempresentasikan narasi hasil diskusi di depan kelas dan menjawab pertanyaan dari kelompok lain selama kira-kira 7 menit.
8. Dosen dan mahasiswa berdiskusi tentang foto dan tersebut menyimpulkan hasil diskusi.
Akhirnya, mahasiswa menulis rangkuman diskusi tentang foto tersebut.

Bergantung pada tingkat kesulitannya, pengajar bisa menggunakan satu foto atau dua foto dalam setiap pertemuan. Kalau fotonya sederhana, mudah dipahami, dan dijelaskan, penggunaan dua foto lebih tepat. Dengan demikian mahasiswa tidak merasa bosan.

7. Manfaat Pembelajaran

Berbagai teknik pembelajaran yang penulis terapkan di atas sangat mudah pelaksanaannya dan tidak memerlukan media yang mahal. Adapun manfaatnya bagi para mahasiswa antara lain:

1. Mahasiswa terbiasa untuk berpikir secara kreatif dan mengembangkan imajinasi.
2. Mahasiswa terbiasa untuk bekerja sama dan bertoleransi terhadap pendapat orang lain.
3. Mahasiswa yang kemampuannya lemah bisa belajar dari mahasiswa yang pandai.
4. Mahasiswa terbiasa menyampaikan pendapat dan menjawab pertanyaan secara lisan di depan kelas.

5. Mahasiswa akan belajar dengan aktif dan tidak merasa bosan karena sambil belajar mereka bisa melihat banyak foto yang menarik.
6. Ketrampilan menulis narasi dalam bahasa Indonesia mahasiswa akan meningkat.

8. Masalah Pengelolaan Kelas

Dalam penerapan pembelajaran aktif di kuliah percakapan bahasa Indonesia ini, beberapa masalah kadang-kadang timbul. Masalah-masalah tersebut antara lain:

1. Ketika disuruh membuat kelompok, beberapa mahasiswa tidak segera melakukannya.
2. Ketika disuruh untuk menulis kata-kata dan kalimat, beberapa mahasiswa tidak bisa segera melakukannya karena tidak membawa kamus.
3. Ada mahasiswa yang malas untuk berdiskusi.
4. Ada kelompok yang pura-pura berdiskusi (sebenarnya mereka berbicara tentang hal-hal yang lain).
5. Ketika mengadakan presentasi dan menjawab pertanyaan, kadang-kadang timbul perbedaan pendapat yang emosional.
6. Ada mahasiswa yang malas menulis rangkuman.

9. Cara Mengatasi/meminimalkan masalah

Sebaik apa pun metode dan teknik yang kita gunakan, keberhasilan proses pembelajaran bergantung pada cara guru/dosen mengelola kelas. Setiap pengajar diharapkan dapat mengelola kelas dengan baik agar tujuan pembelajaran tercapai. Untuk mengatasi masalah-masalah tersebut di atas, guru/dosen harus terus mondar-mandir dan berkeliling di dalam kelas sambil memantau, mengarahkan, memotivasi, menegur, dan kalau perlu memperingatkan mahasiswa yang bandel.

10. Penutup

Dalam makalah ini, penulis menjelaskan pengalamannya dalam mengajarkan mata kuliah percakapan bahasa Indonesia untuk tingkat menengah kepada para mahasiswa di Universitas Kyoto Sangyo. Peserta kuliah adalah mahasiswa tingkat 3 dan tingkat 4. Jadi, mereka sudah memiliki pengetahuan dasar tentang tata bahasa Indonesia. Dari paparan di atas dapat ditarik beberapa simpulan umum sebagai berikut.

Pertama, pembelajaran bahasa diharapkan membantu peserta didik mampu untuk mengemukakan gagasan, mampu berkomunikasi baik secara lisan maupun tulisan dengan tepat dan fasih, serta berpartisipasi aktif dalam masyarakat. Kedua, penerapan metode dan teknik yang bervariasi sangat penting dalam pembelajaran bahasa. Ketiga, media pembelajaran dapat melengkapi tradisi lisan dan tulisan dalam proses pembelajaran bahasa. Media pembelajaran membuat ide yang abstrak menjadi kongkret. Keempat, sebagai salah satu media visual, foto sangat praktis. Penggunaan foto sebagai media dalam pembelajaran bahasa menjadikan proses pembelajaran lebih menarik. dan dapat membangkitkan motivasi

belajar. Kelima, selembar foto bisa dijelaskan dengan seribu kata sehingga sebuah foto dapat digunakan dalam kuliah percakapan. Melalui 8 langkah pembelajaran aktif tersebut di atas, keterampilan berbicara dan menulis pembelajar bisa meningkat.

Kreativitas dan kerja keras pengajar dalam menyiapkan materi pembelajaran dan media pembelajaran sangat penting waktu mengajarkan kuliah percakapan. Model pembelajaran aktif menggunakan foto dalam makalah ini hanyalah sebuah contoh. Penulis berharap agar rekan-rekan pengajar lain bersedia untuk berbagi pengalaman, khususnya dalam pembelajaran percakapan bahasa Indonesia kepada mahasiswa Jepang.

Rujukan

- Barr, R. B., & Tagg, J. 1995. *From Teaching to Learning: A New Paradigm for Undergraduate Education*. Change Magazine, Volume 27: University of North Carolina
- Bligh, D. 2000. *What's the Point in Discussion*. Portland, Oregon: Intellect Books
- Chaer, Abdul. 1998. *Tata Bahasa Praktis Bahasa Indonesia*. Jakarta: Rineka Cipta
- Frodesen, Jan, & Holten, Christine. 2005. (Eds.), *The Power of Context in Language Teaching and Learning*. Boston: Thomson Heinle
- Hasan, Helmi, dkk. 2003. *Buku Ajar Strategi Belajar Mengajar*. Padang: UNP
- Hatcher, Sarah. 2012. *Teaching with Objects and Photographs 2nd edition*. Bloomington: Indiana University
- Keraf, Gorys. 1991. *Diksi dan Gaya Bahasa*. Jakarta: PT Gramedia Pustaka Utama
- Marzano, Robert, J. with Marzano, Jana, S. & Pickering Debra J. 2003. *Classroom Management that Works: Research-Based Strategies for Every Teacher*. Alexandria
- Oxford, Rebecca, L. 1990. *Language Learning Strategies: What every teachers should know*. Boston: Heinle & Heinle Publishers
- Parera, Jos Daniel. 1996. *Pendekatan Keterampilan Proses: Bagaimana Mengaktifkan Siswa dalam Belajar*. Jakarta: PT Gramedia Widiasarana
- Subana, M., Sunarti. 2011. *Strategi Belajar Mengajar Bahasa Indonesia*. Bandung: Pustaka Setia
- Tarigan, Jago dan Henry Guntur Tarigan. 1987. *Teknik Pengajaran Keterampilan Berbahasa*. Bandung: Angkasa
- Ur, Penny & Andrew Wright. 2006. *Five-Minutes Activities*. Cambridge, UK: Cambridge University Press

資料

Lembar Kegiatan

クラスをいくつかのグループに分けます。各グループは 2～4 人です。

練習 1：まず下の写真をよく見てください。そして、その写真を説明するために必要なインドネシア語の単語を口の中に書きましょう。

練習 2：写真について説明する文章をインドネシア語で書きましょう。

練習 3：写真についてインドネシア語で発表してディスカッションをしましょう。

練習 4：最後にも一度インドネシア語の文章をまとめましょう。

写真



(Sumber foto: Dokumentasi pribadi)

**Upaya Mempertahankan Minat Belajar Bahasa Indonesia
Mahasiswa Tingkat III dan IV**

di Kanda University of International Studies (KUIS)

神田外語大学における大学3、4年生の
インドネシア語学習意欲を保つための試み

Suyoto (Program Bahasa Indonesia, KUIS)

スヨト (神田外語大学)

ABSTRAK

Belajar pada hakikatnya merupakan aktivitas mental yang sangat dipengaruhi oleh unsur psikologis pembelajar. Unsur psikologis pembelajar yang berperan vital dalam proses dan/atau kinerja pembelajaran adalah minat. Hal ini dikarenakan minat yang cenderung berorientasi pada keterpesonaan atau ketertarikan terhadap sesuatu akan menumbuhkan dorongan atau motivasi dan membangkitkan perhatian untuk mempelajari dan/atau mendalaminya. Dalam aktualisasi pembelajaran minat akan berpengaruh terhadap sikap atau perilaku belajar. Demikian halnya dalam proses dan kinerja pembelajaran bahasa Indonesia, minat pembelajar memiliki andil besar dalam menentukan keberhasilan pembelajaran. Kekuatan minat belajar bahasa Indonesia dalam diri pembelajar tersebut merupakan motor yang akan mengaktifkan, menggerakkan, menyalurkan, mengarahkan, dan mengerahkan strategi belajar yang sesuai atau tepat.

Berdasarkan pengalaman dan pencermatan terhadap perilaku belajar para mahasiswa Program Studi Bahasa Indonesia (PBI) di Kanda University of International Studies (KUIS) diketahui bahwa pada umumnya minat belajar bahasa Indonesia mereka tinggi pada tahun pertama dan kedua. Tingginya minat belajar bahasa Indonesia tersebut dapat diidentifikasi dari semangat dan kesungguhan mereka dalam mengikuti perkuliahan. Namun, ketika memasuki tahun ketiga dan keempat, minat belajar bahasa Indonesia mereka cenderung menurun. Penurunan minat belajar tersebut dipengaruhi oleh sejumlah hal, di antaranya faktor kejenuhan, kompleksitas bahasa Indonesia yang berimplikasi kesulitan (khususnya aspek struktur), kegamangan implikatur profesi yang berhubungan dengan bahasa Indonesia, kemandekan kompetensi, dan kondisi internal (personal).

Penurunan minat belajar bahasa Indonesia para mahasiswa tingkat III dan IV PBI KUIS merupakan tantangan besar yang menuntut upaya konkret dalam pembelajaran. Terlebih di KUIS, perkuliahan bahasa Indonesia yang diperuntukkan mahasiswa tingkat III dan IV bersifat pilihan (optional) sehingga kebanyakan mahasiswa menempuh mata kuliah bahasa Indonesia lanjut sekadar untuk memenuhi beban kredit, tidak diorientasikan untuk meningkatkan kompetensi kebahasaIndonesiaan. Terkait dengan kondisi objektif minat mahasiswa tingkat III dan IV tersebut, PBI KUIS melakukan sejumlah upaya untuk mempertahankan minat belajar bahasa Indonesia mereka. Upaya-upaya nyata yang ditempuh, antara lain: (1) koordinasi atau kolaborasi pengajar BI Lanjut dalam pengembangan materi dan penerapan metode/teknik pembelajaran; (2) pemeranan mahasiswa Indonesia yang sedang belajar di KUIS sebagai peer-tutor terstruktur; (3) pemberdayaan media pembelajaran yang aktual dan atraktif; (4) pengembangan fasilitas “Rumah Indonesia”

yang dilengkapi dengan literatur dan aneka media pengayaan pembelajaran; (5) penyetaraan/pengakuan alih SKS bagi mahasiswa yang lulus UKBI minimal level C; (6) penyelenggaraan reuni tahunan untuk membangun informasi, komunikasi, dan jaringan dengan alumni; dan (7) penyelenggaraan lomba pidato bahasa Indonesia.

Kata kunci: upaya, minat belajar bahasa Indonesia.

A. PENDAHULUAN

Belajar pada hakikatnya merupakan aktivitas mental yang sangat kompleks dan dipengaruhi oleh unsur psikologis pembelajar sebagai subjek belajar. Unsur psikologis yang sangat vital dalam proses dan/atau kinerja pembelajaran adalah minat. Hal ini dikarenakan minat cenderung berorientasi pada keterpesonaan atau ketertarikan terhadap sesuatu. Dalam entitas belajar, minat dalam diri pembelajar akan menumbuhkan dorongan atau motivasi dan membangkitkan perhatian untuk mempelajari dan/atau mendalaminya.

Selanjutnya, dalam aktualisasi pembelajaran minat akan berpengaruh terhadap sikap atau perilaku pembelajar. Demikian halnya dalam proses dan kinerja pembelajaran bahasa Indonesia, minat pembelajar memiliki andil besar dalam menentukan keberhasilan pembelajaran. Kekuatan minat belajar bahasa Indonesia dalam diri pembelajar tersebut merupakan motor yang berperan mengaktifkan, menggerakkan, menyalurkan, mengarahkan, dan mengerahkan strategi belajar yang sesuai atau tepat. Sebaliknya, kelemahan atau ketiadaan minat dalam diri pembelajar bahasa Indonesia akan menjadi hambatan dan kendala terberat dalam memberhasilkan proses dan kinerja belajarnya.

Minat yang dalam pandangan teoretik sederhana dapat ditafsirkan sebagai adanya rasa suka dan tertarik terhadap sesuatu tidak bersifat tetap atau konstan. Seiring dengan perkembangan psikologis, minat berkecenderungan dinamis; artinya, minat dalam diri seseorang bisa berfluktuasi, dalam satuan waktu tertentu meningkat (menguat), pada masa tertentu tetap, dan dalam kondisi tertentu bisa menurun (melemah). Penurunan (pelemahan) minat dalam diri seseorang bersifat alami dan manusiawi, sebagai perwujudan dari titik kejenuhan yang lazim disebut dengan jemu atau bosan.

Terkait dengan hal di atas, dalam upaya membuahkan proses dan kinerja belajar yang aktif, positif, dan progresif pengajar harus memperhatikan minat para

pembelajar dengan saksama. Dalam hal ini, aspek mendasar yang perlu diperhatikan adalah keberadaan minat pembelajar yang sebenar-benarnya. Kekelirugagasan tentang minat dan motivasi hendaknya dipahami secara objektif. Memang, minat akan berimplikasi pada motivasi, tetapi sebaliknya motivasi tidak selalu berbalik pada minat, terlebih motivasi ekstrinsik. Dengan pemahaman ini pengajar dituntut untuk lebih mampu mencandra berbagai kemungkinan dan alternatif untuk mengkreasikan pembelajaran yang berorientasi pada minat pembelajar.

Fenomena minat mahasiswa dalam belajar bahasa Indonesia di Kanda University of International Studies (KUIS) mengisyaratkan kondisi di atas. Berdasarkan pengalaman dan pengamatan selama penulis mengajar di KUIS diketahui bahwa pada umumnya mahasiswa tingkat I dan II memiliki minat yang tinggi dalam belajar bahasa Indonesia. Tingginya minat belajar bahasa Indonesia tersebut dapat diidentifikasi dari partisipasi, semangat, dan kesungguhan mereka dalam mengikuti perkuliahan. Namun, ketika memasuki tahun ketiga dan keempat, minat belajar bahasa Indonesia mereka cenderung menurun.

Berdasarkan uraian di atas, tulisan ini mengangkat sejumlah upaya yang ditempuh dan dikembangkan di Program Bahasa Indonesia (PBI) KUIS untuk mempertahankan minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa, khususnya bagi mahasiswa tingkat III dan IV.

B. STRUKTUR DAN ISI PROGRAM BAHASA INDONESIA DI KUIS

Program Studi Bahasa Indonesia (PBI) KUIS dirancang sebagai institusi formal pembelajaran bahasa yang berdimensi dan berorientasi global. Visi dan misi program diidentifikasi dari perspektif internasional dan perkembangan regional pada masa depan. Oleh karena itu, proyeksi target lulusannya dijangkaukan pada pemilikan kompetensi komunikasi yang mumpuni untuk kedua kepentingan di atas. Atas dasar pemikiran dan pertimbangan di atas, struktur dan isi program didesain sedemikian rupa sehingga bisa mengakomodasi pembinaan dan pembekalan kompetensi komunikasi dalam bahasa Inggris dan bahasa Indonesia secara seimbang. Program yang menyetimbangkan antara pembelajaran bahasa Inggris dan bahasa Indonesia tersebut ditatalaksanakan dengan model *double major* (program ganda).

Sebagai implementasi dari *double major* tersebut, struktur dan isi program di PBI KUIS juga dipolakan secara paruh program. Artinya, isi programnya terdiri atas 50 persen bahasa Inggris dan 50 persennya adalah bahasa Indonesia. Tujuan utamanya tentu saja untuk membekali mahasiswa dengan kompetensi ganda, yakni kompetensi berkomunikasi dalam bahasa Inggris dan dalam bahasa Indonesia secara mumpuni dan seimbang.

Penatalaksanaan struktur dan isi program *double major* dimaksud juga berperspektif ganda dalam matra persaingan pangsa kerja pada masa depan. Dengan kompetensi ganda yang dimiliki, mahasiswa diharapkan berpeluang lebih luas untuk bisa memasuki dunia kerja karena mereka dapat merentang harapan pekerjaan yang lebih terbuka. Mereka bisa memasuki dunia kerja yang menuntut pemberdayaan bahasa Inggris di satu sisi, dan juga bisa mengeksplorasi kariernya di dunia kerja yang mensyaratkan kompetensi bahasa Indonesia atau kedua bahasa secara bersama-sama di sisi lain.

Bagi mahasiswa yang mau dan mampu mengembangkan visi dan proyeksi diri, struktur dan isi program di PBI KUIS sangat berdimensi motivatorik. Keterbukaan dan keleluasaan orientasi dunia kerja bisa menjadi motivasi yang sangat positif dan efektif dalam pembelajaran. Namun, tidak semua mahasiswa bisa berpola pikir futuristik sejak awal masuk KUIS karena ada juga yang “terpaksa” masuk dan memilih PBI KUIS karena motivasi orangtuanya. Artinya, orangtua mahasiswalah yang sebenarnya memiliki pandangan futuristik terhadap orioentasi masa depan, khususnya pangsa kerja. Mahasiswa yang bersangkutan hanya berusaha untuk menjadi anak yang baik atau bermaksud menyenangkan orangtuanya semata.

Kondisi awal mahasiswa sebagaimana dikemukakan di atas berimplikasi pada sikap dan perilaku belajarnya. Memang hal ini tidak (atau belum) kentara ketika mereka duduk di tingkat I dan II karena pola pembelajaran di PBI KUIS pada tahun pertama dan kedua untuk mata kuliah bahasa Indonesia dan bahasa Inggris bersifat paket-wajib. Mereka “harus” mengambil semua mata kuliah bahasa Indonesia dan bahasa Inggris sesuai dengan beban SKS dan jadwal perkuliahan yang telah ditetapkan. Konkretnya, pada tahun pertama mahasiswa wajib menempuh masing-masing 10 SKS untuk bahasa Indonesia dan bahasa Inggris dengan sebaran sebanyak 5 kali wawan muka per minggu (jadwal ditatalaksanakan sedemikian rupa, sehingga tidak terdapat

kelas ganda untuk kuliah bahasa yang sama). Artinya, dari Senin sampai dengan Jumat mereka memiliki masing-masing satu kali wawan muka perkuliahan bahasa Indonesia dan bahasa Inggris). Ketentuan akademik lain yang bersifat mengikat adalah pemolaan sistem kelulusan perkuliahan. Dari beban wajib 10 SKS untuk bahasa Indonesia dan bahasa Inggris tersebut, mereka wajib lulus minimal 8 SKS. Jika tidak bisa mencapai target lulus 8 SKS pada tahun pertama tersebut, mahasiswa yang bersangkutan tidak bisa menempuh beban perkuliahan tahun kedua. Dengan perkataan lain, apabila tidak bisa lulus minimal 8 SKS pada tahun pertama, mahasiswa tersebut tidak bisa naik tingkat.

Demikian halnya sistem pembebanan SKS yang diberlakukan pada tahun kedua. Mahasiswa wajib menempuh dan menuntaskan beban perkuliahan bahasa Indonesia dan bahasa Inggris sebanyak 8 SKS. Jika mereka tidak bisa memenuhi target minimal (lulus 6 SKS) pada tahun kedua, mereka harus mengulanginya pada tahun berikutnya atawa turun tingkat.

Tata laksana pembebanan SKS di PBI KUIS yang bersifat wajib terikat tersebut sangat positif untuk memberdayakan pola dan strategi belajar mahasiswa karena intensitas pembelajaran yang terus-menerus akan berkorelasi dengan perkembangan dan kemajuan kinerja pembelajarannya. Hal ini sejalan dengan jiwa pembelajaran behavioristik karena rutinitas belajar yang diatur dalam satuan harian tersebut identik dengan pengondisian dan pemberdayaan latihan secara intensif. Oleh karena itu, keluaran belajar yang diperoleh mahasiswa dapat diandalkan secara akademik. Pada akhir tahun kedua, kompetensi berbahasa Indonesia mahasiswa sudah mencapai tingkatan yang memadai secara komunikatif. Artinya, mahasiswa sudah memiliki kemampuan yang cukup untuk mendayagunakan kompetensi berkomunikasi dasar yang terdidik dalam semua komponen kebahasaan dan keterampilan, baik produktif maupun reseptif.

Pemolaan beban studi tersebut menjadi longgar atau terbuka pada tahun ketiga dan keempat. Pada tahun ketiga dan keempat, sistem dan jumlah beban SKS tempuh mahasiswa mengalami ubahan yang signifikan. Beban tempuh SKS bahasa Indonesia bagi mahasiswa tahun ketiga dan keempat adalah 8 SKS. Untuk mahasiswa tahun ketiga dari beban 8 SKS tersebut, 2 SKS bersifat wajib dan 6 SKS bersifat pilihan, sedangkan pada tahun keempat semuanya (8 SKS) bersifat pilihan.

Apakah perubahan tata laksana atau sistem pembebanan perkuliahan tersebut berpengaruh terhadap perilaku belajar dan suasana psikologis mahasiswa, khususnya minat belajar bahasa Indonesianya? Jawabnya bisa YA atau juga bisa TIDAK.

Bagi mahasiswa yang dari awal tidak memiliki minat diri yang kuat untuk belajar bahasa Indonesia, bisa berkonsekuensi YA. Ini bisa diibaratkan seorang anak yang sejak kecil dikekang oleh orangtuanya dengan berbagai ketentuan dan persyaratan yang tidak bisa ditoleransi, kemudian mendapat kesempatan atau peluang baru untuk bisa mengeksplorasi dirinya secara leluasa; apa yang terjadi? Pada umumnya, anak-anak seperti ini akan segera berteriak “MERDEKA!”. Akan tetapi tidak demikian dengan anak yang bisa memaknai pembiasaan dan pengetatan yang dilakukan oleh orangtuanya sebagai media baginya untuk membangun jati diri dan kepribadiannya. Anak-anak demikian, biasanya tidak terpengaruh oleh perubahan situasi atau kondisi baru. Demikian halnya dengan pencermatan penulis terhadap dinamika minat belajar mahasiswa tingkat III dan IV di PBI KUIS. Memang, ditinjau dari tugas perkembangan, mahasiswa tingkat III dan IV sudah memasuki masa dewasa, tetapi tidak berarti kedewasaan seseorang selalu berbanding sama dengan kemapanan unsur kejiwaan, terutama minat. Sebagai pendidik dan pengajar, penulis terus tergelitik untuk melakukan penelitian kecil, atau lebih tepatnya pengamatan terhadap minat belajar BI mahasiswa tingkat III dan IV di PBI KUIS yang hasilnya dikemukakan di uraian berikut ini.

C. MINAT BELAJAR MAHASISWA TINGKAT III DAN IV PROGRAM BAHASA INDONESIA KUIS

Perhatian dan pengamatan terhadap minat mahasiswa dalam belajar bahasa Indonesia di PBI KUIS mulai dilakukan sejak 2008, tepatnya ketika penulis kembali menjadi *visiting lecturer* untuk periode kedua. Hal ini diilhami oleh beberapa fakta sikap dan perilaku mahasiswa yang menurut penulis “agak ganjil”, di antaranya jarang sekali datang ke kampus, tidak berpartisipasi dalam kegiatan-kegiatan keindonesiaan, dan pada semester akhir tidak muncul di kampus sama sekali. Alhasil, yang bersangkutan tidak bisa tamat universitas, meskipun ketika tingkat I dan II dia termasuk salah satu mahasiswa pilihan. Tahun berikutnya, salah seorang mahasiswa yang baru kembali ke KUIS pascaprogram pertukaran mahasiswa di salah satu

universitas di Indonesia, ternyata juga menunjukkan sikap dan perilaku belajar yang “tidak biasa”. Yang bersangkutan sama sekali tidak muncul di kampus selama lebih kurang satu tahun. Dan tentu saja, akhirnya yang bersangkutan tidak bisa tamat universitas. Padahal, mahasiswa tersebut dapat dikatakan sebagai mahasiswa terbaik pada waktu duduk di tingkat I dan II.

Dari kedua kasus mahasiswa tersebut, penulis tergelitik untuk mencoba melakukan pengamatan terselubung. Melalui pendekatan personal-kekeluargaan, penulis berusaha untuk menjaring dan menggali data dan/atau informasi tentang keminatan mahasiswa tingkat III dan IV terhadap bahasa Indonesia. Ada satu informasi penting yang terkemuka dari temuan pengamatan tersebut, yaitu ternyata tidak terdapat hubungan linear dan signifikan antara minat terhadap Indonesia dan minat terhadap bahasa Indonesia. Minat mahasiswa terhadap Indonesia pada umumnya terjaga atau bahkan meningkat pada tahun ke-3 dan ke-4. Fenomena ini menyadarkan penulis, ternyata keminatan atau ketertarikan terhadap Indonesia tidak selalu berbanding lurus dengan keminatan terhadap pembelajaran bahasa Indonesia, terutama pada mahasiswa atau pembelajar bahasa Indonesia tingkat menengah-lanjut. Para mahasiswa tingkat III dan IV PBI KUIS pada umumnya sudah berpengalaman berkunjung dan belajar di Indonesia, serta berteman dengan orang Indonesia. Berdasarkan pengakuan dan pengalaman mahasiswa diketahui bahwa tali pertemanan atau persahabatan dengan sejumlah orang (=sebagian besar mahasiswa) Indonesia tidak menuntut kompetensi dan keterampilan teknis berbahasa Indonesia yang tinggi. Terlebih sebagian besar teman atau kenalan mahasiswa yang ada di Indonesia bisa berbahasa Jepang karena banyak di antaranya adalah mantan peserta program pertukaran mahasiswa di KUIS. Sebagian lainnya juga demikian, terutama para mahasiswa yang kecanduan dengan pesona Bali. Mereka cenderung mengisi liburan semester dengan perjalanan informal ke sejumlah objek wisata di Pulau Dewata dan di sana berkenalan dengan sejumlah teman Indonesia yang bisa berbahasa Jepang. Fenomena tersebut kemudian memberikan penguatan atau penegasan dalam diri mahasiswa bahwa dengan kompetensi bahasa Indonesia yang dimilikinya saat ini, mereka tidak mengalami kendala dan hambatan untuk berkomunikasi dengan orang Indonesia. Meskipun belum didukung dengan data yang cukup akurat, penulis berasumsi bahwa fenomena di atas merupakan salah satu penyebab menurun atau

berkurangnya motivasi belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV di PBI KUIS.

Secara spesifik, hal-hal yang teridentifikasi sebagai faktor yang memengaruhi penurunan minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV di PBI KUIS, antara lain: (1) kejenuhan atau kebosanan, (2) kompleksitas bahasa Indonesia yang berimplikasi pada kesulitan (khususnya aspek struktur), (3) kegamangan implikatur profesi yang berhubungan dengan bahasa Indonesia, (4) kemandekan kompetensi, dan (5) kondisi internal (personal). Dari kelima faktor di atas, khusus untuk faktor ke-5 ditemukan varian alasan terutama mahasiswa tingkat IV semester kedua, seperti semua beban SKS sudah terpenuhi, sudah mendapatkan tempat kerja (di perusahaan atau kantor yang tidak berhubungan dengan Indonesia atau bahasa Indonesia), kemalasan (tidak bisa bangun pagi), tidak ada perkuliahan lain sehingga merasa merugi waktu dan biaya transpor pergi ke kampus hanya untuk menempuh satu mata kuliah, dan sebagainya.

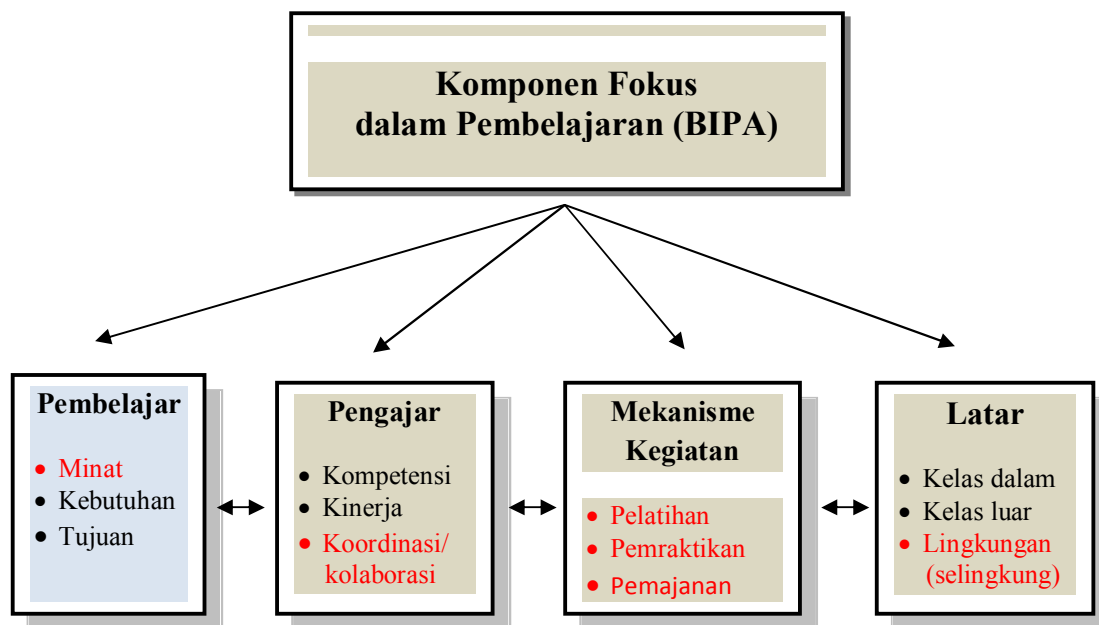
Berdasarkan hasil pengamatan dan penjaringan informasi di atas, penulis berpendapat bahwa minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV PBI KUIS mengalami penurunan. Tentu saja hal tersebut merupakan tantangan besar bagi program dan pengajar yang menuntut upaya konkret, khususnya dalam penatalaksanaan pembelajaran.

D. UPAYA MEMPERTAHANKAN MINAT BELAJAR BAHASA INDONESIA MAHASISWA TINGKAT III DAN IV PBI KUIS

Sebagaimana telah dikemukakan bahwa perkuliahan bahasa Indonesia (lanjut) yang diperuntukkan mahasiswa tingkat III dan IV pada umumnya bersifat pilihan (tidak wajib) sehingga kebanyakan mahasiswa mengambil/menempuh mata kuliah Bahasa Indonesia Lanjut tersebut sekadar untuk memenuhi beban SKS. Sebagian kecil mahasiswa saja yang berorientasi pada keinginan untuk meningkatkan kompetensi kebahasa Indonesiannya.

Terkait dengan kondisi penurunan minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV dimaksud, PBI KUIS melakukan sejumlah upaya terstruktur guna mempertahankan minat belajar mereka. Dimensi pertama dan utama yang menjadi perhatian dalam hal ini adalah pemberdayaan pembelajaran. Komponen-komponen

fokus pembelajaran diidentifikasi dan ditatalaksanakan sedemikian rupa, sehingga pembelajaran bisa berlangsung efektif, akomodatif, dan kondusif bagi mahasiswa. Pemberdayaan pembelajaran dipolakan dengan memberikan fokus pada komponen-komponen prinsipial pembelajaran, yaitu (1) pembelajar, (2) pengajar, (3) mekanisme kegiatan, dan (4) latar (*setting*). Pola ini diadopsi dari Model Komponen Fokus yang dikembangkan oleh Widodo (2006: 7), berikut ini.



Dari gambar di atas dapat diidentifikasi keberadaan dan hubungan peran dari keempat komponen tersebut dalam proses pembelajaran. Di samping itu, juga dapat dipahami bagaimana aspek-aspek yang terdapat dalam keempat komponen pembelajaran tersebut bisa dieksploitasi bagi kepentingan optimalisasi proses dan kinerja pembelajaran dengan menempatkan dan memperhatikan pembelajar/mahasiswa sebagai komponen pokok atau subjek pembelajaran.

Secara komponensial, hal-hal konkret yang dikembangkan PBI KUIS dalam kerangka pemertahanan minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa, dpat dijabarkan berikut ini.

- 1) Untuk komponen pengajar, hal yang dipandang penting adalah koordinasi atau kolaborasi. Koordinasi atau kolaborasi pengajar difokuskan pada pemberdayaan dua aspek pembelajaran, yaitu pengembangan materi dan

metode. Kesepahaman antarpengajar BI lanjut di KUIS adalah pengembangan materi secara tematik berorientasi keminatan dan kebutuhan mahasiswa. Sementara metode pembelajaran yang diterapkan adalah metode 7K (metode pembelajaran yang dikembangkan dari prinsip-prinsip pembelajaran *quantum*, *communicative approach*, dan CTL) berbasis teknik inkuiri-kooperatif. Kesepahaman dalam pengembangan materi dan penerapan metode pembelajaran tersebut diharapkan dapat mengakomodasi keinginan dan harapan mahasiswa yang bersumber dari minat mereka. Koordinasi dilakukan secara periodik guna menjaga kesetimbangan tingkat kesulitan, keterhubungan dan kesinambungan, serta ketertarikan atau keaktualannya.

- 2) Guna memberikan unsur pencelupan (*immersion*) yang kurang bisa dijangkau dalam pembelajaran klasikal, dikembangkan mekanisme kegiatan informal dan nonklasikal. Mekanisme ini dimaksudkan untuk memberikan peluang kepada mahasiswa dalam penambahan dan pengayaan dalam pelatihan, pemraktikan, dan pemaparan (*exposure*) berbahasa Indonesia. Upaya yang ditempuh atau dikembangkan dalam hal ini adalah memerankan para mahasiswa Indonesia yang sedang belajar di KUIS dalam program pertukaran mahasiswa (5 orang tiap tahun) sebagai peer-tutor terstruktur. Program PBI KUIS menetapkan kebijakan bahwa sebagai konsekuensi akademik dari beasiswa yang diterimanya, setiap mahasiswa program pertukaran wajib mengalokasikan waktunya 5 jam per minggu untuk menjadi peer-tutor bagi mahasiswa PBI. Penjadwalan dan pemeranan para mahasiswa Indonesia tersebut dikoordinasi dan dikontrol oleh pengajar (dalam hal ini pengajar MK percakapan). Kegiatan yang dilakukan sangat beragam, mulai membantu mengerjakan tugas-tugas perkuliahan, mendiskusikan berbagai hal tentang Indonesia, membicarakan hal-hal tertentu yang tidak mungkin disampaikan kepada pengajar karena kesenjangan masa dan usia, dan lain-lain.
- 3) Dalam kesempatan tertentu, para mahasiswa Indonesia yang sedang belajar di KUIS juga diperankan sebagai media pembelajaran yang aktual dan atraktif, terutama untuk mengakomodasi hal-hal yang spesifik, seperti pelatihan pelafalan, intonasi, atau ekspresi; mengupas atau membahas fenomena yang

bersinggungan dengan kehidupan kampus atau kawula muda metropolitan, musik dan film Indonesia, dan sebagainya.

- 4) Upaya yang terkait dengan komponen latar (*setting*) adalah pengembangan dan pemberdayaan lingkungan. Untuk memberikan nuansa keindonesiaan dan membuat mahasiswa kerasan belajar di kampus, pada 2009 KUIS membangun gedung baru (gedung 7) yang diberi nama MULC (*multilingual communication center*). Di lantai 2 gedung ini dibangun fasilitas bangunan berciri khas negara asal bahasa asing yang diajarkan di KUIS, termasuk Indonesia. Untuk menarik dan mempertahankan minat mahasiswa, fasilitas “Rumah Indonesia” dilengkapi dengan literatur dan aneka media pengayaan pembelajaran, baik yang berkaitan dengan bahasa maupun kebudayaan Indonesia, berupa buku; VCD/DVD tentang musik/lagu, film/drama televisi, upacara tradisional, cerita rakyat; pakaian tradisional; miniatur rumah adat; serta jaringan televisi dan radio Indonesia (terdapat 15 stasiun televisi dan radio Indonesia yang bisa diakses).

Upaya-upaya lain yang dilakukan untuk mempertahankan minat belajar bahasa Indonesia bagi mahasiswa tingkat III dan IV dalam bentuk penguatan atau motivasi adalah berikut.

- 5) Penyetaraan/pengakuan alih SKS bagi mahasiswa yang lulus Ujian Kompetensi Bahasa Indonesia (UKBI) yang diselenggarakan oleh Himpunan Penyelenggara Ujian Bahasa Indonesia (HIPUBI) Tokyo, minimal level C. Mahasiswa PBI yang berhasil (lulus) UKBI (dengan menyertakan fotokopi sertifikat) level C dihargai 2 SKS dan yang berhasil (lulus) level B dan A dihargai 3 SKS.
- 6) Menyelenggarakan program reuni tahunan untuk membangun informasi, komunikasi, dan jaringan antara alumni dan mahasiswa untuk kepentingan proyeksi pekerjaan dan masa depan. Di samping itu, berkoordinasi dengan Pusat Karier KUIS dari tahun ini dikembangkan program pengenalan, pemetaan, dan penjangkaran kerja di perusahaan yang berhubungan dengan perusahaan Jepang yang ada di Jepang maupun di Indonesia.

- 7) Bekerja sama dengan Kedutaan Besar Republik Indonesia (KBRI), sejak 2007 PBI KUIS menyelenggarakan Lomba Pidato Bahasa Indonesia pada November setiap tahun.

Upaya-upaya yang dikemukakan di atas pada hakikatnya merupakan wujud tanggung jawab institusional dan profesional dari PBI KUIS untuk memberikan yang terbaik bagi mahasiswa. Diharapkan mahasiswa bisa memahami serta memaknai esensi dan nilainya secara aktif, positif, dan kreatif sehingga segala bentuk pemikiran dan pemfasilitasan yang dilakukan lembaga bermanfaat dan berhasil guna bagi kemajuan belajar dan masa depan mereka.

E. PENUTUP

Paparan di atas telah memberikan gambaran tentang kondisi penurunan minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV PBI KUIS beserta upaya-upaya yang telah ditempuh untuk mempertahankan dan/atau meningkatkannya. Sebagai penutup, kiranya dapat dikemukakan catatan simpulan berikut.

Unsur psikologis yang berperan vital dalam pengondisian sikap dan perilaku belajar yang positif serta berandil besar dalam pembelajaran adalah minat. Kekuatan minat belajar bahasa Indonesia dalam diri mahasiswa merupakan motor yang akan mengaktifkan, menggerakkan, menyalurkan, mengarahkan, dan mengerahkan strategi belajar yang sesuai atau tepat sedemikian rupa sehingga kinerja belajarnya optimal.

Berdasarkan pengalaman dan pencermatan terhadap perilaku belajar mahasiswa PBI KUIS teridentifikasi bahwa minat belajar bahasa Indonesia mahasiswa tingkat III dan IV cenderung menurun. Penurunan minat belajar tersebut dipengaruhi oleh beberapa faktor, antara lain: (1) kejenuhan atau kebosanan, (2) kompleksitas bahasa Indonesia yang berimplikasi pada kesulitan (khususnya aspek struktur kata dan bentukan), (3) kegamangan implikatur profesi yang berhubungan dengan bahasa Indonesia, (4) kemandekan kompetensi, dan (5) kondisi internal (personal).

Upaya-upaya nyata yang ditempuh atau dikembangkan untuk mempertahankan minat belajar mahasiswa tingkat III dan IV PBI KUIS, di antaranya: (1) koordinasi

atau kolaborasi pengajar BI Lanjut dalam pengembangan materi dan penerapan metode/teknik pembelajaran, (2) pemeranan mahasiswa Indonesia yang sedang belajar di KUIS sebagai peer-tutor terstruktur, (3) pemberdayaan media pembelajaran yang aktual dan atraktif, (4) pengembangan fasilitas “Rumah Indonesia” yang dilengkapi dengan literatur dan aneka media pengayaan pembelajaran, (5) penyetaraan/pengakuan alih SKS bagi mahasiswa yang lulus UKBI minimal level C, (6) penyelenggaraan reuni tahunan untuk membangun informasi, komunikasi, dan jaringan dengan alumni, dan (7) penyelenggaraan lomba pidato bahasa Indonesia.

Sumber Acuan

- Alwasilah, A. Ch. 1998. *Pengajaran Bahasa Indonesia untuk Pebelajar Asing*. Makalah Kongres Bahasa Indonesia VII. Jakarta, 26-30 Oktober 1998.
- Moeliono, Anton M. 1998. *Kedudukan dan Fungsi Bahasa Indonesia dalam Era Globalisasi*. Makalah Kongres Bahasa Indonesia VII. Jakarta, 26-30 Oktober 1998.
- Suyoto. 2013. *Pemberdayaan Metode 7K dalam Pembelajaran Berbasis Keminatan*. Makalah Seminar Pengembangan Kompetensi Guru TK se-Kabupaten Banyuwangi. Banyuwangi, 23 Februari 2013.
- Widodo Hs. 1994. *Meningkatkan Motivasi dan Pajanan Pembelajaran Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing*. Makalah Kongres Internasional Pengajaran Bahasa Indonesia untuk Penutur Asing I (TISOL). Salatiga: UKSW.
- Widodo Hs. 2006. *Mekanisme Interaktif-Kontekstual dalam Pembelajaran BIPA*. Makalah Sosialisasi Pembelajaran BIPA di Universitas Keio SFC, November 2006.
- Winkel, W.S. 2001. *Psikologi Pengajaran*. Jakarta: PT Gramedia.

How to teach the usage of the prefix meN- of Malay-Indonesian language more effectively?

The application of *gojuonzu* to its teaching for Japanese learners

マレー・インドネシア語接辞 meN の効率的な教授法に関する一提案

Bagaimana mengajar kegunaan imbuhan meN di dalam Bahasa Melayu-Indonesia?

Penerapan *gojuonzu* di pengajarannya untuk mahasiswa Jepang

**Nomura Toru Vimala M.A.,
Professor, Faculty of Policy Management,
Keio University SFC, Fujisawa, Japan**

論文要旨

マレー語ないしインドネシア語の初学者が最初に突き当たる関門が接頭辞 meN の変化形をどのように効率よく覚えるかということである。発表者は過去 23 年にわたり慶応義塾大学でこの言語を教授した経験から、日本語の仮名五十音図に着目し、これを接頭辞 meN の変化形に応用することを考案して、これを授業に活用してきた。幸い学生たちはよく理解してくれている。今回この方法を発表し、同学諸氏にお勧めしようとする次第である。

Ringkasan Makalah

Salah satu kesulitan mengenai belajar bahasa Indonesia bagi orang asing adalah kegunaan awalan “meN”. Saya ingin mempresentasikan dan berbagi satu cara yang saya telah pakai sejak beberapa tahun yang lalu di kelas-kelas Bahasa Melayu-Indonesia, Universitas Keio SFC, Fujisawa, Jepang. Khusus untuk mahasiswa Jepang, saya telah membuat sebuah sistem penjelasan untuk menjelaskan perubahan bunyi imbuhan “meN”. Di bahasa Jepang juga terdapat fenomena yang mirip ini. Senarai *gojuonzu* (Fifty syllable table) berdasar fonologi India kuno untuk menulis bahasa Sanskerta. Gojuonzu diciptakan pada Abad ke-10 (Zaman Heian). Pendeta India kuno pandai mempelajari sistem bunyi secara sistematis seperti yang dilihat dalam susunan aksara *Devanagari*. Jikalau dibandingkan susunan aksara *Devanagari* dan susunan *hiragana/katakana* Jepang, Anda pasti heran melihat keduanya sangat mirip! Saya harap bahwa Anda menerapkan sistem ini untuk mengajar imbuhan “meN” di kelas bahasa Indonesia masing-masing sehingga pembelajar bisa mengerti dengan lebih baik. Saya beryakin bahwa pelajar-pelajar bahasa Indonesia bisa mengerti lebih baik sistem imbuhanannya.

Preface

The beginners of Malay or Indonesian language¹ will quite often find the language rather easy to study at a glance, but soon they will face some difficulties and tend to give up their study after a few lessons. I have seen many of the cases as a language teacher at Keio University, SFC, for the last two decades. One of the biggest hindrance the students would face at the beginners' level is how to master the correct usage of the prefix "meN".

Based on my past experience, I have devised a unique system to teach the usage of the prefix "meN" effectively, especially for the Japanese students. Here I would like to introduce my system so that it will surely benefit both teachers and students of this language in the respective classrooms.

me-	l	lihat	melihat
	r	rokok	merokok
	n	nanti	menanti
	ng	nganga	menganga
	ny	nyala	menyala
	m	masak	memasak
	y	yakin	meyakinkan
	w	warna	mewarnai

meng-	a	ajar	mengajar
	e	edar	mengedarkan
	i	isi	mengisi
	o	obrol	mengobrol
	u	ukur	mengukur
	(k)g	kirim	mengirim
	g	gambar	menggambar
	h	hitung	menghitung

mem-	b	beli	membeli
	f	film	memfilm
	(p)	potong	memotong
men-	c	cari	mencari
	j	jual	menjual
	d	dengar	mendengar
	(t)	tulis	menulis

meny-	(s)	suruh	menyuruh
-------	-----	-------	----------

Table 1, Prefix "meN"²

How to teach the prefix "meN"?

When you want to study Malay or Indonesian language in the classrooms, most likely you will be given the table about the prefix "meN" shown above. In most cases, your teachers will say, "You have to memorize the table above!" without explaining to you its logics behind. The students cannot but just follow the teachers' instruction and try to memorize the system. As you become accustomed to the language, you will naturally be used to the system and you will be able to master the correct usage. Once you master it, you will simply take it for granted and you will face no more difficulty. Perhaps most of the readers of this paper might have had a similar path in the past. We could luckily

¹ In Keio University SFC, we have employed the name of Malay-Indonesian language course since its first year in 1990, because we assume that both Bahasa Indonesia and Bahasa Melayu in Malaysia, Singapore and Brunei etc. are the variants of one single Bahasa Melayu originated in ancient South Sumatra.

² This table is used in my classrooms at keio University SFC.

overcome the difficulty and now we can make use of this language. However, we should not forget the fact that many more people have given up their study in half way because they could not overcome this difficulty. It is my sincere hope that my method of teaching will save many more students in the future from their dropout.

A new method

In my classroom, I will begin my lecture about the explanation of the Malay or Indonesian prefix “meN” not by showing the above tables, but by showing the chart of the structure of a human mouth. (See Chart 1 below.) Here I will explain the students

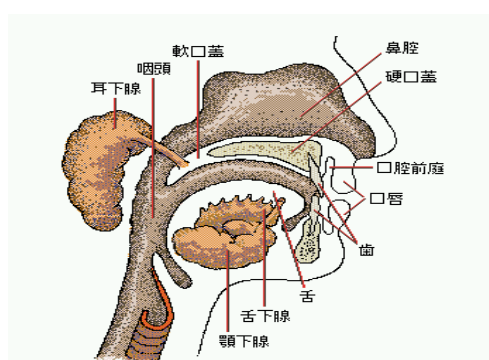


Chart 1. Structure of a human mouth.

about the concept of the points of articulation. It is a basic knowledge of a linguistics and it may be very familiar to most of the readers. You may wonder if the students without the basic knowledge of linguistics may be able to understand the explanation. In fact, I have shown the chart below and let them check each point of articulation one by one. After all, all the human being have more or less the similar physical shape in their body and all of them will understand the structure of a human mouth

without much difficulty.

Then, I will proceed to explain the logics as to how we produce a sound by indicating a classification by points of articulation.

First of all, I will explain the vowels and let them understand the fact that vowels are produced by the transformation of a mouth shape. Then it is followed by the explanation of consonants ; I will begin with gutturals, palatals, dentals, labials, semivowels, r, l, and finally end up with nasals, sibilants. This order of the explanation is meaningful as they will be aware of the importance later.

After letting the students recognize the system of points of articulation, I will indicate to them the following principles by using the technical terms such as labials, palatals and dentals. By this time, they are already familiar with the technical terms so that they may not find my explanation difficult any more.

Prefix “me-” based on the points of articulation

Summary of the usage of the prefix “meN”

If the first letter of the root word is Labial > mem-

If the first letter of the root word is Palatal & Dental >men-

If the first letter of the root word is Vowel & Guttural >meng-

If the first letter of the root word is Nasal, Semivowel & r,l >me-(no change)

If the first letter of the root word is Sibilant (s) >meny-

Comparative method by using Japanese equivalents.

Perhaps for those who are smart enough to understand my above explanation, this much might be enough as an explanation of the Malay Indonesian prefix “meN”. However, I have employed yet one more way to have them further establish in their mind. This method is especially effective for Japanese learners as well as for those who know Japanese language.

Here I will remind the students that the quite similar phenomenon can be seen among Japanese phonetic system.

In Japanese syllabaries, i.e. *hiragana* and *katakana*, phoneme /n/, /m/ and /ng/ are equally represented by a single syllabary “ん”. However in Romanized Japanese, they are written in different sets of letters as is indicated below. Please note both Romanized and *hiragana* syllabary in bold letters.

Shim**ba**shi (し**ん**ばし) (新橋) (labial)

Shin**ju**ku (し**ん**じゅく) (新宿) (palatal)

han**ta**i (は**ん**たい) (反対) (dental)

kan**ga**eru (か**ん**がえる) (考える) (guttural)

kon**ny**aku (こ**ん**にゃく) (蒟蒻) (palatal)

cf. ha**ga**ki(han**ga**ki) (は**が**き) (葉書) ³

Here I would like to explain the background of Japanese syllabary and its relation to the Indian phonology because the students will certainly have more comprehensive understanding the usage of the Malay and Indonesian prefix “meN” if they have the following background knowledge about their own mother tongue.

Just like the case of an alphabet table, we have two well-known ordering systems of syllabary known as *Iroha uta* and *Gojuonzu* respectively.

³ Nowadays fewer people distinguish the nasalized /nga/, /ngi/, ngu/, /nge/, /ngo/ and unnasalized /ga/, /gi/, /gu/, /ge/, /go/. The younger generation tend to pronounce them simply in unnasalized sounds.

Iroha uta

The *Iroha uta* is a Japanese poem, probably written in the Heian period (AD 794-1179). In pre modern times, the composer of the poem was attributed to the founder of the *Shingon* esoteric sect of Buddhism in Japan, Kukai (空海)(774–835), but modern research has found the date of composition to be later in the Heian Period (794-1185). The first record of its existence dates from 1079. In the form of “*waka*” style poem, all of the forty eight sets of syllables are cleverly used without repetition. It is famous because it is a perfect pangram, containing each character of the Japanese syllabary exactly once. It has been used as an ordering for the syllabary

Iroha uta is based on the free translation of a Buddhist prose known as *anicca gāthā* (Verse of Impermanence) among Buddhist Canon. It indicates the fact that nothing is eternal. It goes on as follow;

The first appearance of the *Iroha*, in *Konkōmyōsaishōkyō Ongi* (金光明最勝王經音義)⁴, was in seven lines: six with seven morae each, and one with five. It was also written in *man'yōgana*⁵.

以呂波耳本部止 千利奴流乎和加 餘多連曾津祢那 良牟有為能於久 耶万計不已衣天 阿佐伎喻女美之 恵比毛勢須

An English translation by Professor Ryuichi Abe⁶ reads as:

*Although its scent still lingers on
the form of a flower has scattered away
For whom will the glory
of this world remain unchanged?
Arriving today at the yonder side
of the deep mountains of evanescent existence
We shall never allow ourselves to drift away*

⁴ The interpretation of the esoteric Buddhist text, *Suvarṇaprabhāsa sūtra*. It is one of the most cherished Mahayana sutras in Japanese esoteric Buddhism. The original sutra is estimated to have been written in India before fifth century and was first translated from its original Sanskrit text by Dharmakṣema in early fifth century. Later it was translated again by Chinese monk, Yi Jing(義淨). The second version has prevailed widely among Japanese Buddhists.

⁵ *Man'yōgana* (万葉仮名) is an ancient writing system that employs Chinese characters to represent the Japanese language. It was in use since at least the mid seventh century. The name "man'yōgana" is taken from the *Man'yōshū*, a Japanese poetry anthology of the eighth century written in this system.

⁶ Abe, Ryuichi, *Reading of "Iroha Uta" at "Japanese Classical Literature at Bedtime"* Ryūichi Abe (阿部 龍一) is the Reischauer Institute Professor of Japanese Religions at Harvard University.

intoxicated, in the world of shallow dreams.

The composer of *Iroha uta* must have composed it based on the following Buddhist verses in *Nehangyo* (涅槃經) or *Nirvāṇa Sūtra*. Its classical Chinese version is as follow;
諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂

Shogyō mujō Zeshō meppō Shōmetsu metsui Jakumetsu iraku ⁷.

It is translated into English as follow;

All acts are impermanent

That's the law of creation and destruction.

When all creation and destruction are extinguished

That ultimate stillness (nirvāṇa) is true bliss.

The basic idea of this verse is that everything in this world is of transient nature so that we should not cling too much to this worldly affairs. The idea of transience matched Japanese people's sentiment so much that *Iroha uta* has been very popular among Japanese people in pre modern times. However, after the Meiji era reforms in the mid-19th century, the *gojuon* (五十音, literally "fifty sounds") ordering system based on Sanskrit phonology is regarded more scientific and, became more common. Nowadays *Iroha* ordering is never taught officially in school education any more. Nevertheless, every Japanese, both young and elder, would know of it and use it among daily conversation. For example, whereas an English speaker would say, "It's as simple as ABC.", a Japanese would say, "It's as simple as *Iroha*."

"Fifty sounds table & Indian phonology"

The *gojuonzu* (五十音図 lit. Fifty Sounds table) forms a Japanese ordering of *kana* syllabary, named for the 5×10 grid in which the characters are displayed. Each *kana*, both *hiragana* and *katakana* character, corresponds to one sound in the Japanese language. The sequence begins with the series of vowels, i.e. /a/ (あ、ア), /i/ (い、イ), /u/ (う、ウ), /e/ (え、エ), /o/ (お、オ), then continues with the series of consonant, /ka/ (か、カ), /ki/

⁷ In Pali Canonical text, its original verse is as follow; "*Aniccā vata sankhārā, uppādavaya dhammino, uppajjitvā nirujhanti, tesāṃ vūpasamo sukho.*" This verse is translated into English as follow; "Indeed every existence is impermanent, their basic nature is to appear and pass away. They are born and eventually perish. When we can overcome this nature, we will be able to achieve the eternal happiness." (Translation by the author.) In Sri Lanka, the monks will chant this verse when remains of a deceased person is laid in the coffin. (Keiki Higashimoto: 1970, p. 7)

(き、キ), /ku/ (く、ク), /ke/ (け、ケ), /ko/ (こ、コ), and so on for a total of ten rows of five, altogether fifty kinds of syllables. It is officially taught at primary schools and practically every Japanese would know of it. Furthermore, if you wish to acquire some knowledge of Japanese language, you should know of it, too, as all of the dictionaries are composed according to this ordering.

With the spelling reforms after World War II, the *kana* for /wi/ (ゐ、ヰ) and /we/ (ゑ、ヱ) in the last row of the grid were discarded and replaced with the simple vowel, /i/ (い、イ) and /e/ (え、エ). The sounds they had developed went into history. Nowadays these *kana* is used only in the texts representing pre modern or classical Japanese.

The *kana* for syllabic /n/ (ん、ン) is not part of the grid, as it was introduced long after *gojuonzu* ordering was devised. In ancient times, *kana* for /mu/ (む、ム) was usually used to represent /n/, /m/ and /ng/.

The *gojuonzu* contains all the basic *kana*, but it does not include the versions of *kana* with a *dakuten* such as /ga/ (が、ガ) or /da/ (だ、ダ), or *kana* with *handakuten* such as /pa/ (ぱ、パ), and smaller *kana*, such as the *sokuon* (っ、ツ) or *yōon* (ゃ、ャ, ゅ、ユ, ょ、ヨ).

So far as we know, the earliest example of a *gojuon* style layout dates back from a manuscript known as *Kujakukyo Ongi* (孔雀経音義)⁸ dated in the early eleventh century.

The *gojuonzu* is, in fact, an ancient convention, originating in the character ordering in Sanskrit.

It has been believed among Japanese in pre modern times that the well-known monk Kukai(空海)(774–835) (alias Kobo Daishi, the Grand Master Kobo), the founder of Shingon esoteric Buddhist sect, introduced the *Siddham* script, one style of a *Brahmic* script used for writing Sanskrit, to Japan in 806 on his return from China. Nowadays very few people attribute it to Kukai anymore. However it is no doubt that *gojuonzu* must have been invented by a Buddhist monk (or the group of them) who was well versed in Sanskrit, because they chose to use the word order of a Brāhmī type scripts known among Buddhists as *Siddham*⁹ (悉曇), since the original texts of the important Buddhist writings were written with those alphabets.

The order of consonants and vowels, and the grid layout, originates in Sanskrit *śikṣā*, Hindu phonetics and phonology, and *Brāhmī* script, as reflected throughout the

⁸ The interpretation of Sanskrit text *Mahāmāyūrī sūtra*. Mahāmāyūrī was originally Hindu female deity riding on a peacock, but later she was included into the esoteric Buddhist pantheon and became the important deity among Shingon sect in which she is regarded as the major deity to defend the nation and its king from the enemy.

⁹ In India, this type of scripts are known with the name of *siddamātrikā* script.

Brahmic family of scripts.

In the following chapter, I would like to introduce the basic system of the Brahmic family of scripts and clarify its definite influence upon the formation of *gojuonzu* in ancient Japanese.

Comparison of *gojuonzu* and *Devanagari* scripts order

Nowadays, ancient scripts including *Siddham* system is not used in India anymore. Instead, host of modern Northern Indian languages such as Hindi, the national language of the Republic of India, Nepali, the national language of Nepal, Marathi and Rajasthani, as well as Sanskrit texts published in the form of modern books in India, are equally written and printed in the Devanagari script. It is the offspring of the ancient Brahmic scripts. Those who wish to study any of the modern Indian languages as well as Sanskrit must, first of all, know the order of this system.

It starts with the series of vowels;

अ a, आ ā इ i, ई ī, उ u, ऊ ū, ऋ ṛ, ॠ ṝ, ऌ ḷ, ॡ ḹ, ए e, ऐ ai, ओ o, औ au

In this series, short vowels, long vowels and diphthongs are listed.

The vowel series follow the consonants series. Please note that “Point of articulation” of each consonants shift vertically from back of the mouth to the front. You will note, too, that horizontally from left to right, they shift from (1) unvoiced, unaspirant, (2) unvoiced, aspirant, (3) vocalic, unaspirant, (4) vocalic, aspirant, and finally (5) nasal.

(Guttural); क ka/खkha/गga/घgha/ङṅa

(Palatal); चca/छcha/जja/झjha/ञña

(Retroflex); णṇa/टṭa/ठṭha/डḍa/ढḍha/णṇa

(Dental); तta/थtha/दda/धdha/नna

(Labial); पpa/फpha/बba/भbha/मma

After the regular consonantal order, other consonants will follow. They are either semivowels or sibilants etc. This order is also retained in *gojuonzu* as you will see below.

यya/राra/ लla/ वva सsa/षṣa/ शśa हha/

The logics of the order of *gojuonzu*

In *gojuonzu*, the table starts with the series of vowels as is the case of Indian prototype, i.e. /a/, /i/, /u/, /e/, /o/. This series becomes much simpler than its Indian version as the

number of vowels are quite limited in Japanese. The distinction of long and short vowels are not reflected in this table as Japanese have contrived yet another system to indicate the distinction, i.e. by adding /u/ (う、ウ) to the main syllable to show its nature as a long vowel. Nevertheless it retain original order of Indian Brahmic script.

The vowel series is followed by the series of consonantal series. As in the case of its Indian prototype, it also follows the order of guttural, palatal, dental and labial, but the series of sounds which do not exist in Japanese language phonetics are omitted as in the example of retroflex sounds, aspirants etc.

/ka/, /ki/, /ku/, /ke/, /ko/ ; guttural

/sa/, /shi/, /su/, /se/, /so/ ; (palatal); See the explanation below.

/ta/, /ti(chi)/, /tu(tsu)/, /te/, /to/ ; dental

/na/, /ni/, /nu/, /ne/, /no/ ; nasals for dentals

/ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ ; (labials); See the explanation below.

/ma/, /mi/, /mu/, /me/, /mo/ ; nasals for labial

/ya/, /yu/, /yo/ ; semivowels

/ra/, /ri/, /ru/, /re/, /ro/, ; there is no distinction between /l/ and /r/ in Japanese phonetics.

/wa/, /wi/¹⁰, /u/, /we/¹¹, /wo/¹² ; semivowels

n ; nasal (later invention)

When I introduce the logics of *gojuonzu* to the students at Malay-Indonesian classrooms, many of them are excited to become aware of it as they have known it since their primary school days but nobody had ever taught them the logics behind it. Their surprise will surely help promote their further motivation to study Malay-Indonesian language.

At a glance, you will surely be convinced that the Japanese *gojuonzu* was invented based on the concept of the ancient Indian Brahmic script order. However, you will note some discrepancies between the ancient Indian order and the modern Japanese phonetic system because the table was formed based on ancient Japanese phonetic system and some sounds have changed in the course of over ten centuries. Here I would like to point out some of the important difference.

In *gojuonzu*, after the first guttural series comes /sa/, /shi(si)/, /su/, /se/, /so/, i.e. sibilants, but according to the original Indian system, the palatal series ought to be placed here. Why has such a discrepancy taken place? In fact, in the ancient Japanese, /sa/, /shi(si)/, /su/, /se/, /so/, i.e. sibilant series were previously pronounced as /ts/ instead of /s/.

¹⁰ This syllabary has been obsolete in the modern post war system.

¹¹ *ibid.*

¹² Nowadays this syllabary is used only as the object marker and its phonetic value has been assimilated to /o/ (お、オ).

Japanese /ts/ sound is not exactly the same as Indian palatal /c/, but is much closer to Indian /c/ than modern Japanese /s/ sound. Hence the sibilant series still retain its original location.

In dental series, i.e. /ta/, /ti(chi)/, /tu(tsu)/, /te/, /to/, dentals are intertwined with some palatals such as /chi/ and /tsu/. In fact, many scholars are of opinion that ancient Japanese used to pronounce them as they are written, i.e. as /ti/ and /tu/, but later they have gradually become pronounced as palatals. In fact, some of the dialects in remote regions of Japan still retain the reminiscence of the ancient pronunciation as is the case of some Kyushu dialects and Ryukyuan language in Okinawa¹³.

The fifth row of the table is /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/, i.e. guttural, but in its original Indian order, here should come the labial series. Why has such a discrepancy taken place?

In brief, it is because the syllabaries in /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ series were previously pronounced as /ɸ/ until as late as the second half of the sixteenth century as is testified by the Romanized Japanese texts published by Jesuit missionary in Shimabara seminary, Kyushu. Then the Portuguese transcribed /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ series as /fa/, /fi/, /fu/, /fe/, /fo/ when they translated the Catholic catechism. For example, they have transliterated “Nihon” as “Nifon” and “Hirado” (Island in Nagasaki Prefecture) as “Firando”. /ɸ/ is classified as an unaspirant bilabial fricative sound; it is pronounced by drawing both lips together and then push breath forward between narrow lips. It is a bit similar in quality to /f/ sound so that Japanese tend to pronounce English loanwords containing /f/ sounds with this sound; for example, “France” is usually pronounced as “ɸuransu”¹⁴.

Furthermore, many scholars in Japanese linguistics are of opinion that, prior to Heian Period (794-1185), modern /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ series might have been presumably pronounced as /pa/, /pi/, /pu/, /pe/, /po/ series i.e. labial as in Ryukyuan languages. Nowadays most of the scholars agree that Proto-Japanese has split into Old Japanese and the Ryukyuan languages in the Yamato period (250–710). In Old Japanese, from ninth century till early seventeenth century, /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ series were pronounced as /ɸ/. They began to be pronounced with the present value of guttural /ha/, /hi/, /hu/, /he/, /ho/ only after early Tokugawa period (seventeenth century).

With these and other minor discrepancy in mind, you will readily agree that the Japanese *gojuonzu* was no doubt based on the ancient Indian Brahmic system with

¹³ When I visited Hirado Island, Nagasaki Prefecture, back in 1970s, I heard some local inhabitants pronounced the word “tsuru”(crane)(つる) as “turu”.

¹⁴ Apart from Japanese, such languages as Maori language in New Zealand and Itelmen (Kamchadar) language in Kamchatka Peninsula have this phoneme.

omission of unnecessary phonetic symbols for Japanese language.

Concluding remarks

I have hereby introduced my method of teaching Malay and Indonesian prefix “meN” in the classrooms in relation to the Japanese syllabary system and ancient Indian Brahmic scripts. In my past experience, most of the students in university lectures have been attracted intellectually by the secrets of their own mother tongue and its background history and benefit for the enhancement of their motivation to study Malay and Indonesian language.

I hope this introductory remarks will benefit more teachers as well as students of Malay and Indonesian language in the future.

Gojūonzu(Fifty Syllable Table)

	Vowels					Youon		
vowels	あ a	い i	う u	え e	お o			
gutturals	か Ka	き Ki	く Ku	け Ke	こ Ko	きゃ Kya	きゅ Kyu	きょ Kyo
palatals (sibilants)	さ Sa	し Shi(Si)	す Su	せ Se	そ So	しゃ Sha(Sya)	しゅ Shu(Syu)	しょ Sho(Syo)
dentals	た Ta	ち Chi(Ti)	つ Tsu(Tu)	て Te	と To	ちゃ Cha(Cya)	ちゅ Chu(Cyu)	ちょ Cho(Cyo)
nasal for dental	な Na	に Ni	ぬ Nu	ね Ne	の No	にゃ Nya	にゅ Nyu	にょ Nyo
labials	は Ha	ひ Hi	ふ Fu(Hu)	へ He	ほ Ho	ひゃ Hya	ひゅ Hyu	ひょ Hyo
nasal for labial	ま Ma	み Mi	む Mu	め Me	も Mo	みゃ Mya	みゅ Myu	みょ Myo
y	や Ya		ゆ Yu		よ Yo			
r, l	ら Ra	り Ri	る Ru	れ Re	ろ Ro	りゃ Rya	りゅ Ryu	りょ Ryo
v (w)	わ Wa	ゐ Wi		ゑ We	を Wo			
n, ng, m					ん n/m			

Hiragana
Katanana
roman

Table 2. *Gojuonzu* and its linguistic interpretation¹⁵

Reference works

- Alwi, Hasan. 1995. “BIPA: “hari ini dan esok”. Conference Paper, International Congress on the Teaching of Indonesian as a Foreign Language,” University of Indonesia, 28-30 August 1995.
- Chung, Young-Rhim. 1998. “Keadaan pengajaran bahasa Indonesia di Korea.” In Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, *Bahasa Indonesia Menjelang Tahun 2000*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 853-867.
- Darwowidjojo, Soenjono. 1978. *Sentence Patterns of Indonesian*. Honolulu: University of Hawaii Press.

¹⁵ This table is used in my classrooms at Keio University SFC.

- _____. 1982. *Vocabulary Building in Indonesian - An Advanced Reader*. Ohio: Ohio University.
- Furihata, Masashi, 1998, *Yasashii Indonesia Kaiwa (Easy Indonesian Conversation)*, Unicom.
- Hirataka, Fumiya, Koishi Atsuko & Yamamoto Junichi (ed.), 2005, *Re-design of Foreign Language Education*, Keio University Press.
- Huang Chenfang. 1998. Penelaahan, pengajaran bahasa, dan budaya Indonesia di Beijing. In Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, *Bahasa Indonesia Menjelang Tahun 2000*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 953-967.
- Johns, Yohanni. 1977. *Langkah Baru - A New Approach*. Canberra: Australian National University Press.
- Keiki Higashimoto (alias Rev. Pannananda), 1970, *Pali Buddhist Canon in Ordinary use together with its explanation*, Institute of Pali Literature, Komazawa University, Tokyo.
- Morimura, Shigeru. 1988. "Keadaan dan perkembangan pengajaran bahasa dan sastra Indonesia di Jepang". Conference paper, Vth Indonesian Language Congress, Jakarta, 28 October - 2 November, 1988.
- Read, Julia. 1999. "Indonesian language teaching in historical and global context." Conference paper, 5th ASILE Conference, ANU, Canberra, July 18—19.
- Richards, Jack C. and Rogers, Theodore S. 2001. *Approaches and methods in language teaching*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sato, Masanori. 1995. "Satu tinjauan mengenai bahan pelajaran bahasa Indonesia di universitas-universitas Jepang". Conference paper, International Congress on the Teaching of Indonesian to speakers of other languages, University of Indonesia, 28-30 August 1995.
- Takadono, Yoshihiro, 1996, *Hajimete Manabu Indonesiako (Indonesian for Beginners)*, Goken
- Wolff, John U. 1975. *Beginning Indonesian*. Ithaca: Cornell University Press.
- _____. 1986. *Beginning Indonesian through Self-Instruction*. Books 1-3. Ithaca, New York: Cornell University.

インドネシア流行語再考 Mempertimbangkan Bahasa Gaul sekali lagi

三宅良美 (秋田大学)

MIYAKE Yoshimi (Universitas Akita)

miyake@gipc.akita-u.ac.jp

Makalah ini mencoba menggambarkan karakter dan sejarah bahasa lisan dalam Bahasa Indonesia. Walaupun susah memberi definisi apa bahasa lisan itu, kami mencoba systematisasi karakter-karakter Bahasa Gaul. Memang Bahasa Gaul terletak di tempat terbalik dari Bahasa Baku. Bahasa Gaul adalah suatu variasi Bahasa untuk komunikasi lisan antara manusia. Bahasa Gaul kaya dengan kata-kata untuk ‘pergaulan’, kata-kata emosi, dan kata-kata yang menggambarkan karakter orang.

Bahasa Gaul tidak mencerminkan ekonomi Bahasa, walaupun Bahasa Gaul punya banyak kata-kata singkatan. Dan juga, Bahasa Gaul mempunyai suatu fungsi sebagai Bahasa Rahasia. Kami memberi kesimpulan bahwa Bahasa Gaul memperkayakan cara komunikasi, maupun menambahkan suatu solidaritas antara group-group pembicara yang tertentu.

本論は、インドネシア語口語体の最近の特徴についての試論である。総じて流行語、スラングの定義も難しい中、Bahasa Gaul (以下 BG) を体系化しようとしたが、この BG は、あきらかに、Bahasa Baku (以下 BB) インドネシア標準語の対極にある、「つきあい」のための、口語コミュニケーションのためのヴァリエーションとみなすべきである。その語彙は、コミュニケーションのための言語ヴァリエーションにふさわしく、感情の語彙、人を評価する語彙が多く、とつつきやすい。

BG は言語のエコノミーの理にかなっているわけではない。省略形が多いのは、もともとインドネシア語の特徴であるし、むしろ Bahasa Bencong にみられるように、語彙を複雑化させてコード(暗号)化する特徴もある。BG はコミュニケーションを豊かにすると同時に、特定の話者集団の連帯性をも育む。

0. イントロダクション Introduction

流行語とは何か？英語でもインドネシア語その他の言語でも Slang と呼ばれ、日本語に「俗語」と訳されているものが一般に流行語とされるのだろうか？今日の日本の流行語大賞は、流行語というよりは著名な人物などが発し、メディアにより繰り返し引用される表現に与えられる Tochari の著書 *Indonesian Slang* には一般的な口語体、フランクな挨拶言葉、雑言、ジョークも網羅されている。

一般に知られているように、オランダ領東インドの多様なエスニックが統合し、マレー語が編纂され再生し、インドネシア共和国の公用語として使用される言語がインドネシア語である。このインドネシア語とは、マレー文学起源の言語であり、スカルノ、ハッタのスピーチに代表されるような公式インドネシア語、教科書 Bahasa Baku 標準インドネシア語である。

本来インドネシア語が、文学や新聞により連日生産される言語であることから、学術用語、専門用語として導入される語彙以外の、一般の会話形態、時代とともに変化する語彙や表現は流行語と称される。流行語は口語に特徴的な感嘆詞、女助詞、俗語や隠語、罵倒語、レジスター、慣用句をも含む。

ここではまずはスラングの基点ともいえるべき *prokem* について論じ、その *prokem* が Bahasa Gaul「ためぐち」や流行語に発展してきた過程について論じる。また、日々の会話形態に、どれほど流行語が浸透しているかについても述べる。

1. 流行語の背景

流行語ということばは、一度流行語として生まれ、使われ、いずれは使用されなくなる可能性を含む。しかし、インドネシア語スラング辞典に現れる語彙や表現は、標準語に含まれない語彙や表現を全て含んでいる。そういう意味ではインドネシア流行語に入れられるものは極めて多様である。

1.1. 口語インドネシア語 bahasa lisan, Bahasa percakapan

助詞 *lah*, *kan*、感嘆詞を含めたあらゆる口語形態、さらに、日常の儀礼的会話、たとえば、*Mau kemana? どこまで? Kesana. そこまで.* といったやりとりをも Torchia はインドネシア語スラングに含めている。ゲイ言語、とりわけジャカルタのゲイたちによる言語、一般的にコード暗号‘とされるものも、ある程度ゲイ言語というカテゴリーを超えて使われるようなものもスラングに含まれている。

1.1.1. メタファーを含むことわざや慣用句 Wisdom:

Kapal satu nakhoda dua.

Ship one captain two

One boat with two captain. 舟一隻船頭2人

1.2. Prokem ブロッケム語

ジャカルタの一部で生まれたスラング群であるが、これがインドネシア流行語の起源とされる。Prokem という名称そのものが、スラングの語彙の形成パターンでできた言葉である。かつて私がジャワにいたころには、この *prokem* のオランダ語の *vrijman* ‘ならず者’または英語の *freeman* をインドネシア語の音韻に合わせて *preman* となり、最初の音節の consonant cluster の後に、infix *ok* を入れ、その後の音節を省略してできたのが *prokem* という言葉である。Bahasa Prokem (以降ブロッケム語)は、ジャカルタのギャング集団から始まった

俗語とされるが、infix *ok* の起源についてははっきりしていない。プロッケム語の構造の特徴として、次のことがあげられる。

1.2.1. infix *ok*

bapak-> b+*ok*+ap (最後の *ak* をとる)

1.2.2. 動詞の語尾—in

他動詞を含む命令形の語尾を—in にする。この—in は、Jakarta の vernacular である Betawi 語の文法に基づいている。

教科書インドネシア語会話が (1) であるのに対し、(2) は、プロッケム語である。(1)では他動詞の suffix が—kan であるがプロッケム語では in を使う。訳に関しては、他の訳も考えられるが、雰囲気を出すために下記のように訳した。

(1) Dengarkan-lah.

Listen-SUFFIX –PAR

聞きなさい。

(2) Dengarin, dong.

Listen-in PAR

聞けよな。

1.2.3. 一人称と二人称

プロッケム語の人称として、下記のリストが挙げられるが、そのうち一人称の gue、二人称の lo/lu は、すでになんかの数の人々が使い一般化している。著者は、たまたま Jakarta—Seoul 間のアジアナ航空でジャカルタの中国系富裕層の50代後半と見られる女性ふたりと隣り合わせた2人の間で使う一人称、二人称は gue-lo のみであった。

一人称	二人称
gue	lu/lo
gua	maneh
gw	siah

1.2.4. 人々のカテゴリー化 Category of people

プロッケム語は、他者を描写することことばに多い。また、人々を形容するプロッケム語は多い。

bokap	‘ayah’	お父さん	daddy
nyokap	‘ibu’	お母さん	mommy
sohib	‘sahabat’	友達	friend
cewek	‘perempuan’	女	woman
cowok	‘laki-laki’	男	man
banci		ゲイ	gay

1.2.5. 文末の助詞の使用 End of the sentence particle/tag, hedge

sih, dong, nih のような tag, hedge もまたプロックム語の特徴である。

(3) Tidak tahu, **sih**.

NEG. know PAR

知らないなあ。

(4) Makan banyak, **dong**.

eat lots PAR

沢山食べてよ。

(5) Aku beri makan, **nih**.

I give eat, PAR

食べるものあげるね。

2. Bahasa Gaul : 付き合いの言葉・ため口ことば

1980年代になると、上のプロックム語といった、狭いカテゴリーの流行語群が日常会話に定着する。さらにテレビやラジオを通じてプロックムは国中に広まり、新しい語彙を拡大させて、Bahasa Gaul として一般化する。Bahasa Gaul は、1 で述べたような保守的な人物が眉をしかめるようなものではなく、むしろ、仲間意識、親近感を高揚させる *sosialization* のことばとして発展し、口語インドネシアの基盤となっているともいえる。

さらに Bahasa Gaul (以下BG) は、プロックム語と重複することは明らかなが、Betawi 語はじめ、ジャカルタに集まる多様なエスニックの影響、ゲイ言語の影響を受け極めて多彩な語彙を含む。特徴を下に述べる。

2.2. 音韻論上の特徴

2.2. 1. 省略

2.2. 1. 1. drop of [s]

例: sudah->udah

もうーした(完了)

(6) Udah emoh.

Sudah tidak mau.

もう、いやだ。

例: saja->aja

(7) Gini aja.

Begini saja.

こんなの。

2.2.1.2. 母音に挟まれる/h/の省略 Drop of intervocalic [h]

lihat->liat

見る

lahir->lair

生まれる

2.2.2. 母音の変化 Vowel shift

2.2.2.1. a->e 第2音節の母音/a/がニュートラルになる。

malas->males

pinjam->pinjem

怠けた

借りる

2.2.2.2. u->o 第2音節の母音/u/が低母音になる。

belum->belom

まだ

2.2.3. 二重母音→短母音 diphthong->single vowel

sampai > sampe

～まで

kalau-> kalo

もし

2.3. 形態上の特徴 Morphological features

2.3.1. 他動詞の接尾辞 in Suffix -in for transitive verb

この特徴については1. プロックム語でも述べたが、B G においてはすでに定着した感がある。口語体のインドネシアにおいては、接尾辞の-inは標準語 bahasa baku よりもはるかに多く使われている。上の諸特徴を合わせると次のようなB G となる。

(8) Lo	uda	ngerjain tugas,	belum?
kamu	sudah	kerjakan tugas,	belum

2nd.pp already work duty not yet

‘Have you already finished that duty, or not?’

‘もう、やらなきゃならないことはやったの、まだ？’

dengarin 聞く, bantuin 手伝う, nanyain 尋ねる はすでに一般のひとびとの日常の会話形態である。

2.3.2. 接頭辞の省略 Drop of prefix

接頭辞 *men* で始まる動詞の場合、その接頭辞 *me* をドロップし、最後の子音 *n* は残す。

Menulis->nulis, menembak->nembak, menonton->onton となる。また、接頭辞 *men* のみでなく、多い頻度で使われる語の接頭辞は省略される。

begini->gini そんな

like this

begitu->gitu そんな

like that

2.3.3. 接頭辞 *ng* - Prefix *nge*

多くの場合、借用語を用いた動詞を作る際には、接頭辞 *ng* を使う。下記がその例である。

Bahasa baku のフレームに入れるのであるのなら *men* か *ber* の接頭辞で始めるところを *bahasa gaul* では *nge* にとって代わる。

nge-dance 踊る

nge-drop 落とす

nge-top トップになる

2.3.4. 進行形 *sedang*->*lagi*

Bahasa Baku の進行形のマーカである *sedang* が *lagi* にとって代わる。

2.3.5. 接続詞 Connectives の単純化

2.3.5.1. 接続詞 *dengan* が *sama* にとって代わる。Connective *dengan* -> *sama*

(9) Lo jeles sama guwe.

Kamu cemburu dengan saya.

You are jealous of me.

あたしに嫉妬してる。

2. 4. 文構造の特徴 Sentence structure

2.4.1. 一人称の省略 Drop of 1st person pronoun

(10) Minta satu, dong!

Saya minta satu, ya.

Give me one.

ひとつくださいね。

2.4.2. 主語—動詞の順序の逆転 Reversing the default SV order to VS order

Bahasa Gaul において、取り分け感情の表現などにおいて VS の順序に逆転させることがよくある。

(11) Males, ah, gue!

Malas, ah, aku

Saya malas.

I am being lazy.

面倒くさいな、もう、あたし。

2.4.3. 強調 Emphasis

banget sekali すごく ‘very’

doing ‘saja’ ーだけ ‘only’

(12) Gitu, doing

like just

Seperti itu saja.

Just like that.

そんなもんよ。

(13) Cantik banget, Ci.

Cantik sekali, you (to a Chinese woman).

You are very beautiful.

すごくきれいよ、あなた。

2.4.4. 否定形の短縮 Shortening of negation markers

tidak->ndak

本来口語体の nggak をさらに nggak, gak, ga までに省略させる。

2.4.5. Tag, Hedge の多用

Kok, sih, kan, emang, dong, deh, lho, lo, loh, nih といった文末または文中の助詞が多い。

(14) Kok, sudah makan?

Oh, did you already eat?

あ、もう食べちゃったの？

(15) Loh, Bu Risma ‘kan pilihan rakyat langsung...

Ms.Risma HEDGE choice people direct

Hey, Mrs. Risma is the choice of the direct people.’

イブ・リスマは直接民衆が選んだ人じゃなかったのかあ...

2.5. 語彙 Lexicon

下記の語彙はほとんどのインドネシア人が知っている Bahasa Gaul である。インドネシア人によると、こうした語彙はまずジャカルタの青年たちにより使われ始め、それからコメディアンらによってテレビやラジオで拡大し、だれもが知る Bahasa Gaul となる。

2.5.1. Prokem と同様、友人や人々を描写したり、お互いのコミュニケーションの状況を評価するような表現に語彙が集中することがわかる。

bokin	‘girl friend’ ガールフレンド
gebetan	‘pacar’ 恋人
anak layang	‘anak kampungan’ 田舎者
jomblo	‘have no boyfriend/girlfriend’
bencong	‘transgender, homosexual’ トランスジェンダー
kece	‘handsome’ イケメン
gokil, geli, saraf	‘crazy’ 頭がイカレてる
kepo	‘want to know about everything, nosy’ お節介
bego, goblok	‘idiot?’ 馬鹿
gede	‘besar’ でかい
mantap	‘bagus’ いい
jayus	‘tidak lucu’ (really provincial, rurally lame). くだらない
naksir	Have a crush on someone ぞっこん

一文のそれぞれの単語の最初の部分をとってつなげた表現

kamseupay (totally lame) ←→ *kampungankali udik payah*
いやになるほどダサイ。

もっとも最近使われる表現に masbulo がある。

masbulo ←→ masalah buat lo
あなたの問題
(余計なお世話だ。)
‘It’s none of your business.’

(16) Kamu kok bajunya sexi.

You EXC. Outfit-ARTICLE sexy

Oh, your outfit is sexy.

お、その恰好セクシーだな。

Masbulo !

It's none of your business.

余計なお世話！

2. 5.2. ある特定の行動、振る舞いを描写することば Descriptive about certain actions or behaviours

nongkrong - To sit around, doing nothing

道端などでしゃがんでたむろすること。今日ではスターバックスのようなところで、ドリンク一杯で粘るのも nongkrong である。

PD- Percaya diri - Self-confidence 自信をもっていること。

ABG 'anak baru gede' 思春期に達した子ども。ティーン。

BT [be:te:] 'boring time' つまらないこと。

2.5.3. 罵倒語 derogative terms

当然罵倒語や雑言がこのカテゴリーに含まれる。それぞれの語彙は語源が異なり、また使用条件も異なる。たとえば、*bajingan* は、語源を、「馬車をひく者」としているが、Robby Ertanto 監督による 映画 *7 hati 7 cinta 7 wanita* (2011) 「七つのこころ、七つの恋、七人の女」においては、イスラム教徒の敬虔な妻が、心無い夫をなじるのに何度も使われていた。また、本来は「雑巾」を意味する *gombal* も、人の弱みを利用するような卑怯者に使われる。下記の語彙にはそれに近いと思われる英語を付ける。こうした罵倒語は、すでに口語として、ごく日常使われることばであり、あえて流行語のカテゴリーに入れる必要はないといえる。

goblok, dodol 'idiot' ばか

bajingan, 'bastard, jerk' 畜生

bangsat 'bastard' 馬鹿野郎

gombal 'bastard' 卑怯者

2.5.4. 性に関わる言葉 Sex related terms

Sange, longe といった性行為を表す言葉は当然のこととして多い。

3. 流行語再考：今日の、また今後の流行語

Jakarta のギャングのコードから発した Bahasa Prokem が境界を越えてインドネシアにため口として広がり、bahasa gaul として定着する一方、グローバリゼーション、インターネット、HP、スマートフォンの普及、ミドル・クラスの成長ゆえに、インドネシア流行語はあたらしい側面を見せ始めた。インドネシアにおけるソーシャルネットワークの普及率は、世界で2番目といわれている。子供も大人も、都市でも農村でも人々はインターネットに頼っている。ほとんどの公共の場、たとえば、ショッピング・モールや大学のカフェテリア、コンビニという、若者がたむろするところには必ず無料の Wifi が飛んでいる。私がしばしば調査に訪れる Yogyakarta ではインターネット・カフェ Warnet (<= warung internet) がブロックごとにあるし、

HP [ha:pe:] (←hand phone) 携帯電話は、子供も老人もほとんどすべての人がもっている。

コンテル Counter とは、携帯の SIM カードや PULSA プリペイドカードを売る warung をいうのであり、それもまたブロックごとにある。ベチャ、ojek ‘オートバイ・タクシー’は携帯を持ちコールを待つ。このような環境のもと、インターネットのダウンロード、アップロードなどに関わる用語が新しい流行語としてくる。その結果、新しい流行語とは、インターネット、YouTube, Yahoo, Face Book 上でもっともよく使われる英語起源の表現か、その短縮形である。下記に、こんにちだれもが使う流行語を紹介する。

3.1. インターネット、P Cに関わることば

Lola: loading telat ダウンローディング、アップローディングが遅いこと。

COPAS [tjopas] copy and paste. 日本語でいうコピー。

Misscall 電話番号を伝えるためにワンギリすること

*misscall は、日本語における借用表現と似ていて、英語にはないインドネシア独特の表現である。

3.2. 英語表現、またその短縮形 English idioms and their acronyms

テレビ番組の増加、とりわけケーブルテレビチャンネルによるグローバル化から英語表現はごく自然に入ってきたと言える。特徴として、単語のみではなく、英語表現、英語イディオムがインドネシア語独自の方法で省略し創造される。携帯とともに、パソコン、インターネット上頻繁に使われるということから、高校生、大学生間でよく使われる。

COD [tje: o:de:] <=Cash on Delivery online trading

JB <=join bareng

cekidot <=check it out.

Satnit <=Saturday Night

gorjis <=gorgeous

jeles <=jealous

3.3. トランス・ジェンダーのことば Bahasa Bencong

とりわけジャカルタを中心としたゲイ言葉、表現もまた、最初はその中だけで使われていたものがファッション雑誌、メディアを通して一般に知られるようになるものも出てきている。このカテゴリーの流行語の発生とポピュラー化は早い。

トランスジェンダーのことばに関しては Dede Utomo の詳しい報告があり、その語彙の形成の多様さには感心する。ここでは、もとの言葉をやや変え、ちょっとウイットを効かせた語彙や、元の言葉の音節数を増やし、最初の音節に似た単語にとって替える方法で形成された語彙を紹介する。

トランスジェンダー語	意図するところの意味	Bahasa baku 標準語
Diana - 個人名	she or he 彼・彼女	< dia
bagasi 荷物	nice 良い	< bagus
manila - マニラ	sweet 甘い、可愛い	< manis
rambutan - ランブータン	hair 髪	< rambut
mawar バラ	-want ーしたい、欲しい	< mau
tinta インク	NEG 否定形	< tidak
Makarena - マカレナ (曲の名前)	eat 食べる	< makan
Aku	1 st P.P 私	< akika

- (17) Akika tinta mawar Macarena, cin
aku tidak mau makan, sayang
I don't want eat darling
'I don't want to eat, darling.'
ねえ、あたし、食べたくないの。

さらに、ゲイの間あるいはゲイと友達関係にある女性もまた、お互いを cin, cyiiin と呼びあう。cin は、cinta 'love'の省略形。著者も2013年夏、ゲイのカップル宅に遊びに行く機会があったが、別れのあいさつは、お互いに、Selamat malam, cin.と言ってキスしあうものだった。

4. その他の特徴

4.1. ジャワ語のケース

4.1. 1. フォーク・エティモロジー現代版

地方におけるインドネシア語流行語として、ジャワ語の例を挙げよう。ジャワ語は、本来のことば遊び、あるいは民俗語源学（フォーク・エティモロジー）、*kerata basa* ケロトボソがあり、その影響と考えられるが、省略形をふんだんに使う。その省略形をもまたひとつの言葉として意味を帯びる。かつては王宮の文献に書かれていたジャワ語のことば遊びは実は大衆文化のものであった。この伝統は新しい流行語形成に明らかに影響している。ある語彙を、名詞句、文章の省略形をつなげたものと解釈する言葉ゲームである。こうして、次のようなケロトボソが出来上がる。

- (18) polisi= **pol-pole** ming ngapusi,
police characteristics only lie

“Police lie as much as they can.”

警察とは、できるだけ嘘をつくものだ。

- (19) wartawan= *wargane* *ansah oleh* *prawan*,
wartawan warganya selalu dapat perawan
journalist group def.art. always get maiden

“Journalists are the group who always get maidens”.

記者らは、いつでも処女を得る連中だ。

4.1. 2. Bahasa Walikan

さらに、ジョグジャの若者は、ジャワ語のイロハニホヘト、*Hanacaraka* の詩の2行目と4行目、1行目と3行目とを交換して、コード *Kata Walikan* (ひっくり返し語)を作る。こうして、罵倒語 *Matamu!* ‘お前の眼!’は *Dagadu* となる。

1. Ha na ca ra ka
 Ada kerajaan kerajaan
 王国があった
2. da ta sa wa la
 Mereka berperang
 戦争をしていた
3. pa dha ja ya nya
 Sama kekuasaannya
 力は同じだった
4. ma ga ba tha nga
 Semua mati
 両者とも死んでしまった

Hanacaraka の詩（ジャワ文字のを全て使った唄）は5音節4行でなっているが、2行目と4行目、1行目と3行目をそれぞれ交換して異なる子音に替えるのが Bahasa Walikan である。若者たちは、お互いの悪意のない罵倒語として、Dagadu といいあう。こうして、ジョグジャの有名なTシャツブランド Dagadu シャツもできあがった。

ここでは著者の研究対象である Yogya の例をあげたが、各地域において地方の口語体は確立しつつあり、それが今後の言語学者の主な研究対象になるであろう。

5. 結論

本論は、インドネシア語口語体の最近の特徴についての試論である。総じて流行語、スラングの定義も難しい中、付き合いのことばBGを体系化しようとしたが、このBGは、あきらかに Bahasa Baku（以下BB）インドネシア標準語の対極にある、「つきあい」のための、口語コミュニケーションのためのヴァリエーションとみなすべきである。インドネシア語教育者は、BGや英語借用語の蔓延に眉をひそめ、インドネシア語が損なわれると嘆くが、BGの語彙は、コミュニケーションのための言語ヴァリエーションにふさわしく、感情の語彙、人を評価する語彙が多く、とっつきやすい。

BG は言語のエコノミーの理にかなっているわけではない。省略形が多いのは、もともとインドネシア語の特徴であるし、むしろゲイ言語 Bahasa Bencong にみられるように、語彙を複雑化させてコード(暗号)化する特徴もある。BG はコミュニケーションを豊かにすると同時に、特定の話者集団の連帯性をも育む。

冒頭において、著者は、Bahasa Prokem はジャカルタのギャング集団から発し、それからインドネシアの若者の BG に発展してその確固たる地位を獲得したと述べた。本稿で紹介した BG の語彙は、もはや若者ことばではない。少なくとも Jakarta の人たちであれば、60代の女性たちも gue, lo と呼び合う。Yogya の宮廷に住まう、もっとも品性のあることばを話すと言われる人たちですら他動詞の接尾辞—in、文末の分詞、deh, dong, は日常使っている

インドネシア語の教師からすれば、スタンダード・マレー語がインドネシアの国語として制定されてきたために口語インドネシア語はその反対語として Bahasa Slang として考えられてきた傾向がある。そのため口語インドネシア語が、正規のインドネシア語に危機をもたらしていると憂う文化人はいる (Dragana Mrkaja 2014)。しかし、流行語表現の増加がインドネシア標準語に悪影響を及ぼすということを証明する事象はない。

地方語の観点からすると、インドネシア語は、都市のことば、文字のことば、学校のことば、メディアの言葉であり、その結果ミドル・クラスのことばである (Heryanto 1990)。その点からすると、インドネシア語のヴァリエーションである BG もまたミドルクラスのことばである。

BG は、さらなるヴァリエーションを作り出しインドネシア語口語体としての地位を獲得していく。本論で紹介した英語イディオムや慣用表現の借用とインドネシア語化、ゲイコミュニティーの創造的な言語、また、本論では触れることのできなかつた Bahasa Alay（携帯、e-mail

コミュニケーションの言語) ——こうしたヴァリエーションは、インドネシア語にさらに多様性をもたらし、語彙を豊かにしていこう。

References/Bibliography

Dragana Mrkaja,

2014 Is Indonesian language on the decline? *Tempo February 23*, 2014. pp.58-59.

Hersri, Setiawan

2003 *Kamus Gestok*. Indonesia Tera.

Lindsay, Jennifer, 2014

2014 Sounds, *Tempo February 23*, 2014. P.56-57.

Smith-Hefner, Nancy J.

2007 Youth Language, Gaul Sociability, and the New Indonesian Middle Class. *Journal of Linguistic Anthropology*. 17(2):184–203.

Torchia, Chirstopher and L. Djuhari

2007 *Indonesian Slang*. Tuttle.

現代ジャワ若者におけるジャワ語の敬語使用の運用実態
—ガジャマダ大学学生のケーススタディ—

Kondisi Pemakaian Bahasa Krama pada Kalangan Muda Jawa Saat ini
—Studi Kasus terhadap Mahasiswa Universitas Gadjah Mada—

エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ
(東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程)
Elyzabeth Esther Fibra Simarmata
(Universitas Bahasa Asing Tokyo)

Abstract

The Javanese language is known as one of the languages which have complex norms of honorific. This honorific system, namely *Krama*, is used as a tool to express politeness (formality) or to pay tribute at many different levels in daily life. However, these days, it is pointed out that the ability of using honorific in Javanese become worn among numbers of Javanese young speakers, and it build a tendency to avoid the use of the honorific among them.

Nevertheless, no research has been done to substantiate the practical use of the honorifics among Javanese young speakers. Therefore, this research aimed in revealing the actual proof of the current situation, as well as, what kind of changes are in the honorific use among young Javanese speakers and how those changes stimulate a new style and a new concept of honorific system from sociolinguistic point of view.

1. はじめに

現在、ジャワ語の敬語を使用できない若者や敬語の使用を避ける若者が増えているなど、現代ジャワの若者の敬語離れが指摘されている。若者がジャワ語の敬語、つまりクロモを使用する能力が低下しているとよく耳にするが、それはジャワ社会では誰でも感じることであろう。しかし、若者自身の敬語認識や敬語の運用実態に関しては未だに明らかにされていない。

そこで、上記の敬語の認識と運用実態を明らかにすべく、ジョグジャカルタ市のガジャマダ大学において、2011年8～9月と2013年2～3月に、現地調査を二回行った。一回目は、若者の敬語認識に関する調査を行い、複雑な敬語の規範を持つ言語として知られるジャワ敬語が現代の若者によってどのように使用され、また変化していくのかを社会言語学的視点から明らかにした。この調査の成果はシマルマタ(2014a, 2014b)で報告した。この論文では、ジャワの若者の間では、①敬語の必要性の認識はあるが規範的に使う自信がないこと、②誤使用のリスクが敬語使用の回避の要因となっていること、③簡素化した敬語が出現したこと、即ち、クロモ・ルマ¹の使用やインドネシア語へのコードスイッチングが見られたことを指摘した。また、ジャワ敬語からインドネシア語へのコードスイッチングする理由に関して学生たちは、①無難で使いやすい、②相手に対する誤解を招きにくい、③中立的で誰にでも平等に使えるため好ましいなどと、インドネシア語の利点をいくつか述べていた。

¹ クロモ・ルマ(Krama Rumah)は、直訳すると「家の敬語」を意味する。たとえば家の中や家の周辺、近所の人たちに挨拶をしたり短い会話をしたりするときに使われる、決まったパターンのような簡素化したクロモなどが挙げられる(シマルマタ 2014a:14)。「クロモ・ルマ」という用語自体がどの程度普及しているのかまだ明らかではないが、特に若い世代が用いる簡素化した敬語のことを指すと考えられる。

そして二回目は、本稿の主な目的である、ジャワの若者の敬語使用の運用実態について調査を行った。本稿では、現代ジャワの若者が規範的なクロモを使用できなくなるという実態を実証するために、クロモの運用実態をはかれるような質問アンケートを用いてクロモの正誤用法に対する認識の調査を行い、若者の敬語使用の傾向を明らかにする。

2. ジャワ語の研究背景

ジャワ敬語に関する先行研究では、これまで次のように指摘されてきた。まず、1928年3月、ジョグジャカルタで行われたジャワ語の講師学会では、ジャワ語の発話の階層を使用するのが難しいため、詳しく説明できる発話の階層のテキストブックが必要だという結論に至った (Dwijawiyata 1930)。そして、Poedjosoedarmo ら (1979) は、ジャワ語の難しさのほかに、当時 (1979 年頃) の家庭における敬語使用の状況について、現在はエリート家庭においても、家庭内でクロモを使用することに対してこだわりがなくなっている。親子の会話でクロモを使用しない理由としては、親と子供の間に関係を求めるからだと述べる (Soepomo Poedjosoedarmo, et al. 1979:15)。さらに、1991 年、1996 年、2001 年のジャワ語学会の結果は、現代ジャワの若者は既に発話の階層の使い方を把握していないということに加え、特に一般人 (エリートの枠には入らない人々のことを指す) からは、発話の階層を簡素化しようとする願望が高まっているということが見られるという (Sasangka 2004:1-5)。

先行研究のなかでは、上記のようにジャワ語の発話の階層の複雑さと、若者らが使用を回避する傾向があることは指摘されてきた。しかしながら、ジャワ敬語の使用に対する認識とその運用実態がどこまで低下しているのか、その実態をデータで示したものはないため、本稿ではこの点を明らかにする。

3. ジャワ語の仕組み

現代ジャワの若者が規範的なクロモを使用できなくなるという実態を明らかにするために、図1はジャワ語の仕組みについて示したものである。本章では、ジャワ語の語彙レベルと発話レベルに分けて、ジャワ語の仕組みを概観する²。

² ジャワ語の仕組みに関してはシマルマタ (2014:216-218) にてより詳細に論じている。

●語彙レベルによる区別

- ① Ngoko (N) ンゴコ語 (丁寧ではない語彙)

- ② Madya (M) マディオ語 (準丁寧な語彙)

- ③ Krama (K) クロモ語 (丁寧な語彙)

- ④ Krama Inggil (Ki)

クロモインギル語 (最も丁寧な語彙)

敬意を
表わす

●発話レベル (文体) による区別

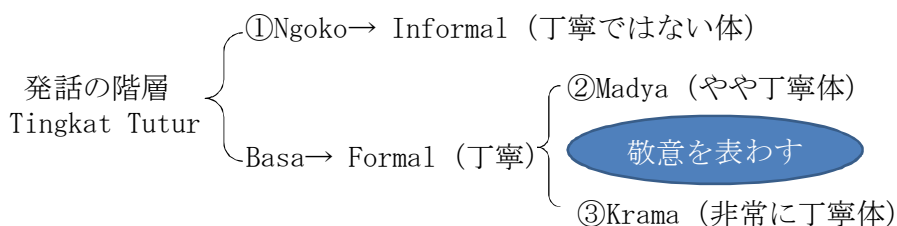


図 1 ジャワ語の仕組み
(Soepomo Poedjosoedarmo ら (1979) に基づき筆者作成)

3-1. ジャワ語の語彙レベル

インドネシアのジャワ語研究者 Soepomo Poedjosoedarmo ら (1979) は、ジャワ語の語彙レベルを四つに分けている。そのうちの三つは話し手と聞き手との間の「丁寧さ」 *formality* と関係するものを指す。

- ① Ngoko ンゴコの語彙である。ンゴコは丁寧ではない、インフォーマルな語彙を指す。
- ② Madya マディオの語彙である。マディオは準丁寧、準インフォーマルな語彙を指す。
- ③ Krama クロモの語彙である。クロモは丁寧、フォーマルな語彙を指す。
- ④ Krama Inggil クロモインギルといい、特別な語彙として見なされる。クロモインギルとクロモの語彙を組み合わせると、より敬意を表わす機能を持つ。

また、全てのことが Ngoko ンゴコ、Madya マディオ、Krama クロモ、Krama Inggil クロモインギルの 4 つの語彙を持っているとは限らない。lunga、omah、arep という語彙を例にみると、次のように説明できる。

表 1 語彙の階層の例

	Ngoko	Madya	Krama	Krama Inggil	意味
動詞	lunga	kesah	—	tindak	行く
名詞	omah	—	griya	dalem	家
助動詞	arep	ajeng	badhe	—	～する

つまり表 1 で示したように、違うレベルで等しい意味を持つ語彙が存在しない場合もある。

3-2. ジャワ語の発話レベル

ジャワ語の発話のレベル（階層）はジャワ語では *unggah-ungguh ing basa*、インドネシア語では *tingkat tutur* と呼ばれる。政治的、経済的な力関係など、社会的地位に応じて話し手と聞き手の間で使われ、ジャワ語話者の社会的様式として捉えられる。Soepomo Poedjoesoedarmo ら (1979) は「ことばの多様なバリエーションであり、バリエーション間の相違は、話し手が聞き手に対してどのような待遇意識を持つかによって決定される」(1979:3) と定義している。

注意すべきなのは、発話のレベルにおけるンゴコ体、マディオ体、クロモ体は、語彙レベルにおけるンゴコ、マディオ、クロモとは異なるので区別しなければいけないということである。発話の階層は、敬意を表わすためのコードシステム *code system* である。そのコードシステムが特定の語彙、特定の構文、特定の形態、特定の音韻の要素を持っている。一方、語彙レベルとは各レベルの中で、同じ意味や同じ丁寧さを持つ語彙を指す。例えば、文章の中でクロモの語彙を多く用いることによって、文章全体がより丁寧になり、発話の階層からみれば、クロモ体の形をとっていると見なされる。

次に、丁寧さの度合（順）によって分類される発話の階層について述べる。まず、ンゴコ体は、話し手と聞き手の間に距離がないことを示す。つまり、相手に対して話者は遠慮せず、敬意を表わす必要がない。例えば、教師が学生に対する時など、或いはは怒っている時や痛みを感じる時など、感情的に極めて厳しい状況になる際に、ンゴコを使う。つぎにマディオ体は、ンゴコ体とクロモ体の間にあり、クロモほど敬意を表わさず、中間的な敬意を表わすときに使われる。マディオ体を用いる相手はクロモ体ほど高く敬意を表わす必要はないが、礼儀正しく接しなければならない人であるとされる。社会的に地位の低い人だが年齢的には非常に年輩の人に対する場合にマディオ体がよく使われている。最後にクロモ体は、非常に敬意を表わす体である。この発話の階層は、相手があまり知らない人、或いは、自分より社会的に高い地位を持つ人など、非常に遠慮を持って敬意を表わしたい相手のときに使われる。例えば、学生が教師に対する時、部下が上司に対する時などに使う。

また、発話の階層はスピーチレベルとして見なされている (Soepomo Poedjosoedarmo, et al. 1979:8)。つまり、「丁寧さ」の度合と話し手が聞き手に対して感じている敬意の度合を表わすと述べている。なお、このスピーチレベルは社会的変種 *social dialect* とは区別すべきであると Poedjosoedarmo ら (1979) は指摘している。なぜなら、社会的身分や階層や方言の所属に関わらず、ジャワ語母語話者全員がこれを用いているからである。

4. 調査の概要

4-1. 調査地

ジョグジャカルタ特別州 Daerah Istimewa Yogyakarta の人口は約 350 万人で、面積は 3,185 km² である。この地域に住んでいるインドネシア人はほとんどがジャワ民族であるため、使用される言語としてインドネシア語の他にジャワ語があげられる。

ガジャマダ国立大学 Universitas Gadjah Mada は、ジョグジャカルタ市に本部が置かれる有名な国立大学で、1949 年に設置され、18 の学部を持つ総合大学である。インドネシアでは最も高い水準を持つ大学として知られている。そのため、全国からガジャマダ大学へ入学希望者が集まる。2007 年から 2010 年までの各年の学生平均数は 1 万 5 千人である。全体の学生数から

みれば、ジャワ人の学生が最も多く、学生の日常コミュニケーションの中では、ジャワ語が欠かせないと言われている。

インドネシアでは、学校や大学など教育の場で行われている正式な授業や活動、教育上のやり取り、教育の実施は全てインドネシア語で行われているが、実際ジャワ人学生の間で行われる日常会話をみると、地方語であるジャワ語もよく話されている。つまり、ジャワ人学生たちは学内でもジャワ語とインドネシア語を使い分けて会話をしている（シマルマタ 2014：219）。

4.2. 調査の方法

本稿では現地調査の結果に関する分析を中心に行う。調査地はガジャマダ大学で、2013年2月20日から3月21日まで実施した。対象者は、人文学部ジャワ語学科などに在籍しているジャワ人学生の245人（ジョグジャカルタ出身の学生115人とその他の地域の出身の学生130人）と、ジャワ語の教師の3人（ガジャマダ大学の教師2人とその他の教師1人）である。調査方法は、アンケート調査（全5問³）である。アンケートでは、学生が相手と話す場面を作る（相手の年齢と地位を区別する）状況設定を行った。またアンケートの回答方法は、丁寧さの異なる27文の中から普段自分が使う文体を選ぶという方法を用いた（複数回答可）。

学生のほかに、ジャワ語の教師にも回答を依頼し、教師が規範的だと思っている文体のみを選び、それがなぜ規範的/正しいかを説明してもらった。

具体的な設問の場面として、下記のように用意した。

・場面①

私はガジャマダ大学人文学部の学生（18～22才）、演劇部に入っている。定年を迎えるストモ先生（70才）の送別会がソロ市（隣町）で行われることになり、私はその会に招待された。また、私と仲良くしている演劇部のコーチ、ヨヨさん（40才）と学部長の秘書、ラティさん（40才）も、その送別会に招待されている。

問1. 私はヨヨさんにソロ市へ行くかどうかをたずねる。

・場面②

ヨヨさんと話している際、ストモ先生と仲の良い大先生、ハルディト先生（68才）が来た。私はハルディト先生の授業に出たことがあり、たまに相談もする。そこで、私はハルディト先生がソロ市で行われる送別会に出席するかどうかをたずねる。また、私も送別会に出席することにしたということを先生に伝える。

問4. 私はハルディト先生にソロ市へ行くかどうかをたずねる。

問5. 私はハルディト先生にソロ市へ行くことにすると伝える。

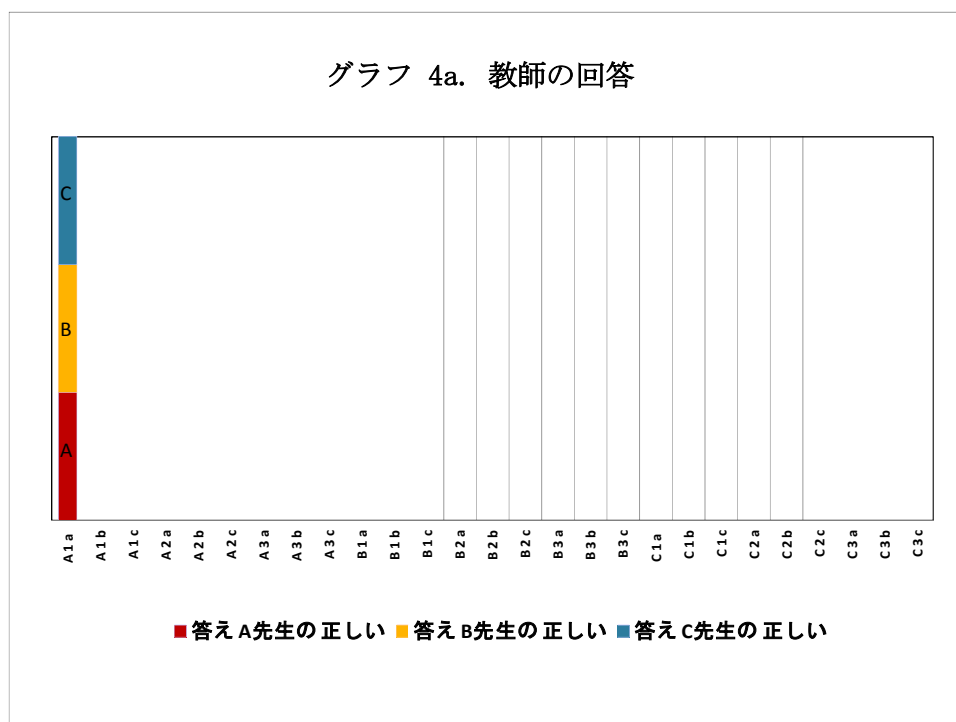
5. 回答分析とその考察

本章では、ジャワ語の敬語使用の運用実態をデータから明らかにする。アンケート調査の結果を見て分析を行う。より理解しやすくするため、アンケートの分析はまず（問4）、（問5）、（問1）の順で行う。

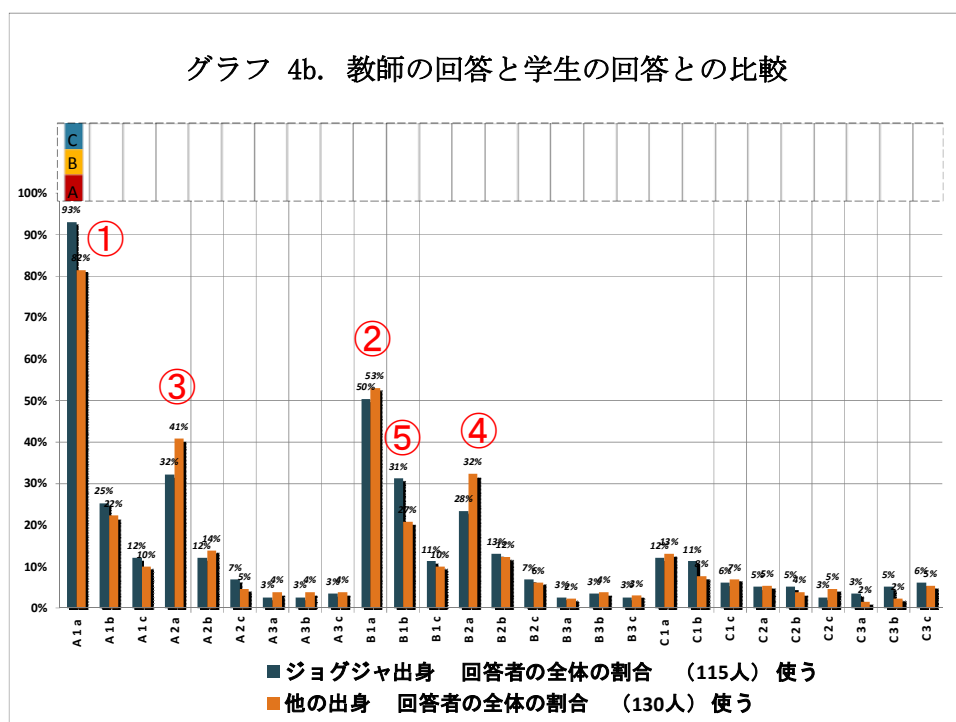
³ 本稿では、第44回日本インドネシア学会研究大会の発表で取り上げた問1、問4、と問5に対して分析を行う。なお、問2と問3については、別の機会に論じる予定である。

5.1. 問 4. 私はハルディト先生（大先生、68 才）にソロへ行くかどうかをたずねる。

a. 教師の回答



b. 教師の回答と学生の回答との比較⁴



⁴ ジョグジャカルタ出身と他の地域の出身の学生の回答の間に大きな差が見られなかったため、両回答の平均数を示した。

このデータから次のような点を指摘できる⁵。

問4.

①	A1a ○	Bapak (先生、～さん) NAME (appellation)	badhe (K) ～教します will	tindak (Ki) いらしやる go	dhateng (K) ～(の方)へ to	Solo? (地名) PLACE	学生が使う (平均) 88%
		先生は ソロ の方へ いらしやいますか。					
②	B1a ×	Bapak	ajeng (M) ～します	tindak (Ki) いらしやる	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	52%
		先生は ソロ の方へ いらしやるんですか。					
③	A2a ×	Bapak	badhe (K) ～教します	kesah (M) 行く	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	37%
		先生は ソロ の方へ 行きますか。					
④	B2a ×	Bapak	ajeng (M) ～します	kesah (M) 行く	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	30%
		先生は ソロ の方へ 行くんですか。					
⑤	B1b ×	Bapak	ajeng (M) ～します	tindak (Ki) いらしやる	menyang (N) ～へ	Solo?	29%
		先生は ソロ へ おいでになるんですか。					

まず、教師が三人とも一致して、規範的だと示したのは次の文章である。

① A 1 a

Bapak badhe tindak dhateng Solo?

K Ki K

その理由として、「相手は大先生で、歳の差も非常に大きい」「敬意を最も表わすべき人なので、全部クロモにしなければならない」と述べている。

教師らによると、ハルディト先生は大先生で、歳の差も大きいという理由で、勿論全てがクロモ (全部クロモ⁶) で話さなければならないという。さらに、学生の年齢から比較してみれば、68 才というのは、経験が豊富で尊敬すべきお年寄り tiyang sepuh としての意味も含めるため、ここは全てがクロモで話さないと非常に失礼だと思われると述べている。

全てをクロモで話すべきなのに、②の B 1 a のように助動詞に ajeng (M) を入れる学生が 5 割以上いた。これはどういう意味なのか。前に述べたように kesah はマディオオなので、クロモほど敬意度は高くないが、それなりの丁寧さも持っているため、使っても失礼ではないだろうと考える傾向が見られる。つまり、規範的な文章、①の A 1 a を選んだ学生は 9 割近くいるが、ほかに②のような文章を、十分に使うことができると認識している学生も多いことが分かる。規範的な文章を選んでいても、敬意度を重視するほかに、丁寧さの意味でより“相手に近づく”文章を妥当とする傾向が見られるといえるだろう。

マディオオに変えることで、文章としては規範的ではないが、丁寧さがまだ伝わると思われる。しかし本来は、相手の行為を指す動詞のところは、必ずクロモにしなければいけない。最もしてはいけないのが、尊敬すべき相手の行為をクロモにしないことであり、つまり相手に敬意を

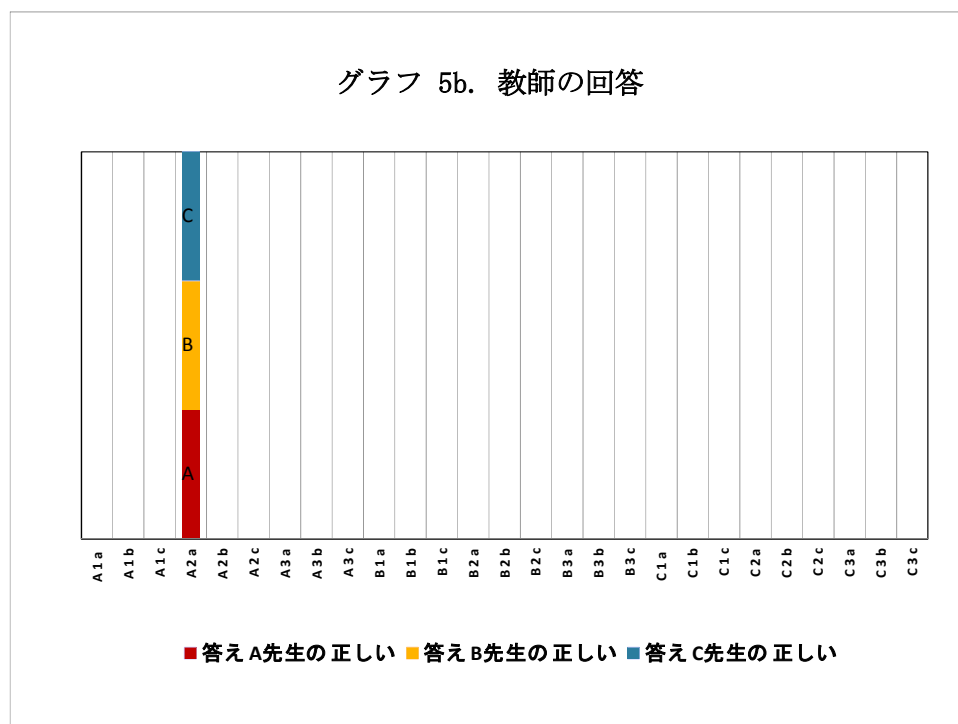
⁵ 現時点は暫定的に日本語訳に当ててみたが、今後の検討事項としたいと考える。

⁶ 「全部クロモ」は、文中の語をすべてクロモ以上にしなければいけないことを意味する。

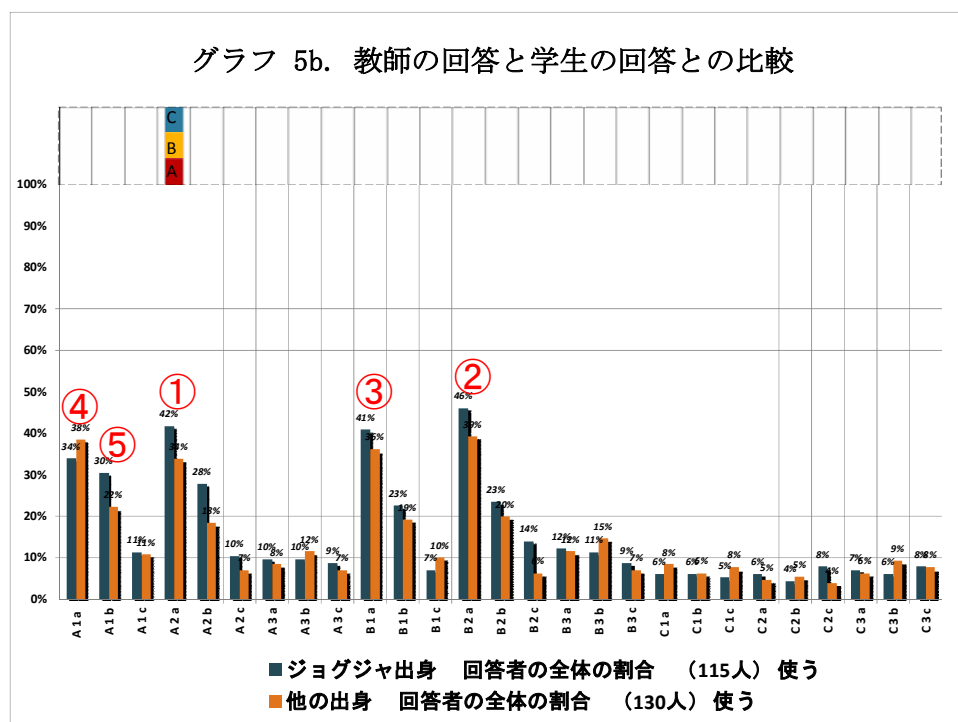
表さないこととなる。特にこの場面の相手は大先生なので、動詞をマディオに変える選択肢はないはずだが、③と④のように使うという学生が3～4割もいた。一方、⑤の場合、動詞はクロモにして敬意を表わそうとしている印象は受ける。しかし、前置詞をンゴコに変換することによって、②と同じく、相手により近い距離を求めている可能性がある。

5.2. 問5. 私はハルディト先生（大先生、68才）にソロへ行くことにすると伝える。

a. 教師の回答



b. 教師の回答と学生の回答との比較



このデータから次の点を指摘できる。

問5.

①	A2a ○	Kula 名 (「尊な語」) NAME (appellation)	badhe (K) ～致します will	kesah (M) 行く go	dhateng (K) ～(の方)へ to	Solo. (地名) PLACE	学生が使う (平均) 38%
		わたくしは ソロ の方へ 参ります。					
②	B2a ×	Kula	ajeng (M) ～します	kesah (M) 行く	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	43%
		わたくしは ソロ の方へ 行きます。					
③	B1a ×	Kula	ajeng (M) ～します	tindak (K) いらっしゃる	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	39%
		わたくしは ソロ の方へ いらっしゃるんです。					
④	A1a ×	Kula	badhe (K) ～致します	tindak (K) いらっしゃる	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	36%
		わたくしは ソロ の方へ いらっしゃいます。					
⑤	A1b ×	Kula	badhe (K) ～致します	tindak (K) いらっしゃる	menyang (N) ～へ	Solo?	26%
		わたくしは ソロ へ いらっしゃいます。					

この設問に対しても、教師らは全員一致で①の規範的な敬語のパターンのみを選んだ。

① A 2 a

Kula badhe kesah dhateng Solo.

K M K

その理由は(問4)と殆ど同じだが、(問5)では、自分の行為を相手に伝える、つまり文章の中に使われる動詞は自分の行為を指す動詞のため、動詞の中に敬意を表わしてはいけないという。相手は大先生で、歳の差も非常に大きく、敬意を最も表わすべき人なので、全部クロモにしなければならない⁷という。

三人のジャワ語の教師によると、規範的で文章として正しいといえるのは、①のA 2 aのみであるという。ジャワ語では年齢が自分より上、さらに地位のある人に対して物事を伝えるときに、自分の行為を指す動詞を敬語にしていけない、つまり自分を高めてはいけないというのは、最も基本の規則として知られているはずであるという。しかし、現代ジャワの若者はこのような使い分けを理解できていないため、相手が自分より上だとわかったら、誰が行為を行うかという点を無視して、④のように文章全体を敬語にするか、とにかくまずは動詞を敬語にする傾向があるという。データからも明らかになったが、動詞の使い分けに関して、若者は十分に理解していないといえるだろう。

また、動詞は自分を指すため、敬語にしていけないと理解していたとしても、違うところに敬語の誤使用が出てくる場合もある。②のB 2 aは学生に最も選ばれ、4割以上もあるが、実はこの文章にも微妙な使用ミスがある。

⁷ このことについて Sasangka も主張している。つまり、自分を高めてはいけないため、自分の行為を表わす動詞にクロモを使ってはいけない (Sasangka 2004:38-39)。

② B 2 a

Kula ajeng kesah dhateng Solo

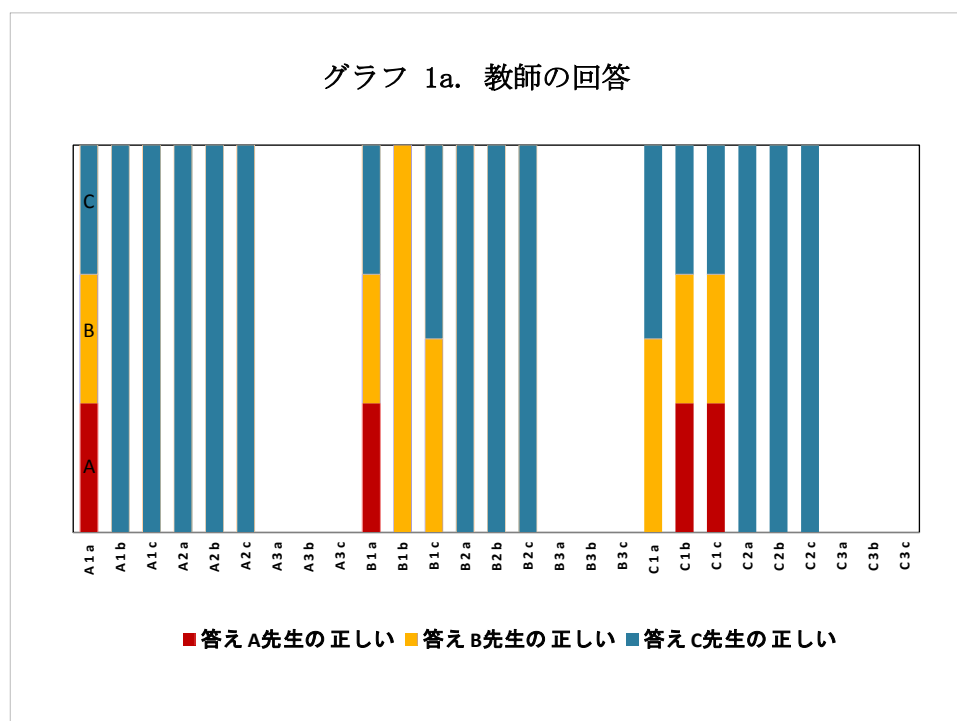
M M K

B 2 a を選択した 4 割以上の学生は ajeng (M) の使い方をあまり理解していないと考えられる。つまり、敬意を表わすことと丁寧に伝えることを混合する傾向がある。ジャワ語の規則では、相手は大先生で 68 才ということは、相手により高い敬意を表わす敬語を使用すべきだと教師らは述べている。しかし、学生は次のように誤解していると推測できる。第一に、助動詞の ajeng も自分を指すので、敬語にしてはいけないと思っていること、第二に、助動詞 ajeng がマディオとして十分に丁寧さが伝わると理解していると指摘できる。

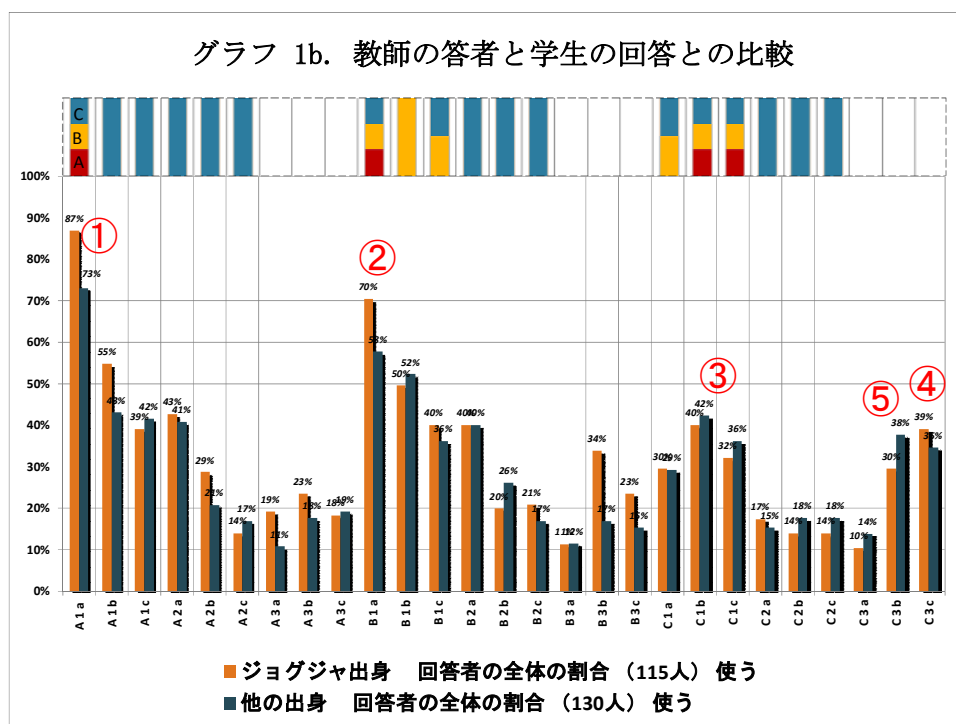
また、教師 A は、自分の行為を指す動詞をクロモの tindak にすることは、相手に非常に失礼極まりない行為をすることであり、品位に欠ける（あまりしつけを教わっていない人）というイメージが付いていても仕方がないと述べる。また、このような場面は現代ジャワの若者に多く見られるため、そのような間違いを起こした学生はジャワ語の教育をあまり受けていない人として見なされるというが、③と④を選んだ学生が 4 割近くもいる。さらに、教師 A と B は、敬意を表わすのは主に動詞で、丁寧に伝えるかどうかは助動詞や前置詞などで表わすとは限らないと述べているが、多くの学生はそうのように表わしてしまうようである。

5.3. 問 1. 私はヨヨさん（演劇部コーチ、40 才、仲良し）にソロへ行くかどうかをたずねる。

a. 教師の回答



b.教師の回答と学生の回答との比較



このデータから、次のように分析できる。

問1.

①	A1a ○	Mas (年上男性の呼称、 ～さん) NAME (appellation)	badhe (K) ～致します will	tindak (K) いっちゃる go	dhateng (K) ～(の方)へ to	Solo? (地名) PLACE	学生が使う (平均) 83%
		ヨヨさんは ソロ へ いっちゃいますか。					
②	B1a ○	Mas	ajeng (M) ～します	tindak (K) いっちゃる	dhateng (K) ～(の方)へ	Solo?	64%
		ヨヨさんは ソロ へ いっちゃるんですか。					
③	C1b, C1c ○	Mas	arep(N) ～する	tindak (K) いっちゃる	menyang (N), ning(N) ～へ	Solo?	41%, 34%
		ヨヨさんは ソロ へ いっちゃるのか。					
④	C3c ×	Mas	arep(N) ～する	lunga(N) 行く	menyang (N) ～へ	Solo?	38%
		ヨヨさんは ソロ へ 行くのか。					
⑤	C3b ×	Mas	arep(N) ～する	lunga(N) 行く	ning (N) ～へ	Solo?	34%
		ヨヨさんは ソロ へ 行くのか。					

この設問に対する、教師の回答にはばらつきが見られる。三人とも規範的だと選んだ文章は27文のうち、4つもある。さらに、教師によって説明が微妙に異なる。それは、ヨヨさん（40才）は年齢や地位も自分より上だが、ストモ先生（70才）とハルディット先生（68才）に比べて、自分との歳の差がそこまで大きくないし、ヨヨさんとは仲良くしているからである。各教

師はこの点について異なる考え方を持っているため、答えが一致しなかった。

4つの規範的な回答は次のようになる。

① A 1 a

Mas badhe tindak dhateng Solo?

K Ki K

② B 1 a

Mas ajeng tindak dhateng Solo?

M Ki K

③(1) C 1 b

Mas arep tindak menyang Solo?

N Ki N

③(2) C 1 c

Mas arep tindak ning Solo?

N Ki N

①のA 1 aの場合は、敬意を非常に表わしたいときには、いくら仲が良くても、全部クロモにする必要がある。教師らによると本来、これが最も規範的な文章であるという。なぜなら、相手は年上、しかもコーチなので、敬意を表わすべき人であり、話すときに全部クロモにするのが適切だからである。この教師の指摘に対し、学生も8割以上が支持した。しかし、教師からは次のような指摘もあった。ヨヨさんは大先生ほど歳をとっていないし、コーチといっても仲良くしているコーチなので、この関係を強調したい場合は、②のB 1 aを使っても間違いではなく、規範的な文章として捉えられるという。この意見に対し、学生たちからも賛成の声が多く、6割以上から支持され、①に匹敵する割合である。この場面では、敬意を表わしながら親しい関係を持つということを示すときに、マディオを使っても許されるパターンとなる。注意すべきなのは、相手の年齢もお年寄りの範囲ではなく、どちらかというと、中堅の年齢層にされていることである。むしろ、このようにマディオを使うことによって、表現が硬すぎず、相手に尊敬の気持ちを表わしながらも今まで通り親しい関係を保ちたいというアピールもできる。

一方、③(1)のC 1 bと③(2)のC 1 cの場合では、また印象が異なってくる。これは、親しい関係を重視したいときに使われる。動詞以外、つまり助動詞と前置詞をンゴコにすることによって、文章全体が柔らかくなって、敬意を表わしながら緊張をほぐすような言い方として見ることができると、特に教師AとCが述べている。ンゴコを使うと丁寧ではないと考える人はあるかもしれないが、動詞ではしっかりと相手の事を敬うことを示した上で、コーチに対する甘え、つまり近い距離でいたいという印象を与えることができる。敬意は①ほど高くないが、規範的な文章としても成り立ち、学生の3~4割が支持した。

また、注目すべき点は下記の点である。

④ C 3 c

Mas arep lunga menyang Solo?

N N N

⑤ C 3 b

Mas arep lunga ning Solo?

N N N

この選択肢を選んだ学生が3～4割あるが、教師は三人とも、この表現は規範的ではなく、より失礼な話し方であるため、このように伝えてはいけなと強く主張していた。つまり、コーチといくら仲良しであっても、コーチはコーチの立場もあって、自分に教える側の年上として、話すときには少なくとも動詞で敬意を表わすべきだという。しかし、データからみると、これは最も選んではいけない文章であるにもかかわらず、選んだ学生は4割近くもいる。ここから、敬意よりむしろ親しい関係を重視したい学生が増えているという傾向が見られるということが分かる。現代の学生は④と⑤の文章は絶対に使ってはいけなという認識がなくなっているといえる。

6. おわりに

本稿では、現代ジャワの若者の間における敬語使用の運用実態について考察を行った。敬語の運用実態がどのようなものであるか、ここでは次の二点に絞ってまとめる。

第一に、現代ジャワの若者は敬語の運用に対する知識をあまりもっていないことが明らかになった。勿論、まったくわからないとは言えないが、敬語を学ぶというよりは、敬語を生活環境の中で身に付けることのほうが一般的なので、規範的な敬語を習得していない。これは一回目の認識調査で明らかになったことと関連する。つまり、学生たちが学校でジャワ語を学ぶよりも、近所の付き合いや日常生活で起きた出来事から敬語を身に付けるという結果であった。本稿で分析した二回目の調査結果からも、運用実態の調査で推測した通り、規範的な敬語を使いこなせない学生が少なくないことが明らかとなった。

第二に、年上、さらに地位的に自分より上の人と話すときに、全てをクロモにすることが、本来のジャワ語の規範だったが、現代の若者には、他の選択肢ができた。それはクロモ体よりもマディオ体を使うという方法で、実際にマディオ体の使用を好む若者が多く見られた。つまり、丁寧さを大事にするものの、敬意の表わし方は中間的で十分だと理解されるようになったということだろう。また、年齢が離れていても、より近い距離を求める(lebih akrab/dekat)若者も増えている。例えば、相手の行為を指す動詞のみをクロモにすることによって、親しい関係をアピールしながら尊敬の意思を表わしたがる若者が少なくない。このような伝え方は十分に丁寧であり、失礼な行為を起こさなくて済むこととなると思われている。

以上二点から、若者の間では丁寧さが伝われば十分だとされており、敬意よりも丁寧さを表わすことばで伝えていることが明らかとなった。以上の結果から、丁寧語化が広がる傾向が若者に見られるといえるだろう。

本稿では、丁寧語化の現象が現代ジャワの若者の間に見られることを報告した。井上(1999)は日本語にも同様の傾向があることを指摘しており、降幡(2009)はスンダ語について同じ趣旨の報告をしている。このように、敬語が発達しているとされる日本語、ジャワ語およびスンダ語において敬語の丁寧語化が広がる傾向が見られる。このことが何を意味するのかについては今後の検討が課題となろう。

参考文献

【日本語文献】

- 井上史雄. 1999. 『敬語はこわくない』. 現代新書.
- 菊池康人. 1997. 『敬語』. 講談社学術文書.
- シマルマタ、エリザベス・エスター・フィブラ. 2014a. 「現代ジャワ語話者の若者における敬語使用の変化—ジョグジャカルタ市ガジャマダ大学学生のケーススタディー」『言語・地域文化研究 第20号』. 博士後期課程論集: 東京外国語大学大学院.
- . 2014b. 「現代ジャワ語話者の若者における敬語使用の意識の変化」『Jurnal Ilmiah Aurora Volume 1, Nomor 3』. Bandung: Fakultas Satra Universitas Kristen Maranatha. 241-262.
- スリ・ブディ・レスタリ. 2010. 『ジャワ語の敬語における記述的研究—第三者敬語を中心に—』. 博士論文: 東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 降幡正志. 2009. 「スンダ語を通じて敬語を考える」 (「比較文化論」講義資料). 東京外国語大学.

【インドネシア語文献】

- Sasangka, Sri Satriya Tjatur Wisnu. 2004. *Unggah-ungguh Bahasa Jawa*. Jakarta: Paramalingua.
- Soepomo Poedjosoedarmo, Th. Kundjana, Gloria Soepomo, Alip Suharso. 1979. *Tingkat Tutur Bahasa Jawa*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa- Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.

【ジャワ語文献】

- Dwijawiyata, M. 1930. *Pratelan Tembung Jawi manut Unggah-Ungguh*. Weltevredhen: Bale Pustaka.

インドネシア語の補文の含意について Implikasi Klausa Pemerlengkapan Bahasa Indonesia

安田和彦 (京都産業大学)
YASUDA Kazuhiko (Universitas Kyoto Sangyo)

Makalah ini membahas implikasi klausa pemerlengkapan proposisional yang mempunyai tafsiran sebagai pernyataan mengenai kenyataan dalam Bahasa Indonesia dari sudut tata bahasa wacana atau tata bahasa fungsional.

Implikasi mengacu pada hubungan makna bahwa jika proposisi klausa matriks mempunyai nilai benar, sehingga proposisi klausa pemerlengkapan juga mempunyai nilai benar.

Implikasi tersebut ditentukan berdasarkan ciri semantis verba atau frase verba dalam klausa matriks, pengetahuan pembicara mengenai proposisi klausa pemerlengkapan dan struktur sintaksis tertentu pada klausa pemerlengkapan.

Waktu klausa matriks mengandung implikasi, informasi yang disampaikan oleh verba atau frase verba dalam klausa matriks itu berfungsi yang penting sebagai informasi baru dalam wacana.

1. はじめに

以下の(1)、(2)の文（または談話）において、下線を引いた節（または文）は、共に主節の述語動詞 *menjelaskan* が目的語として *bahwa* に導かれる補文¹を取っているが、その叙述内容はどうのように解釈されるだろうか。

- (1) Sayangnya ia tidak banyak menjelaskan mengenai kukang tersebut, bahkan ia tidak menjelaskan [bahwa gigitan kukang dapat beracun, bahkan bagi manusia]².

(Surat Pembaca - KOMPAS.com)

- (2) SURABAYA, KOMPAS.com — Wali Kota Surabaya Tri Rismaharini meminta waktu untuk menjelaskan kabar yang berkembang akhir-akhir ini bahwa dia mundur dari jabatan karena tidak cocok dengan wakilnya.

中略

Risma menjelaskan [bahwa ia sebetulnya tidak ada persoalan secara personal dengan Wisnu Sakti]. Hanya, lanjut dia, pihaknya masih mempersoalkan proses pemilihan wakil wali kota Surabaya yang dinilai tidak sesuai prosedur.

(Dikabarkan Mundur, Wali Kota Surabaya Minta Waktu untuk Menjelaskan - Kompas.com)

(1)の下線部についての最も自然な解釈は、話者は、主語 *ia* が指示する人物が補文の叙述内容

¹ 本稿では、動詞句の直接構成要素であり、目的語として機能する節を補文と記す。

² 本稿では補文を角括弧で括って示す。

を説明しなかったことと、その補文の叙述内容を共に真として述べている、というものであり、(2)の下線部については、話者は、スラバヤ市長が補文の叙述内容を説明したことは真として述べているが、その補文の叙述内容の真偽に関しては何も述べていない、というものであろう。

つまり、(1)と(2)では、動詞 *menjelaskan* の補文の叙述内容の真偽に対する話者の認識が異なっている。

そして、(1)の下線部については、主語 *ia* 以下の節の叙述内容が真であれば、補文の叙述内容も真であり、主語 *ia* 以下の節は補文の叙述内容が真であることを含意していると言うことができる。

補文はその形式と意味が主節動詞の語彙的性質によって決定されると言われる。上記(1)、(2)について言えば、補文が補文標識 *bahwa* によって導かれていること、その叙述内容の真偽に関する含意に関して違いが見られることは、動詞 *menjelaskan* がどのような意味的特徴を持ち、どのような統語構造を取るかによって決められていることになる。

本稿は、以上のような事柄をふまえ、上記(1)、(2)のような補文を持つ文を取り上げ、補文の叙述内容の含意について考察する。

2. 先行研究と本稿における問題点

2.1 Lapoliwa(1990)

インドネシア語の補文についての先行研究としては、当時の変形生成文法の枠組みにおいてインドネシア語の語彙範疇の補部の位置に現れる文について考察した Lapoliwa(1990)が挙げられる。

Lapoliwa(1990)は、動詞句の補文を、動詞を意味的に補い、動詞に含まれる意味関係を詳らかにするものとし、その意味に基づく分類を行い、類型の一つとして真偽の判断対象となる命題を持つものを挙げ、それは、通常、補文標識 *bahwa* によって動詞句と結び付けられるとする。

Lapoliwa(1990)が挙げる補文の類型は、真偽の判断対象となる命題を持ち、*bahwa* によって動詞句と結び付けられるものだけではないが、本稿が前章の(1)、(2)のような *bahwa* に導かれる補文を持つ文について考察することをふまえ、以下に、Lapoliwa(1990)の真偽の判断対象となる命題を持ち、*bahwa* によって動詞句と結び付けられる補文に関する記述を参照する。

Lapoliwa(1990)は、真偽の判断対象となる命題を持ち、*bahwa* によって動詞句と結び付けられる補文は、話者の補文命題の真偽に関する表明、もしくは話者の意見、信念を表し、その解釈は主節動詞によって定められるとする。

そして、*bahwa* に導かれる補文を取ることができる動詞を叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の三つの範疇に分類し、三種類の動詞とそれぞれに結びつく補文の意味的な性質を示している。

叙実動詞とは、話者がその叙述内容を真と捉えている補文と結びつくもので、その補文を叙実節としている。以下がその例である。

(3) *Icuk tahu [bahwa angin masih berhembus].*³

Lapoliwa(1990)

³ Lapoliwa(1990)の77ページ(111)aを引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

非叙実動詞とは、話者の意見、信念を表す補文と結びつくもので、その補文を非叙実節としている。以下がその例である。

(4) *Icuk mengira [bahwa angin masih berhembus].*⁴

Lapoliwa(1990)

半叙実動詞とは、話者がその叙述内容を真と捉えているとも、話者の意見、信念を表すとも解釈される補文と結びつくもので、その補文を半叙実節としている。以下がその例である。

(5) *Saya memberitahukan kepadanya [bahwa angin masih berhembus].*⁵

Lapoliwa(1990)

また、叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の統語構造について、補文標識 *bahwa* の前に名詞 *kenyataan* を入れることができるか、補文を疑問詞によって代名詞化できるか、補文の命題を否定できるかの三つの基準に基づき、以下のようにまとめている。

叙実動詞は、補文標識 *bahwa* の前に名詞 *kenyataan* を入れることと、補文の疑問詞による代名詞化が可能で、補文の命題を否定することはできない。以下がその例である。

(6) *Orang tua mengetahui kenyataan [bahwa setiap anak berbeda].*⁶

(7) *Saya tahu [bagaimana benda itu].*⁷

(8) **Anak itu tahu bahwa [nasibnya bergantung pada usahanya sendiri], tetapi ternyata bergantung pada usaha orang tuanya.*⁸

Lapoliwa(1990)

半叙実動詞は、補文標識 *bahwa* の前に名詞 *kenyataan* を入れること、補文の疑問詞による代名詞化、補文の命題を否定すること、すべてが可能である。以下がその例である。

(9) *Orang itu menyatakan kenyataan [bahwa pesawat itu jatuh].*⁹

(10) *Mereka melaporkan [siapa yang meninggal kemarin].*¹⁰

(11) *Dia mengakui bahwa [biaya pendidikan sangat mahal], tetapi ternyata mudah sekali.*¹¹

Lapoliwa(1990)

⁴ Lapoliwa(1990)の 77 ページ(111)b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

⁵ Lapoliwa(1990)の 77 ページ(113)a を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

⁶ Lapoliwa(1990)の 82 ページ(123)を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

⁷ Lapoliwa(1990)の 85 ページ(129)b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

⁸ Lapoliwa(1990)の 86 ページ(134)c を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

⁹ Lapoliwa(1990)の 83 ページ(126)b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁰ Lapoliwa(1990)の 86 ページ(131)を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹¹ Lapoliwa(1990)の 87 ページ(137)c を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

非叙実動詞は、補文標識 *bahwa* の前に名詞 *kenyataan* を入れることと、補文の疑問詞による代名詞化が不可能で、補文の命題を否定することができる。以下がその例である。

(12) Mereka percaya pada kenyataan* [bahwa dia akan pindah].¹²

(13) *Saya mengira [bagaimana benda itu].¹³

(14) Saya mengira [bahwa di sini hujan deras], tetapi ternyata tidak.¹⁴

Lapoliwa(1990)

また、上記の叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞を分ける三つの基準に従わない動詞もあることも述べた上で、それらについての考察も行っている。

そして、叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の用例とその深層構造を示し、叙実動詞と半叙実動詞の補文標識 *bahwa* の前に *kenyataan* を挿入する規則を明らかにしている。

2.2 本稿における問題点

補文の形式と叙述内容の真偽の関わりについては、英語、日本語に関しても数多くの考察がなされてきた。

まず、英語の事例を見られたい。

(15) He reported [that she had committed the crime].¹⁵

(16) He reported [her having committed the crime].¹⁶

(17) He reported [her to have committed the crime].¹⁷

(15)では、主節動詞 *report* が取る *that* 以下の補文は、話者がその叙述内容を真と捉えているとも、その叙述内容の真偽に関しては何も述べていないとも解釈される。

しかし、(16)では、補文は動名詞となっていて、話者がその叙述内容を真と捉えていると解釈されるが、(17)では、補文はいわゆる主語の繰り上げによる対格、不定詞句の形式を取り、話者がその叙述内容を真と捉えているという解釈は許されない。

日本語では、久野(1973)が先駆的な研究として挙げられる。久野(1973)は、『日本語の動詞の目的節をマークする形式として「コト(ヲ)、ノ(ヲ)、ト」の三種類がある。』とし、『「コト/ノ」で終わる名詞節は、その節が表わす動作、状態、出来事が真であるという話者の前提¹⁸を含んでいるが、「ト」で終わる名詞節には、そのような前提が含まれていない。』『「ト」と「コト/ノ」の両方をとることができる動詞がある。』例として以下を挙げている。

¹² Lapoliwa(1990)の 82 ページ(124)b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹³ Lapoliwa(1990)の 86 ページ(130)b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁴ Lapoliwa(1990)の 87 ページ(138)c を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁵ 稲田(1989)の 165 ページ iv a を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁶ 稲田(1989)の 165 ページ iv b を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁷ 稲田(1989)の 165 ページ iv c を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

¹⁸ 下線は原文ママ。

(18) 太郎ハ花子ガ死ンダコトヲ信ジナカッタ。¹⁹

(花子が死んだことは事実である)

(19) 太郎ハ花子ガ死ンダト信ジナカッタ。²⁰

(花子は死んだかもしれないし、生きているかもしれない)

さて、あらためて前章に挙げた(1)、(2)について述べれば、動詞 *menjelaskan* は Lapoliwa(1990)では半叙実動詞とされている。

確かに、(1)では、話者がその叙述内容を真と捉えていると解釈される補文を取っている。しかし、(2)は、話者の意見、信念を表すと解釈される補文を取っているものではなく、主節の主語の意見、信念を表すと解釈される補文を取っているものである。(5)に示したように、主節の主語が一人称であれば、話者の意見、信念を表すと解釈される補文を取っていると言える。

叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の用例において、補文の叙述内容は、誰が真と捉えているのか、誰の意見、信念を表しているのかについては、さらに詳しく見ていく必要がある。

また、叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の補文が担う情報は、どのような性質を持っているのだろうか。

この点については、Lapoliwa(1990)では言及されていない。

インドネシア語はかねてから『一文のなかのみでの充足した文法体系を持つ言語とは言いがたく、かなりの程度にまでコンテクストに依存した文法を持つ言語』(崎山(1982))と言われ、文、談話に示された情報構造、その構成要因をふまえた、談話・機能文法的な観点からの考察が必要とされることが明らかにされている。

叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の補文が担う情報についても、やはり談話・機能文法的な観点からの考察が不可欠であろう。

本稿は、インドネシア語の真偽の判断対象となる命題を持つ補文を取る文を取り上げ、その叙述内容の含意について、主節動詞の語彙的性質、主節動詞と補文との意味的な関係、補文の統語構造、補文が担う情報の性質等の事柄をふまえ、談話・機能文法的観点から考察する。

3. 動詞の語彙的性質に基づく分類とその用例の考察

第1章においても述べたように、補文はその形式と意味が主節動詞の語彙的性質によって決定されると言われる。

Lapoliwa(1990)においても、叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の三つの範疇に含まれる動詞が、補文標識 *bahwa* によって導かれた真偽の判断対象となる命題を持つ補文を取ることが示されている。

本稿においても、以下に Lapoliwa(1990)に示された叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞の三つの範疇に含まれる動詞が、真偽の判断対象となる命題を持つ補文を取る用例について考察していく。

¹⁹ 久野(1973)の138ページ(7)bを引用した。

²⁰ 久野(1973)の138ページ(7)aを引用した。

3.1 叙実動詞

叙実動詞は、話者がその叙述内容を真と捉えている補文を取る。それを用いた文は、主節の叙述内容が真であれば、補文の叙述内容も真であり、主節は補文の叙述内容が真であることを含意している。

(20) Dia menyayangkan [bahwa benda-benda peninggalan sejarah itu tidak dipelihara].²¹

(21) Icu tahu [bahwa angin masih berhembus].²²

Lapoliwa(1990)

叙実動詞は、補文の叙述内容が真であるという前提を、意味の一部として持っている。

まず、(20)の動詞 *menyayangkan* は単に「遺憾に思う」という意味を持つのではない。話者が、補文の叙述内容が真であること、主節の主語が指示する人物もそれを知っていることを前提とした上で、主節の主語が指示する人物の遺憾という感情を述べている。補文の叙述内容が真であることは、話者のみではなく、主節の主語が指示する人物にも前提とされていると言える。

このような、補文の叙述内容を前提として、それに対する主節の主語の感情を表すものは、感情的叙実動詞と呼ばれている。

これに対し、(21)の動詞 *tahu* が持つ前提は、話者のみが知っている。

また、補文の叙述内容の真偽は、主節動詞の肯定・否定によって左右されない。

(22) Dia tidak menyayangkan kenyataan [bahwa benda-benda peninggalan sejarah itu tidak dipelihara].

(23) Icu tidak tahu kenyataan [bahwa angin masih berhembus].

そして、補文の叙述内容が真であることを前提にしているのが、感情的叙実動詞 *menyayangkan* においては、話者と主節の主語が指示する人物の両方であり、*tahu* においては話者のみであることも変わらない。

(23)では、主節の主語は補文の叙述内容そのものを知らないのであり、その真偽についての認識を持つこともできない。

叙実動詞の補文は、話者、または主節の主語にとって前提となる真である事柄を述べることで、主節動詞句の意味を補っているのである。

そのため、意味的に、補文標識 *supaya*、*agar* を取ることはできない。

(24) *Dia menyayangkan [supaya benda-benda peninggalan sejarah itu tidak dipelihara].

(25) *Icu tahu [agar angin masih berhembus].

²¹ Lapoliwa(1990)の 88 ページ(142)c を引用し、一部形式を変えて表記した。角括弧の挿入は引用者による。

²² (1)の再掲。

このような事柄をふまえると、話者が、補文の叙述内容が真であると確信できない場合、真ではない可能性を認識している場合、叙実動詞を用いた文を発話することは不適切であると言える。

しかし、話者、または主節の主語のみが知りえる事柄を真として述べることは可能である。

(26) JAKARTA--Presiden RI Susilo Bambang Yudhoyono menumpahkan kekecewaannya terhadap kasus kericuhan di lapas Tanjung Gusta, Medan, saat membuka rapat terbatas di Pangkalan TNI Bandara Halim Perdana Kusuma, Jakarta, Sabtu, (13/7).

Presiden menyayangkan [bahwa ia mengetahui peristiwa itu lebih dulu dari media massa dibanding jajaran pemerintahan].

"Terpaksa saya sampaikan ketidaksenangan saya terhadap sejumlah isu. Soal lapas di Medan, saya justru tahu lebih dulu dari media massa. Sejumlah televisi internasional sudah meliputnya. Dibanding info yang saya dapat dari sistem. Harusnya sama cepatnya, bahkan kalau bisa lebih cepat," kata Presiden dengan nada suara tinggi saat membuka rapat di Pangkalan TNI Bandara Halim Perdana Kusuma, Jakarta, Sabtu, (13/7).

(Telat Terima Laporan Kasus Tanjung Gusta, SBY Ngamuk - JPNN.com)

(26)の二番目の文の補文の叙述内容は、その次の文に述べられた「大統領」の発言の要約であり、主節の主語 *Presiden* のみが事実として語れることである。

そして、補文の叙述内容に、話者、または主節の主語の主観的判断を含めることも可能である。

(27) Jakarta (ANTARANews) - Ketua Umum Pimpinan Pusat Muhammadiyah, Prof. Dr. Din Syamsuddin, pada Rabu menyampaikan penyesalannya terhadap kebijakan Prancis yang melarang penggunaan cadar dan burqa bagi muslimah di negara itu.

"Saya menyesal [bahwa Prancis melarang penggunaan burqa dan cadar yang dinilai tidak menghargai kebebasan beragama yang merupakan bagian dari demokrasi]," kata Din saat berbincang dengan Direktur Jenderal Urusan Asia Tenggara Kementerian Luar Negeri Prancis, Charles Henri Brossoeau.

(Muhammadiyah Sesalkan Pelarangan Penggunaan Cadar di Prancis - ANTARA News)

(27)の二番目の文の補文で、事実に当たるのは「フランス政府がブルカとチャダルの着用を禁じた」ことのみである。yang 以下に述べられた事柄は、話者の主観的な判断であり、「後悔する」ことの理由に当たる判断を述べることで主節動詞の意味を補っている。

次に、叙実動詞が取る補文の形式は補文標識 *bahwa* に導かれるものばかりではない。

(28) Bandar Lampung| kabar3

TIGA pembangkit listrik di Lampung jebol. Satu bulan ke depan, konsumen PLN di Lampung akan terkena pemadaman bergilir.

中略

Sementara itu, masyarakat menyayangkan [terjadinya pemadaman bergilir ini].

(Kabar3 » Pelanggan PLN di Lampung Terancam Pemadaman Bergilir | Blog)

(29) Singaraja (Bali Post) -

Gubernur Bali, Dewa Made Beratha, mengemukakan keinginannya untuk memindahkan penangkaran burung jalak putih dari Desa Sumberkelampok, Gerokgak, ke sebuah tempat di Denpasar. Pasalnya, penangkaran di kawasan Taman Nasional Bali Barat (TNBB) itu dinilai belum begitu aman, terbukti dengan beberapa kali dibobol pencuri. "Kalau hilang terus, lebih baik dipindahkan saja ke Denpasar," ujar Gubernur usai melakukan kunjungan ke sejumlah lokasi banjir di Kecamatan Banjar, Buleleng, Sabtu (7/2) lalu.

中略

Di bagian lain, Gubernur sangat menyayangkan [hilangnya 15 ekor jalak putih di penangkarnya], Kamis (29/1) dini hari lalu.

(New Page 1)

(28)、(29)中の動詞 *menyayangkan* の補文は、動詞に接尾辞-nya が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語としている。

補文の叙述内容は、記事中で先行する文に述べられ、文の発話の時点で既に社会的にも知られている事柄であり、当然、話者も、主節の主語も、それが真であることを前提にしている。

このような形式の補文も、その叙述内容が真であり前提とされていることは、主節動詞が否定されても維持される。

(30) KENDAL, KOMPAS.com — Memasuki arus mudik H-6 Lebaran, kecelakaan terjadi di perbatasan Kendal-Batang, Jawa Tengah, tepatnya di Kalikutho Weleri, Kendal, Sabtu (3/8/2013). Seorang pengendara sepeda motor, Dede Rahmat (23), warga Kutosari Gringsing Batang, tewas terlindas truk trailer PT Siba Surya H 1844 AH yang dikemudikan Winarso (35), warga Tersono Batang, dari arah belakang.

Dari kesaksian sejumlah orang, Dede yang mengendarai sepeda motor Honda G 6751 QL melaju dari arah barat. Diduga korban terjatuh setelah sepeda motor tergelincir di jalan bergelombang di jalur pantura.

Menurut saksi mata, Eko, secara pasti dirinya tidak tahu [terjadinya kecelakaan]. Ia hanya tahu bahwa korban terjatuh terlebih dahulu dan terlindas truk.

Sebelum melindas, sebenarnya truk sudah sempat mengerem, tetapi posisi korban saat terjatuh tepat di bawah kolong truk sehingga tewas terlindas ban depan. Arus lalu lintas saat kejadian ramai didominasi sepeda motor pemudik.

(Pengendara Sepeda Motor Tewas Terlindas Truk di Jalur Pantura - Kompas.com)

(30)は新聞記事の冒頭からの引用だが、四番目の文の補文は、先行する文中に述べられた出

来事「事故が起きた」ことを伝えている。話者は補文の叙述内容を前提に、主節の主語 *dirinya* が指示する人物 *Eko* がその事故が発生した瞬間は認識していないと述べている。

そして、このような形式の補文にも、話者、または主節の主語が主観的な判断を含むことができる。

(31) TEMPO Interaktif, Jakarta: Kereta naas Gaya Baru Malam yang mengangkut penumpang korban kecelakaan di Brebes Jawa Tengah tiba di stasiun Senen pada pukul 15.30 WIB, Selasa (25/12).

中略

Salah satu dari mereka adalah Gayatri, penumpang gerbong tiga kereta yang naas itu.

中略

Awalnya, tutur Gayatri, korban hanya ditolong oleh masyarakat sekitar di pagi buta itu. Gayatri menyayangkan [terlambatnya bantuan dari aparat yang baru datang satu jam setelah kejadian].

"Para petugas datang terlambat. Mereka baru datang setelah terang,"ujarnya.

(Tempointeraktif.com - Korban Tabrakan KA Brebes Tiba di Senen)

(31)の最後の文の補文で「警察の救援が事故後 1 時間後にやっと到着した」ことを「遅い」としているのは、主節の主語 *Gayatri* の事故に遭った当事者としての実感によるものである。

このように見てくると、叙実動詞は話者、または主節の主語がその叙述内容を真と捉えている補文を取るが、補文が担う情報の性質には違いが見られることがわかる。

感情的叙実動詞の補文は、事実のみを伝える場合と、事実に加え、話者、または主節の主語の主観的判断、断定を伝える場合がある。事実は主節に含意され、主観的判断、断定は主節の主語が抱く感情の根拠に当たっている。

叙実動詞 *tahu* の補文は、話者が知っていて前提としている事柄を述べるが、主節の主語が知っていて前提としている必要はない。主節の主語が、補文の叙述内容を知っているか知らないか、そのこと自体が新情報として提示されている。

3.2 半叙実動詞

半叙実動詞は、話者がその叙述内容を真と捉えている補文も、話者、または主節の主語の意見、信念を表す補文も取ることができる。

まず、動詞 *membuktikan* の用例を挙げる。

(32) Washington (ANTARA News) - Seekor bayi panda raksasa yang langka dan lahir di kebun binatang nasional Smithsonian, Amerika Serikat, dua minggu lalu baru terungkap jenis kelaminnya yaitu betina, kata petugas kebun binatang, Kamis.

Bayi panda itu tampak segar bugar dengan perut bundar dan suara tangisnya kencang, kata Jen Zoon, perempuan juru bicara kebun binatang.

Jenis kelamin anak panda itu belum bisa diketahui saat dia lahir pada 23 Agustus, namun suatu pemeriksaan yang dilakukan oleh ilmuwan Smithsonian membuktikan [bahwa dia adalah betina].

(Panda Mei Xiang lahirkan bayi betina - ANTARA News)

(32)の最後の文の接続詞 *namun* 以下の節の補文の叙述内容は、記事中で先行する文に述べられていることである。

話者はそれが真であることを前提にし、接続詞 *namun* 以下の節の主語、動詞が担う情報を新情報として伝えている。

やはり、主節の叙述内容が真であれば、補文の叙述内容も真であり、主節は補文の叙述内容が真であることを含意している。

(33) Yogyakarta (ANTARA News) - Penanganan kasus pembunuhan wartawan Fuad Muhammad Syafrudin (Udin) tidak dapat dinyatakan kadaluarsa pada tahun depan apabila proses penyelidikannya dilanjutkan atau dibuka kembali oleh kepolisian, kata Praktisi Hukum Achiel Suyanto.

中略

Misalnya, kata dia, hingga saat ini Kepolisian masih cenderung berkeyakinan bahwa kasus udin tetap memiliki kaitan erat dengan persoalan perselingkuhan yang dilakukan antara istri Almarhum Udin dengan Iwik yang dulu pernah masuk persidangan namun tidak terbukti.

Sebaliknya, pihak wartawan ingin membuktikan [bahwa pembunuhan Udin murni berkaitan dengan pemberitaan kritis yang pernah ditulis oleh Udin].

(Praktisi: kasus Udin tak kadaluarsa jika dilanjutkan - ANTARA News)

一方、(33)の最後の文の補文は、主節の主語 *pihak wartawan* が事実であると信じ、主張していることを述べている。

話者は、その補文の叙述内容が真かどうかに関しては何も述べていない。それは社会的に広く知られている推測ではあるが、まだ証明されていない事柄で、否定される可能性もある。

次に、動詞 *mengakui* の用例を挙げる。*mengakui* も、話者がその叙述内容を真と捉えている補文も、話者、または主節の主語の意見、信念を表す補文も取ることができる。

(34) JAKARTA, KOMPAS.com — Nama domain internet "Jokowi.id" ternyata telah didaftarkan dan dibeli. Siapakah pemiliknya dan akan digunakan untuk apa?

Pengelola Nama Domain Internet Indonesia (Pandi) mengakui [bahwa alamat situs "Jokowi.id" telah didaftarkan] pada Senin (24/3/2014). Namun, Pandi enggan mengungkapkan siapa pihak yang mendaftarkan nama domain tersebut.

(Bukan PDI-P, Siapa Pemilik Domain Internet "Jokowi.id"? - Kompas.com Tekno)

(34)の二番目の文の補文の叙述内容は、記事の冒頭で述べられた、判明したばかりの事実である。

話者はそれが真であることを前提にし、主節の主語 *Pengelola Nama Domain Internet Indonesia (Pandi)* が記事が出る前日に認めた事柄を、まさに新情報として伝えている。

(35) LENSAINDONESIA.COM: Dilansirnya data Badan Pusat Statistik (BPS) Jawa Timur pada September lalu tentang penurunan jumlah populasi sapi Jatim, hasil sensus pertanian Mei 2013 lalu

sempat ditolak oleh Pemprov Jatim. Saat itu, Gubernur Jatim, Soekarwo mengelak kurangnya jumlah sapi tersebut.

Namun, melihat fakta di lapangan dengan kian melejitnya harga sapi saat Idul Adha membuat orang nomor satu di Jatim ini berubah pikiran. Akhirnya, pria yang terkenal dengan kumisnya itu mengakui [susutnya populasi Jatim mencapai 1,3 juta ekor] dan [berdampak pada kenaikan harga di pasar].

(Soekarwo akhirnya mengakui jumlah sapi di Jatim menyusut 1,3 juta ekor | LensaIndonesia)

(35)の最後の文では、動詞 *mengakui* の補文は、動詞に接尾辞-*nya* が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語とする形と、目的語が省略され補語のみが現れている形を取っている。その叙述内容は、どちらも記事中で先行する文に述べられている。

話者はそれが真であることを前提にし、今までそれを認めてこなかった東ジャワ州知事 Soekarwo がついに認めたことを重要な新情報として伝えている。

(36) Solopos.com, SOLO — Google Inc mengakui [terjadinya masalah di layanan email mereka, Gmail, yang mengalami down pada Jumat (24/1/2014) malam].

中略

Seperti dilaporkan Reuters, Google mengakui masalah pada Gmail yang pertama terjadi pada pukul 11.12 waktu Pasifik atau 19.12 GMT. Hanya berselang satu jam, Google segera menyatakan masalah Gmail tersebut sudah teratasi.

(SOLOPOS.COM : Google Mengakui Gmail Sempat Down - APLIKASI GOOGLE email google error pada gmail gmail down google youtube lambat layanan email google -Tekno)

(36)では、記事の最初の文に、主節動詞 *mengakui* と、動詞に接尾辞-*nya* が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語とする形の補文が見られる。

先行文脈を持たずに、話者が、文が発話される以前に発生した出来事を補文に述べ、それが真であることを前提として、主節の主語 Google Inc が認めたことを重要な新情報として伝えている。

補文の叙述内容が真であることは、後続の文脈において示されている。

(37) TRIBUNNEWS.COM, JAKARTA - Akhir pekan lalu, Ahmad Dhani (42) secara tidak langsung mengakui [bahwa dirinya adalah suami penyanyi Mulan Jameela (34)] ketika menjadi juri audisi 'Indonesian Idol 2014'. Saat itu, Dhani dan Anang Hermansyah (43) sedang bercanda.

Anang meminta Mulan untuk muncul didepan layar televisi setelah Dhani memaksa Ashanty Siddik (30), istri Anang dan penyanyi, beraksi di panggung audisi 'Idol'. Dhani hanya tersenyum mendengar permintaan koleganya tersebut.

Sejurus kemudian, begitu Mulan menolak tampil diatas panggung audisi, Dhani hanya 'nyeletuk', "Dia (Mulan) tidak menghargai suami." Dhani dan Anang, termasuk Tantri 'Kotak', kemudian sama-sama tersenyum.

Di televisi lainnya, Dhani justru mengakui [dirinya sudah menikahi Mulan tahun 2009]. Didepan Indy Rahmawati yang memandu acara talkshow 'Satu Jam Lebih Dekat' itu, Dhani mengatakan, akad nikahnya dengan Mulan digelar di rumahnya.

(Ahmad Dhani Mengakui Nikah dengan Mulan Jameela Sejak 2009 - Tribunnews.com)

(37)の記事には、最初の文と七番目の文に動詞 *mengakui* とその補文が現れている。最初の文の補文は接続詞 *bahwa* に導かれた形を取り、七番目の文では目的語、補語の形を取っている。内容は、どちらも「Ahmad Dhani と Mulan Jameela は結婚している」というもので、記事中に明確には書かれていないが、芸能界を中心に公然の秘密として語られ、話者も当然知っていたであろう事柄である。

話者はそれが真であることを前提にし、今までそれを公にしてこなかった主節の主語 Ahmad Dhani 自身がついに認めたことを重要な新情報として伝えている。

上記(34)～(37)においても、動詞 *mengakui* が用いられた主節が、補文の叙述内容が真であることを含意するという関係が成り立っている。

(38) Menteri Ekonomi Jepang Amari: G-20 mengakui [bahwa kebijakan moneter Jepang tidak ditujukan untuk melemahkan nilai yen].

(Menteri Ekonomi Jepang Amari: G-20 mengakui bahwa kebijakan moneter Jepang tidak ditujukan untuk melemahkan nilai yen)

(39) KOPI, MARABAHAN – Gubernur Kalsel H Rudy Arifin memberi apresiasi tinggi atas langkah dan upaya Pemkab Barito Kuala (Batola) dalam membangun daerah dan mensejahterakan masyarakat. Di tengah keterbatasan yang dimiliki, Batola dipandang tetap eksis sebagai daerah otonom.

“Saya memperhatikan tidak sedikit keberhasilan yang dapat diraih Kabupaten Batola seperti terwujudnya penyelenggaraan pendidikan bagi masyarakat yang ditunjukan semakin terjangkau dan meratanya akses untuk memperoleh pendidikan,” kata Gubernur saat menghadiri Puncak Peringatan Hari Jadi (Harjad) ke-53 Kabupaten Batola, Rabu (09/01)

Gubernur juga mengakui [terwujudnya pelayanan kesehatan masyarakat di Batola]. Hal itu diindikasikan dengan semakin mudah, murah, memadai dan meratanya penyelenggaraan layanan kesehatan, yang mendorong kemandirian kemampuan masyarakat dalam berpola hidup sehat.

(Gubernur Akui Kemajuan Batola)

しかし、(38)、(39)に見られる動詞 *mengakui* は、話者、または主節の主語がその補文の叙述内容を肯定的に評価するという意味を持つが、聴者の立場からは、補文の叙述内容が否定される可能性は残っている。

(38)は、日本の甘利経済再生相の発言をそのまま記述したものである。(39)の補文は、主節の主語 Gubernur がその南カリマンタン州知事という立場から地方の開発の成果として認めた事柄を述べている。いずれの場合も、話者は補文の叙述内容の真偽を判断できる立場にいない。

(38)、(39)では、動詞 *mengakui* が用いられた主節は、補文の叙述内容が真であることを含意するとは言えない。

3.3 非叙実動詞

非叙実動詞は、話者、または主節の主語の意見、信念を表す補文を取る。

基本的に、主節は補文の叙述内容を真として含意しない。動詞 *menuduh* の用例を挙げる。

(40) Kelompok ini menuduh [bahwa Iran sedang mengembangkan senjata nuklir], tuduhan yang Iran tolak, bersikeras bahwa program nuklirnya hanya untuk memproduksi listrik saja.

(AS dan Iran Picu Harga Minyak Turun | Republika Online)

(41) Pejabat Cina secara resmi menyebut gerakan Islam sebagai ”pendukung di balik layar” serangan maut di Lapangan Tiananmen. Untuk pertama kalinya Beijing menuduh [adanya rantai terorganisir dalam insiden itu].

(Organisasi Teroris di Balik Insiden Tiananmen | Dunia | DW.DE | 01.11.2013)

(40)の補文は、補文標識 *bahwa* に導かれ、(41)の二番目の文の補文は、動詞に接尾辞-*nya* が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語としている。

主節の動詞 *menuduh* は、話者、または主節の主語が、補文の叙述内容を事実であると主張し、そのことを非難する、という意味を持つ。

事実認識そのものが、話者、または主節の主語の立場からの主観的判断によるものであり、補文の叙述内容は真として含意されることはない。

次に、動詞 *menganggap* の用例を挙げる。

(42) Bagi banyak ekonom, masalah kebijakan pemerintah yang aktif adalah jelas dan sederhana. Resesi merupakan periode pengangguran tinggi, pendapatan rendah, dan peningkatan tekanan ekonomi. Model permintaan agregat dan penawaran agregat menunjukkan bagaimana guncangan terhadap perekonomian bisa menimbulkan resesi. Model tersebut juga menunjukkan bagaimana kebijakan fiskal dan moneter bisa mencegah (atau setidaknya mengurangi) resesi dengan menanggapi guncangan ini. Para ekonom menganggap [terjadinya pemborosan] bila instrumen kebijakan ini tidak digunakan untuk menstabilkan perekonomian.

(Ilmu Pengetahuan Umum Terbaru: Kebijakan Stabilisasi)

(43) Sejak saat itu, momentum berpindah ke tim tamu. Di menit 73, terjadi klaim gol oleh Gary Cahill yang menganggap bola tendangannya sudah melewati garis gawang. Dalam tayangan ulang, bola tembakan Cahill membuat kemelut di mulut gawang dan tampak sedikit melewati garis gawang setelah Demba Ba terlibat di dalamnya. Namun wasit tetap tidak menganggap [terjadinya gol].

(Goal.com)

(43)の最後の文の補文は、まだ発生していない事柄、主節の主語 *Para ekonom* が条件が整えば発生すると考えている事柄を表している。

また、(43)の最後の文の補文は、主節の主語 *wasit* によって発生したとみなされず、実際に発生しなかった事柄を表している。

しかし、動詞 *menganggap* の用例には、以下に示すような統語構造において、補文の叙述内容の一部が真として含意されているものが見られる。

- (44) Selamat bertemu kembali para pembaca Perspektif Baru, senang sekali bertemu Anda untuk kesekian kalinya. Tamu kita kali ini adalah Ibu Kamala Chandrakirana. Dia dikenal sebagai aktivis dalam bidang-bidang sosial terutama masalah perempuan, masalah kekerasan dalam rumah tangga, dan concern lain yang sangat penting dalam hidup kita.

中略

Kami di Komnas Perempuan juga menarik perhatian sangat besar di daerah-daerah konflik bersenjata di Indonesia, baik itu di Aceh, Maluku, termasuk juga di Timor-Timur sebelum menjadi negara independen (merdeka). Papua juga masih kita anggap sebagai daerah konflik. Jadi ini adalah seluruh spektrum. Kita menganggap [terjadinya kekerasan yang dialami oleh perempuan dalam konteks rumahnya sendiri, proses dia mencari kerja, maupun di daerah-daerah konflik], itu adalah bagian yang integral dari seluruh proses yang mengobjektivikasi perempuan dan tubuhnya.

(Kamala Chandrakirana - Hentikan Kekerasan Dalam Keluarga | Perspektif Baru bersama Wimar Witoelar)

- (45) MAKASSAR, KOMPAS.com — Padamnya listrik yang terjadi di Makassar dan sekitar pada Minggu (28/8/2011) menjelang siang sempat mengganggu pengambilan gambar dan rekaman suara pidato resmi Gubernur Sulawesi Selatan Syahrul Yasin Limpo untuk menyambut Idul Fitri 1432 H. Gubernur menganggap [terjadinya pemadaman listrik ini] sebagai persoalan teknis. "Lampu ini tentu mati secara teknis. Sampai H-7 Idul Fitri saya masih berkomunikasi dengan aparat PLN. Beliau mengatakan semaksimal mungkin akan antisipasi berbagai hal untuk mendukung agar Idul Fitri dan Ramadhan berjalan baik," katanya.

(Listrik Mati, Pidato Gubernur Pun Terhenti - Kompas.com)

(44)、(45)に見られる *menganggap* の補文は、動詞 *terjadi* に接尾辞-nya が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語としているが、下線部の動詞句 *terjadinya* と主語によって表される事柄は先行する文中に既に述べられている。

(44)では、話者が、下線部の事柄を前提に、それが *dalam* 以下の前置詞句によって表される環境で発生したとみなしている。

(45)では、主節の主語 *Gubernur* が、下線部の事柄を前提に、それが *sebagai* 以下の前置詞句によって表される要因によって引き起こされたとみなしている。

(44)、(45)の動詞 *menganggap* は、補文の叙述内容に含まれる事実を前提とし、話者、または主語の主語の考えを述べるという意味を持ち、補文では動詞句と主語は旧情報で重要度が低く、

前置詞句が重要度が高い新情報を担っている。

引き続き、想定、予想を表す動詞 *menyangka* の用例を挙げる。

- (46) London (ANTARA News) - Selama bertahun-tahun, para penggemar The Beatles menyangka [bahwa salah satu lagu terkenal band itu adalah tentang narkoba], namun seorang ibu rumah tangga Inggris menyatakan lagu itu diilhami oleh lukisan dirinya hasil sapuan kwas putra John Lennon.

(`Lagu Narkoba` Beatles Ternyata Diilhami Lukisan Putranya - ANTARA New)

(46)の補文は、主節の主語 *para penggemar The Beatles* によって長い間そのように思われてきたが、実はそうではなかった事柄を表している。

意味的に、*bahwa* の前に *kenyataan* を入れることはできない。

- (47) *Selama bertahun-tahun, para penggemar The Beatles menyangka kenyataan [bahwa salah satu lagu terkenal band itu adalah tentang narkoba], namun seorang ibu rumah tangga Inggris menyatakan lagu itu diilhami oleh lukisan dirinya hasil sapuan kwas putra John Lennon.

これに対し、主節で動詞 *menyangka* が否定されると、多くの場合、補文の叙述内容は真であり、前提とされていると解釈される。

- (48) TRIBUNNEWS.COM, JAKARTA - Gubernur DKI Jakarta Joko Widodo mengatakan dirinya segera mencari pengganti Fadly Lubis selaku Lurah Ceger yang ditangkap Kejaksaan Negeri Jakarta Timur atas dugaan penyelewengan dana APBD DKI sebesar Rp450 juta.

"Kalau sudah seperti itu, nanti langsung diganti," ujar Joko Widodo di rumah dinasny, Jalan Taman Suropati, Menteng, Jakarta Pusat, Senin (14/10/2013).

Joko Widodo atau akrab disapa Jokowi ini tidak menyangka [bahwa Lurah Ceger bisa berurusan dengan Kejaksaan akibat dugaan penyelewengan dana].

(Jokowi Tidak Menyangka Lurah Ceger Selewengkan Uang APBD - Tribun Jakarta)

(48)の最後の文の補文の叙述内容は、記事中で先行する文に述べられ、文の発話の時点で既に社会的にも知られている事柄であり、話者も、主節の主語も、それが真であることを前提にしている。

(47)と異なり、意味的に、*bahwa* の前に *kenyataan* を入れることができる。

- (49) Joko Widodo atau akrab disapa Jokowi ini tidak menyangka kenyataan [bahwa Lurah Ceger bisa berurusan dengan Kejaksaan akibat dugaan penyelewengan dana].

動詞句 *tidak menyangka* は、話者が、補文の叙述内容が真であること、主節の主語もそれを知っていることを前提とした上で、主節の主語 *Joko Widodo* の「思いもよらなかった出来事が起こって戸惑っている、驚いている」という感情を述べるという意味を持つ。

このような、主節で動詞 *menyangka* が否定される形は、先行文脈を持たなくても、感情的叙実動詞のように用いられる。

(50) Cumi Raksasa Ditangkap di Jepang, Lihat Video Penampakannya!

Shigernori Goto tak pernah menyangka, [ia akan mendapat tangkapan besar]. Nelayan Jepang itu kaget bukan main saat mengangkat jaring yang dipasang di kedalaman 69 meter, di lepas pantai Pulau Sadogashmia di Prefektur Niigata.

(Cumi Raksasa Ditangkap di Jepang, Lihat Video Penampakannya!)

(50)では、記事の最初の文に動詞句 *tak pernah menyangka* が見られるが、その補文は文が発話される以前に発生し、既に報じられている出来事を述べている。

話者は、それが真であることを前提として、主節の主語 Shigernori Goto が抱く驚きの感情を新情報として伝えている。

(47)、(48) においては、動詞句 *tidak menyangka* または *tak pernah menyangka* が用いられた主節が、補文の叙述内容が真であることを含意している。

4. 結論

以下に、本稿における結論を述べる。

インドネシア語の真偽の判断対象となる命題を持つ補文の含意の有無を決定する要因として、叙実動詞、半叙実動詞、非叙実動詞という動詞の意味的特徴と補文の統語構造が挙げられる。

叙実動詞を用いた文は、その語彙的性質から、主節が補文の叙述内容が真であることを含意する。補文の形式は、補文標識 *bahwa* に導かれたものに限らない。

半叙実動詞を用いた文は、話者が補文の叙述内容を知っていることが聴者にとって既知である場合、主節が補文の叙述内容が真であることを含意する。補文の形式は、補文標識 *bahwa* に導かれたものに限らない。しかし、話者の立場から補文の叙述内容の真偽は判断できない場合、含意を持たない。

非叙実動詞を用いた文は、基本的に、含意を持たない。しかし、動詞 *menganggap* が動詞 *terjadi* に接尾辞 *-nya* が付加された形式を述語、その後ろに置かれる名詞句を主語とする形式を補文とするという特定の統語構造において、補文の動詞句 *terjadinya* と主語によって表される事柄が真であることを含意する。また、想定、予想を表す非叙実動詞を否定した動詞句は、感情的叙実動詞のような意味を持ち、主節が補文の叙述内容が真であることを含意する。

そして、主節が補文の叙述内容が真であることを含意する場合、その文は主節動詞の表す感情、認識等を重要な新情報として提示する。主節に含意されるのは、補文に述べられた事実であり、補文の叙述内容に含まれた話者、または主節の主語の主観的判断は、主節動詞の意味を補う。

おわりに

本稿は、筆者が 2013 年 11 月の日本インドネシア学会第 44 回大会において行った「インドネシア語の補文の含意について」と題する研究発表を基に、論点を絞り、新たな考察、用例を加

え、まとめたものである。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、京都産業大学教授のエディ・プリヨノ氏に多大なるご協力とご教示を賜った。ここに、心より謝意を表すものである。

参考文献

- Lapoliwa, Hans. 1990. *Klausa Pemerlengkapan dalam Bahasa Indonesia: Suatu Tinjauan Sintaktik dan Semantik*. Yogyakarta: Penerbit Kanisius.
- Sneddon, James N., Alexander K. Adelaar, Dwi N. Djenar and Michael Ewing. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar (Second Edition)*. London: Routledge.
- 稲田俊明. 1989. 『補文の構造』大修館書店.
- 久野暲. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
- 崎山理. 1982. 「インドネシア語の談話の構造」『講座日本語学 12』明治書院.
- 福地肇. 1985. 『談話の構造』大修館書店.
- 安田和彦. 2006. 「meN-動詞の目的語となる従属節に現れる動詞+nya について」『インドネシア言語と文化 第12号』日本インドネシア学会.

引用資料

インターネット上のウェブサイト

Ahmad Dhani Mengakui Nikah dengan Mulan Jameela Sejak 2009 - Tribunnews.com

<http://www.tribunnews.com/seleb/2014/01/27/ahmad-dhani-mengakui-nikah-dengan-mulan-jameela-sejak-2009>

AS dan Iran Picu Harga Minyak Turun | Republika Online

<http://www.republika.co.id/berita/ekonomi/bisnis-global/13/10/16/muqd7k-as-dan-iran-picu-harga-minyak-turun>

Bukan PDI-P, Siapa Pemilik Domain Internet "Jokowi.id"? - Kompas.com Tekno

<http://tekno.kompas.com/read/2014/03/25/1036434/Bukan.PDI-P.Siapa.Pemilik.Domain.Internet.Jokowi.id>

Cumi Raksasa Ditangkap di Jepang, Lihat Video Penampakannya!

<http://news.liputan6.com/read/798721/cumi-raksasa-ditangkap-di-jepang-lihat-video-penampakannya?news.trkn>

Dikabarkan Mundur, Wali Kota Surabaya Minta Waktu untuk Menjelaskan - Kompas.com

<http://regional.kompas.com/read/2014/01/30/1500140/Dikabarkan.Mundur.Wali.Kota.Surabaya.Minta.Waktu.untuk.Menjelaskan>

Goal.com

<http://m.goal.com/s/id-ID/news/3970629/?page=2>

Gubernur Akui Kemajuan Batola

<http://www.pewarta-indonesia.com/warta-utama/10905-gubernur-akui-kemajuan-batola.html>

Ilmu Pengetahuan Umum Terbaru: Kebijakan Stabilisasi

<http://ilmupengetahuanumumterbaru.blogspot.jp/2013/09/kebijakan-stabilisasi.html>

Jokowi Tidak Menyangka Lurah Ceger Selewengkan Uang APBD - Tribun Jakarta

<http://www.tribunnews.com/metropolitan/2013/10/14/jokowi-tidak-menyangka-lurah-ceger-selewengkan-uang-apbd>

Kabar3 » Pelanggan PLN di Lampung Terancam Pemadaman Bergilir | Blog

http://www.kabar3.com/news/2014/02/pelanggan-pln-di-lampung-terancam-pemadaman-bergilir#.UxRQBvI_vFE

Kamala Chandrakirana - Hentikan Kekerasan Dalam Keluarga | Perspektif Baru bersama Wimar Witoela

<http://www.perspektifbaru.com/wawancara/488>

`Lagu Narkoba` Beatles Ternyata Diilhami Lukisan Putranya - ANTARA New

<http://www.antaranews.com/berita/64914/lagu-narkoba-beatles-ternyata-diilhami-lukisan-putranya>

Listrik Mati, Pidato Gubernur Pun Terhenti - Kompas.com

<http://regional.kompas.com/read/2011/08/28/19261336/sitemap.html>

Menteri Ekonomi Jepang Amari: G-20 mengakui bahwa kebijakan moneter Jepang tidak ditujukan untuk melemahkan nilai yen

http://www.mt5.com/id/forex_news/quickview/1442491/

Muhammadiyah Sesalkan Pelarangan Penggunaan Cadar di Prancis - ANTARA News

<http://www.antaranews.com/berita/238985/muhammadiyah-sesalkan-pelarangan-penggunaan-cadar-di-prancis>

New Page 1

<http://www.balipost.co.id/balipostcetak/2004/2/9/b7.htm>

Organisasi Teroris di Balik Insiden Tiananmen | Dunia | DW.DE | 01.11.2013

<http://www.dw.de/organisasi-teroris-di-balik-insiden-tiananmen/a-17198414?maca=ind-rss-ind-all-1487-rdf>

Panda Mei Xiang lahirkan bayi betina - ANTARA News

<http://www.antaranews.com/berita/394286/panda-mei-xiang-lahirkan-bayi-betina>

Pengendara Sepeda Motor Tewas Terlindas Truk di Jalur Pantura - Kompas.com

<http://regional.kompas.com/read/2013/08/03/1519033/Pengendara.Sepeda.Motor.Tewas.Terlindas.Truk.di.Jalur.Pantura>

Praktisi: kasus Udin tak kadaluarsa jika dilanjutkan - ANTARA News

<http://www.antaranews.com/berita/390734/praktisi-kasus-udin-tak-kadaluarsa-jika-dilanjutkan>

Soekarwo akhirnya mengakui jumlah sapi di Jatim menyusut 1,3 juta ekor | LensaIndonesia

<http://www.lensaIndonesia.com/2013/10/15/soekarwo-akhirnya-mengakui-jumlah-sapi-di-jatim-menyusut-13-juta-ekor.html>

SOLOPOS.COM : Google Mengakui Gmail Sempat Down - APLIKASI GOOGLE email google error pada gmail gmail down google youtube lambat layanan email google -Tekno

<http://www.solopos.com/2014/01/25/google-mengakui-gmail-semat-down-484861>

Surat Pembaca - KOMPAS.com

<http://www1.kompas.com/suratpembaca/read/22681>

Telat Terima Laporan Kasus Tanjung Gusta, SBY Ngamuk - JPNN.com

<http://www.jpnn.com/read/2013/07/13/181602/Telat-Terima-Laporan-Kasus-Tanjung-Gusta,-SBY-Ngamuk->

Tempointeraktif.com - Korban Tabrakan KA Brebes Tiba di Senen

<http://tempo.co.id/hg/nasional/2001/12/25/brk,20011225-16,id.html>

インドネシア語の引用句倒置構文 Quotative Inversion in Indonesian

長南一豪 (獨協大学)
CHONAN Kazuhide (Dokkyo University)

要旨

Indonesian has the so-called quotative inversion construction, whose word order is quotative-verb-subject. This word order is similar to the one of English. However, there are several important differences between Indonesian and English. One of them is the characteristic of the subject noun phrase. This is due to the difference of the information structure of the sentence: the subject in Indonesian must be old information. Indeed, quotative inversion in Indonesian has the different syntactic structure than English: in Indonesian, quotative is located in the Spec of CP; in English, in the Spec of TP. Moreover, the verbal affix deletion in quotative inversion can be related to the similar phenomenon in imperative.

はじめに

「誰かが『...』と言った」という引用句を含む文は、インドネシア語では通常(1a)のように「主語－動詞－引用句」という語順になるが、(1b)のように「引用句－動詞－主語」という語順も可能である。(1b)では、「言う」を表す動詞 *berkata* の接辞 *ber-*が義務的に脱落する。

(1) インドネシア語

- a. John berkata, “Terima kasih.”
- b. “Terima kasih,” kata John.

英語でも同様に、(2a)のような「主語－動詞－引用句」語順のほかに、(2b)のような「引用句－動詞－主語」語順が可能である。

(2) 英語

- a. John said, “Thank you.”
- b. “Thank you,” said John.

インドネシア語(1b)と英語(2b)は、いずれも通常とは異なる「動詞－主語」という語順であり、いわば「倒置」が起こっている。一見すると、インドネシア語(1b)は英語(2b)と同様の構文であるように思われる。

インドネシア語(1b)の構文を、佐々木(2010)は「ト動詞」と呼ぶ。これは、この構文をとる動詞が、「～と言う」「～と答える」など、対応する日本語において引用の格助詞「と」を選択することにもとづく名称である。また、Sneddon(2010)は、(1b)を「引用名詞」Quote Noun と呼んでいる。一方、英語(2b)は一般に「引用句倒置」Quotative Inversion と呼ばれる。(1b)や(2b)

における「動詞－主語」語順がはたして「倒置」であるかどうかという点については検討が必要であるが、インドネシア語(1b)と英語(2b)の構文に対する呼称として、本稿では「引用句倒置」という用語を用いることにする。

インドネシア語の引用句倒置(1b)について、以下の疑問が生じる。

1. インドネシア語の引用句倒置構文(1b)はどんな構造か？
2. インドネシア語(1b)と英語(2b)は同じ構造か？
3. なぜ(1b)では動詞接辞 *ber-* が義務的に脱落するのか？

本稿ではこれらの疑問を順に考察し、インドネシア語(1b)と英語(2b)は、見かけ上の類似にもかかわらず、まったく異なる構文であることを証明する。さらに、(1b)における動詞接辞の義務的な脱落は、命令文における動詞接辞脱落と同じ現象であることを提案する。

1. 引用句倒置と先行研究

1.1 インドネシア語の引用句倒置

インドネシア語で、引用句を補部にとる文は、以下の3通りの語順が可能である。

- (3) a. John berkata, “Terima kasih.”
 S V Q
 b. “Terima kasih,” John berkata.
 Q S V
 c. “Terima kasih,” kata John.
 Q V S

主語を S、動詞を V、引用句を Q で標示する。インドネシア語は基本的に SVO 言語であるので、通常は(3a)のような SVQ 語順となり、引用句 Q を文頭に出せば(3b)のように QSV 語順になる。ところが、(3c)のように、引用句 Q を文頭に出し、さらに主語 S と動詞 V を倒置させた QVS 語順も可能である¹⁾。

一方、英語でも同様に3通りの語順が可能である。

- (4) a. John said, “Thank you.”
 S V Q
 b. “Thank you,” John said.
 Q S V
 c. “Thank you,” said John.
 Q V S

(4a)が通常の SVQ 語順、(4b)が引用句を文頭に出した QSV 語順であり、(4c)が「引用句倒置」における QVS 語順である。インドネシア語(3)における3通りの語順は、英語(4)と並行的であり、類似している。

インドネシア語と英語には見かけ上、相違点が存在する。

- (5) a. John berkata/*kata, “Terima kasih.”
b. “Terima kasih,” John berkata /*kata.
c. “Terima kasih,” *berkata/kata John.

引用句を補部にとる「言う」という動詞 *berkata* は、接辞 *ber-*を持っている。通常の文(5a)や引用句を単に文頭に出した(5b)では、接辞 *ber-*は義務的である。ところが引用句倒置(5c)では、接辞 *ber-*が義務的に脱落し *kata* となる²⁾。一方、英語にはインドネシア語のような動詞接辞が存在しないので、引用句倒置(4c)において動詞の形態が変化することはない。とは言え、動詞に接辞がつくというのは英語にはないインドネシア語の特殊事情であるので、その点を無視すれば、インドネシア語(3)と英語(4)における語順の並行性は明らかである。したがって、「インドネシア語(3c)は英語(4c)と同様の構文である」と考えられるかもしれない。

しかし、インドネシア語(3c)と英語(4c)には、動詞の形態以外にも、従来あまり指摘されていない相違点が存在する。次節では、インドネシア語と英語の引用句倒置構文の共通点・相違点を詳しく論じる。

1.2 インドネシア語と英語の共通点・相違点

まず、インドネシア語と英語の引用句倒置構文の共通点を考える。第一に、前節で述べたように、インドネシア語も英語も3通りの語順が可能であり、QVSという倒置構文になる。

第二に倒置は随意的である。この点は、たとえば英語の疑問文における主語一助動詞倒置と異なる。

第三に、インドネシア語も英語も、助動詞や否定語があると倒置されない。

- (6) a. * “Thank you,” must say John.
b. * “Thank you,” say must John.
c. * “Thank you,” must John say.
(7) a. * “Thank you,” not said John.
b. * “Thank you,” didn’t say John.
c. * “Thank you,” said not John.
d. * “Thank you,” say didn’t John.
e. * “Thank you,” didn’t John say.

英語では *must* のような助動詞や否定語 *not* があると、(6)(7)に示すように引用句倒置が不可能である(Collins 1997)。インドネシア語にも同様の現象が見られる。

- (8) a. * “Terima kasih,” harus kata John.
b. * “Terima kasih,” kata harus John.
c. * “Terima kasih,” harus John kata.
(9) a. * “Terima kasih,” tidak kata John.

- b. * “Terima kasih,” kata tidak John.
- c. * “Terima kasih,” tidak John kata.

インドネシア語では助動詞 *harus* や否定語 *tidak* があると、(8)(9)に示すようにやはり引用句倒置は不可能である³⁾。

一方、インドネシア語と英語の引用句倒置には次のような相違点が存在する。第一に、すでに述べたように、英語とは異なり、インドネシア語では動詞接辞が義務的に脱落する。

第二に、英語の引用句倒置は文語的表現で話し言葉ではあまり用いられないが、インドネシア語の引用句倒置は口語的であり、よく用いられるように思われる。

第三に、主語の性質により引用句倒置の適格性が異なる。

- (10) a. “Thank you,” said the man who came from Japan.
- b. “Thank you,” said ?he/*him.
- (11) a. ? “Terima kasih,” kata orang yang datang dari Jepang.
- b. “Terima kasih,” kata dia/katanya.

英語の引用句倒置では、(10a)のように主語は長い名詞句でもよく、(10b)のように代名詞になると容認性が低い。一方、インドネシア語では(11b)のように代名詞の方が好まれ、(11a)のように長い名詞句であると容認性が低い⁴⁾。この点は、インドネシア語と英語の引用句倒置における情報構造の違いを示しており、重要である。

第四に、数量詞遊離に関してインドネシア語と英語の引用句倒置は異なるふるまいを見せる。この点については2.3節で述べる。

以上のように、語順の並行性や助動詞・否定語との共起不可という共通点にもとづくと、インドネシア語と英語の引用句倒置は同種の構文であると思われるかもしれない。しかし、従来あまり指摘されてこなかった4つの相違点を重視すると、インドネシア語と英語の引用句倒置はまったく別の構文である可能性が高い。次節以降では、引用句倒置に関する先行研究を概観し、問題点を述べる。

1.3 英語の引用句倒置に関する先行研究：Collins(1997)

英語の引用句倒置に関する先行研究として、Collins(1997)およびCollins and Branigan(1997)がある。本節ではCollins(1997)による分析を概観する。

Collins は、詳細な統語テストにもとづき、英語の引用句倒置において主語名詞句・動詞・引用句が統語上占める位置を論じている。

まず、引用句倒置における主語名詞句の位置を考察する。

- (12) a. “Where to?” asked the driver of the passenger.
- b. * “Where to?” asked of the passenger the driver. (Collins 1997: 32)

(12)において *of the passenger* は動詞 *ask* の補部であるが、(12a)のように主語名詞句 *the driver* は動詞補部の左に現れる。この文が通常の語順である *the driver* asked “Where to” *of the driver* から

派生したと仮定すると、引用句倒置では主語名詞句 *the driver* が動詞の右に移動したものではないと考えられる。また、英語の引用句倒置では数量詞遊離が不可能である。

- (13) a. “We must do this again,” [_{NP} all the guests] declared to Tony.
b. “We must do this again,” [_{NP} the guests] [all] declared to Tony.
c. “We must do this again,” declared [_{NP} all the guests] to Tony.
d. * “We must do this again,” declared [_{NP} the guests] [all] to Tony.

(Collins 1997: 33)

英語では *all* のような数量詞は、一般に(13b)のように名詞句 *the guests* と遊離させることが可能である。しかし引用句倒置では(13d)のように名詞句 *the guests* と遊離させることができない。Sportishe(1988)以降、数量詞遊離は VP 内主語仮説の証拠とされ、次のように説明される。主語はもともと VP 内に生成され、(13a)では主語名詞句である *all the guests* 全体が TP 指定部に移動しているが、(13b)では主語名詞句の一部である *the guest* のみが TP 指定部へ移動し、数量詞 *all* は VP 内に取り残された結果、数量詞遊離構文が生じる。しかし、(13d)のように数量詞遊離が不可能であるということは、引用句倒置では主語名詞句 *all the guests* は TP 指定部に移動せず、VP 内にとどまっている証拠となる⁵⁾。

次に、引用句倒置における動詞の位置を考察する。1.2 節で述べたように、否定語があると引用句倒置は不可能になる。

- (14) a. * “Let’s eat,” not said John just once.
b. * “Let’s eat,” said not John just once.
c. * “Let’s eat,” didn’t John say just once.

(Collins 1997: 33)

この事実について Collins は、引用句倒置では動詞が T 位置へ上がるためであるとしている⁶⁾。*not* は主要部 Neg を占める要素であり、Neg は T と V の間にあると仮定すると、Neg があると主要部移動制約により動詞が V から T に上がれないため不可となる。また、同様に助動詞があると引用句倒置が不可能であるという事実は、助動詞要素が T 位置を占めており、動詞が T から V へ上がれないためであると説明される。

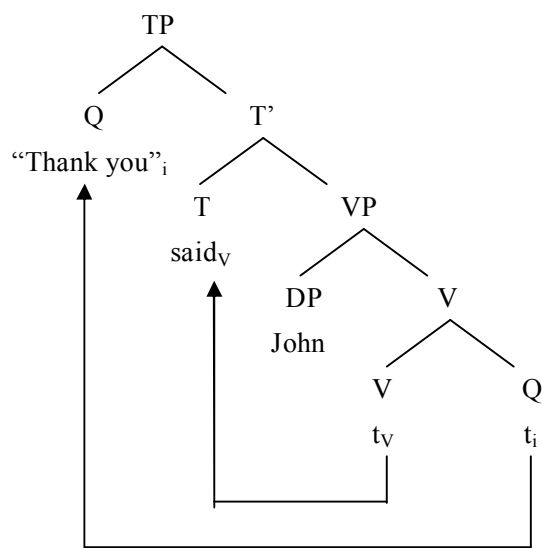
最後に、引用句倒置における引用句の位置を考察する。引用句は文の左端にある。動詞が T 位置を占めるとすれば、引用句は動詞の左であるので TP 指定部と考えるのが自然である。ただし、Collins はさらに高い位置である CP 指定部の可能性も排除していない⁷⁾。

以上のことから、主語名詞は VP 内にとどまり、動詞は V 位置に上がり、引用句は VP 指定部にあることがわかった。すなわち、英語の引用句倒置の構造は(15)となる。

- (15) 英語の引用句倒置の構造

(Collins 1997: 40 修正⁸⁾)

“Thank you,” said John.



引用句倒置では、通常の文の主語位置である TP 指定部を、主語名詞句ではなく引用句 Q が占めている。また、英語の一般動詞は通常は V にとどまるが、引用句倒置では T に上がる。そのため、助動詞や否定詞があると倒置不可になる。主語名詞句は、通常の文では TP 指定部に上がるが、引用句倒置では VP 指定部にとどまる。

本節では、Collins(1997)による引用句倒置の分析を概観した。英語の引用句倒置の構造は、基本的に(15)であると考えてよい。では、インドネシア語の引用句倒置も同様の構造であろうか。

1.4 インドネシア語の引用句倒置に関する先行研究：Sneddon(2010)

インドネシア語の引用句倒置の統語構造に関する先行研究は存在しない。ただし、記述文法の立場から Sneddon(2010)が興味深いことを述べている。本節では Sneddon の主張を紹介し、批判を加える。

Sneddon は、「直接発話(=引用句、筆者注)が文頭に置かれる場合、その後には発話動詞ではなく、引用名詞(Quote Noun)+所有者が来る」と述べている(Sneddon 2010: 293)。

- (16) a. “Terima kasih,” kata John.
 V NP(主語)
 b. “Terima kasih,” kata John.
 N NP(所有者)

ふつうに考えれば、引用句倒置では(16a)のように kata が「言う」という動詞、John が「ジョンは」という主語である。ところが Sneddon は(16b)のように、kata は名詞であり、John は主語ではなく「ジョンの」という所有者であると言う。すなわち、インドネシア語の引用句倒置(16b)は「『ありがとう』とジョンが言った」ではなく、「『ありがとう』がジョンの言葉だ」という意味であることになる。この Sneddon 分析は、インドネシア語の引用句倒置は英語とはまったく異なる構文であると考えている点において興味深いが、妥当ではない。以下、Sneddon 分析の問題点を論じる。

(17) a. “Terima kasih,” John berkata.
NP(主語) V
b. “Terima kasih,” kata John.
N NP(所有者)

第二に、引用句倒置は名詞一名詞構文ではない。引用句倒置が Sneddon の主張する(17b)の構造であれば、この文は John murid. 「ジョンは生徒です」と同様の名詞一名詞構文であり、いわば英語の be 動詞を用いた構文(コピュラ文)に相当することになるが、はたしてそうであろうか。名詞一名詞構文は、以下の(18)のような特徴を持つ。すなわち、(18a)のように 2 つの名詞の間に *adalah* を挿入したり、(18b)のように *bukan* で否定したり、(18c)のように倒置したりすることができる⁹⁾。

- 一方、引用句倒置では、これらの操作はいずれも不可能である¹⁰⁾。したがって、引用句倒置は名詞一名詞構文であるとは考えられない。

- 第三に、動詞句副詞やコントロール構文の問題がある。引用句倒置は、(20a)のように動詞句副詞をつけたり、(20b)のようにコントロール構文にしたりすることが可能である。

- 100

b. コントロール構文

‘Itu bukan maksudku,’ katanya sambil tersenyum.

(Sneddon 2010: 294)

dengan+形容詞は副詞句を作り、動詞句を修飾する(Sneddon 2010: 215)。しかし、(20a)の引用句倒置には dengan 句があらわれている。Sneddon の主張するように(20a)の ujarnya が動詞+主語ではなく名詞句であれば、なぜ dengan 句が ujarnya を修飾できるのか説明できない。また、(20b)は一種のコントロール構文で、sambil tersenyum「笑いながら」の意味上の主語が明示されていない。Sneddon の主張するように(20b)の katanya が名詞句であれば、(20b)における tersenyum の意味上の主語についても、説明が難しくなるだろう。

第四に、決定的な点として、引用句倒置における「動詞」が名詞であるとは考えられない例が存在する。

(21) a. “Terima kasih,” kata John.

b. “Dari Jepang,” sahut John.

c. “Dari Jepang,” jelas John.

(21a)の kata は、一般に「言葉」という名詞として単独に用いられるので、Sneddon のように「kata は名詞である」と主張することは可能である。しかし(21b)の sahut は動詞 menyahut「答える」の語根であるが、sahut はこの構文以外で単独に名詞としての用法がない¹¹⁾。また(21c)の jelas は、この引用句倒置では動詞 menjelaskan の語幹として「説明する」という意味で用いられているが、jelas は単独では「明らかな」という形容詞であり、「説明」という名詞ではない。

以上の議論から、「(21a)の引用句倒置において kata は動詞ではなく名詞である」という Sneddon の主張は誤りであることが証明された。では、動作主 John についてはどうなるだろうか。Sneddon によれば、John は主語「ジョンが」ではなく所有者「ジョンの」であるという。前述のように kata は名詞ではなく動詞であれば、John が所有者であることはありえないが、John が所有者ではなく主語であるという証拠はあるだろうか。

インドネシア語では、ヨーロッパ語のように名詞句が格によって屈折したり、日本語のように格助詞を用いて格を明示したりすることはない。名詞句は、主語であっても所有格や目的語であっても形が変わらない。そのため、主格であるか他の格であるかを判定することは難しいが、唯一、3人称単数代名詞が特殊なふるまいを見せる。

(22) a. Dia/ia akan menolong kami.

b. Ini buku dia/*ia.

(Sneddon 2010: 169)

3人称単数代名詞には dia と ia の2つがあり、同義である。(22a)では、dia と ia がいずれも「彼は」という主格として用いられている。(22b)では「彼の」という所有格であるが、この場合、dia は可能だが、ia は不可能である。すなわち、dia は主格だけでなく所有格としても使用可能であるが、ia は主格のみが可能である。では、引用句倒置ではどうだろうか。

(23) “Terima kasih,” kata dia/ia.

結論として、Sneddon の引用名詞分析は誤りであり、kata John はやはり「動詞＋主語」であるということになる。では、インドネシア語の引用句倒置はどのような統語構造であろうか。Collins によれば、英語の引用句倒置は(15)の構造であるが、インドネシア語の引用句倒置も同様の構造を持つと言えるだろうか。次章では、1.2 節で指摘した両言語の相違点について再検討し、インドネシア語の引用句倒置の構造を提案する。

2.1 引用句倒置と情報構造

(24) a. “Thank you,” said the man who came from Japan.
b. ? “Thank you,” said he.

(25) a. ? “Terima kasih,” kata orang yang datang dari Jepang.
b. “Terima kasih,” kata dia/katanya.

文中の名詞句は、一般に旧情報と新情報とに分けられる(Huddleston and Pullum 2005)。旧情報は聞き手がすでに知っている情報であり、話題(topic)もこれに含まれる。一方、新情報は聞き手が知らない情報で、話し手が伝えようとしている内容の中核部分であり、焦点(focus)や解説(comment)がこれに当たる。ここで、英語とインドネシア語の引用句倒置は、それぞれ以下のような情報構造を持つと考えよう。

- 英語の引用句倒置は文全体が新情報であるのに対し、インドネシア語の引用句倒置は引用句“Terima kasih”のみが新情報であり、kata John「ジョンが言った」という部分は旧情報である¹²⁾。(26a)のように英語では文全体が新情報であるので、(24a)のように情報量の多い重い主語が可能であるが、(24b)のような旧情報である代名詞主語は不自然になる。一方、(26b)のようにインドネシア語の引用句倒置は引用句のみが新情報なので、(25b)のような旧情報である代名詞主語が

好まれる一方、(25a)のような重い主語は不自然になる。

以上のように、引用句倒置における情報構造の違いを仮定することにより、両言語の相違点の1つを自然に説明することができた。これをふまえて、インドネシア語の引用句倒置の構造を考えるが、その前提としてインドネシア語の情報構造と統語構造の関係について述べる。

2.2 インドネシア語の主語旧情報制約

インドネシア語の情報構造と統語構造について、Cole, Hermon and Tjung(2005)が興味深い提案を行っている。本節では、Cole et al.の議論を概観する。

インドネシア語は、英語とは異なり、wh 疑問文において wh 句の移動は起こらない(wh-in-situ)。ところが、主語 wh 疑問文では不思議なふるまいを見せる。

- (27) a. John membeli apa?
b. * Siapa membeli buku?
c. Siapa yang membeli buku?

(27a)のように、wh 句 apa が目的語である場合、語順は平叙文と変わらない。しかし、疑問詞 siapa が主語である場合、(27b)のように非文となる¹³⁾。主語 wh 疑問文では、(27c)のように主語 wh 句と動詞句の間に yang を入れなければならない。このことから、Cole et al.は以下の主語旧情報制約を主張している¹⁴⁾。

- (28) 主語旧情報制約：

焦点すなわち新情報は述語でなければならない、主語は旧情報(話題)でなくてはならない。

(Cole, Hermon and Tjung 2005: 562)

インドネシア語には(28)の主語旧情報制約がある。wh 句はつねに新情報である。(27a)では wh 句が述語にあるので問題ないが、(27b)では wh 句が主語であるため、主語旧情報制約に違反している。したがって、wh 句が主語である場合、(27c)のように yang を用いた文にする必要があるというのである。

では、(27c)の yang は何であろうか。yang は通常、関係詞として用いられる語である。インドネシア語の関係節の構造は明らかではないが、yang は C(補文標識)であり、(27c)において wh 句 siapa は CP 指定部を占めていると考えるのが自然であろう。

- (29) [CP Siapa_i yang [TP t_i membeli buku]]?

ただし、Cole et al.は(29)を否定し、かわりに(30)の分裂文構造を仮定している。

- (30) [NP Siapa]_i [NP yang membeli buku] t_i?

(30)は、ちょうど Sneddon が引用句倒置について仮定したものと同じような名詞一名詞構文である。本稿では詳しく論じないが、Cole et al.が(29)ではなく(30)を仮定する根拠は薄弱である

¹⁵⁾。(29)の構造で疑問詞 *siapa* の占める位置(CP 指定部)は、英語の *wh* 疑問文において *wh* 句が占める位置と同じであり、自然である。

主語 *wh* 疑問文の構造として(29)と(30)のいずれが妥当であるかはさておき、Cole et al.の提案する(28)の主語旧情報制約については基本的に正しいものと考えられる。次節では、インドネシア語の引用句倒置の構造を検討する。

2.3 引用句倒置の統語構造

1.3 節で述べたように、英語の引用句倒置の統語構造は、引用句が TP 指定部、動詞は T 位置を占めると考えられる。TP 指定部は、通常の文における主語位置である。インドネシア語とは異なり、英語には「主語旧情報制約」はない。したがって、英語の引用句倒置では、新情報である引用句が TP 指定部を占めていると考えても問題はない。一方、インドネシア語には「主語旧情報制約」がある。そのため、新情報である引用句は TP 指定部ではなく、他の位置を占めていると考えられる。

前節で述べたように、(31a)のように、主語疑問文において新情報である疑問詞 *siapa* は CP 指定部を占めている。そうであれば、(31b)のように、引用句倒置においても新情報である引用句は CP 指定部を占めていると考えるのが妥当である。

- (31) a. [CP *Siapa_i* yang [TP *t_i* membeli buku]]?
b. [CP “Terima kasih” [TP kata John *t_i*]].

では、引用句倒置において引用句が CP 指定部にあるという直接的証拠はあるだろうか。また、(31b)では暫定的に動詞 *kata* および主語 *John* は TP 内にあるものとしたが、これらは実際にはどの位置にあるのだろうか。これらの問題について、英語とインドネシア語の引用句倒置におけるもう一つの相違点である数量詞遊離に関する事実をもとに考察する。

1.3 節でふれたように、英語の引用句倒置では数量詞遊離が不可能である。

- (32) a. “We must do this again,” [NP all the guests] declared to Tony.
b. “We must do this again,” [NP the guests] [all] declared to Tony.
c. “We must do this again,” declared [NP all the guests] to Tony.
d. * “We must do this again,” declared [NP the guests] [all] to Tony.

(Collins 1997: 33)

引用句を単に前置した場合は、(32b)のように主語名詞句からの数量詞 *all* の遊離が可能であるが、引用句倒置では、(32d)のように主語名詞句から数量詞 *all* を遊離させることができない。標準的説明によれば、(32a)では主語 *all the guests* はもともと VP 内(VP 指定部)に生成された後、TP 指定部に移動する。一方、(32b)では(33)のように *the guests* のみが移動し、数量詞 *all* は VP 内に残置されている。

- (33) “We must do this again,” [TP the guests_i [VP all *t_i* declared to Tony]].

引用句倒置では(32d)のように数量詞遊離が不可能であるのは、主語が TP 指定部に移動せず、VP 指定部にとどまっている証拠となる。

一方、インドネシア語の引用句倒置は、英語とは異なり、数量詞遊離が可能である。

- (34) a. “Terima kasih,” kata [NP tiga orang pegawai].
 b. “Terima kasih,” kata [NP pegawai] [tiga orang].

(34b)のように、インドネシア語では、引用句倒置において、主語名詞句 pegawai と数量詞 tiga orang を遊離させることができる¹⁶⁾。このことから、引用句倒置においても英語のように主語が VP 内にとどまっておらず、TP 指定部に移動していると考えられる。したがって、引用句はその左の CP 指定部であり、動詞は C 位置にあることになる。

結論として、英語の引用句倒置では、(35a)のように引用句は TP 指定部にあるが、インドネシア語の引用句倒置では、(35b)のように引用句は CP 指定部にある。英語とインドネシア語の引用句倒置は、見かけ上の類似にもかかわらず、統語構造がまったく異なる構文であることが明らかとなった。

- (35) a. 英語： [TP “Thank you,” said [VP John ...]].
 b. インドネシア語： [CP “Terima kasih,” kata [TP John [VP ...]].

2.4 場所句倒置と引用句倒置

前節の議論で、インドネシア語の引用句倒置では、英語とは異なり、引用句は CP 指定部にあることがわかった。では、他の倒置構文はどうであろうか。本節では、引用句倒置に類似した倒置構文として、場所句倒置をとりあげる。

英語の場所句倒置とは、(36b)のような文である。

- (36) a. “Thank you,” said John.
 b. In the village lived a king.

Collins(1995:29)は、(36b)のような場所句倒置も、引用句倒置(36a)と基本的に同じ構造を持つと主張している。(36b)における場所句は、(36a)における引用句と同様に TP 指定部を占めている。

では、インドネシア語ではどうだろうか。場所句倒置と引用句倒置には、情報構造上、大きな違いがある。

- (37) a. “Terima kasih,” kata John.
 新情報 旧情報
 b. Di kampung itu tinggal seorang raja
 旧情報 新情報

2.1 節で述べたように、インドネシア語の引用句倒置は、(37a)のように文頭の場所句が新情報、残りの動詞＋主語は旧情報である。一方、場所句倒置では、「その村に一人の王様が住んでい

(38) a. 引用句倒置: [CP “Terima kasih,” kata [TP John [VP ...]]].
b. 場所句倒置: [TP Di kampung itu tinggal [VP seorang raja ...]]

106

すなわち、(41a)のように主語が旧情報である場合、主題の「は」が用いられる。一方、(41b)のように主語を含む文全体が新情報であったり、(41c)のように述語が旧情報であるのに対して主語が新情報である場合には、中立叙述ないし総記の「が」が用いられる。

以上をふまえて、英語とインドネシア語の引用句倒置を考えよう。

- (42) a. 英語: “Thank you.” said John.
新情報
「ありがとう」とジョンが言った。
- b. インドネシア語: “Terima kasih.” kata John.
新情報 旧情報
「ありがとう」とジョンは言った。

2.1 節で述べたように、英語の引用句倒置は文全体が新情報である。すなわち、(42a)のように中立叙述の「が」を用いて「『ありがとう』とジョンが言った」と訳すことができる。一方、インドネシア語の引用句倒置は、文頭の引用句が新情報、主語は旧情報である。したがって、(42b)のように「『ありがとう』とジョンは言った」と訳すのが妥当である²⁰⁾。

本節では、インドネシア語の引用句倒置の統語構造を考察した。「はじめに」で挙げた引用句倒置に関する3つの疑問のうち、第1の「インドネシア語の引用句倒置はどんな構造か」、および第2の「インドネシア語と英語の引用句倒置は同じ構造か」という点について、回答を示した。次章では、最後の疑問である「なぜ引用句倒置では動詞接辞が義務的に脱落するのか」という点について考える。

3. 接辞脱落をめぐるって

3.1 さまざまな接辞脱落構文

引用句倒置構文は、動詞接辞が義務的に脱落するという特徴を持っている。ところで、インドネシア語には、他にも同様に動詞接辞が脱落する構文がある。

第一に、ゼロ受身文（第2種受身、目的語前置）が挙げられる。(43)では、他動詞 *membaca* の論理的目的語である *buku itu* が前置されて主語となり、動詞接辞 *meN-* が義務的に脱落する²¹⁾。

- (43) Buku itu John ϕ -baca.

第二に、関係節が挙げられる。(44)は「私はジョンが読んだ本を借りた」という意味であるが、下線部の関係節において、動詞接辞 *meN-*が義務的に脱落する²²⁾。

- (44) Saya meminjam buku yang John ϕ -baca.

第三に、命令文が挙げられる。「その本を読め」という場合、(45a)のように動詞接辞 *meN-* が義務的に脱落する。

- (45) a. ϕ -Baca buku itu!

b. * Membaca buku itu!

最後に、本稿で論じた引用句倒置構文である。引用句倒置では、動詞接辞 ber-, meN-が義務的に脱落する。では、これらの構文における接辞脱落の理由は同じであろうか、それとも別個であろうか。これらの接辞脱落構文にはどんな共通性があるのだろうか。結論から言うと、現段階ではこれら4つの構文における動詞接辞脱落現象を統一的に説明することは難しい。しかしながら、少なくとも後の2つに関しては、同じ理由であるということができるとはなかろうか。次節では、命令文と引用句倒置に見られる接辞脱落を一般化し、統一的説明を試みる。

3.2 接辞脱落の一般化：命令文と引用句倒置

前節の(45)で示したように、命令文では動詞接辞 meN-が脱落する。しかし、命令文であっても動詞接辞が脱落しない場合がある²³⁾。

- (46) a. Jangan ϕ -baca buku itu!
b. Jangan membaca buku itu!

「～するな」という意味の jangan を用いた否定命令文では、(46)のように meN-の脱落は随意的である。これはなぜだろうか。実は、否定命令文は、通言語的に興味深いふるまいを見せる。たとえば英語では(47)のように、be 動詞の否定であるにもかかわらず don't を用いた不思議な形になる。

- (47) Don't be noisy!

また、否定命令文を持たない言語も存在する。ギリシャ語では、否定命令文では動詞の命令形のかわりに接続法を用いる。

このような事実をもとに、Bošković(2008)は、命令文では TP の左に何らかの機能範疇 F が存在することを提案している。

- (48) a. [_F Be_i [_{TP} [_{VP} t_i quiet]]]!
b. [_F [_{TP} [_{Neg} Don't [_{VP} be noisy]]]]!

(48a)のように、通常の命令文では動詞 be が F へ主要部移動する。一方、否定命令文では T と V の間に否定 Neg があり、動詞 be の主要部移動が阻止される。そのため do が挿入されて“Don't be …”という形になる。インドネシア語でも同様に考えることができる。

- (49) a. 命令文： [_F ϕ -Baca/*Membaca_i [_{TP} [_{VP} t_i buku]]]!
b. 否定命令文： [_F [_{TP} [_{Neg} Jangan [_{VP} ϕ -baca/membaca buku]]]]!

インドネシア語の命令文にも機能範疇 F がある。通常の命令文(49a)では、動詞接辞 meN-が脱落した baca は V から T を越えて F に移動するが、動詞接辞のついた membaca は何らかの理由

で移動できないと仮定する。一方、否定命令文(49b)では、T と V の間にある Neg が主要部移動を阻止するので、動詞は F に上がらない。したがって、接辞のない *baca* も、接辞のついた *membaca* も可能である²⁴⁾。

では、引用句倒置はどうであろうか。

(50) 引用句倒置： [CP “Terima kasih,” kata/*berkata_i [TP John [VP t_i]]].

(50)は示した引用句倒置の構造である。2章で、引用句は CP 指定部、動詞は C 位置にあることを示した。命令文(49a)と同様に、接辞のない *kata* は V から T を越えて C へ移動するが、接辞のついた *membaca* は移動できない。すなわち、否定命令文と引用句倒置から次の一般化が得られる。

(51) 接辞脱落の一般化：

接辞のついた動詞は、TP より左への主要部移動ができない。

(51)は単に事実から得られた記述に過ぎず、このままでは原理に基づいた説明とは言い難い。しかし、もし(51)の一般化の方向性が正しければ、言語理論全体に重要な知見をもたらすであろう。前節で挙げた他の動詞接辞脱落構文の説明や、他の言語における類似現象の検討を含めて、今後の課題としたい。

注

- 1) (3c)において *kata* が動詞(V)、 *John* が主語(S)であるかどうかについては検討が必要であるが、語順の違いを示すために、便宜上それぞれ V,S と表示している。
- 2) 引用句を補部にとる動詞には、 *menyahut* 「答える」のように接辞 *meN-*がつく動詞もあり、同様に引用句倒置において接辞 *meN-*が脱落する。また、 *menjelaskan* 「説明する」のように接辞 *meN-kan* がつく動詞もあり、その場合は接頭辞 *meN-*と接尾辞 *-kan* がともに脱落する。
- 3) インドネシア語において、 *harus* 「～しなければならない」のような語が助動詞であるか、それとも副詞であるかというのも未解決の問題であるが、(8)の事実は、 *harus* が副詞ではなく助動詞であるという根拠の一つになるかもしれない。
- 4) (11a)について、筆者が確認したインフォーマントは「あまりよくない」という判断を下したが、日本インドネシア学会における発表時に、あるインドネシア人から「とくに悪いとは感じられない」という判断をいただき、インドネシア語話者の間で判断が分かれる結果となった。これは、 *yang* 以下の関係節が制限用法であるか非制限用法であるかということが関与している可能性がある。インドネシア語では英語とは異なり、制限的關係節と非制限的關係節の区別が明瞭ではない。この文を以下の(a)のような制限的關係節（「ありがとう」と、日本から来た人が言った）ととると、 *yang* 以下は重要な新情報であるため容認性が落ちるが、(b)のような非制限的關係節（「ありがとう」と人が言ったが、その人は日本から来た）ととれば、 *yang* 以下は付加的な情報であるため容認されるかもしれない。
 - a. ? “Terima kasih,” kata orang yang datang dari Jepang .
 - b. “Terima kasih,” kata orang(.) yang datang dari Jepang .
- 5) Collins(1997)では VP のほかに TrP を仮定し、主語名詞句は TrP 内にとどまると主張している。TrP は、

近年のミニマリズムや分散形態論の枠組みにおける vP にほぼ相当すると思われる。ここでは話をわかりやすくするため、TrP を VP に言い換えた。

- 6) 英語ではふつう、一般動詞は T 位置には上がらず V 位置にとどまるとされる。
- 7) 引用句倒置では、以下のような引用句が「分裂」する構文が存在する。

“John,” said Mary, “wants to go to the store.”

(Collins 1997: 39)

このことから Collins は、実際に左方に移動しているのは引用句自体ではなく、引用句演算子(Op)であると主張している。簡略化のため、本稿では引用句自体が移動すると考えることにする。

- 8) 図(15)は Collins の結論を書き直している。注 5)で述べたように、Collins では動詞は V ではなく Tr にあるとしている。また注 7)で述べたように、Collins によれば TP 指定部にあるものは引用句自体ではなく引用句演算子である。
- 9) (18a)の *adalah* は *be* に相当する語であるが、通常は 2 つの名詞が長い場合などに用いられ、(18a)のようにどちらも単純な名詞の場合に用いると不自然である。また、(18c)の倒置も、このような単純な名詞の場合には不自然であり、ポーズを置いたり、倒置する要素を定名詞句 *murid itu* などにする必要があるだろう。
- 10) (19)は、Sneddon の言うように *kata* を名詞ととれば、いずれも非文とは言えない。後に論じるように、*sahut* のような単独の名詞として存在しない語でテストすれば、明らかに非文である。したがって(19)の例文中の *kata* はすべて *sahut* などにして論じるべきであるが、*kata* のまま示した。
- 11) 代表的な辞書である『最新インドネシア語小辞典』第 1.4 版(佐々木重次, 私家版, 2013)や *A Comprehensive Indonesian-English Dictionary, second edition* (Stevens and Schmidgall-Tellings, Ohio University Press, 2010)には、*sahut* の語幹にはこの引用句倒置における用法のみが記載され、単独の名詞(あるいは他の品詞)としての用法は記載されていない。
- 12) ここで、動詞 *said/kata* の扱いが問題となる。厳密には、(26a)では *said* を除いた引用句“Thank you”および主語 *John* のみが新情報であり、(26b)では *kata John* のうち主語 *John* のみが旧情報と考えるべきかもしれない。本稿では(26)のように動詞も含めた形で情報構造を示す。
- 13) (27b)について非文としたが、実際には容認性について母語話者の判断が分かれ、これをかまわないとする話者と、嫌う話者とが存在する。この点は Cole et al.(2005)も指摘し、当該論文で詳細な分析を行っている。
- 14) Cole et al.は(28)を「並行性仮説」(The Parallelism Hypothesis)と名づけているが、本稿では便宜上「主語旧情報制約」と呼ぶことにする。
- 15) Cole et al.の提案する主語疑問文の構造(30)についてはいくつかの疑問がある。第一に、Cole et al.によれば、(a)の主語疑問文は(b)が元であるということだが、(b)は通常は不自然であり、(a)ははるかに自然である。また、(a)と(b)はイントネーションや意味も異なる。(a)は「誰かが来た」ということは前提となっておらず「誰も来ていない」可能性があるが、(b)は「誰かが来た」ということが前提になっている。
 - a. *Siapa yang datang?*
 - b. *Yang datang siapa?*また Cole et al.は(29)を否定する理由として、(c)のように述語が名詞句である場合に *yang* があらわれない点を挙げているが、(d)が不適格である理由については、たとえば *yang* は名詞句をとることができないといった他の説明も可能であり、(29)を否定する根拠とするにはならない。
 - c. *Siapa Presiden RI pertama?*
 - d. **Siapa yang Presiden RI pertama?*
- 16) 英語では、*three* のようなふつうの数量詞は遊離できず、*all* や *each* のような特殊な数量詞のみが遊離可能である。一方、インドネシア語では英語とは逆に、*tiga orang* 「3 人」のようなふつうの数量詞は遊離しやす

いが、all にあたる semua(-nya)のような特殊な数量詞は遊離しづらい。したがって、(34)では tiga orang という数量詞を用いて議論している。

- 17) 場所句倒置と引用句倒置には文体的な違いもある。インドネシア語では、引用句倒置は日常的な口語表現だが、場所句倒置は文語的な特殊な表現である。英語の引用句倒置も文語的であることも考え合わせる必要がある。
- 18) Kuno は、「が」にさらに「目的格」(objective)の用法を認めているが、当該の議論に無関係であるので省略する。
- 19) 対照の「は」については、引用句倒置とは無関係と思われるので省略する。
- 20) 本節の議論はやや乱暴である。とくに(42)で示した「『ありがとう』とジョンが言った」といった日本語文では、主語「ジョンが」の前に引用句がおかれている。これは一種の「かきまぜ」(scrambling)と呼ばれる現象であるが、英語やインドネシア語の引用句倒置をそのまま日本語のかきまぜ文に相当すると考えてよいのか、また「ジョンが『ありがとう』と言った」と「『ありがとう』とジョンが言った」はいずれも中立叙述で、後者の場合も文全体が新情報になるのかといった点について、詳しく検討する必要があるだろう。
- 21) ゼロ受身については、長南(2013)を参照。
- 22) (44)の文は、下線部が(43)のようなゼロ受身を関係節化したものと考ええると、ゼロ受身と同一の現象になる。しかし、Cole and Hermon(2005)によれば、(44)の下線部はゼロ受身ではなく能動文を関係節化した可能性がある。
- 23) 否定命令文以外にも動詞接辞 meN-が脱落しない場合がある。Sneddon(2010:333)は、その例として、“Membaca sekarang!”「今、読め」のように他動詞の目的語が省略される場合や、“Membaca buku!”「本を読め」のように目的語が不特定である場合を挙げている。これらの例についても、以下の議論と同様の説明が可能であるかどうかは、今後の課題である。
- 24) 否定命令文(49)において、否定語 jangan は Neg の主要部であるか、それとも指定部位置を占める要素であるかというのは、重要な問題である。また、もし主要部である場合、動詞の代わりに jangan が F へ主要部移動するかどうか問題になる。これらは今後の課題である。

付：引用句倒置構文をとるおもな動詞

※佐々木(2010:194)を参考に作成した。順序と選択、日本語訳は筆者による。

kata	言う	<berkata
ujar	述べる	<berujar
pikir	考える	<berpikir
tanya	尋ねる	<bertanya
jawab	答える	<menjawab
sahut	答える	<menyahut
jasas	説明する	<menjelasakan
terang	説明する	<menerangkan
tegas	断言する	<menegaskan
cerita	話す	<menceritakan
lanjut	付け加える	<melanjutkan
sambung	続ける	<bersambung
ulang	繰り返す	<berulang

teriak	叫ぶ	< berteriak
ajak	誘う	< mengajak
bantah	反論する	< membantah
perintah	命じる	< memerintah
desak	詰め寄る	< mendesak
bisik	ささやく	< berbisik

参考文献

- Bošković, Z. (2008) “When are negative imperatives banned?” ms.
- 長南一豪 (2013) 「OSV 言語としてのインドネシア語」 『インドネシア 言語と文化』 第19号: 1-20.
- Cole, P. and G. Hermon. (2005) “Subject and Non-subject Relativization in Indonesian” *Journal of East Asian Linguistics* 14: 59-88.
- Cole, P., G. Hermon, and Y. N. Tjung. (2005) “How irregular in WH in situ in Indonesian?” *Studies in Language* 29: 553-581.
- Collins, C. (1997) *Local Economy*, MIT Press.
- Collins, C. and P. Branigan (1997) “Quotative Inversion,” *Natural Language and Linguistic Theory* 15: 1-41.
- Huddleston, R. and J. Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*, Cambridge University Press.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press.
- 佐々木重次 (2010) 『インドネシア語の中庭 文法編』 私家版.
- Shibatani, M. (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge University Press.
- Sneddon, J. N. (2010) *Indonesian: A Comprehensive Grammar*, 2nd edition, Routledge.

インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティについて

Penggunaan dan Modalitas dalam Pola Hubungan Syarat Bahasa Indonesia

アリ・アルタディ（大東文化大学大学院生）
Ari Artadi (Universitas Daito Bunka)

要旨:

Fokus penelitian ini adalah menjelaskan penggunaan dan modalitas bentuk kalimat pola hubungan syarat (条件形式) dalam Bahasa Indonesia. Kalimat pola hubungan syarat dalam Bahasa Indonesia merupakan kalimat majemuk bertingkat, yang dibentuk dengan penggunaan konjungsi “kalau” “jika” “(apa)bila” dan “asal(kan)”. Dengan menggunakan teori realitas (レアリティ) dan modalitas(モダリティ), penggunaan dan modalitas yang dapat muncul dalam kalimat pola hubungan syarat “kalau” “jika” “(apa)bila” dan “asal(kan)” adalah sebagai berikut. Bentuk “kalau” “jika” “(apa)bila” digunakan untuk membentuk kalimat bentuk syarat yang menunjukkan suatu hipotesis (仮定条件文), kejadian yang berulang, dan juga kebiasaan (恒常条件文). Dan dari segi modalitas kalimat yang dibentuk “kalau” “jika” “(apa)bila” tidak memiliki batasan dalam penggunaan modalitas. Mulai dari modalitas yang menunjukkan narasi (叙述), pertanyaan (疑問), keinginan (意志), perintah (命令), ajakan (勧誘), larangan (禁止), ijin (許可), penjelasan (説明), hingga modalitas yang menunjukkan peringatan (警告). Namun, kalimat pola hubungan syarat yang menggunakan konjungsi “asal(kan)” memiliki batasan dalam penggunaan dan modalitasnya.

1. はじめに

インドネシア語の複文では、条件という因果関係を表すため節と節の間に接続詞が必要となる。その条件関係を表す主たる接続詞は *kalau*・*jika*・*(apa)bila*・*asal(kan)* の4つである。この4つの接続詞は日本語でいえば条件文の「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」に相当する。よって、*kalau*・*jika*・*(apa)bila*・*asal(kan)* をインドネシア語の条件文の形式と呼ぶことにする。Alwi Hasan et al. (2003) の説明に基づく、*kalau*・*jika*・*(apa)bila*・*asal(kan)* から成立した条件文は *Kalimat Majemuk Bertingkat* (従位関係の複文) である。インドネシア語の従位関係の複文では主節の位置は従属節の前に置いても後ろに置いても可能であり、文の意味は変わらない。インドネシア語の条件文の構成は以下の図式であらわされる。

Induk Kalimat (主節) + <i>kalau</i> ・ <i>jika</i> ・ <i>(apa)bila</i> ・ <i>asal(kan)</i> Anak Kalimat (従属節)
<i>kalau</i> ・ <i>jika</i> ・ <i>(apa)bila</i> ・ <i>asal(kan)</i> Anak Kalimat (従属節) + Induk Kalimat (主節)

これらのインドネシア語の条件文に関する研究は、管見の限りまだ少ない。そのため *kalau*・*jika*・*bila*・*asal(kan)* の分類と用法についてはまだ十分に分析がなされていないのが現状であ

る。従って、本研究では、前田直子（2009）のレアリティ概念¹に基づく条件文の分類と日本語記述文法研究会（2003）の4つのモダリティ²の種類の枠組みで、*kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)*という4つの条件形式の用法と主節のモダリティの分析を試みる。

前田直子（2009）は、レアリティの概念から、条件文を仮定条件文と非仮定条件文の2種類に分類している。仮定条件文には仮説と反事実条件文が含まれ、非仮定条件文には、多回的条件文と一回的条件文が含まれるという。本研究では多回的条件文を恒常条件文、一回的条件文を事実条件文と呼ぶことにする。従って、本研究では条件文は仮定条件文³・恒常条件文⁴・事実条件文⁵という3つの種類に分けられる。日本語記述文法研究会（2003）によれば、モダリティは4つのタイプに分けられる。表現類型のモダリティ⁶・評価と認識モダリティ⁷・説明のモダリティ⁸・伝達態度のモダリティ⁹である。

本研究では分析資料として、インドネシアの新聞記事（電子版）、および『佐賀のがばいばあちゃん』、『ノルウェイの森』、『坊っちゃん』、『風林火山』、『上杉謙信』というインドネシア語に翻訳された5つの日本の小説から収集した例文を使用している。収集した例文の数は*kalau*は966、*jika*は355、*(apa)bila*は262、*asal(kan)*は50である。これらの各形式の例文をレアリティとモダリティで分析した結果を以下で説明する。

2. インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティ

*kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)*の例文を分析した結果、各形式の使用分布は以下のようである。

表1 *kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* 形式の用法の使用分布の比較

用法		従属節－主節	<i>kalau</i>		<i>jika</i>		<i>(apa)bila</i>		<i>asal(kan)</i>	
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合
仮定	典型的な仮定	未実現－未実現	817	85%	295	83.1%	163	62.2%	38	76%
		事実－未実現	26	1.7%	4	1.1%	0	0%	0	0%
	反事実	反事実－反事実	7	0.7%	4	1.1%	3	1.1%	0	0%
		事実－反事実	2	0.2%	0	0%	0	0%	0	0%
恒常	一般	不問－不問	12	1.2%	21	6.0%	72	27.5%	12	24%
	習慣	事実－事実	61	5.5%	28	7.9%	24	9.2%	0	0%
事実（過去一回）		事実－事実	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
非条件文			41	4.2%	3	0.8%	0	0%	0	0%
			966	100%	355	100%	262	100%	50	100%

（筆者作例）

表1から分かるように、用法に関して *kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* 形式では仮定条件文と恒常条件文を用いることが可能であるが、事実条件文が用いられない。より細かく見ると、*jika・(apa)bila・asal(kan)*形式では仮定条件文の反事実条件文の事実－反事実パターンが見当たらなかった。さらに、*(apa)bila* と *asal(kan)*形式では仮定条件文の事実－未実現パターンと非条件文の例文が見当たらなかった。従って、*jika・(apa)bila・asal(kan)*形式では反事実条件

文の事実－反事実パターンを用いることが可能かどうか、また、(apa)bila と asal(kan)形式では仮定条件文の事実－未実現パターンと非条件文の例文を用いることが可能かどうか、さらに各形式ではどんなモダリティが用いられるか、以下により詳しく説明する。

2.1 kalau の条件文の用法と主節のモダリティ

kalau 形式は書き言葉にも話し言葉にも使用されるが、話し言葉としての比率が大きいと思われる。レアリティに基づく用法の分類からみると、kalau 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いること可能である。kalau 形式の仮定条件文には、典型的仮定条件文と反事実条件文の用法が用いられる。また、kalau の恒常条件文には、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。より細かくみると、kalau の一般条件文には自然現象、科学的な出来事、普遍性の出来事が現れる。

モダリティ観点から見ると、反事実条件文を除く kalau の仮定条件文の主節に、①表現類型のモダリティ【情報系の叙述と疑問モダリティ・行為系の意志、勧誘、行為要求モダリティ】、②評価と認識のモダリティ【評価の必要、不必要、許可、不許可モダリティ・認識の断定、推量、蓋然性、証拠性モダリティ】、③説明のモダリティ、④伝達のモダリティの終助詞を用いることが可能である。つまり、モダリティに関して kalau の仮定条件文にはほとんど制限はない。また、kalau の恒常条件文のモダリティは主に叙述モダリティである。以下は、kalau 形式の仮定条件文、反事実条件文、恒常条件文の例文である。

- (1) Kalau tidak ingin botak berhenti lah merokok.
ト/バ/タラ/ナラ ～たくない はげ やめる ～なさい たばこを吸う
はげたくなければ、タバコをやめなさい。 (Republika 2011/12/06) (筆者訳)
- (2) Tapi, kalau aku di sini, apa tidak mengganggu makan mu?
でも ト/バ/タラ/ナラ 私 に ここ 何 ではない 邪魔する 食べる あなた
でもここにいと食事の邪魔かしら？ (ノルウェイの森：108) (Norwegian wood：97)
- (3) Kalau memang pekerjaan ini sesulit itu, seharusnya
ト/タラ/レバ/ナラ 確かに 仕事 この 難しい そんな ～べきだ
mereka menjelaskan semua fakta sebelum kedatangan ku.
彼ら 説明する 全て 事実 前 来ること 私
そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。
(坊っちゃん：20) (Botchan：26)
- (4) Kalau mau meletus Merapi memberi tanda.
ト/タラ/レバ/ナラ ～しそう 噴火する メラピ山 あげる 徴候
メラピ山が噴火しそうな場合は、徴候がある。 (Republika 2012/1/21) (筆者訳)
- (5) Kalau bingung maka gagapnya semakin parah.
ト/バ/タラ/ナラ 混乱する すると どもり もっと ひどい
混乱するとどもりがひどくなった。 (ノルウェイの森：34) (Norwegian Wood: 26)

上の (1) － (3) の例文は仮定条件文の例文であり、(4) と (5) は恒常条件文の例文である。

(1) の例文は仮定条件文の未実現－未実現のパターンであり、主節に行為要求の禁止モダリティが用いられる。(2) の例文は仮定条件文の事実－未実現のパターンであり、主節に疑問モダリティが用いられる。(3) の例文は反事実条件文の事実－反事実のパターンであり、主節に評価モダリティが用いられる。また、(4) の例文は一般条件文の例文であり、(5) の例文は習慣を表す条件文である。(4) と (5) の例文の主節に叙述モダリティが用いられる。

2.2 jika の条件文の用法と主節のモダリティ

jika は kalau と比較した場合、書き言葉として用いられる場合が多いと考えられる。そのため、kalau よりもややフォーマルな語であるとの印象を受ける。レアリティに基づく用法の分類からみると、jika 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いることが可能である。jika は kalau と同様、事実条件文の例文が見つからなかった。jika 形式の仮定条件文には、仮定条件文と反事実条件文が用いられる。反事実条件文に関して、kalau のような反事実条件文（事実－反事実）のパターンが見つからなかったが、用いることが可能である。例えば、以下の例文を挙げる。

- (6) a. Kalau memang pekerjaan ini sesulit itu, seharusnya
 ト/タラ/レバ/ナラ 確かに 仕事 この 難しい そんな ~べきだ
 mereka menjelaskan semua fakta sebelum kedatangan ku.
 彼ら 説明する 全て 事実 前 来ること 私
そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。 (例文 3 と同じ出典)
- b. ○ Jika memang pekerjaan ini sesulit itu, seharusnya mereka menjelaskan
 semua fakta sebelum kedatanganku.

上の(6a)は kalau の反事実条件文（事実－反事実）の例文である。この例文の場合、kalau を jika に置き換えても、意味が変わらず自然な文になる。

また、jika 恒常条件文には、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。kalau 形式と同様に一般条件文には自然現象、科学的な事態、普遍性の事態が用いられる。

モダリティ観点から見ると、反事実条件文を除く jika の仮定条件文の主節に、①表現類型のモダリティ、②評価と認識のモダリティ、③説明のモダリティ、④伝達のモダリティの終助詞を用いることが可能である。つまり、モダリティに関して jika は kalau と同様、仮定条件文にはほとんど制限はない。また、jika の恒常条件文のモダリティは主に叙述モダリティである。以下は、jika 形式の仮定条件文、反事実条件文、恒常条件文の例文である。

- (7) Jangan ke Balikpapan jika tidak punya tujuan jelas.
 ないでください に バリクパパン ト/タラ/レバ/ナラ ~ない 持つ 目的 はっきり
はっきりとした目的がなかったら、バリクパパンに来ないでください。
 (Kompas 2008/10/17) (筆者訳)
- (8) Jika dia tidak membunuh ayah ku, pasti ayah ku yang membunuhnya.
 ト/バ/タラ/ナラ 彼 ではない 殺す 父 私 に違いない 父 私 relative 殺す 彼

御屋形様が父を討たなかったなら、反対に父が御屋形様を討ったことでありましょう。

(風林火山：69) (furin kazan:62)

- (9) Jika harga minyak dunia turun, maka harga BBM juga turun.

ト/バ/タラ/ナラ 値段 石油 世界 下がる すると 値段 ガソリン も 下がる

世界の石油の値段が下がれば、ガソリンの値段も下がる。 (Kompas 2008/10/21) (筆者訳)

- (10) Jika ada serangga di kamar, ia akan menyemprotkan

ト/バ/タラ/ナラ いる 虫 で 部屋 彼 FUT まきちらす

pembasmi serangga ke seluruh ruangan.

殺虫剤スプレー に 全て 部屋

困るのは虫が一匹でもいると部屋の中に殺虫スプレーをまきちらすこと。

(ノルウェイ森：32) (Norwegian wood:25)

上の (7) の例文は仮定条件文の例文であり、(8) の例文は反事実条件文である。(9) と (10) は恒常条件文の例文である。(7) の例文は仮定条件文の未実現－未実現のパターンであり、主節に行為要求の禁止モダリティが用いられる。(8) の例文は仮定条件文の反事実－反事実のパターンであり、主節に認識の推量モダリティが用いられる。また、(9) の例文は一般条件文の例文であり、(10) の例文は習慣を表す条件文である。(9) と (10) の例文の主節に叙述モダリティが用いられる。

2.3 (apa) bila の条件文の用法と主節のモダリティ

bila 形式は jika よりフォーマルな形式であると考えられる。実例を見ると、apabila は、法律やスポーツのルールによく用いられる。レアリティに基づく用法の分類からみると、bila 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法が可能である。bila 形式の仮定条件文には、仮定条件文と反事実条件文が用いられる。但し、bila 形式には仮定条件文（事実－未実現）と、反事実条件文（事実－反事実）事態というパターン of 例文が見つからなかったが、用いることが可能である。例えば、以下の例文を検討する。

- (11) a. Tapi, kalau aku di sini, apa tidak mengganggu makan mu ?

でも ト/バ/タラ/ナラ 私 に ここ 何 ～ない 邪魔する 食べる あなた

でもここにいると食事の邪魔かしら？ (例文 2 と同じ出典)

- b. ○ Tapi, bila aku di sini, apa tidak mengganggu makan mu ?

- (12) a. Kalau memang pekerjaan ini sesulit itu, seharusnya

ト/タラ/レバ/ナラ 確かに 仕事 この 難しい そんな ～べきだ

mereka menjelaskan semua fakta sebelum kedatangan ku.

彼ら 説明する 全て 事実 前 来ること 私

そんなむずかしい役なら雇う前にこれこれだと話すがいい。 (例文 3 と同じ出典)

- b. ○ Bila memang pekerjaan ini sesulit itu, seharusnya mereka menjelaskan semua fakta sebelum kedatangan ku.

上の (11a) と (12a) の例文は kalau の仮定条件文（事実－未実現）と反事実条件（事実－

反事実) の例文である。このような例文の場合、*kalau* は *bila* に置き換えが可能である。但し、(11b) の例文はやや不自然な文になると考えられる。理由は、書き言葉の *bila* は話し言葉の一人称の *aku* に組み合わせにくいからである。また、*bila* 恒常条件文には、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。*kalau* や *jika* 形式と同様に *bila* の一般条件文には自然現象、科学的な事態、普遍性の事態が用いられる。

モダリティ観点から見ると、反事実条件文を除く *bila* の典型的な仮定条件文の主節に、①表現類型のモダリティ、②評価と認識のモダリティを用いることが可能である。しかし、*kalau*・*jika* と異なり、*bila* 形式には、行為系の意志・勧誘、伝達態度の終助詞モダリティが用いられにくいという傾向が見られる。さらに、*bila* の恒常条件文のモダリティは主に叙述モダリティである。以下には、*bila* 形式の仮定条件文、反事実条件文、恒常条件文の例文である。

- (13) *Bila* AS mau berunding lagi, *harus* tanpa syarat.
ト/バ/タラ/ナラ アメリカ へたい 交渉する また へしなければならぬ ない 条件
もしアメリカが再び交渉したいならば、無条件でなければならない。

(Republika 2012/1/20) (筆者訳)

- (14) Masalah imigrasinya *seharusnya* tidak pelik, *bila* saja
問題 入管 へはずだ ではない 複雑、ト/タラ/レバ/ナラ だけ
pacar Anton seorang perempuan. (Republika 2011/02/16) (筆者訳)
恋人 アントンさん 一人 女
アントンさんの恋人が仮に女性でさえあれば、入管の問題は複雑ではないはずだった。

- (15) Putusan batal demi hukum *apabila* lewat batas waktu.
判決 無効になる ために 法律 ト/タラ/レバ/ナラ 過ぎる 期限
期限が過ぎると法律のために判決は無効になる。 (Tempo 2005/8/4) (筆者訳)

上の (13) の例文は仮定条件文の例文であり、(14) の例文は反事実条件文である。また (15) は恒常条件文の例文である。(13) の例文は仮定条件文の未実現－未実現のパターンであり、主節に評価の必要モダリティが用いられる。(14) の例文は反事実条件文の反事実－反事実のパターンであり、主節に評価の必要モダリティが用いられる。また、(15) の例文は一般条件文の例文であり、主節に叙述モダリティが用いられる。

2.4 asal(kan) の条件文の用法と主節のモダリティ

asal(kan) の形式は *kalau*、*jika*、*bila* 形式に比べると使用範囲が最も狭い。理由は *asal(kan)* は最低条件を表すためである。レアリティに基づく用法の分類からみると、*asal(kan)* 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いることが可能であるが、仮定条件文には仮定条件文（「未実現（最低条件）－未実現」）というパターンのみ用いられる。また、*asal(kan)* の恒常条件文には、一般条件文のみ用いられる。但し、自然現象・科学的な出来事・習慣を表す事態の *asal(kan)* の例文は見つからなかった。*asal(kan)* 形式では、典型的な仮定条件（未実現－未実現）、反事実条件文、恒常条件文の習慣を表す条件文が用いられるかどうか以下の例文で確認する。

- (16) a. Tapi, kalau aku di sini, apa tidak mengganggu makan mu ?
 でも ト/バ/タラ/ナラ 私 に ここ 何 ~ない 邪魔する 食べる あなた
でもここにいると食事の邪魔かしら？ (例文 2 と同じ出典)
 b. ?? Tapi, asalkan aku di sini, apa tidak mengganggu makan mu ?
- (17) a. Jika dia tidak membunuh ayahku, pasti ayahku yang membunuhnya.
 ト/バ/タラ/ナラ 彼 ではない 殺す 父 私に違いない 父 私 Relative 殺す 彼
御屋形様が父を討たなかったなら、反対に父が御屋形様を討ったことでありましょう。
 (例文 8 と同じ出典)
 b. ?? Asalkan dia tidak membunuh ayahku, pasti ayahku yang membunuhnya.
- (18) a. Kalau mau meletus Merapi memberi tanda.
 ト/タラ/レバ/ナラ ~しそう 噴火する メラピ山 あげる 徴候
メラピ山が噴火しそうな場合は、徴候がある。 (例文 4 と同じ出典)
 b. ?? Asalkan mau meletus Merapi memberi tanda.
- (19) a. Kalau bingung maka gagapnya semakin parah.
 ト/バ/タラ/ナラ 混乱する すると どもり もっと ひどい
混乱するとどもりがひどくなった。 (例文 5 と同じ出典)
 b. ?? Asalkan bingung maka gagapnya semakin parah.

上の (16a) は、典型的な仮定条件文の事実－未実現のパターンの例文である。(17a) は、反事実条件文の例文である。(18) a は、自然現象を表す例文である。そして、(19) a は習慣を表す例文である。これらの例文の場合、*kalau* や *jika* を *asal(kan)* に置き換えると、不自然な文になる。従って、*asal(kan)* 形式では仮定条件文の事実－未実現、反事実条件文、恒常条件文の自然現象と習慣を表す条件文が用いられにくい、もしくは用いられない。

モダリティに関して、データを分析した結果、*asal(kan)* の仮定条件文の主節には、① 表現類型のモダリティの【情報系の叙述モダリティ】や②評価と認識のモダリティ【評価の許可モダリティ】が用いられる。*asal(kan)* の仮定条件文には行為系の意志、勧誘、行為要求の命令・禁止・依頼・願望・勧めモダリティ、評価の必要・不必要・不許可モダリティ、認識の推量・蓋然性・証拠性モダリティ、説明モダリティ、伝達態度の終助詞が用いられにくい。以下には、*asal(kan)* 形式の仮定条件文「未実現（最低条件）－未実現」と恒常条件文の例文である。

- (20) Anas bisa diberhentikan asalkan terbukti bersalah.
 アナスさん できる 辞めさせられる さえ~れば 立証されている 罪を犯す
罪を犯したことさえ立証されればアナスさんは辞めさせることができる。
 (Republika 2012/1/24) (筆者訳)
- (21) Komodo boleh dipindah asalkan habitat barunya sama dengan habitat aslinya.
 コモド ~ていい 移される さえ~れば 生息地 新しい 同じ と 生息地 元
新しい生息地が元の生息地と同じでさえあれば、コモドは移されてもよい。
 (Kompas 2009/8/19) (筆者訳)

(22) Bisnis kecil juga bisa sukses, asalkan spesifik.

ビジネス 小さい も できる 成功 さえ~れば 特有

特有でさえあれば、スモールビジネスも成功できる。 (Kompas 2011/3/25) (筆者訳)

上の (20) と (21) の例文は仮定条件文の例文であり、(22) の例文は恒常条件文の例文である。(20) と (21) の例文は仮定条件文の「未実現 (最低条件) - 未実現のパターンであり、主節に叙述モダリティ (20) と評価の許可モダリティ (21) が用いられる。(21) の例文は一般条件文の例文であり、主節に叙述モダリティが用いられる。

3. インドネシア語の条件形式のまとめ

レアリティ概念とモダリティに基づき分析した結果、*kalau*・*jika*・(*apa*)*bila*・*asal(kan)* という 4 つの形式の用法についてまとめる。これらの 4 つの形式は全て仮定条件文の典型的な仮定条件文の用法を用いる。但し、仮定条件文の既定条件文と反事実条件文は 4 つの形式で必ず用いられるわけではない。4 つの *kalau*・*jika*・(*apa*)*bila*・*asal(kan)* の条件文の用法は以下のようである。

1. *kalau* 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法が用いること可能である。しかし、*kalau* 形式では事実条件文の例文が用いられない。*kalau* 形式の仮定条件文では、典型的な仮定条件文、既定条件文、反事実条件文の用法が用いられる。また、*kalau* 恒常条件文では、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。より細かくみると、*kalau* の一般条件文には自然現象、科学的な事態、普遍性の事態等が用いられる。*kalau* の習慣を表す条件文は主に人の習慣を表す条件文である。
2. *jika* 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いることが可能である。また *jika* は *kalau* と同様に事実条件文の例文が用いられない。*jika* 形式の仮定条件文には、典型的な仮定条件文、既定条件文、反事実条件文という用法が用いられる。また、恒常条件文には、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。*kalau* 形式と同様に一般条件文には自然現象、科学的な事態、普遍性の事態が用いられる。習慣を表す条件文は主に人の習慣を表す条件文である。
3. (*apa*)*bila* 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いることが可能である。(*apa*)*bila* 形式は、*jika* や *kalau* と同様に事実条件文の例文が見つからなかった。(*apa*)*bila* 形式の仮定条件文には、典型的な仮定条件文と反事実条件文という用法が用いられる。しかし、(*apa*)*bila* 形式では既定条件文の例文が用いられにくいと考える。また、(*apa*)*bila* 恒常条件文には、一般条件文と習慣を表す条件文が用いられる。*kalau* や *jika* 形式と同様に (*apa*)*bila* の一般条件文には自然現象、科学的な事態、普遍性の事態が用いられると考える。但し、(*apa*)*bila* は特に法律や規則ある文でよく用いられる。
4. *asal(kan)* 形式では仮定条件文と恒常条件文の用法を用いることが可能である。*asal(kan)* 形式は、*kalau*・*jika*・(*apa*)*bila* と同様に事実条件文が用いられない。*asal(kan)* 形式の仮定条件文には典型的な仮定条件文の最低条件文しか用いられない。また、恒常条件文では、一般条件文は普遍性の事態が用いられる。自然現象と科学的な出来事、そして習慣を表す例文が見つからなかったのも、用いられにくい、もしくは用いられない。

以上の4つのインドネシア語の条件文形式の用法は以下の表2ようになる。

表2 kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)条件形式の用法

用法			前件と後件の事態の関係	kalau	jika	(apa)bila	asal(kan)
(A) 仮定	典型的 仮定条件文	1	未実現－未実現	○	○	○	×
		2	避られない－未実現	△	△	△	×
		3	最低条件－未実現	×	×	×	○
	既定条件文	4	事実－未実現	○	○	△	×
	反事実条件文	5	反事実－反事実	○	○	○	×
		6	事実－反事実	○	△	△	×
(B) 恒常	一般	自然現象	7	不問－不問	○	○	○
		科学的	8	不問－不問	○	○	○
		普遍性	9	不問－不問	○	○	○
	習慣		10	事実－事実	○	○	○
(C) 事実	発見		11	事実－事実	×	×	×
	発現		12	事実－事実	×	×	×
	きっかけ		13	事実－事実	×	×	×
	連続動作		14	事実－事実	×	×	×

(筆者作成) ○：使用が可能 △：使用不可能ではないが、用いられにくい ×：使用不可

上の表2から分かるように、kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)形式には、仮定条件文の典型的な仮定条件文と恒常条件文の一般条件文を用いることが可能である。また、kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)形式には、事実条件文は用いられない。事実条件文に当たる用法はインドネシア語の複文では waktu・ketika・saat などの時間関係を表す形式で表される。例えば、以下の例文を検討する。

(23) a. (時宗さん方を) 見に行ったら、奥の方から火が出ていた。(朝日新聞 2010/08/19)

b.○ Ketika/Saat/Waktu pergi melihat rumah Tokimune api keluar

ト・タラ・時 行く 見る 家 時宗 火 出る

dari dalam rumah.

から 中 家

c.?? Kalau pergi melihat rumah Tokimune api keluar dari dalam rumah.

d.?? Jika pergi melihat rumah Tokimune api keluar dari dalam rumah.

e.?? Bila pergi melihat rumah Tokimune api keluar dari dalam rumah.

f.?? Asalkan pergi melihat rumah Tokimune api keluar dari dalam rumah.

リアリティ概念に基づいて分析した結果は、用法に関して asalkan 形式を除く kalau・jika・(apa)bila には違いがほとんど見当たらなかったが、反事実条件文の「事実－反事実」のパタ

ーンが jika と(apa)bila では用いられにくい。従って、仮定条件文と恒常条件文の場合 kalau ・ jika ・ (apa)bila は多くの場合お互いに置き換えが可能である。モダリティ観点からみると、asal(kan)形式を除く仮定条件文の場合、kalau・jika・(apa)bila はモダリティの制限がないが、(apa)bila には意志・勧誘モダリティが用いられにくいという傾向が見られる。以下には、インドネシア語の条件形式の仮定条件文のモダリティのまとめた表である。

表 3 kalau ・ jika ・ (apa)bila ・ asalkan 形式の
典型的な仮定条件文の主節のモダリティの分析した結果

	モダリティ					形式			
						kalau	jika	(apa)bila	asal(kan)
I	表現 類型	1	情報系	a	叙述	○	○	○	○
				b	疑問	○	○	○	×
		2	行為系	a	意志	○	○	△	×
				b	勧誘	○	○	△	×
				c	行為要求	○	○	○	○
		3	感嘆			△	△	△	×
II	評価 と 認識	1	評価	a	必要	○	○	○	×
				b	不必要	○	○	△	×
				c	許可	○	○	△	○
				d	不許可	○	○	△	×
		2	認識	a	断定	○	○	△	△
				b	推量	○	○	△	△
				c	蓋然性	○	○	○	△
				d	証拠性	○	○	△	△
III	説明				「のだ・わけだ」	△	△	△	×
IV	伝達	1	丁寧さ ¹⁰	a	ます形	○	○	○	○
		2	終助詞	b	よ、ぞ、ね等	○	○	△	△

(筆者作成)

○：使用が可能 △：使用不可能ではないが、用いられにくい ×：使用不可能

上の 3 表をみると、典型的な仮定条件文のモダリティに関して、4 つの条件文の形式の中で kalau 形式の使用範囲が最も広い。一方、asal(kan)形式は最も制限されている。jika と(apa)bila 形式のモダリティは基本的に kalau 形式と同じモダリティを用いることが可能であると考ええる。但し、(apa)bila 形式には、意志・勧誘・伝達態度のモダリティが用いられにくいという傾向がある。

4. 日本語の典型的な条件形式とインドネシア語の条件形式の比較

上の 3 節ではインドネシア語の条件文の用法と主節のモダリティについてまとめた。この部

分では、インドネシア語の条件形式は日本語の典型的な条件形式（「ト」「タラ」「レバ」「ナラ」）と比較する¹¹。日本語とインドネシア語の条件形式の用法を比較した結果を表でまとめると以下の表4になる。

表4 日本語の条件文の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の用法

用法			前件と後件の関係	日本語				インドネシア語			
				ト	タ ラ	レ バ	ナ ラ	kalau	jika	(apa) bila	asal (kan)
A 仮 定	典型的	1	未実現－未実現	○	○	○	○	○	○	○	×
		2	最低条件－未実現	×	○	○	×	×	×	×	○
		3	事実－未実現	○	○	○	○	○	○	○	×
	反事実	4	反事実－反事実	○	○	○	○	○	○	○	×
		5	事実－反事実	×	△	△	○	○	△	△	×
B 恒 常	一 般	自然現象	6	不問－不問	○	△	△	△	○	○	×
		科学的	7	不問－不問	○	○	○	△	○	○	×
		普遍性	8	不問－不問	○	○	○	○	○	○	○
	習慣		9	事実－事実	○	○	○	○	○	○	×
C 事 実	発見		10	事実－事実	○	○	○	×	×	×	×
	発現		11	事実－事実	○	○	×	×	×	×	×
	きっかけ		12	事実－事実	○	○	×	×	×	×	×
	連続動作		13	事実－事実	○	×	×	×	×	×	×

(筆者作成)

○：使用が可能 △：使用不可能ではないが、用いられにくいと考える ×：使用不可能

上の表4を基に日本語の典型的な条件形式の用法とインドネシア語の条件形式の用法を比べると次のことが明らかになる。

A. 仮定条件文の共通点と相違点

- 共通点は、日本語の典型的な形式も asal(kan)形式を除くインドネシア語の形式も、仮定条件文の典型的な仮定条件文の「未実現－未実現」、既定条件文の「事実－未実現」、反事実条件文の「反事実－反事実」というパターンが用いられるということである。従って、日本語の4つの典型的な形式について、これらの用法の場合は、基本的にインドネシア語の kalau・jika・(apa)bila に訳すことができる。また、他の共通点は、「ト」形式を除く日本語の典型的な条件形式の「タラ」・「レバ」・「ナラ」形式と、asal(kan)形式を除くインドネシア語の kalau・jika・(apa)bila 形式に、典型的な仮定条件文の「避けられない事態－未実現」と反事実条件文の「事実－反事実」のパターンが用いられる。
- 相違点は、日本語の典型的な形式の「タラ」と「レバ」の2つの形式では、典型的な仮定条件文の「最低条件－未実現」というパターンは用いられるが、「ト」と「ナラ」では

用いられない。一方、インドネシア語の条件文では、asal(kan)形式は最低条件文として用いられるが、kalau・jika・(apa)bila 形式は用いられにくい。日本語の最低条件文を表す「さえ～たら」や「さえ～レバ」という構成は理論的にインドネシア語では asal(kan)形式の用法に対応する。そのため、最低条件を表す条件文の場合「さえ～たら」や「さえ～レバ」は asal(kan)に訳すと適切であると予測される。kalau・jika・(apa)bila に訳すと最低条件の意味が弱くなる。但し、kalau・jika・(apa)bila に saja という言葉を加えることによって最低条件の意味を表すことも可能である。以下の (24) 「レバ」形式の典型的な仮定条件文「最低条件－未実現」の例文を検討する。

- (24) a. NHKは、紅白に代わる視聴率の取れる番組さえあれば、すぐにでもやめるつもりですよ。 (週刊朝日 2007/12/21)
- b. ○NHKは、紅白に代わる視聴率の取れる番組さえあったら、すぐにでもやめるつもりですよ。
- c. ?? NHKは、紅白に代わる視聴率の取れる番組さえあるなら、すぐにでもやめるつもりですよ。
- d. ?? NHKは、紅白に代わる視聴率の取れる番組さえあると、すぐにでもやめるつもりですよ。

インドネシア語の訳：

- (24)' e. ○Asalkan NHK punya program dengan rating pemirsa
 さえ～レバ NHK 持つ 番組 で 視聴率
 tinggi pengganti Merah Putih, bermaksud segera berhenti.
 高い 変わる 紅白 つもり すぐ やめる
- f. ? Kalau NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti
 Merah Putih, bermaksud segera berhenti.
- Kalau saja NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti
 Merah Putih, bermaksud segera berhenti.
- g. ? Jika NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti Merah
 Putih, bermaksud segera berhenti.
- Jika saja NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti
 Merah Putih, bermaksud segera berhenti.
- h. ? Bila NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti Merah
 Putih, bermaksud segera berhenti.
- Bila saja NHK punya program dengan rating pemirsa tinggi pengganti
 Merah Putih, bermaksud segera berhenti.

上の (24) の例文は典型的な仮定条件文「最低条件－未実現」のパターンである。表 4 から分かるように、a の「さえ～レバ」は b の「さえ～たら」に置き換えられるが、c の「さえ～たら」と d の「さえ～と」に置き換えられない。また、インドネシア語の(24)'e の

asal(kan)に訳することができるが、f の kalau、g の jika、h の(apa)bila に翻訳すると最低条件の意味がなくなると予測される。但し、saja を加えれば最低条件という意味が現れる。実際に訳してみたところ表 4 の分析が正しいと証明できる。

以上が日本語の典型的な条件形式とインドネシア語の条件形式の仮定条件文の共通点と相違点である。次に、日本語の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の恒常条件文の共通点と相違点を説明する。

B. 恒常条件文の共通点と相違点

1. 共通点は、日本語の典型的な形式「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」形式はいずれも恒常条件文の一般条件文の普遍性を表す条件文が用いられる。インドネシア語の kalau・jika・(apa)bila・asal(kan) 形式も同じように恒常条件文の一般条件文の普遍性を表す条件文が用いられる。しかし、asal(kan)は最低条件の意味が含まれるので、単なる普遍性を表す条件文を表さない。そのために、典型的な形式の「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」形式の普遍性を表す条件文の場合は、基本的にインドネシア語の kalau・jika・(apa)bila に訳すことができるが、asal(kan)に訳すと少し不自然な文になる。また、日本語の「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」もインドネシア語の kalau・jika・(apa)bila、も恒常条件文の自然現象・科学的な出来事・習慣を表すために用いられる。そのため、自然現象・科学的な出来事・習慣を表す条件文の場合、「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」は kalau・jika・(apa)bila に訳すことが可能である。以下の (25) の習慣を表す例文を検討する。

- (25) a. 仕事の壁にぶち当たると、オフィスを出て、人影のない階段で泣くのだ。
(アエラ 2005/10/17)
- b. ○ 仕事の壁にぶち当たったら、オフィスを出て、人影のない階段で泣くのだ。
- c. ○ 仕事の壁にぶち当たれば、オフィスを出て、人影のない階段で泣くのだ。
- d. ○ 仕事の壁にぶち当たったなら、オフィスを出て、人影のない階段で泣くのだ。

インドネシア語の翻訳：

- (25)' e.○ Kalau mengalami masalah pekerjaan (saya) keluar
ト/タラ/レバ/ナラ 経験する 問題 仕事 (私) 出る
kantor dan menangis di tangga yang tidak ada orang.
オフィス と 泣く で 階段 Relative ~ない いる 人
- f.○ Jika mengalami masalah pekerjaan (saya) keluar kantor dan menangis
ditangga yang tidak ada orang.
- g.○ Bila mengalami masalah pekerjaan (saya) keluar kantor dan menangis
ditangga yang tidak ada orang.
- h.?? Asalkan mengalami masalah pekerjaan (saya) keluar kantor dan menangis
ditangga yang tidak ada orang.

上の (25) は「ト」形式の習慣を表す条件文である。表 4 を見ると、日本語の典型的な形式もインドネシア語の *kalau・jika・(apa)bila* の形式も習慣を表す用法が用いられる。従って、この習慣を表す例文では、「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」はインドネシア語の *kalau・jika・(apa)bila* に訳すことができると予測される。実際に訳してみたところ表 4 の分析が正しいと証明される。

2. 相違点は、日本語の典型的な条件形式とインドネシア語の条件文の形式は恒常条件文の場合ほとんどない。但し、インドネシア語の *asal(kan)* 形式では用いられる恒常条件文の用法が限られている。

以上が日本語とインドネシア語の条件文の仮定条件文と恒常条件文の共通点と相違点である。仮定条件文と恒常条件文の場合、日本語とインドネシア語には共通点が多く、相違点は少ない。仮定条件文と恒常条件文では「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」はほとんど *kalau・jika・(apa)bila* に訳すことが可能である。従って、用法の観点から見ると、仮定条件文と恒常条件文は日本語とインドネシア語の条件文の共通点といえる。

一方、両言語の最大の相違点は事実条件文である。表 3 と表 4 から分かるように、日本語の典型的な条件形式のうち、特に「ト」と「タラ」形式では事実条件文の発見・発現・きっかけ・連続動作の用法が用いられる。これらの事実条件文の用法は *kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* の形式では用いられない。*kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* の形式では事実条件文が用いられないことについて、3 節で説明した。日本語の事実条件文に当たる用法はインドネシア語の複文では *waktu・ketika・saat* などの時間関係を表す形式で表される。

日本語の典型的な形式とインドネシアの条件形式の用法に関する共通点と相違点のまとめは次のように考えられる。日本語の典型的な形式の「ト」と「タラ」形式は仮定条件文、恒常条件文、事実条件文が用いられるが、「レバ」と「ナラ」形式は事実条件文が用いられにくい、又は用いられない。一方、インドネシア語の条件形式の *kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* は仮定条件文と恒常条件文にのみ用いられる。事実条件文の場合、条件形式の代りに *waktu・ketika・saat・begitu* という時間を表す接続詞が使用される。日本語をインドネシア語に訳す時に「ト」・「タラ」・「レバ」・「ナラ」の仮定条件文と恒常条件文を表す場合、*kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* に対応する。しかし、事実条件文を表す「ト」と「タラ」形式はインドネシア語の *kalau・jika・(apa)bila・asal(kan)* に訳されない。従って、インドネシア人にとって「レバ」と「ナラ」形式は理解しやすいが、「ト」と「タラ」は間違いが起こる可能性があると考えられる。これはインドネシア人に対して日本語の条件文を教える際に重要な点の一つである。

続いて、日本語とインドネシア語の条件形式のモダリティ共通点と相違点について述べる。日本語の典型形式とインドネシア語の条件形式の仮定条件文のモダリティの共通点と相違点は以下の表 5 のようにまとめられる。

表 5 日本語の典型的な条件形式とインドネシア語の条件文の仮定条件文のモダリティ

モダリティ						形式							
						日本語の条件形式				インドネシア語の条件形式			
						ト	タ ラ	レ バ	ナ ラ	kalau	jika	(apa) bila	asal (kan)
I	表現 類型	1	情報系	a	叙述	○	○	○	○	○	○	○	○
				b	疑問	○	○	○	○	○	○	○	×
		2	行為系	a	意志	△	○	○	○	○	○	△	×
				b	勧誘	×	○	○	○	○	○	△	×
				c	行為要求	×	○	○	○	○	○	○	○
		3	感嘆			×	○	○	○	△	△	△	×
II	評価 と 認識	1	評価	a	必要	○	○	○	○	○	○	○	×
				b	不必要	○	○	○	○	○	○	△	×
				c	許可	○	○	○	○	○	○	○	○
				d	不許可	○	○	○	○	○	○	△	×
		2	認識	a	断定	○	○	○	○	○	○	○	△
				b	推量	○	○	○	○	○	○	○	△
				c	蓋然性	○	○	○	○	○	○	△	△
				d	証拠性	○	○	○	○	○	○	○	△
III	説明				「のだ・ わけだ」	○	○	○	○	△	△	△	×
IV	伝 達	1	丁寧さ	a	ます形	○	○	○	○	○	○	○	○
		2	終助詞	b	よ、ね等	○	○	○	○	○	△	△	△

(筆者作成)

○：使用が可能 △：使用不可能ではないが、用いられにくい ×：使用不可能

上の表 5 から、日本語の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の仮定条件文のモダリティの共通点と相違点を次のようにまとめる。

I. 表現類型のモダリティの共通点と相違点

1. 共通点は、日本語の典型的な形式でもインドネシア語の条件形式でも情報系の叙述と疑問モダリティが用いられる。
2. 日本語の「ト」と「レバ」形式とインドネシア語の asal(kan)形式にはモダリティの制限があることを除けば¹²、日本語の条件文の典型的な形式とインドネシア語の条件形式は表現類型モダリティについて相違点はほとんどない。

II. 評価と認識のモダリティの共通点と相違点

1. 共通点は、日本語の典型的な条件形式もインドネシア語の条件形式も認識モダリティを用いることが可能であるということである。また、日本語の典型的な条件形式も asal(kan)形式を除くインドネシア語の条件形式も、評価の必要、不必要、許可、不許可モダリティが用いられる。

2. 日本語の典型的な条件形式と asal(kan)形式を除くインドネシア語の条件形式の評価と認識のモダリティに関して、相違点はほとんど見られない。

III. 説明モダリティの共通点と相違点

1. 共通点は日本語の典型的な形式も asal(kan)形式を除くインドネシア語の条件形式も、説明モダリティを用いることが可能である。
2. 日本語の典型的な条件形式と asal(kan)形式を除くインドネシア語の条件形式のモダリティに関して、相違点はほとんど見られない。

IV. 伝達モダリティの共通点と相違点

1. 共通点は日本語の典型的な形式もインドネシア語の条件形式も伝達の終助詞モダリティを用いることが可能である。また、日本語の典型的な形式では伝達の丁寧さモダリティが用いられる。但し、インドネシア語の条件文には日本語のような丁寧さモダリティが用いられないが、言葉の選び方とイントネーションにより丁寧さを表す。
2. 相違点はほとんど見られない。

続いて、日本語の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の恒常条件文のモダリティの共通点と相違点を検討する。日本語の典型的な形式もインドネシア語の条件形式も、恒常条件文の主節では情報系の叙述モダリティと説明モダリティのみ用いられる。従って、恒常条件文のモダリティの場合、日本語の典型的な条件形式とインドネシア語の条件形式は相違点がほとんど見られない。

以上が、日本語の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の仮定条件文と恒常条件文のモダリティの共通点と相違点である。これらの共通点と相違点を分析した結果、日本語の典型的な形式とインドネシア語の条件形式の仮定条件文と恒常条件文のモダリティには共通点が多い。相違点は、日本語の典型的な形式の「ト」形式にはモダリティの制限があるが、インドネシア語の条件形式は asal(kan)を除く kalau・jika・(apa)bila はモダリティに関して制限がほとんどないという点である。但し、bila 形式では行為系の意志、勧誘モダリティと伝達の終助詞が用いられにくいという傾向が見られる。また、「レバ」形式の仮定条件文の従属節が動作性の述語の場合、行為系の意志、勧誘、行為要求モダリティが用いられにくい、又は用いられない。これらはインドネシア人に日本語の条件文を教える際に、重要な点の一つである。

5. インドネシア語の条件形式に関する今後の課題

インドネシア語の条件形式の用法については、asal(kan) 形式を除く kalau・jika・(apa)bila 形式はほぼ明らかにした。asal(kan)形式のまだ明らかになっていない問題は、恒常条件文に関することである。収集したデータから見ると、asal(kan) 形式には恒常条件文の一般条件文の自然現象と習慣を表す例文は見つからなかった。自然現象が現れない理由の一つは、asal(kan) 形式は主に人間が巻き込まれる出来事用いられるからであると考えられる。しかし、明確な説明をするには更なる研究が必要となる。また、習慣の例文が見つからなかった理由は、asal(kan) より他の形式、特に kalau 形式の方がより適切であるからであると考えられるが、理由はまだ明確になっていない。従って、asal(kan)形式の恒常条件文の用法について、更なる研究が必要である。

モダリティの基準を用いて分析した結果、インドネシア語の条件形式のモダリティについて

も、多くの部分が明らかになった。但し、(apa)bila 形式と asal(kan)形式の典型的な仮定条件文では、行為系の意志、勧誘、行為要求モダリティを用いることが可能かどうかという問題が生じる。その理由は、収集したデータには kalau と jika 形式では意志、勧誘、行為要求を用いる例文が見つかったが、(apa)bila 形式と asal(kan) 形式では意志、勧誘、行為要求モダリティを用いる例文が見つからなかったからである。この問題に関する筆者個人の意見では、(apa)bila も asal(kan)も意志、勧誘、行為要求モダリティが用いられるが、制限がある。どのような制限であるのかを確認するために、以下の例文を検討する。

- (26) a. Kalau saja bisa, aku pun mau memeluk nya erat-erat.
 ト/タラ/レバ/ナラ だけ できる 私 も ~たい 抱く 彼女 しっかり
もしできることなら直子を抱きしめてやりたい。 (ノルウェーの森 (上) : 62)
- b. ? Bila saja bisa, aku pun mau memeluknya erat-erat.
 c. ? Asalkan saja bisa, aku pun mau memeluknya erat-erat.
- (27) a. Kalau sudah selesai belajar, ayo main bola. (作例)
 ト/バ/タラ/ナラ ~した 終わる 勉強、 ~ましょう 遊ぶ サッカー
勉強が終わったら、サッカーをやりましょう。 (筆者訳)
- b. ? Bila sudah selesai belajar, ayo main bola.
 c. ? Asalkan sudah selesai belajar, ayo main bola.

上の (26) と (27) の例文は kalau の典型的な仮定条件文であり、主節に意志と勧誘モダリティが用いられる。これらの例文の場合、(26) も (27) も kalau は(apa)bila と asalkan に置き換えにくいと考える。その理由の一つは「mau」という意志モダリティと「ayo」という勧誘モダリティは口語的な形なので、bila 形式や asal(kan)形式に置き換えにくいと考えられる。一方、(apa)bila と asal(kan)の例文には「mau」は文語的な形の「ingin/hendak」に替えると、(26b) と (26c) の例文は自然な文になる。このような問題は本研究におけるレアリティやモダリティという分析の枠組みでは明確に説明できない。従って、他の枠組みが必要である。

インドネシア語の条件形式には kalau ・ jika ・ (apa)bila ・ asal(kan)以外に seandainya ・ andaikata ・ sekiranya などの形式が存在する。これらの seandainya ・ andaikata ・ sekiranya 形式は asal(kan)形式と同じように使用範囲が限られていると考える。例えば、以下の例文を検討する。

- (28) a. Kalau tidak cukup bukti, kasus Yusril harus dihentikan.
 ト/バ/タラ/ナラ NEG 足りる 証拠 事件 ユスリル ~ばならない 止める
もし証拠が足りなかったら、ユスリルさんの事件は止めなければならない。
 (MediaIndonesia 2011/1/31)
- b. ○ Seandainya/andaikata/sekiranya tidak cukup bukti, kasus Yusril harus dihentikan.

(29) a Kalau bingung maka gagapnya semakin parah.

ト/バ/タラ/ナラ 混乱 すると どもり もっと ひどい

混乱するとどもりがひどくなった (ノルウェイの森 : 34) (Norwegian Wood: 26)

b. ?? Seandainya/andaikata/sekiranya bingung maka gagapnya semakin parah.

上の (28) a と (29) a の例文は *kalau* 形式の仮定条件文と恒常条件文の習慣を表す例文である。(28) の仮定条件文では *kalau* は *seandainya*・*andaikata*・*sekiranya* に置き換えることが可能であり、文の意味がほとんど変わらない。しかし、(29) の恒常条件文の習慣を表す条件文では、*kalau* は *seandainya*・*andaikata*・*sekiranya* に置き換えると不自然な文になる。従って、*seandainya*・*andaikata*・*sekiranya* 形式は仮定条件文が用いられるが、習慣を表す条件文が用いられにくいと考えられる。しかし、これは暫定的な結論であり、分からない部分が多いので、詳しく分析する必要がある。さらに、使用範囲だけではなく、*seandainya*・*andaikata*・*sekiranya* 形式のモダリティについても詳しく分析する必要がある。従って、*seandainya*・*andaikata*・*sekiranya* 形式の用法やモダリティについて今後の研究課題とする。

前述のようにインドネシア語の *kalau*・*jika*・(apa)bila・asal(kan)形式は日本語の条件形式と異なり、事実条件文が用いられない。その代わりに、*waktu*・*ketika*・*saat*・*begitu* という時間関係を表す形式が日本語の事実条件文に対応する。以下の例文を検討する。

(30) a. (時宗さん方を) 見に行ったら、奥の方から火が出ていた。(朝日新聞 2010/08/19)

b. ○ Waktu /Ketika/Saat pergi melihat rumah Tokimune api keluar

ト/タラ/時に 行く 見る 家 時宗さん 火 出る

dari dalam rumah.

から 中 家

c. ?? Kalau/Jika/bila/asalkan pergi melihat rumah Tokimune api keluar

上の (30) の例文は「タラ」形式の事実条件文の発見という用法である。この例文では、「タラ」はインドネシア語の条件形式の *kalau*・*jika*・(apa)bila・asal(kan)に訳されないが、時間関係を表す接続語の *waktu*・*ketika*・*saat*・*begitu* に訳することが可能である。但し、*begitu* に訳すと、やや不自然な文になる。*waktu*・*ketika*・*saat*・*begitu* の用法やモダリティの制限、またこれらと他の条件形式の *kalau*・*jika*・(apa)bila・asal(kan)形式との関係、さらに日本語の事実条件文を表す「ト」や「タラ」形式との対照研究は今後の課題とする。

注 :

1. 前田 (2009 : 18) によれば、レアリティとは、言語によって表された事態と、現実との事実関係である。前田は、前件と後件の事態が事実か未実現かという判定を基にして、日本語の条件文を仮定的条件文と非仮定的条件文の2つに大別している。
2. 日本語記述文法研究会 (2003 : 1) によれば、文は、命題とモダリティという2つの意味的な側面から成り立っている。命題は、その文が伝える事柄的な内容を担う。一方、モダリティは、その文の内容に対す

- る話し手の判断、発話状況やほかの文と関係、聞き手に対する伝え方といった文の述べ方を担う。
3. 仮定条件文とは、現実には生じていない事態を仮定し、その結果として生じるであろう事態を予想するものである。つまり、前件の事態も後件の事態も成立していないという意味である。
 4. 恒常条件文とは、ある条件のもとで必ずそのような事態が生じることを表す。従属節の事態が成立する場合、必ず主節の事態も成立するという意味である。そのため、一般的と考えられる出来事、自然件な出来事、科学的な出来事、習慣的な出来事、反復的な出来事は恒常条件文に分類される。
 5. 事実条件文の重要な特徴は、文末の述語部分が過去形ということである。この過去形の意味は、既に起こった出来事を事実として捉えている。つまり、従属節の事態も主節の事態も成立した事態である。従属節の事態と主節の事態は一回性的な結びを表している。
 6. 文の伝達的な表し分けを表すモダリティはその文がどのような伝達的な機能を担うのかという、文の基本的な性質を決定するものであり、**表現類型のモダリティ**と呼ばれている。表現類型のモダリティは情報系と行為系と感嘆という3つモダリティに分けられている。（日本語記述文法研究会 2003：15）
 7. 事態に対する捉え方を表すモダリティとは命題によって表される事態に対する話し手の捉え方を表すものであり、**評価と認識のモダリティ**と呼ばれている。このタイプは評価と認識の2つに分けられている。評価のモダリティとは、話し手が何らかの事態を述べ伝える時に、その事態に対する話し手の評価的な捉え方を表すものである。評価は必要、許可・許容、不必要、不許可・不許容という4つのモダリティに分類される。認識のモダリティとは、事態に対する話し手の認識的な捉え方を表すものである。認識のモダリティには、断定、推量、蓋然性、証拠性という4つのモダリティタイプがある。（日本語記述文法研究会 2003：91・133）
 8. 先行文脈と文との関係づけを表すモダリティは**説明モダリティ**と呼ばれる。説明のモダリティは、主に「のだ」「わけだ」「からだ」によって表される。（日本語記述文法研究会 2003：189）
 9. **伝達態度のモダリティ**とは、話し手がその文をどのように聞き手に伝えようとしているかに関わるモダリティである。伝達には、普通形と丁寧形の選択による丁寧さのモダリティと終助詞によって表される伝達態度のモダリティがある。丁寧さのモダリティとは、聞き手に対して何かを伝えようとするとき、聞き手と自分との関係や状況などから、どのようなスタイルの文を選ぶかという選択を行わなければならない場合である。伝達態度のモダリティとは、話し手が発話状況をどのように認識し、聞き手にどのように示そうとしているかを終助詞によって表すものである。伝達態度のモダリティには伝達に関わる「よ」「ぞ」「ぜ」「さ」「わ」と認識・詠歎に関わる「ね」「な」「なあ」「よね」がある。（日本語記述文法研究会 2003：239）
 10. インドネシア語では日本語の「～です」、「～ます」のような丁寧さモダリティというものは見当たらなかった。しかし、言葉の選び方とイントネーションによればその文の丁寧さが決まる。
 11. ここで取りあげたインドネシア語と日本語の典型的な条件形式の用法と主節モダリティの分析、および比較の結果は、筆者が2014年に提出した「日本語とインドネシア語の条件文の日本語とインドネシア語の条件文の対照研究－用法と主節のモダリティを中心に－」という博士論文の一部である。
 12. 「レバ」形式の主節のモダリティについて分析した結果、前件の述語が動作性の場合、主節に意志、勧誘、行為要求のモダリティが用いられにくいということが分かった。この結果は、多くの先行研究と同じである。

【参考文献】

- アリ アルタディ (2011) 「日本語条件文の分類からみたインドネシア語の条件文の用法について」『語学教育研究論叢』第 28 号 pp.345－366 大東文化大学語学教育研究所
- アリ アルタディ (2014) 「日本語とインドネシア語の条件文の対照研究－用法と主節のモダリティを中心に」『博士論文』大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻
- 有田節子 (1993a) 「日本語の条件文と知識」益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』pp.41－71 くろしお出版
- 田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究』白帝社
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『条件表現』くろしお出版
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』くろしお出版
- 益岡隆志 (編) (2006) 『シリーズ言語対照 6 条件表現の対照』くろしお出版
- Alwi, Hasan. Dardjowidjojo, Suejono. Lipoliwa, Hans. Moelono, Anton (2003) *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia*, Balai Pustaka Jakarta.
- Chaer, Abdul (2006) *Tata Bahasa Praktis Bahasa Indonesia*, Rineka Cipta, Jakarta.
- Kridalaksana, Harimurti (1999) *Tata Wacana Deskriptif Bahasa Indonesia*, Fakultas Sastra Universitas Indonesia, Jakarta.
- Kridalaksana, Harimurti (2005) *Kelas Kata Dalam Bahasa Indonesia*, Gramedia, Jakarta
- Sneddon, James Neil (2010) *Indonesian A Comprehensive Grammar*, Routledge New York.

【用例出典】

- I. 聞蔵 II のビジュアル：朝日新聞記事データベース『朝日新聞』『アエラ』『週刊朝日』
- II. 小説
- 井上靖 『風林火山』新潮社 (2006 年 八十七刷)
- 島田洋七 『佐賀のがばいばあちゃん』徳間書店 (2006 年)
- 夏目漱石 『坊ちゃん』角川文庫 (1987 年 五十一版)
- 吉川英治 『上杉謙信』講談社 (1991 年 第四刷)
- 村上春樹 『ノルウェイの森 (上)』講談社 (2009 年 第二十九刷)
- 村上春樹 『ノルウェイの森 (下)』講談社 (2009 年 第二十九刷)
- III. インドネシア語に翻訳された日本の小説
- Diah Faoziah & Fatmawati Djafri (翻訳者) (2010) 『FURIN KAZAN』, Kانشa Books
- Indah.S.Pratidina (翻訳者) (2011) 『Nenek Hebat dari Saga』, Kانشa Books
- Jonjon Johana (翻訳者) (2012) 『BOTCHAN』, Kانشa Books
- Jonjon Johana (翻訳者) (2009) 『Norwegian Wood』, Kepustakaan Populer Gramedia
- Ribeka Ota (翻訳者) (2012) 『UESUGI KENSHIN』, Kانشa Books

セレベス上位語群と南スラウェシ語群の關係
**Perhubungan Genealogis di antara Kelompok Bahasa Atas Selebes
dan Kelompok Bahasa Sulawesi Selatan**

山口真佐夫 (摂南大学)
YAMAGUCHI Masao (Universitas Setsunan)

Abstrak

Makalah ini bertujuan untuk meneliti pengelompokan bahasa daerah di Pulau Sulawesi dan pulau-pulau sekitarnya. Ruang lingkup penelitian ini kelompok bahasa atas Selebes dan kelompok bahasa Sulawesi Selatan. Dalam penelitian ini diteliti perhubungan genealogis di antara kelompok bahasa atas Selebes yang terdiri atas kelompok bahasa Tomini-Tolitoli, Saluan-Banggai, Bungku-Tolaki, Kaili-Pamona, Muna-Buton, dan Wotu-Wolio dengan kelompok bahasa Sulawesi Selatan.

Melalui penelitian kualitatif, ternyata terdapat gejala yang relevan dalam kelompok bahasa atas Selebes dan kelompok bahasa Sulawesi Selatan. Gejalanya antara lain, adanya penanda adjektiba *mV-* (*V* terdapat varian vokal) yang berasal dari **ma-* di samping penanda adjektiba lain yang berlainan dalam setiap kelompok bahasa dan adanya prefiks pembentuk verba *si-* walaupun tidak ditemukan dalam semua kelompok bahasa. Ditemukan juga gejala yang berlainan di antara kelompok bahasa atas Selebes dan kelompok bahasa Sulawesi Selatan. Misalnya, konsonan yang dapat menduduki posisi akhir kata dasar. Secara umum, anggota bahasa dari kelompok bahasa atas Selebes merupakan bahasa vokalis dan suku kata terakhir terbuka, sedangkan anggota bahasa dari kelompok bahasa Sulawesi Selatan terdapat konsonan pada posisi akhir kata dasar walaupun terbatas. Akan tetapi, gejala ini terdapat kekecualian. Kelompok bahasa Saluan-Banggai, terdapat sejumlah konsonan yang jenisnya lebih banyak daripada kelompok bahasa Sulawesi Selatan. Sebagian besar anggota bahasa dari kelompok bahasa atas Selebes memiliki fonem konsonan frikatif labial seperti ϕ dan β (bilabial) serta f dan v (labio-dental). Fonem tersebut sebagian besar diwujudkan dari **b*, dan terdapat salah satu di antara keempat jenis fonem labial tersebut dalam sebuah bahasa (atau dialek). Gejala tersebut yang menonjol dalam kelompok bahasa atas Selebes tidak terdapat dalam kelompok bahasa Saluan-Banggai.

Berdasarkan penelitian selama ini, penulis menekankan supaya meneliti kembali kelompok bahasa Tomini-Tolitoli, Saluan-Banggai, Bungku-Tolaki, Kaili-Pamona, Muna-Buton, Wotu-Wolio, dan Sulawesi Selatan secara kualitatif untuk dikelompokkan lagi.

Penelitian ini dibantu oleh JSPS KAKENHI Grant Number 21520455 (tahun 2009-2012) dan 24520483 (tahun 2012-2016).

0. 序

インドネシア共和国のスラウェシ島および周辺の行政上含まれる島々には、複数の語群が分布している。それらの語群分類は時代により変わってきている。本稿では、これまでの語群分類を考察した上で、スラウェシ島の北部ミナハサ半島および南西部を除いた地域に分布するセ

レベス上位語群と南西部に分布する南スラウェシ語群の系統関係について論じたものである。

本研究は JSPS 科研費 21520455（平成 21～23 年度）、24520483（平成 24～27 年度）の助成を受けたものである。

1. 1. 中間祖語と語群

現在スラウェシ島に分布している言語（＝現代語）はオーストロネシア語族に属している¹。そしてこれらの言語は、かつて存在した共通の言語、原オーストロネシア語から分岐したものである。通時的にみれば、祖語と現代語の間に中間祖語が、共時的にみれば語族と各言語の間には語派、語群が設定される。

実際には中間祖語も語群も単一の場合はあまりない²。通時的には第 1 中間祖語、第 2 中間祖語等の複数の中間祖語を建てる必要がある。共時的には上位語群、語群、下位語群等を設定する必要がある。図式化すれば以下ようになる。

通時	祖語	第 1 中間祖語	第 2 中間祖語	第 3 中間祖語	第 4 中間祖語	・ ・ ・ ・ ・	現代語
共時	語族	語派	上位語群	語群	下位語群	・ ・ ・ ・ ・	言語

本研究の対象は、上記の第 2 中間祖語以下、あるいは上位語群以下である。

1. 2. 本稿で用いる語群名

スラウェシ島の諸語群についてはこれまで多様な語群名が用いられてきた。本稿で筆者が用いる語群名はサンギル（Sangir）語群、ミナハサ（Minahasa）語群、ゴロンタロ（Gorontalo）・モンゴンドウ（Mongondow）語群、トミニ（Tomini）・トリトリ（Tolitoli）語群、サルアン（Saluan）・バンガイ（Banggai）語群、ブンク（Bungku）・トラキ（Tolaki）語群、カイリ（Kaili）・パモナ（Pamona）語群、ムナ（Muna）・ブトン（Buton）語群、ウォトゥ（Wotu）・ウォリオ（Wolio）語群、南スラウェシ（Sulawesi Selatan）語群である。

上記の諸語群中、SIL によってセレベス上位語群に含まれるとされるのが、トミニ・トリトリ語群、サルアン・バンガイ語群、ブンク・トラキ語群、カイリ・パモナ語群、ムナ・ブトン語群、ウォトゥ・ウォリオ語群である（*ethnologue*, 2013）。スラウェシ島の言語は、サンギル語群、ミナハサ語群、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群からなるフィリピン上位語群、セレベス上位語群、そして上位語群に属さない南スラウェシ語群に分けられることになる（*ethnologue*, 2013）。

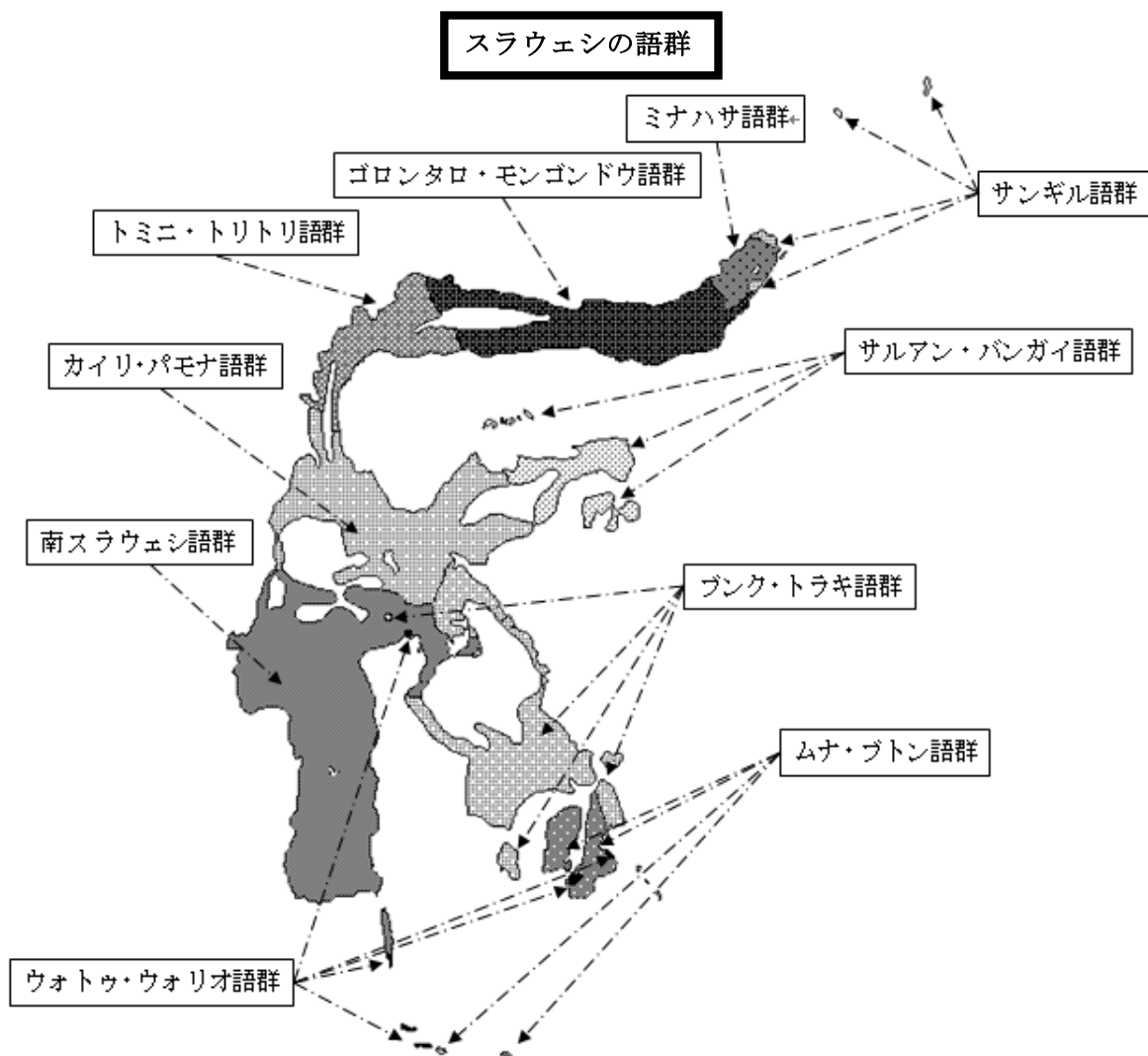
2. スラウェシ島およびその周辺に分布する言語

スラウェシ島およびその周辺には多くの言語が分布している。Pusat Bahasa によればスラウェシの言語数は外来の 5 言語を含め 58 言語である（Pusat Bahasa, 2008: 15）。一方、SIL による *ethnologue* 最新版では外来の 7 言語およびスラウェシから外部に出ていったと思われる 3 言語を含め 120 言語である（*ethnologue*, 2013）。この大きな差異は、Pusat Bahasa が計量方言学を

¹ 中国語諸方言等の外来の非オーストロネシア系の言語を除く。

² 本稿と関係する中間祖語の再構には原南スラウェシ語、原ブンク・トラキ語がある（Mills, 1975; Mead, 1998）。

用い、SIL が語彙統計学を用いたことによる (Pusat Bahasa, 2008: 3)。ここではこれまでの語群分類を、二つの時期に分けて説明する。



2.1. 語群分類 I (～1960 年代)

この時期は語彙統計学、計量方言学がまだ用いられていない。

2.1.1. K. F. Holle, 1894

Holle が作成した言語地図は、スラウェシ島の言語地図としては最古のものである³。この言語地図には語群名は書かれていないが、スラウェシ島の言語を I～V のグループに分けている⁴。そして現在の語群分類とは異なる点が多い。I は、ほぼ現在のサンギル語群、ミナハサ語群、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群、(バンガイ語を含まない) サルアン・バンガイ語群、トミニ・トリトリ語群にあたる。II は、カイリ・パモナ語群、南スラウェシ語群にあたる。III は、一言

³ J.L.A. Brandes と J.C.G. Jonker の協力を得ている。

⁴ 同地図中の IV はスラ諸島のスラ (Sula) 語であり、本稿の対象ではない。

語のみでライヨロ (Laiyolo) 語である。そしてVは、(サルアン語は含まない) サルアン・バンガイ語群、ブンク・トラキ語群、ムナ・ブトン語群等となっている。

2.1.2. N. Adriani, A. C. Kruijt, 1914

オランダの言語学者 Adriani と人類学者 Kruijt による中部スラウェシのバレー (Bare'e=パモナ) 語等に関する3巻本の第3巻には語群の説明と巻末に言語地図が載っている (Adriani, 1914: 346-354)。この説明および言語地図には、ミナハサ半島の先端部 (おおよそ現在のゴロンタロ州と北スラウェシ州の州境以東) と南スラウェシのスラヤル島の最南部は含まれていない。

Holle の言語地図よりは幾分現在の語群分類に近くなっているが、現在のカイリ・パモナ語群が西トラジャグループ (West-Toradjasche Groep) と東トラジャグループ (Oost-Toradjasche Groep) に分けられている点、現在の南スラウェシ語群がマンダル (Mandar)、サッダン (Sa'dan) (=トラジャ (Toraja) 語)、ブギス (Bugis)・マカッサル (Makassar) に分けられている点等が大きく異なっている⁵。そして重要なことは、スラウェシ島にフィリピン語群を設定したことである (Adriani, 1914: 347-348)。

2.1.3. S. J. Esser, 1938

オランダ人言語学者である Esser はインドネシア全体の言語地図を作成している。この言語地図はインドネシアを中心に長く使われている (*Ensiklopedia Indonesia*, n.d.; Сирк, 1975: 11; Kridalaksana, 1993, 2008)。

Esser はスラウェシに8語群を設定している。ただし、その中には groep (グループ、語群) と南スラウェシ語群のように単に言語 (taal) の複数形 (talen) を用いて表しているものがある。そしてサンギル語群、ミナハサ語群 (モンゴンドウ語を含む) をフィリピングループとしている。

なお、Esser によればインドネシアに存在するマライ・ポリネシア語族 (=現オーストロネシア語族) の17の語群・諸語中、8語群・諸語がスラウェシに存在することになる。

2.1.4. R. Salzner, 1960

1960年に出版された Salzner による『インド・太平洋地域言語地図』には2枚から成るスラウェシの言語地図が含まれている。そしてスラウェシの言語は10語群に分類されている (Salzner, 1960: 9-10, 13-15)。Salzner の分類は、オーストロネシア語族より上位の分類も考慮しているが、ここでは直接本稿と関連する部分を説明する (Salzner, 1960: 1)。

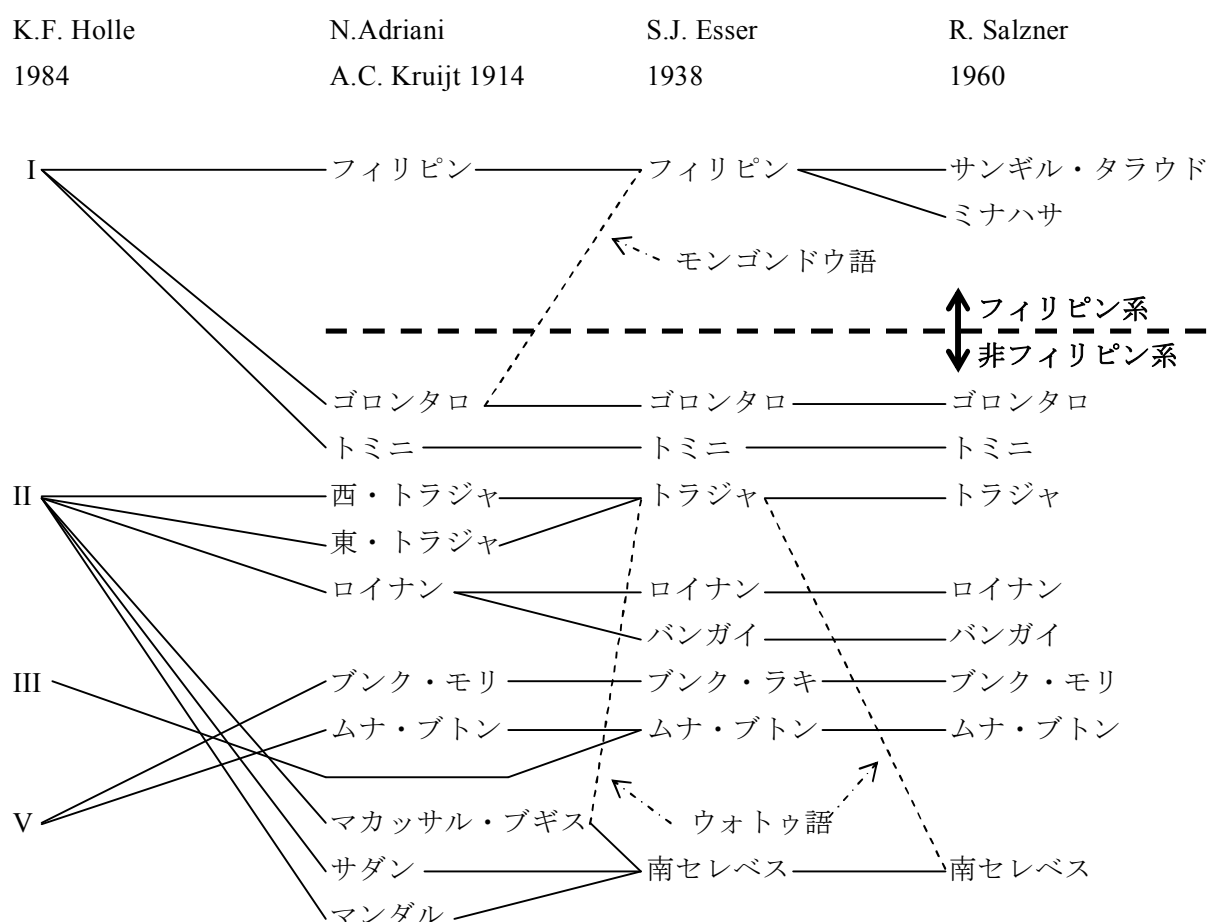
Salzner の分類によればスラウェシに分布する言語は以下ようになる (Salzner, 1960: 7)。インドネシア (Indonesisch) → 西インドネシア (Westindonesisch) → 北西インドネシア (Nordwestindonesisch) → サンギル・タラウド語群とミナハサ語群、それ以外のスラウェシの語群は、インドネシア→西インドネシア→南西インドネシア (Südwestindonesisch) に含まれる、としている。なお Salzner の北西インドネシアには、現在他のオーストロネシア語族の言語から最初に分離したとされる台湾の諸言語もフィリピンの諸言語と共に含まれている。

⁵ ここで用いている西トラジャグループ、東トラジャグループはそれぞれほぼ現在のカイリ語 (あるいはカイリ下位語群)、パモナ語 (=バレー語、あるいはパモナ下位語群) にあたるもので、南スラウェシ語群のトラジャ語 (=サッダン語) とは峻別しなければならない。

現在ゴロンタロ語と共にゴロンタロ・モンゴンドウ語群（あるいはゴロンタロ語群）を形成するとされるモンゴンドウ語はミナハサ語群の1言語として扱われている (Salzner, 1960: 9-10)。

現在ウォトゥ・ウォリオ語群に属するとされているウォトゥ語は、Adriani, Kruijt および Salzner によってマカッサル・ブギス語群あるいは南セレベス語群に属するとされている。しかし、Esser はトラジャ語群に分類している。

ここまでの語群分類の変遷について表にすると以下ようになる。



2.2. 語群分類Ⅱ（1960年代～現在）

1970年代以降、1950年代にアメリカの言語学者 M. Swadesh によって始められた言語年代学および語彙統計学が、スラウェシの言語に適用され始めた。インドネシアにおいては、語彙統計学が1960年に H. Kridalaksana によって紹介されている (Kridalaksana, 1964: 319-352)。そしてスラウェシの言語については、1970年代初頭に現地研究者がカイリ・パモナ語群の言語を語彙統計学に基づき分類した (Masjhuda, 1972)。

2.2.1. D.F. Barr, S.G. Barr, C. Salombe, 1979

この研究の対象は中スラウェシ州内に分布する言語に限られているが、これ以降スラウェシの言語に対して語彙統計学が SIL の研究者によって盛んに用いられる端緒となったものである。なお、現在南スラウェシ州のように SIL の研究が行われなくなった地域もあるが、中スラウェ

シ州、東南スラウェシ州などではまだ活動が行われている。

SIL 所属の D.F. Barr、S.G. Barr は、中スラウェシ州に分布する言語について語彙統計学に基づいて語群・言語分類を行っている。対象は中スラウェシ州に分布する 28 言語（外来言語であるバジャウ（Bajau）語を含む）である（Barr, 1979: 23-27）。

Barr 達の研究によれば、中スラウェシ州にはトミニ、カイリ・パモナ、ブンク・モリ（Mori）、サルアン・バンガイの 4 下位語群（Sub-Group）と下位語群に属さないバラエサン（Balaesang）語、バンガイ語、バジャウ語が存在することになる（Barr, 1979: 27-27）。下位語群中、トミニ、カイリ・パモナ、ブンク・モリは（語群名は与えられていないが）合流し西部インドネシア（West Indonesian）に遡ることになっている（Barr, 1979: 27）。

2.2.2. J. N. Sneddon, 1981^a, 1981^b

1981 年に出版された『太平洋地域言語地図』には、J.N. Sneddon により作成されたスラウェシ島北部と南部の言語地図が含まれている（Sneddon, 1981^a, 1981^b）。Sneddon の語群分類の特徴は、語群を上位語群（Supergroup）、語群（Group）、下位語群（Subgroup）に分けている点である。スラウェシには、サンギル・ミナハサ上位語群、モンゴンドウ・ゴロンタロ上位語群、中央上位語群、および上位語群持たない独立した語群としてのムナ・ブトン語群、南スラウェシ語群があるとしている。

2.2.3. *ethnologue*, 1996, 2000, 2005, 2009, 2013

1935 年にメキシコで最初の本格的現地調査を行った Summer Institute of Linguistics（現 SIL）は、1981 年にはマカッサルのハサヌッディン大学と協定を結び本格的にスラウェシで言語調査を始める（*Summer Institute of Linguistics di Indonesia*. 1990）。ここでは、現在 web 版で見ることが出来る *ethnologue* の 1996, 2000, 2005, 2013 年版に基づいて説明する。

現在、オーストロネシア語族は台湾の諸言語が先ず分離したと考えるのが一般的になっている。そして台湾の言語を除いた部分がマラヨ・ポリネシア（Malayo-Polynesian）である。スラウェシの言語に関しては、*ethnologue* の 2005 年版と 2009 年版の間で語群分類上の大きな変更がある。以下で、1996, 2000, 2005, 2009, 2013 年版の違いを説明する。

2.2.3.1. *ethnologue*, 1996, 2000

スラウェシの言語は、サンギル・ミナハサ語群、モンゴンドウ・ゴロンタロ語群、中央スラウェシ語群、ムナ・ブトン語群、南スラウェシ語群に分けられ、これらの語群はスラウェシ上位語群に含まれる。なお、中央スラウェシ（Central Sulawesi）語群は東方（Eastern）下位語群と西中央（West Central）下位語群からなっている。語群分類に関して 1996 年版と 2000 年版の違いはない。

2.2.3.2 *ethnologue*, 2005

この版では 2 点、1996 年版、2000 年版とは異なった語群分類が行われている。サンギル・ミナハサ語群がサンギル語群とミナハサ語群に分けられたこと、中央スラウェシ語群がなくなりトミニ・トリトリ語群、サルアン・バンガイ語群、ブンク・トラキ語群、カイリ・パモナ語群

に分けられたことである。また、ムナ・ブトン語群がムナ・ブトン語群とウォトゥ・ウォリオ語群に分けられている。なお、モンゴンドウ・ゴロンタロ語群は名称がゴロンタロ・モンゴンドウ語群に変わっている。南スラウェシ語群を加えて、スラウェシ上位語群には 10 語群が含まれることになる。

2.2.3.3 *ethnologue*, 2009, 2013

2009 年版と 2013 年版は、基本的に大きな相違はない。相違点は、スラウェシ固有の言語数が 111 から 110 になっている点である。これは 2009 年版で独立した言語として扱われたトアラ語が 2013 年版ではタエ (Tae') 語の方言となったことによる。

本研究と関連する 2009、2013 年版とそれ以前の版との大きな違いはスラウェシの諸語群が 2005 年版以前ではスラウェシという上位語群に属していたとしていた点が、3 つの上位語群と上位語群に属していない南スラウェシ語群からなる、とした点である。2009、2013 年版の語群分類では、サンギル語群、ミナハサ語群、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群がフィリピン上位語群に属し、トミニ・トリトリ語群、東方語群 (Eastern)、カイリ・パモナ語群、ウォトゥ・ウォリオ語群がセレベス上位語群に属するとなる。また南スラウェシ語群は、上位語群を持たない語群で、その下にブギス、マカッサル、北方、セコ (Seko)、レモラン (Lemolang) の下位語群を持っていることになる。2009、2013 年版とそれ以前との違いは以下のように図式化することが出来る。



マラヨ・ポリネシア語派からスラウェシ上位語群を経て (さらにいくつかの中間語群を経て) 各言語に分かれているとされていたものが、スラウェシの各言語は最終的に 2 上位語群と上位語群を持たない語群を経て、かつフィリピン上位語群は同系のフィリピンの言語と共にマラヨ・ポリネシア語派に直接繋がることになる。すなわち、フィリピン上位語群、セレベス上位語群、南スラウェシ語群は一度も系統上のつながりを持たずに各 (上位) 語群に分かれたことになる。2013 年版によれば、オーストロネシア語群—マラヨ・ポリネシア語派—19 上位語群 (上位語群を持たない語群を含む) という分類になる。本稿で考察するセレベス上位語群と南スラウェシ語群は (フィリピン上位語群同様) オーストロネシア語族— (台湾の諸言語を除いた) マラヨ・ポリネシア語派—19 上位語群中の 2 (上位) 語群となる。この点を通時的にみれば、原オーストロネシア語→マラヨ・ポリネシア (第 1) 中間祖語→19 (第 2) 中間祖語ということになる。

SIL 分類は語彙統計学に基づいて行われている。そのため下位語群、言語、方言のように分類の下位の段階 (比較的高い一致率の部分) は細分化される傾向がある。本稿の対象でもあるブンク・トラキ語群のワウオニイ (Wawonii) 語の場合は Austronesian→Malayo-Polynesian

→Celebic→Eastern→Southeastern→Bungku-Tolaki→Eastern→East Coast→Wawonii 語となる。オー
ストロネシア語族からワウオニイ語まで9段階の分類を経ることになる。しかし分類の上位の
段階（比較的低い一致率の部分）ではセレベス上位語群が直接マラヨ・ポリネシア語派から分
かれているように粗い分類になることが判る。

2.4. Pusat Bahasa, 2008

2008年にPusat Bahasaから出版された計量方言学に基づくインドネシア全土の言語地図によ
ると、スラウェシ島およびその周辺には58言語が存在し、その中の5言語が他の地域からの言
語とされている（Pusat Bahasa, 2008: 15）。

同書と *ethnologue* のスラウェシの言語数は2倍ほどの違いがある。*ethnologue* で2言語として
扱われているものが、Pusat Bahasa では1言語として扱われる場合がある。例えば、ブトン島
に分布するカマル（Kamaru）語とラサリム（Lasalimu）語は *ethnologue* によってそれぞれウオト
ウ・ウオリオ語群とムナ・ブトン語群の言語とされている（*ethnologue*, 2013）。一方 Pusat Bahasa
ではラサリム・カマル語という1言語として扱われている（Pusat Bahasa, 2008: 82）。さらに
ethnologue に載っている言語が Pusat Bahasa に現れない場合もある。例えば、西スラウェシ州
に分布するカイリ・パモナ語群のトポイヨ（Topoiyo）語は Pusat Bahasa には載っていない。
なお、Pusat Bahasa の研究は語群に関しては言及がない。

3. セレベス上位語群

ここではセレベス上位語群の基本的な特徴について説明する。

この上位語群に属する諸語群は、音韻体系から見た場合に、調音点が唇音（両唇音、唇歯音）
で調音方法が摩擦音の音素が存在することである。例えばトミニ・トリトリ語群のバラエサン
語の/v/、ブंक・トラキ語群のモリ語の/B/、ムナ・ブトン語群のチアチア（Ciacia）語の/ɸ/、
ウオトウ・ウオリオ語群のウオリオ語の/f/、カイリ・パモナ語群のレド・カイリ（Kaili Ledo）
語の/v/等である⁶。

さらにセレベス上位語群全体に共通する大きな特徴としては、語末の開音節がある⁷。原オー
ストロネシア語の再構形は*CV(N)CV(C)である。語末が開音節である再構形もあるが、多くの
再構形は語末に子音を持っている。セレベス上位語群の言語および南スラウェシ語群の言語は
祖語の語末子音の種類を減らしてきている。減少していく過程は、単に語末子音が脱落するの
ではなく、複数の子音が合流する過程を経ている。歴史的過程を考える上で語末の子音は重要
である。

基語末の音韻を含めて祖語の音韻が現代語でどのように具現されるかは、比較言語学におけ
る基本的な特徴であり、弁別基準である。サルアン・バンガイ語群の言語については上記の諸
語群と異なった特徴がある。まず唇音のバリエーションがないこと、そしてさらに重要と思わ
れることは語末に複数の子音が現れることである。例えばサルアン語には語末に/p, t, d, k, r, l, s,
m, n, ŋ/が現れる（Karsana, 2012: 19-21）。また、バンガイ語は/p, t, k, r, l, s, m, n, ŋ/が現れる
（Syamusuddin, 1997-1998: 21-25）。この語末に現れる子音の種類は、語末は基本的に開音節で

⁶ チアチア語には有声両唇入破音/b/も存在する（Hanan, 2013: 69-70）。

⁷ 例えばカイリ・パモナ語群の言語には、音素としての機能を持たない[ʔ]が現れることがある。

ある他のセレベス上位語群の語群とも大きく異なり、後述する南スラウエシ語群の言語とも異なる。

母音に関しては語末の子音で差異を見せたサルアン・バンガイ語群の言語を含めて5母音体系である。

4. 南スラウエシ語群

ここでは南スラウエシ語群の基本的な特徴について説明する。

南スラウエシ語群の言語の特徴は、形態素中の重子音、および形態素結合の際に現れる重子音化である。基本的にセレベス上位語群の言語においては音素結合としての重子音も、形態素結合としての重子音化も現れない。

語末の子音に関しては、言語により差異はあるが限られている。最も少ないものはブギス語等の/ʔ, ŋ/やマカッサル語の/k, ŋ/である。多いものではマンダル語の/ʔ, s, ŋ, l, r/である。語末の子音が/ʔ, ŋ/（マカッサル語は/k, ŋ/）の言語は下位語群に属さないブギス語、マカッサルとセコ下位語群の言語であり、それ以外の北方下位語群に属する言語は3種類以上の子音が語末に現れる⁸。

ethnologue では南スラウエシ語群に属するとされている、南スラウエシ州北ルウ県でブギス語ルウ（Luwu）方言とタエ語域で言語島となっているレモラン語は語末が開音節であり非南スラウエシ語群の言語とみるべきであろう⁹。

子音音素については特に特徴はないが、母音音素に関しては5母音体系ではなく、6母音体系の言語・方言もある。ブギス語の/a/、ピトゥ・ウルンナ・サル（Pitu Ulunna Salu）語バンバン（Bambam）方言の/æ/である。しかしブギス語の/a/は、ブギス語内における新しい変化であり*a>əも*a>əも起きている（Yamaguchi, 2013: 119-120）。また、ピトゥ・ウルンナ・サル語バンバン方言の/æ/も*a>a/æであり、原南スラウエシ語に遡るものではない（Yamaguchi, 2013: 120）。原南スラウエシ語の母音体系は/a, e, i, u, o/の5母音体系である（Yamaguchi, 2013: 134）。

5. セレベス語群と南スラウエシ語群

ここでは、セレベス語群と南スラウエシ語群の比較を行う。比較に用いるおもな文献資料は、Barr, [1979]、Bergh, 1953、Grimes, 1987、Kaseng, 1987、Lauder, 2000^a、2000^b、2000^c、Mead, 1999である。

5.1. 共通の再構形に遡る場合

本稿で扱う語群はすべて同じ共通祖語、原オーストロネシア語に遡るのであるから、当然共通の語形から現代語の具現形が現れる場合がある。対象語群の言語で共通の語形に遡る*batu「石」、*kutu「シラミ」、*[t]əluR「卵」を例に説明する¹⁰。

⁸ 例外としてアラッレ・タブラハン（Aralle-Taburahan）語がある。アラッレ・タブラハン語では/ʔ, ŋ/しか確認できていない。

⁹ 筆者はレモラン語はブンク・モリ語群に属する言語である可能性が高いと考えている（山口, 2003: 179）。

¹⁰ 特に注記が無い場合、ブンク語はブンク方言、モロネネ（Moronene）語はモロネネ方言、トラキ語はコナウェ（Konawe）方言、チアチア語はゴンダ・バル（Gonda Baru）方言、ブギス語はボネ（Bone）方言、マンダル語はバラニパ（Balanipa）方言、マムジュ（Mamuju）語はマムジュ方言、トアラ語はパリリ（Palili）方言、トラジャ語はマカレ（Makale）方言の例である（以下の表も同様）。---は対応語がない場合。

原オーストロネシア語再構形		*batu	*kutu	*[t]əluR
語群	言語	「石」	「シラミ」	「卵」
トミニ・トリトリ	バラエサン	batu	kutu	ntalu
	トリトリ	batu	kutu	intolu
サルアン・バンガイ	バランタック	watu	kutu	---
	バンガイ	batu	kutu	---
	サルアン	batu	kutu	---
ブンク・トラキ	ブンク	ϕatu ¹¹ , βacu ¹² , Batu ¹³	kutu, kucu ¹⁴ , kutukutu ¹⁵	---
	モリ・アタス	βasu	kutu	sului
	モリ・バワ	βatu	kutu	suʔului
	モロネネ	βatu	kutu	---
	ワウオニイ	βatu	kutu	---
	トラキ	βatu	kutu	tiolu, tiʔolu ¹⁶
ムナ・ブトン	チアチア	wacu ¹⁷	cucu ¹⁸	---
	ムナ	---	otu	---
ウオトウ・ウオリオ	ウオリオ	batu	kutu	ontolu
	ウオトウ	batu	utu	---
カイリ・パモナ	レド・カイリ	vatu	kutu	ntalu
	パモナ	βatu	tuku	toyu ¹⁹
	ランピ	βatu	tuku	tolu
南スラウェシ	ブギス	batu	utu	itəlluʔ
	マンダル	batu	utu	talluʔ
	マムジュ	batu	kutu	tallo ²⁰ , tullu ²¹
	トアラ	batu	--- ²²	tallo
	トラジャ	batu	kutu	talloʔ

*batu の例ではブンク・トラキ語群で ϕ-（無声両唇摩擦音）、β-（有声両唇摩擦音）、カイリ・パモナ語群では β-（有声両唇摩擦音）、v-（有声唇歯摩擦音）で具現される例がある。

ブンク・トラキ語群のブンク語ワイア方言 ϕatu、モリ・アタス（Mori Atas）語では Batu であ

¹¹ ワイア（Waia）方言、ブンク方言形。

¹² ランダウェ（Landawe）方言、トゥランバトゥ（Tulambatu）方言形。

¹³ トレテ（Torete）方言、ロウタ（Routa）方言形。

¹⁴ ランダウェ方言、トゥランバトゥ方言形。

¹⁵ トレテ方言形。

¹⁶ コナウェ方言、メコンガ（Mekongga）方言形。

¹⁷ Kaseng, 1987: 61.

¹⁸ マシリ（Masiri）方言、ラペンデワ（Lapendewa）方言形。

¹⁹ パモナ語において一部の*-l->-y-は規則的である。

²⁰ マムジュ方言、パダン（Padang）方言形。

²¹ スマレ（Sumare）方言、シニョニョイ（Sinyonyoi）方言形。

²² トアラ語バリリ方言は lisse（*li(n')sa「シラミの卵」に由来する）。

る。ブンク・トラキ語群ではすべての言語において*batu「石」の*b-は b-で具現されていない (Mead, 1999: 141)。ブンク・トラキ語群は、祖語の音韻の具現において均一性の高さを見せている。この点から中間祖語から分離して現代語に至までの時間が比較的短いことが判る。

カイリ・パモナ語群のレド・カイリ語の具現形は vatu である。他の同語群の言語でも*b-は v-あるいはβ-で具現されている (Barr, 1979: 92-99)。

ムナ・ブトン語群のチアチア語では b- (あるいは方言によって φ-)、w-で具現されている (Hanan, 2013: 73)。なお、例は少ないが/6/も*bəRas「米」> 6ea、*bəRat「重い」> boa のように*b-に由来することが判る (Hanan, 2013: 76)。

サルアン・バンガイ語群で*b-は b-あるいは w-で具現されている。

南スラウェシ語群では、基本的に batu で具現されるが、セコ下位語群の言語ではパナスアン (Panasuan) 語、セコ・パダン (Seko Padang) 語ホノ (Hono) 方言、セコ・トゥンガ (Seko Tengah) 語、タンコウ (Tangkou) 語で hatu である。

*batu のように対象全語群に分布しかつ具現も多様な場合、必ずしも音韻対応が語群を弁別する有力な基準とはなり難い。ただし*b-が b-以外に摩擦唇音 β-, φ-, v-, f-等で具現されることがあるのが、セレベス上位語群の特徴といえることができる。なお、両唇摩擦音 φ- (無声音) と β- (有声音) あるいは、唇歯摩擦音 f- (無声音) と v- (有声音) が有声・無声の対で一つの言語に現れるのではなく β-, φ-, v-, f-の中の一つが*b の具現音として一言語・方言内で現れるのである。

ここで注目しておきたいのは、サルアン・バンガイ語群では*b-が b-あるいは w-で具現されていることである。これは他のセレベス上位語群とは異なり、南スラウェシ語群と同じである。南スラウェシ語群においては、基本的に*b-> b/w-である。

*kutu はすべての語群にわたって kutu で具現されることが多い。その中でも、やはりブンク・トラキ語群の均一性が目立つ。

*-t-が-c-になっているものは u の前で硬口蓋化が起きたものである²³。なお、語頭の*k は南スラウェシ語群の一部の言語では脱落することがある。ムナ・ブトン語群のムナ語、ウォトゥ・ウォリオ語群のウォトゥ語の > ø-は規則的なものかはさらに考察を要する。

[t]əluR については、トミニ・トリトリ語群、ウォトゥ・ウォリオ語群、カイリ・パモナ語群に(-)nt-という鼻音前出例がある。またブギス語に i-が現れている。トミニ・トリトリ語群のバラエサン語 ntalu、カイリ・パモナ語群のレド・カイリ語 ntalu のように本来存在しない基語頭音と同一調音点の鼻音が現れる現象はトミニ・トリトリ語群、ブンク・トラキ語群、ムナ・ブトン語群、ウォトゥ・ウォリオ語群、カイリ・パモナ語群にみられる現象であり、南スラウェシ語群にはみられない現象である。上記表中、トミニ・トリトリ語群のトトリ (Totoli) 語の intolu、ウォトゥ・ウォリオ語群のウォリオ語 ontolu、南スラウェシ語群のブギス語の itəllu? から共通の再構形として[V](N)təlu[C]が再構出来る可能性がある ([V]は特定できない母音、(N)は前鼻音化が起きた可能性、[C]は特定できない子音を表す)。*[V]-が脱落した語形がセレベス上位語群にみられる NCVCV 形である。ただし、ブギス語の具現形が intəllu?あるいは ittəllu?でない点で疑問が残る。

²³ u あるいは i の前で t が硬口蓋化を起こすのは通時的にも共時的にも起こる現象である (Yamaguchi, 2013: 128-134)。

5.2. 複数の再構形に遡る場合

原オーストロネシア語においても、同義語と考えられる再構形が建てられている。ここでは複数の再構形に遡る場合について考察する。

原オーストロネシア語 再構形		*bulan 「月」	*bintaŋ 「星」	*bi[t]uhən 「星」	*kilaw 「反射」	*anak 「子供」 *bulan 「月」
語群	言語					
トミニ・ トリトリ	バラエサン	---		betuoŋ		
	トリトリ	bulan			kikilo?	
サルアン・ バンガイ	バランタック	→		bintu?on 「月」		
	バンガイ	→		bituon 「月」		bituon pauno ²⁴
	サルアン	→		bintu?on 「月」		
ブンク・ トラキ	ブンク	φula				anambula ²⁵
	モリ・アタス	βula	---			
	モリ・バワ	βula				anano βula
	モロネネ	βula	---			
	ワウオニイ	βula		bitu?o		
	トラキ	βula				anaβula ²⁶
ムナ・ ブトン	チアチア	φula	---			
	ムナ	wula	---			
ウオトウ・ ウオリオ	ウオリオ	bula	---			
	ウオトウ	bula	bintala			
カイリ・ パモナ	レド・カイリ	bula		betue		
	パモナ	wuya		betu?e		
	ランピ	wula	---			
南 スラウェシ	ブギス	uləŋ		wittoŋ		ana? uləŋ ²⁷
	マンダル	bulaŋ		bittoŋ		
	マムジュ	--- ²⁸		bintoŋ, bittoŋ ²⁹		
	トアラ	bulaŋ		bintueŋ		
	トラジャ	bulan	bintaŋ			

「月」についてはサルアン・バンガイ語群を除いて*bulan に遡る語形を用いている。しかし

²⁴ pauno の pau は「子供」。

²⁵ ランダウェ方言、トゥランバトゥ方言形。トレテ方言、ロウタ方言は anaβula、ワイア方言は anaφula。

²⁶ アセラ (Asera) 方言、コナウェ方言形。

²⁷ 雅語、古語。

²⁸ マムジュ方言の「月」は karampuan だが、「1ヶ月」の場合は sam/bulaŋ と*bulan > bulaŋ が残っている。

²⁹ シニョニョイ方言形。

「星」については、*bintan「星」、*bi[t]uhən「星」、*kilaw「反射」という複数の再構形に遡る具現形を用いている。また「月」＋「(その) 子供」という表現もサルアン・バンガイ語群語群、ブンク・トラキ語群、南スラウェシ語群に現れている。

この「星」の例からも判るように同源語を用いているかどうかを語群の判断基準とすることは適切ではないように思われる。

5.3. 形態素の比較

言語の弁別基準の設定には音韻対応を研究するための語彙の比較だけではなく、借用が比較的少ないその言語の本来の姿を保っている場合が多い形態素の比較が重要な役割を果たす。

5.3.1. 形容詞マーカー

ここでは先ず、形容詞マーカーについて考察する。例えば南スラウェシ語群の言語では基本的には **ma-** が形容詞マーカーとして用いられている。ブギス語で「白い」は **mapute** であり、**pute** に対して **ma-** が接頭されているということはネイティブスピーカーにとっては「通時的」範疇に入ることであり、「共時的」には「白い」は **mapute** である、という認識を持っている。以上のことからここでは形容詞形成接頭辞という用語を用いずに形容詞マーカーという用語を用いることにする。

原オーストロネシア語 再構形		*mV-	*na-	*ka-	他の 形式	基語形
語群	言語	「白い」 (*putih 「白い」、*bug'a 「泡」)				
トミニ・ トリトリ	バラエサン	ma/manjeŋ				
	トリトリ					mpati?
サルアン・ バンガイ	バラントック				bubulak	
	バンガイ	mo/ute				
	サルアン	ma/pute?				
ブンク・ トラキ	ブンク	mo/pute				
	モリ・アタス	mo/pute				
	モリ・バワ	mo/pute				
	モロネネ	mo/pila				
	ワウオニイ	ma/bula				
	トラキ	mo/pute ³⁰				
ムナ・ ブトン	チアチア	mɔ/pute ³¹				mpute ³²
	ムナ			ka/pute		pute
ウオトウ・ ウオリオ	ウオリオ	ma/puti				
	ウオトウ	ma/puti ³³				puti

³⁰ アセラ方言は maβina。

³¹ マシリ方言、ラペンデワ方言形。

³² ゴンダ・バル方言形。

カイリ・ パモナ	レド・カイリ		na/puti, na/bula	
	パモナ	ma/buya		
	ランピ			po/puhi
南スラウエシ	ブギス	ma/pute		
	マンダル	ma/pute		
	マムジュ	ma/pute		
	トアラ	ma/busa		
	トラジャ	ma/busa		

上記の表から mV-（母音は語群・言語によっては異なる）はすべての語群で用いられていることが判る。レド・カイリ語は na-を用いているが、カイリ・パモナ語群においては、レド・カイリ語、ダア・カイリ（Kaili Da'a）語、ウンデ・カイリ（Kaili Unde）語、クラウィ（Kulawi）語、トポイヨ語で形容詞マーカーとして na-が用いられている（山口, 2000: 51）。一方バダ語、ベソア（Besoa）語、ナプ（Napu）語、パモナ語、セドア（Sedoa）語等では ma-～me-が用いられている（山口, 2000: 51）。このように同一語群中で異なるマーカーが主流になっている場合もある。なおパモナ語には ma-とともに ka-も存在する（Hente, 1997: 111- 112）。

一部のマーカーがすでに非生産的になっている場合がある。例えば表中の例では南スラウエシ語群の言語は ma-を用いているが、痕跡的には*ba-および*ka-と再構出来る接頭辞も残っている（山口, 2000: 54-55）。この*ka-はパモナ語の ka-と同源である。

マーカーを用いない方法としては基語形をそのまま用いる場合と、サルアン・バンガイ語群のバランタック（Balantak）語、カイリ・パモナ語群のパモナ語に存在する語頭音節重複形がある。重複形を用いるのは、ブンク・トラキ語群、ムナ・ブトン語群、ウォトゥ・ウォリオ語群にも存在する（山口, 2000: 52-54）。

上記の表では南スラウエシ語群において、すべての言語で ma-を接頭しているが、南スラウエシ語群においても基語形のまま形容詞を使用することは例外的な現象ではない。マカッサル語の現代語では ma-は生産的ではなく通常基語形のままで用いられる（山口, 2000: 39）。また他の南スラウエシ語群の言語でも形容詞の基語形が使用されている（山口, 2000: 43）。形容詞が基語形のままで使用される場合があるのは、対象となる全語群にも見られる現象である。重要なのは、形容詞のマーカーとして接頭辞が使われる場合において、どの接頭辞が使用されているかである。また、南スラウエシ語群とその周辺の言語には名詞、形容詞の重複およびその形式について形態上、意味形成上の共通性が存在することは判っている（Yamaguchi, 2012; 山口, 2012.）。

上記の表だけでは不足する情報を他の資料から補っておく。トミニ・トリトリ語群のバラエサン語の形容詞のマーカーは ma-である（Garantjang, 1985: 29）。同じ語群のトリトリ語の形容詞マーカーは ma-、mo-、me-である（Kadjia, 2001: 61）。

ブンク・トラキ語群のワウォニイ語については Andersen 氏提供の辞書の語例によると masaki「痛い」、me?uu「古い」、mokula「熱い」のように mV-が用いられている（Kamus Wawonii-

³³ Grimes, 1987: 127.

Indonesia-Inggris. 2013) ³⁴。モリ語には kodei 「小さい」、kontonjaa 「中くらいの」のように ko- というマーカーが存在する (Ntoala, 2012) ³⁵。トラキ語には karao 「不安な」、karasai 「失敗した」、kawasa 「豊かな」のように *ka- の痕跡が存在する (Rahmania, 2012)。

ウォトゥ・ウォリオ語群のウォトゥ語の形容詞マーカーは ma- であるが me(ŋ)-/mo(ŋ)- という異形態も存在する (Salombe, 1987: 50-51)。

形容詞マーカーをまとめるとおおよそ以下の通りになる。

トミニ・トリトリ語群	mV-			
サルアン・バンガイ語群	mV-			語頭音節重複
ブンク・トラキ語群	mV-		(ka-/ko-)	
ムナ・ブトン語群	mV-		ka-	語頭音節重複
ウォトゥ・ウォリオ語群	mV-			
カイリ・パモナ語群				
カイリ下位語群		na-	(ko-)	語頭音節重複
パモナ下位語群	mV-		(ka-)	
南スラウェシ語群	ma-		(ka-)	(ba-)

今後研究資料が増えれば状況は変わるかもしれないが、カイリ・パモナ語群カイリ下位語群を除いて mV- というマーカーが広く使われていることが判る。このことは形容詞マーカー mV- がセレベス上位語群と南スラウェシ語群の境界を越えて広がっていることを表している。一方カイリ・パモナ語群に見られるように、同一語群内でも下位語群によって形容詞マーカーが異なるということも起こっている。

5.3.2. 動詞形成接頭辞

スラウェシの多くの言語を対象としなければならない研究ではつねに資料の問題がある。多くの少数言語に関しては 100～200 語程度の語彙集しかない場合が多い (山口, 2001: 7-8, 26) ³⁶。

ここでは 100 語彙中に含まれる「死ぬ」と「殺す」を用いて検討する。

原オーストロネシア語 再構形		*matay 「死亡 した」	*patay 「死ぬ」	*patay 「死ぬ」	*matay 「死亡した」	*bunuh 「打ち 殺す」
語群	言語	「死ぬ」		「殺す」		
トミニ・ トリトリ	バラエサン	nate, mate		pa/pate		
	トリトリ	maate?		pate/i		

³⁴ ワウオニイ語では形容詞の基語頭が母音の場合声門閉鎖音が現れる。

³⁵ インドネシアの研究者は SIL のようにモリ・アタス語とモリ・バワ (Mori Bawah) 語に分けず、1 言語としている。

³⁶ Barr による中部スラウェシ州の語彙統計学を用いた研究は、Swadesh が言語年代学に用いた 100 語彙表である (Barr, 1979: 81-83; 山口, 2001: 35-41)。

サルアン・ バンガイ	バランタック		pate	pa/pate/i		
	バンガイ	mate		---		
	サルアン	mate		pate/i		
ブンク・ トラキ	ブンク	mate		pe/pate ³⁷		
	モリ・アタス	mate		pe/pate		
	モリ・バワ	mate		pe/pate		
	モロネネ	mate		pe/pate		
	ワウオニイ	mate		pe/pate		
	トラキ	mate		be/pate ³⁸		
ムナ・ ブトン	チアチア	mate		---		
	ムナ	mate		---		
ウオトウ・ ウオリオ	ウオリオ	mate			apeko/mate ³⁹	
	ウオトウ	mate		pate/i		
カイリ・ パモナ	レド・カイリ	mate		pate/si		
	パモナ	mate		pe/pate		
	ランピ	mahi		---		
南 スラウェシ	ブギス	mate				uno
	マンダル	mate		pate/i		
	マムジュ	mate		pate/i		
	トアラ	mate		pa/pate/an		
	トラジャ	mate		---		

「死ぬ」についてはサルアン・バンガイ語群のバランタック語を除いて*matay 遡る具現形を接辞なしで用いている。カイリ・パモナ語群のランピ（Rampi）語の mahi は不規則な変化であるが、散発的に起こるものである（山口, 2004: 87-88）。一方「殺す」は、ウオトウ・ウオリオ語群のウオリオ語、南スラウェシ語群のブギス語（および be-を用いているトラキ語）を除いて、*patay「死ぬ」に使役を形成する接頭辞*pa-を用いた語形を用いている。また方向を表す接尾辞-i もブンク・トラキ語群を除いて散発的に現れている。

トアラ（Toala'）語の pa/pate/an は pa- (<*pa-) + pate (<*patay) + -an (<*-kən) と分析できる。方向を表す接尾辞ではなく、直接目的の**-kən* を用いている⁴⁰。これらの意味は「死に至らしめる」→「殺す」である。

ウオトウ語の apeko/mate の mate の部分は明らかに*matay に由来する。また、ブギス語の uno は*bunuh「打ち殺す」に遡る⁴¹。

³⁷ すべての方言で*patay に遡る。

³⁸ すべての方言で*patay に遡る。

³⁹ Kaseng, 1987: 39.

⁴⁰ *ethnologue* ではトアラがタエ語の方言としているが、タエ語の他のロンコン・アタス（Rongkong Atas）方言、ロンコン・バワ（Rongkong Bawah）方言、セコ・レモ（Seko Lemo）方言では pate/i < *patay + *-i を使用している。

⁴¹ 南スラウェシ語群で*bunuh に遡る具現形を用いているのはブギス語だけではなく、マカッサル語、マッセンレンプル（Massenrempulu）語にも存在する（Grimes, 1987: 194-195; Pelenkahu, 1972: 24）。

5.3.3. 動詞形成接頭辞 si-

全対象語群に存在を確認されていないが、今後の研究のために重要と思われる接頭辞 si-について説明する。接頭辞 si-は南スラウェシ語群の言語においては生産的な接頭辞である。

ブギス語 si- + canriŋ 「恋人」→sicanriŋ 「愛し合う」 (Said, 1979: 10)

マカッサル語 si + benturuk 「会う」→sibenturuk 「互いに会う」 (Manyambeang, 1996: 73)

マンダル語 si- + gayan 「刺す」→sigayan 「刺しあう」 (Muthalib, 1992: 66)

トラジャ語 si- + lumba 「競う」→silumba 「互いに競う」 (Salombe, 1982: 108)

マムジュ語 si- + rumuŋ 「集まる」→sirumuŋ 「集まる」 (Rahman, 1991: 54)

si-については「互いに～する」という意味を形成するもの、あるいは「自動詞」を形成する接頭辞の一つと考えることができる。この接頭辞は上記のように、南スラウェシ語群において生産的であるが、南スラウェシ語群特有のものではなく、現在手元にある資料から以下のようなセレベス上位語群の例が見つかった。

トミニ・トリトリ語群

バラエサン語 si- + seor 「触れる」→siseor 「触れあう」 (Garantjang, 1985: 30)

ウォトゥ・ウォリオ語群

ウォトゥ語 si- + jagurru 「拳」→sijagurru 「殴り合う」 (Salombe, 1987: 47)

カイリ・パモナ語群

レド・カイリ語 mo/si- raga 「追う」→mosiraga 「追いかけてあうだろう」 (Basran, 2003: 46-47)

no/si- + raga→nosiraga 「追いかけてあっている」 (Basran, 2003: 47)

カイリ語の一部の動詞接頭辞はアスペクトを表す機能も持っている。mo(N)-は「未来」を表し、no(N)-は「現在」を表す接頭辞である (Fatinah, 2013: 81-85)。上記の例は mo(N)-/no(N)-と接頭辞 si-による重接辞である。mo(N)-/no(N)-がアスペクトを示し、si-が意味を担っている。

接頭辞 si-に対して再構形を建てるためには、さらに考察が必要である。si-の機能考えれば*sa-あるいは*sa- (意味としては「一」)を再構したいが、複数の語群で si-で現れていることから、非常に早い段階で*si-という形で存在していた可能性がある。

6. 量的研究と質的研究

本稿で行ってきた考察は「質的な」研究である。言語年代学、語彙統計学、計量方言学は基本的には「量的な」研究方法である。実際に語彙統計学、計量方言学で言語数に差異が起きたのも別言語とする際の一致率である (Pusat Bahasa, 2008, 3-4)。本稿で考察してきたように、セレベス上位語群と南スラウェシ語群の間では共通した現象が多い。また、語末の子音の例のようにサルアン・バンガイ語群が他のセレベス上位語群の言語と大きく異なる様相を見せている点も、単に同源語数を数えるための過程では説明が困難であり、質的に調べ歴史的変遷を追求すべきであろう。変遷の過程を解明することが通時的段階の証明になり、語群分類等の共時

的な系統関係の確立に繋がる。

語彙を比較する場合に、量的な研究であれ、質的な研究であれ注意を要するのは借用語の排除である。語彙の比較を通して音韻対応を確かめた上で、借用の可能性の低い形態法の比較に進むべきである。スラウエシの言語の場合は拘束形態素である接辞、その形態音韻論、さらに形態法上の現象である重複が対象になる。

7. 結論

本稿で考察したように、セレベス上位語群と南スラウエシ語群の間に上位語群という線引きをするほどの顕著な差異は見つけられなかった。

セレベス上位語群自体にも、非常に高い均一性を見せるブンク・トラキ語群、他の語群との距離があるサルアン・バンガイ語群の存在がある。より詳しい考察が必要ではあるが、セレベス上位語群の中で最も早く分離したとすべき語群はサルアン・バンガイ語群である。また、語群内の差異の少なさからブンク・トラキ語群が最も遅く分離したものと判断できる。

セレベス上位語群に属するとされるトミニ・トリトリ語群、サルアン・バンガイ語群、ブンク・トラキ語群、カイリ・パモナ語群、ムナ・ブトン語群、ウォトゥ・ウォリオ語群と南スラウエシ語群の間に共通の中間祖語を持っていた可能性が高いと思われる。今後の研究の方向としては、セレベス上位語群という枠組みを外した上で、質的な研究により改めて上記7語群の分離の過程を考察することが重要である。

参考文献

- Adriani, N., Kruijt, A.C. 1912-1914. *De Bare'e Sprekende Toradja's van MiddenCelebes* (3 Banden). Landsdrukkerij, Batavia.
- Anceaux, J.C. 1988 (second edition). *The Wolio Language: Outline of Grammatical Description and Texts*. Foris, Dordrecht and Providence.
- Barr, D.F., S.G. Barr and C. Salombe. [1979]. *Languages of Central Sulawesi*. [SIL and Hasanuddin University], Ujung Pandang.
- Basran, M. 2003. *Afiksasi Bahasa Kaili (Laporan Penelitian)*. Balai Bahasa Palu, Provinsi Sulawesi Tengah.
- Berg, R. v. d. 1989. *A Grammar of the Muna Language*. Foris, Dordrecht, Providence.
- 1996. *Muna-English Dictionary*. KITLV, Leiden.
- Bergh, J.D.V. 1953. *Spraakunst van het Banggais*. Martinus Nijhoff, 's-Gravenhage.
- Dempwolff, O. 1934, 1937, 1938. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. 3 Bde. Verlag von Dietrich Reimer, Berlin, Hamburg (rep. ed. 1969, Kraus Reprint, Nendeln).
- Ensiklopedia Indonesia*. n.d.W.van Hoeve, Bandung, 's-Gravenhage.
- Esser, S.J. 1938. Talen. (Blad 9, 9 b). *Atlas van Tropisch Nederland*. Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundige Genootschap, Amsterdam (rep. ed. 1999. Gemilang, Landmeer).
- ethnologue*, 1996. <http://web.archive.org/web/19990219082422/http://sil.org/ethnologue/>
- 2005. http://archive.ethnologue.com/15/show_country.asp?name=IDL
- 2009: http://archive.ethnologue.com/16/show_country.asp?name=IDL

- , 2010. <http://archive.ethnologue.com/14/web.asp>
- , 2013. <http://www.ethnologue.com/country/ID/languages>
- Fatinah, S. 2013. Sistem Afiksasi Bahasa Kaili. Yamaguchi, M., Adri, C. Tae Young (ed). *Morfofonemik Bahasa Daerah di Pulau Sulawesi Bagian Selatan*. Hokuto Publishing Inc., Kyoto.
- Garantjang, A., dkk. 1985. *Struktur Bahasa Balaesang*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Grimes, C.E. and Grimes, B.D. 1987. *Languages of South Sulawesi*. The Australian National University, Canberra.
- Hanan, S.S. 2013. Karakteristik Fonologi Bahasa Cia Cia. Yamaguchi, M., Adri, C. Tae Young (ed). *Fonologi Bahasa Daerah di Pulau Sulawesi Bagian Selatan*. Hokuto Publishing Inc., Kyoto.
- Hente, A., dkk. 1997. *Tata Bahasa Pamona*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta.
- Holle, K.F. 1894. SchetsTaalkaart van Celebes. *Koloniaal Verslag van 1894*.
- Kadjia, D., A. Kadir, I. Patekai. 2001. *Morfologi Nomina dan Adjektiva Bahasa Totoli*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Kamus Wawonii-Indonesia-Inggris*. 2013. David Andersen 氏提供
- Karsana, D., Songo, S. Fatinah. 2012. *Tata Bahasa Saluan*. De Lamacca, Makassar.
- Kaseng, S., dkk. 1987. *Bahasa-bahasa di Sulawesi Tenggara*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Kridalaksana, H. 1964. Perhitungan Leksikostatistik atas Delapan Bahasa Nusantara Barat serta Penentuan Pusat Penyebaran Bahasa2 itu Berdasarkan Teori Migrasi. *Indonesian Journal of Culture Studies*. Djilid II No. 3: 319-352.
- , 1993. *Kamus Linguistik (edisi ketiga)*. Gramedia Pustaka Utama, Jakarta.
- , 2008. *Kamus Linguistik (edisi keempat)*. Gramedia Pustaka Utama, Jakarta.
- Lauder, M. RMT., dkk. 2000^a. *Penelitian Kekerabatan dan Pemetaan Bahasa-bahasa Daerah di Indonesia: Propinsi Sulawesi Selatan*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- , dkk. 2000^b. *Penelitian Kekerabatan dan Pemetaan Bahasa-bahasa Daerah di Indonesia: Propinsi Sulawesi Tengah*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- , dkk. 2000^c. *Penelitian Kekerabatan dan Pemetaan Bahasa-bahasa Daerah di Indonesia: Propinsi Sulawesi Tenggara*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Manyambeang, A., A.K. Mulya, Nasruddin. 1996. *Tata Bahasa Makassar*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Masjhuda, M.P. [1972]. *Pengelompokan Bahasa di Sulawesi Tengah Berdasar: Leksikostatistik Djilid I: Bahasa Kaili Pamona*. Perwakilan Departemen P. dan K. Propinsi Sulawesi Tengah.
- Mead, D.E. 1998. *Proto-Bungku-Tolaki: Reconstruction of its Phonology and Aspects of its Morphosyntax*. Dissertation. Rice University, Houston.
- , 1999. *The Bungku-Tolaki Languages of South-Eastern Sulawesi, Indonesia*. Pacific Linguistics, Canberra.
- Mills, R.F. 1975. *Proto South Sulawesi and Proto Austronesian Phonology*. Dissertation. The

- University of Michigan.
- Muthalib, A., dkk. 1992. *Tata Bahasa Mandar*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Ntoala, P.L., I G.K.A. Saputra, Herawati. 2012. *Kamus Bahasa Mori-Indonesia*. La Macca, Makassar.
- Pelenkahu, R.A., dkk. 1972. *Bahasa di Lima Massenrempulu*. Lembaga Bahasa Nasional Tjabang III, Ujungpandang.
- Pusat Bahasa. 2008. *Bahasa dan Peta Bahasa di Indonesia*. Jakarta.
- Rahman, M.T., K.J. Sötmmme. (1991). Kata Dasar Bahasa Mamuju. *Sebagian Hasil Penelitian Proyek Mamuju*. Program Kerjasama UNHAS-SIL.
- Rahmania, dkk. 2012. *Kamus Dwibahasa Tolaki-Indonesia*. Kantor Bahasa Provinsi Sulawesi Tenggara, Kendari.
- Said, M.I., dkk. 1979. *Morfologi dan Sintaksis Bahasa Bugis*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Salombe, C. 1982. *Bahasa Toraja Saqdan: Proses Morfemis Kata Kerja*. Djambatan, Jakarta.
- , dkk. 1987. *Struktur Bahasa Wotu*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Jakarta.
- Salzner, R. 1960. *Sprachenatlas des Indopazifischen Raumes* (2 bd.). Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Сирк, Ю.Х. 1975. *Бугуйский Язык*. Наука, Москва.
- Sneddon, J.N. (comp). 1981^a. North Part of Celebes (Sulawesi), Wurm, S.A. and S. Hattori (eds). *Language Atlas of the Pacific Area*. The Australian National Academy of Humanities, Japan Academy, The Australian National University, Canberra.
- , 1981^b (comp). South Part of Celebes (Sulawesi), Wurm, S.A. and S. Hattori (eds). *Language Atlas of the Pacific Area*. The Australian National Academy of Humanities, Japan Academy, The Australian National University, Canberra.
- Summer Institute of Linguistics di Indonesia, The*. 1990.
- Syamsuddin, D. Kadja, I. Patekkai. 1997-1998. *Struktur Bahasa Banggai (Laporan Penelitian)*. Bagian Proyek Penelitian Bahasa dan Sastra Indonesia dan Daerah.
- Yamaguchi, M. 2012. Reduplication in Languages of South Sulawesi. 『アジア・アフリカの言語と言語学』 6 : 71-88.
- , 2013. Beberapa Catatan tentang Fonem Protobahasa Sulawesi Selatan. Yamaguchi, M., Adri, C. Tae Young (ed). *Fonologi Bahasa Daerah di Pulau Sulawesi Bagian Selatan*. Hokuto Publishing Inc., Kyoto.
- 山口真佐夫. 2000. 「南スラウェシ語群における形容詞形成接頭辞の再構」. 『言語文化学会論集』 第 14 号 : 33-64.
- , 2001. 「南スラウェシ州北西部の言語—研究誌と問題点—」. 『ことばのアスペクト』 第 12 号 : 1-41.
- , 2003. 「レモラン語の系統研究方法」. 『言語文化学会論集』 第 20 号 : 165-181.
- , 2004. 「ランピ (Rampi) 語の研究」. 『インドネシア 言語と文化』 第 10 号 : 77-97.
- , 2012. 「南スラウェシおよびその周辺の言語における形容詞の重複」. 『言語文化学会論集』 第 39 号 : 111-137.

日本インドネシア学会会則

- 第1条 本学会は「日本インドネシア学会」(Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang)と称する。
- 第2条 本学会はインドネシアを中心とした言語、文化、文学等に関する研究の発展および会員相互の協力を促進することを目的とする。
- 第3条 本学会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- ① 機関誌の発行
 - ② 研究発表のための大会の準備
 - ③ 会員総会の開催
 - ④ 会員への連絡および協力促進
 - ⑤ その他必要な事業
- 第4条 本学会の会員は第2条の目的に賛同し、所定の会費を納めたものとする。
2. 入会の際には、5年以上会員であった者1名の推薦により、会員総会における承認を求める。
 3. 特別な理由なく3年以上にわたり、所定の会費を納めないものに関しては、本人の意思を確認の上、総会において除籍する。
- 第5条 本学会の発展に寄与し、会員総会において承認されたものを名誉会員とする。
2. 名誉会員からは会費の徴収をせず、機関誌を贈呈する。
- 第6条 本学会の会員は、大会（総会および研究発表）への参加、機関誌への投稿、機関誌の被配布の権利を有する。また、会費納入の義務を負う。
- 第7条 本学会に次の役員と委員を置く。
- ① 会長1名
 - ② 監査委員1名
 - ③ 事務局委員（総務担当1名、学会誌担当1名、会計担当1名）
2. 会長の任期は3年とし、重任をさまたげない。
 3. 監査委員および事務局委員は、会長がこれを委嘱し、会員総会において承認を経なければならない。
 4. 監査委員および事務局委員の任期は3年とする。
 5. 当番校は事務局と協議の上、研究発表のための大会および会員総会を開催する。
 6. 会長は、「日本インドネシア学会会長選挙規程」の定めるところにより、会員総会において選出する。
- 第8条 本学会の事務は事務局が執り行う。
2. 本学会の事務局を東京外国語大学（郵便番号 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1）内に置く。
- 第9条 本学会会則の改正は会員総会において行う。
- 第10条 本学会の会議は会員総会とし、毎年少なくとも一回会長が招集する。
2. 会員総会は、全会員の3分の1以上の出席をもって成立し、議事は出席会員の過半数をもって決する。
 3. 総会の議事は、事務局の総務担当が執り行う。

- 第 11 条 本学会の経費は、会費、寄付金及びその他の収入をもってあてる。
2. 本学会の会計年度は、10 月に始まり翌年 9 月に終わる。
 3. 決算報告書は、会員総会に提出し、その承認を経なければならない。

附則 この会則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

2007 年 11 月 10 日 一部（7 条 1, 2, 3, 4, 5 項、8 条 1, 2 項、9 条 1 項、10 条 1, 2, 3 項、11 条 1, 2, 3 項）改正、即日施行。

2008 年 11 月 8 日 一部（4 条 2 項、10 条 2 項）改正、即日施行。

2008 年 11 月 8 日 一部（2 項）改正、3 項削除、即日施行。

会費等に関する細則 この細則は、会則第 4 条の規定のうち、会費の施行について定める。

2. 会員の会費は、年額 3000 円とする。
- 付則 この細則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

以上

編集後記

『インドネシア 言語と文化 *Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang*』第20号をお届けします。

本誌は、2013年11月9日(土)、10日(日)の両日に摂南大学寝屋川キャンパスにおいて開催された、日本インドネシア学会第44回研究大会で発表された報告をもとに改めて投稿していただいた論稿を掲載したものです。

第44回研究大会は、以下のプログラムで開催されました。

■第1日目 2013年11月9日(土曜日) 場所：摂南大学寝屋川キャンパス・プチテアトル

12:00～12:25 受付開始(10号館3階プチテアトル入口)

12:25～12:30 開会挨拶

12:30～14:45 テーマ発表

「インドネシア語の会話の授業について

ーネイティブ教員の報告を手がかりとしてー」

企画者：森山幹弘(南山大学)、降幡正志(東京外国語大学)、原真由子(大阪大学)

14:45～15:00 休憩

15:00～15:30 自由研究発表1

エディ・プリヨノ(京都産業大学)

「Penggunaan Foto dalam Pembelajaran Percakapan」

15:30～16:00 自由研究発表2

スヨト(神田外語大学)

「Upaya Mempertahankan Minat Belajar Bahasa Indonesia Mahasiswa

Tingkat 3 dan 4 di Kanda University of International Studies」

16:00～16:30 自由研究発表3

野村亨(慶應義塾大学総合政策学部)

「インドネシア語の接辞 meN と五十音図」

16:30～17:00 自由研究発表4

三宅良美(秋田大学)

「インドネシア語の流行語再考」

17:00～17:10 休憩

17:10～18:20 第44回日本インドネシア学会総会

■第2日目 2013年11月10日(日曜日) 場所：摂南大学寝屋川キャンパス・プチテアトル

08:45～09:00 受付開始(10号館3階プチテアトル入口)

09:00～09:30 自由研究発表5

大形里美(九州国際大学)

「インドネシアにおけるイスラム新興ビジネスの担い手たちのイスラム教

義解釈とその実践」

- 09:30～10:00 自由研究発表 6
野中葉（慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員、同総合政策学部講師）
「インドネシアにおけるイスラーム短編小説の広がりと女性たちのイスラーム覚醒」
- 10:00～10:30 自由研究発表 7
エリザベス・エスター・フィブラ・シマルマタ
（東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程）
「現代ジャワ若者におけるジャワ語の敬語使用の現状」
- 10:30～10:40 休憩
- 10:40～11:10 自由研究発表 8
安田和彦（京都産業大学）
「インドネシア語の補文の含意について」
- 11:10～11:40 自由研究発表 9
長南一豪（獨協大学）
「インドネシア語の引用句倒置構文」
- 11:40～12:10 自由研究発表 10
アリ・アルタディ
（大東文化大学大学院外国語学研究科日本語言語文化専攻博士後期課程）
「インドネシア語の条件形式の用法と主節のモダリティについて」
- 12:10～12:40 自由研究発表 11
山口真佐夫（摂南大学外国語学部）
「セレベス上位語群と南スラウェシ語群の関係」
- 12:40 閉会挨拶 山口真佐夫（幹事校：摂南大学）
舟田京子（日本インドネシア学会会長）

以上

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang

第 20 号

編集者：浦野崇央（摂南大学外国語学部）

発行者：日本インドネシア学会 Himpunan Pengkaji Indonesia Seluruh Jepang

<http://indonesia-gakkai.sakura.ne.jp/wp/>

連絡先：humas@indonesia-gakkai.sakura.ne.jp

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 インドネシア研究室気付 青山亨

Prof. Toru Aoyama

c/o Indonesian Studies Program, Graduate School of Global Studies,

Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan

発行日：2014 年 5 月 31 日

ISSN : 1882-9848
